気体と液体。
行動や社会の分類。
生物や人間への応用。

IWAO OTSUKA

気体と液体。
行動や社会の分類。
生物や人間への応用。

IWAO OTSUKA

目次

私が執筆した全ての書籍。その一覧。

私の書籍の内容。それらの自動翻訳のプロセスについて。

私の略歴。

気体と液体。行動や社会の分類。生物や人間への応用。

Iwao Otsuka

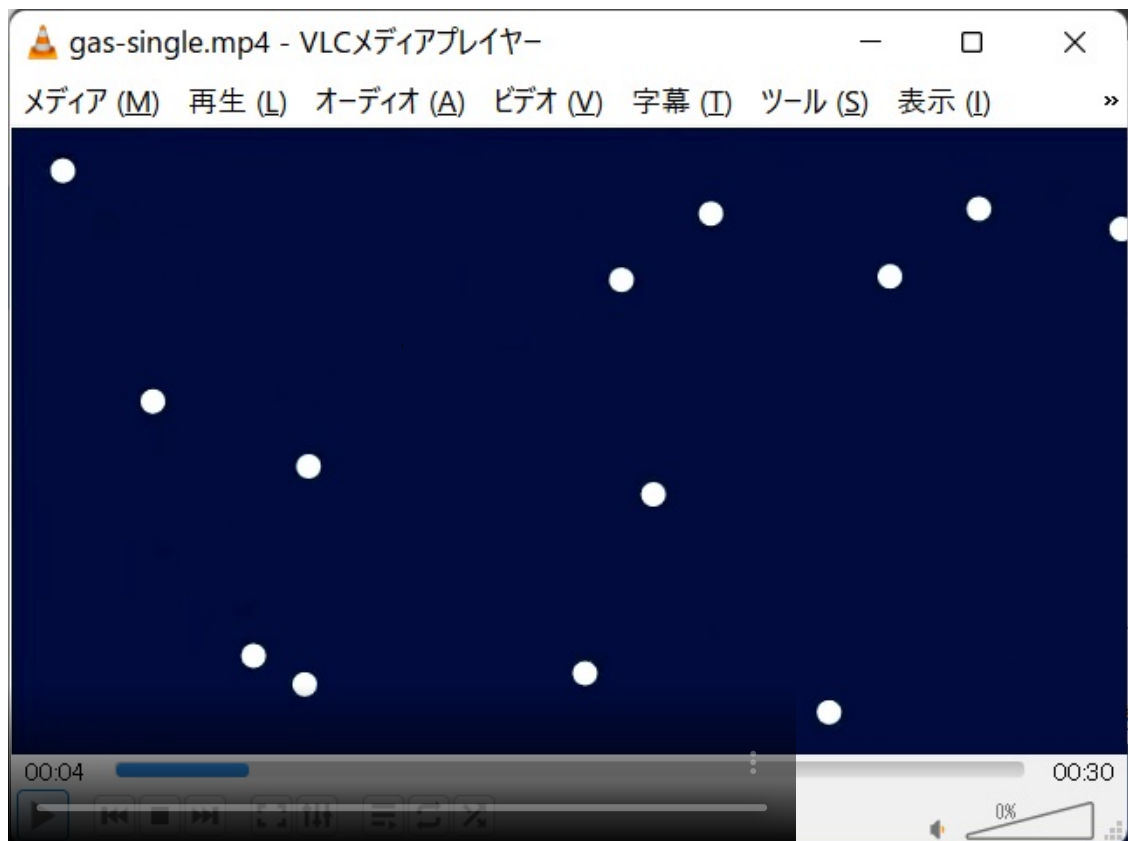
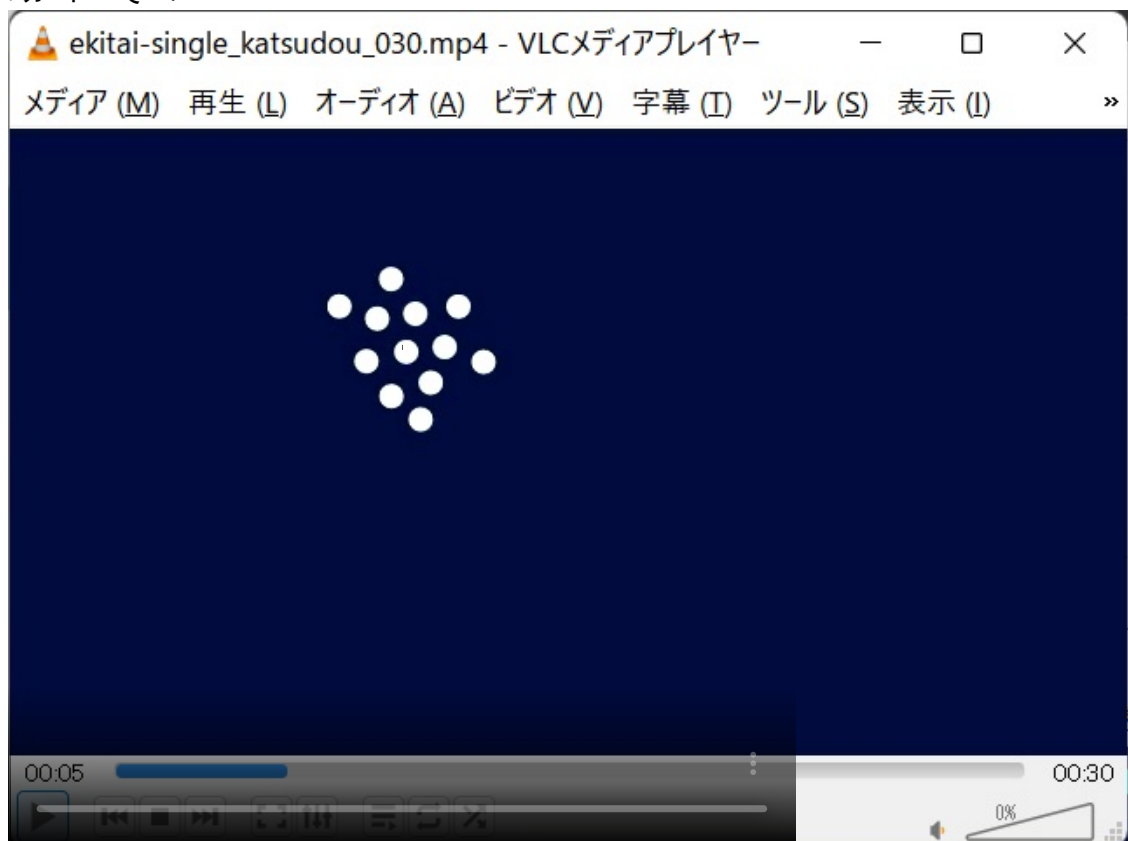
（注意）
筆者が使用した自動翻訳サイト。それは、以下の通りです。
www.DeepL.com/Translator

動画と画像による説明。

基本パターン

ある同じ２つのパターンが、色々な領域やレベルで、共通に見られます。
ある同じ２つのパターンが、以下の内容に当てはまります。

色々な領域や世界。そこにおいて、基本的で重要な、粒子や個体の行動、運動パターン。

次にお見せするのが、その２パターンです。
動画　その１

その基本的で重要なパターンは、以下の様なものです。
以下の（１）が、以下の（２）を実行すること。

（１）一般的な個体、粒子。
（２）以下の二つの条件を満たす動きをすること。

すると、以下の（１－１）が、以下の（２－１）の状態になること。
（１－１）個体群、粒子群
（２－１）互いに明らかに異なる特徴的なパターンでが動くようになること。

その条件は、以下の通りです。
（１）速度が速い／速度が遅い
（２）相互の間の引力が働かない／相互の間の引力が働く

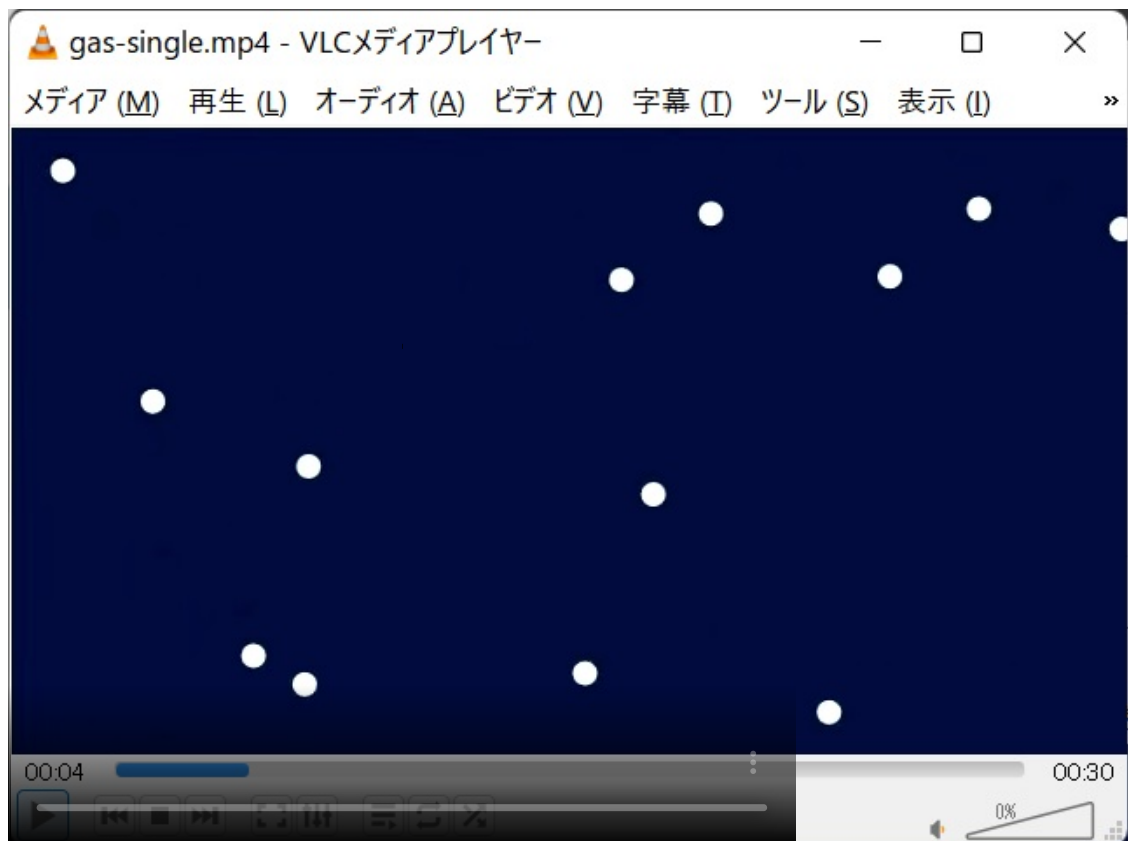
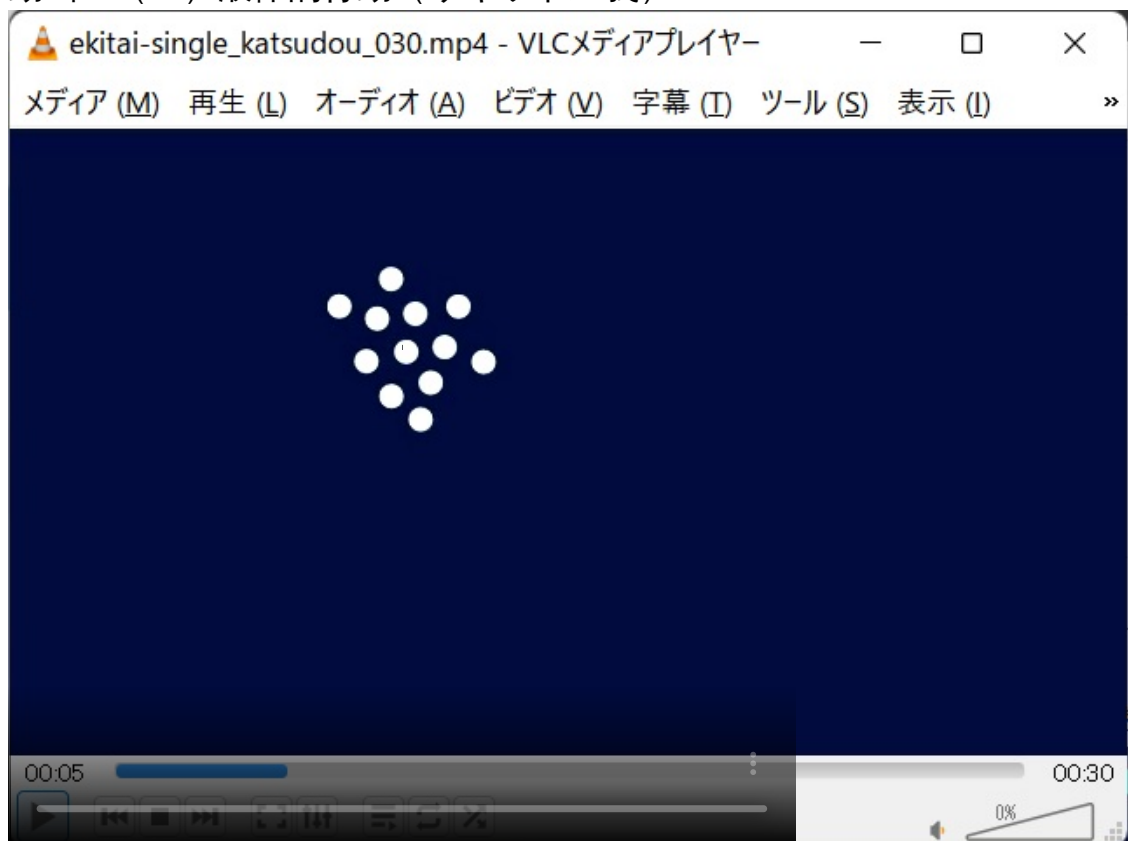
速度が速い＆相互の間の引力が働かない場合。それが、パターンその１です。
速度が遅い＆相互の間の引力が働く場合。それが、パターンその２です。

この２パターンは、生物や人間や社会の特徴や主義、主張を表します。それらは、従来、政治、社会、歴史等の分野で、繰り返し取り上げられてきました。

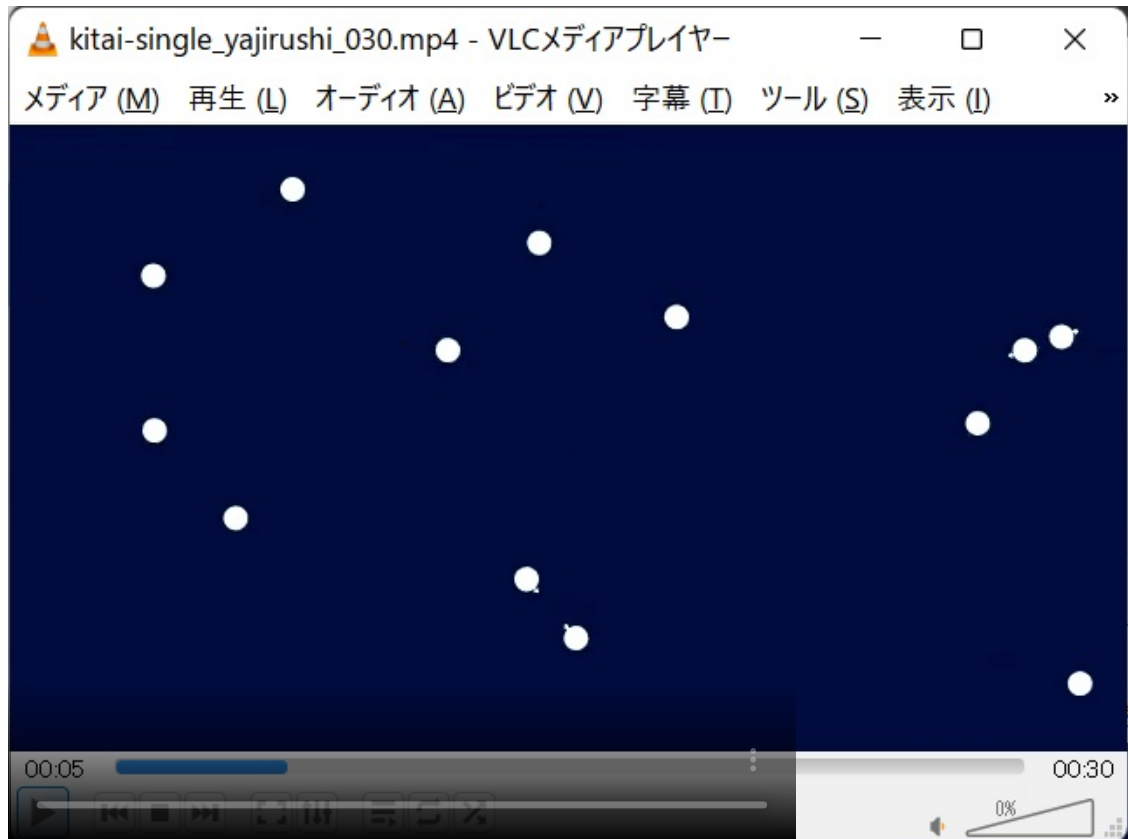
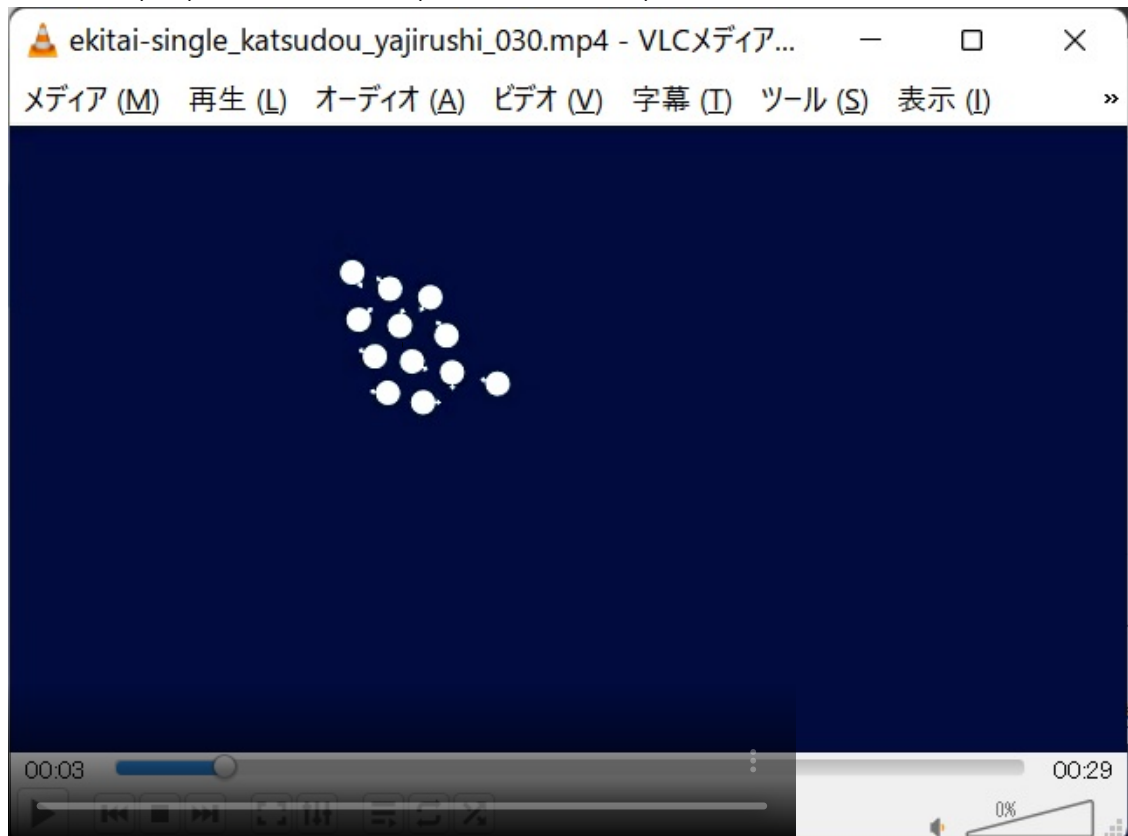
この２パターンは、特に以下の実現に大きな力を発揮します。
民族性、国民性の違いの解明。

この２パターンの社会のあり方を、ここでは、以下のように名付けます。
（１）気体的行動
（２）液体的行動

（１）気体的行動の行動様式で動こうとするイデオロギー。筆者は、それを、以下のように名付けます。ガス主義。
（２）液体的行動の行動様式で動こうとするイデオロギー。筆者は、それを、以下のように名付けます。リキッド主義。

動画　（１）気体的行動（ガス主義）

動画　（２）液体的行動（リキッド主義）

個体、粒子間の力の働きを矢印で表すと、以下のようになりま

す。

動画　（１）気体的行動（ガス主義）

動画　（２）液体的行動（リキッド主義）

そこから、以下のことが、分かります。
（１）気体的行動では、個体、粒子の間に、あまり力が働かず、独立性が高い。
（２）液体的行動では、個体、粒子間の力の働き合いが大きい。

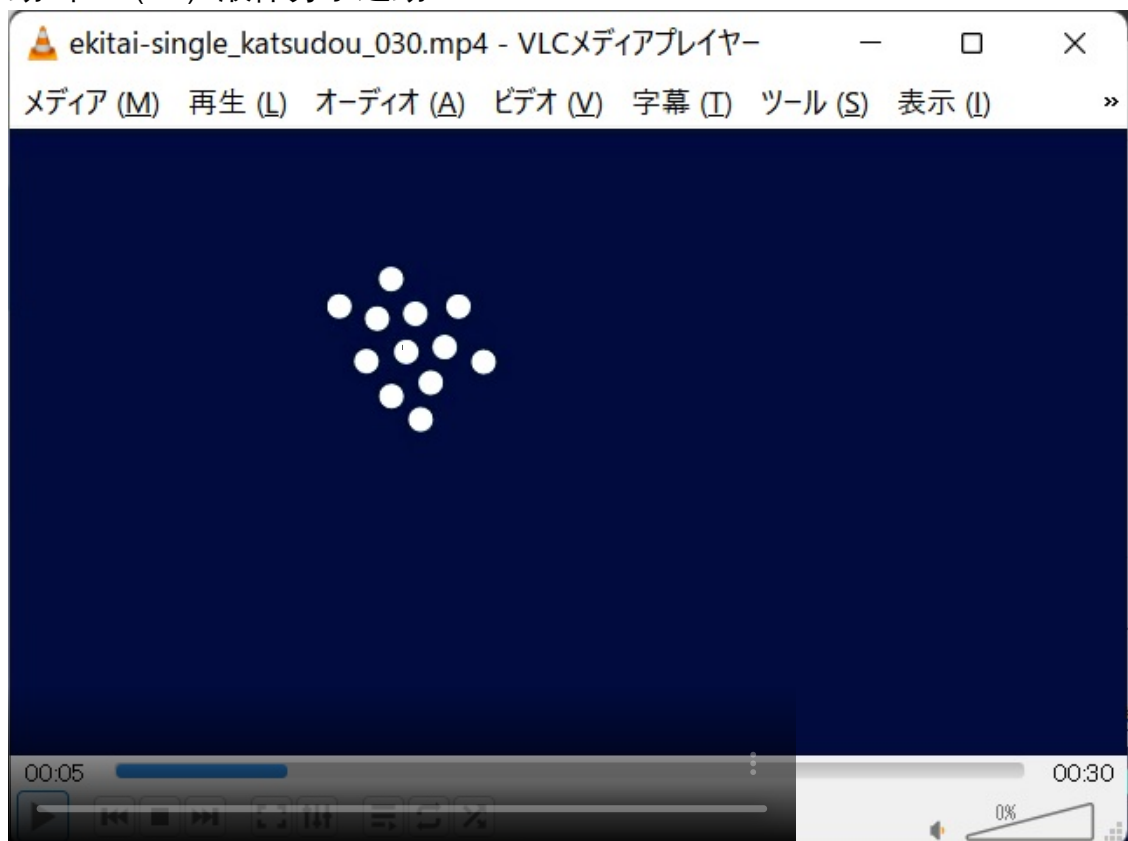
（１）各個体、粒子が気体的行動を取る社会。それは、気体的社会です。
（２）各個体、粒子が液体的行動を取る社会。それは、液体的社会です。

実例

以下の運動、行動様式が、気体的行動、液体的行動の実例になります。

（分子物理学、化学）気体分子運動／液体分子運動。物理的運動パターン。

動画　（１）気体分子運動

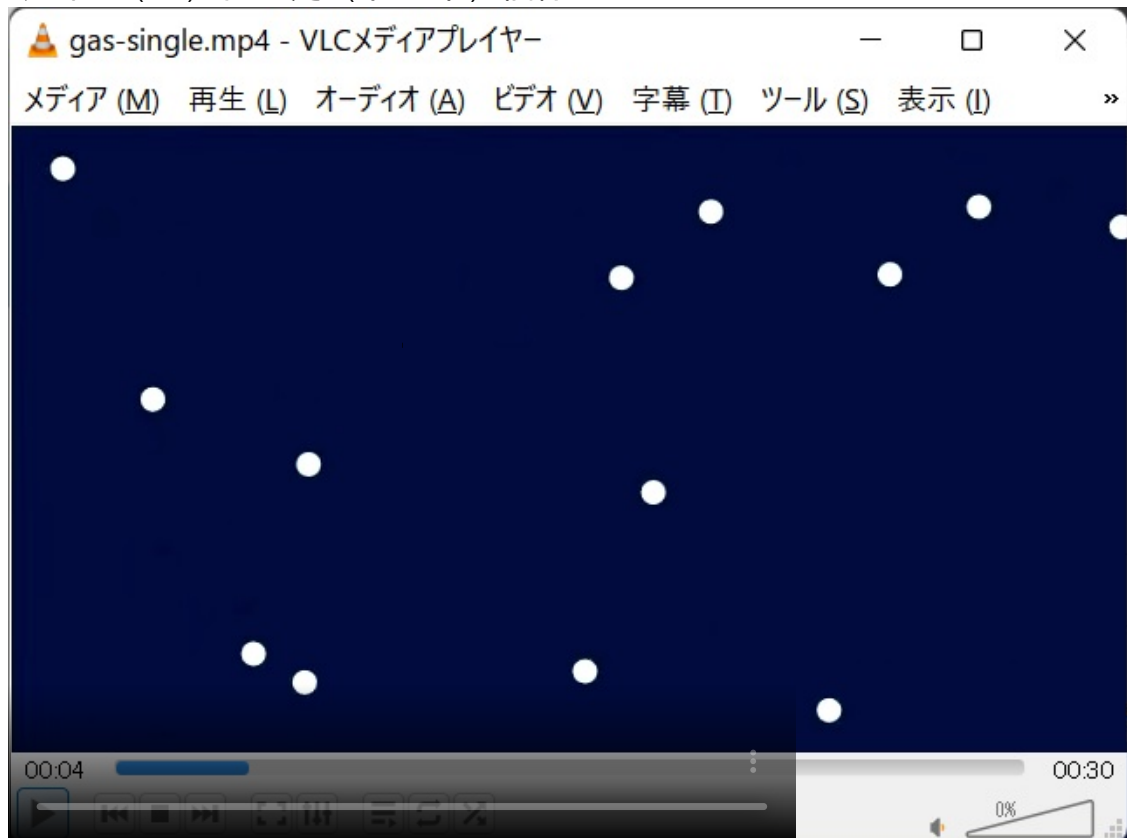
動画　（２）液体分子運動

これは、以下の（１）の違いにより、以下の（２）の通りとなり

ます。

（１－１）分子運動速度が速い（気体分子）／分子運動速度が遅い（液体分子）
（１－２）分子間力が無い（気体分子）／分子間力が有る（液体分子）

（２－１）気体的行動＝気体分子運動
（２－２）液体的行動＝液体分子運動

（感覚、知覚心理学）湿度感覚（乾いた（ドライ）／湿った（ウェット）個体）

動画　（１）乾いた（ドライ）個体

動画　（２）湿った（ウェット）個体

これは、以下の感覚を生物や人間に対して与えます。

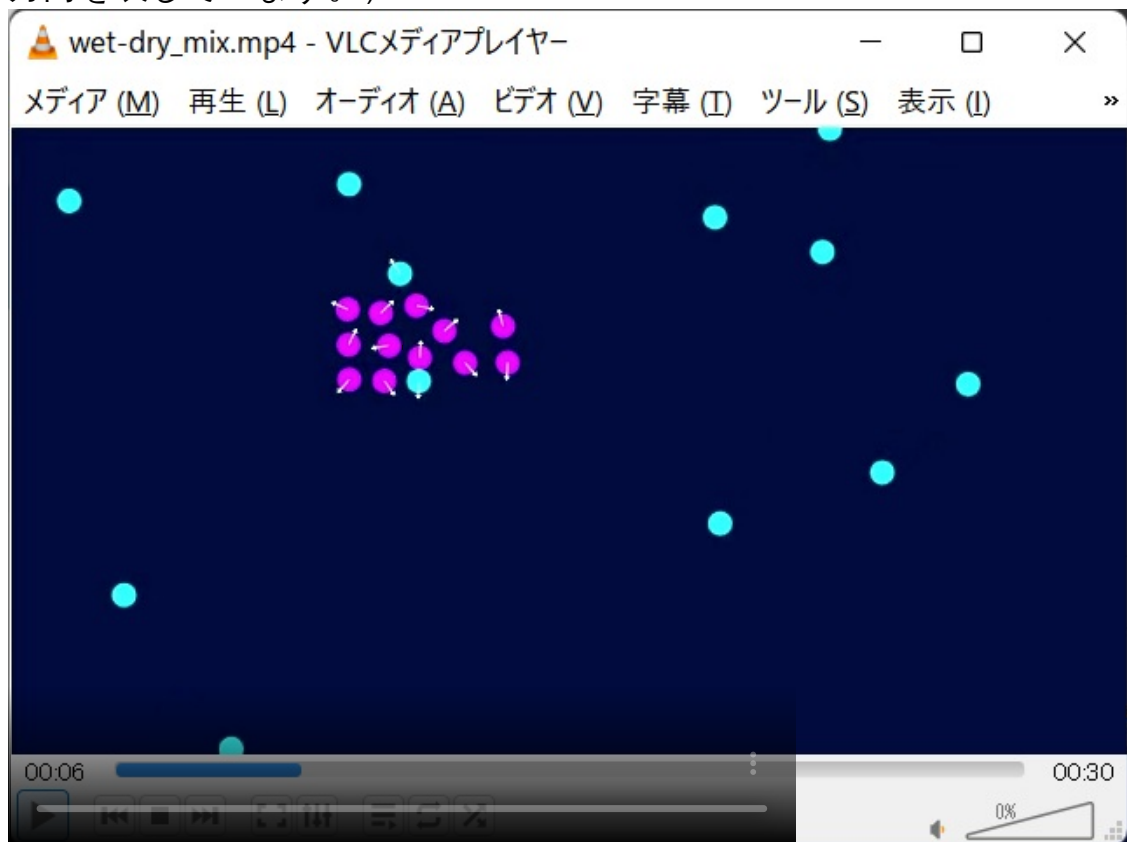
（１）気体的行動＝ドライな、乾いた感覚
（２）液体的行動＝ウェットな、湿った感覚

その原因は、上記の物理的な気体分子運動／液体分子運動との類推です。
（１）気体が、乾いた、ドライな感覚を生物や人間の肌に与えること。
（２）液体が、湿った、ウェットな感覚を生物や人間の肌に与えること。

同じ気体の空気が、以下のように異なる感覚を、生物や人間に対して与えます。
（１）空気中に気体として存在する水の分子の数が少なくなる場合。湿度が低下します。それは、ドライな感覚を人肌に与えます。
（２）空気中に気体として存在する水の分子の数が多くなる場合。湿度が高まります。それは、ウェットな感覚を人肌に与えます。

空気中に気体として存在できる水の分子の数。それには限界があります。湿度が高まるにつれて、水は気化しにくくなります。温度低下をきっかけに、気体だった水の分子が、液体に変わります。

ここで、乾いた（ドライな）個体群と、湿った（ウェットな）個体群を相互作用させると以下のようになります。

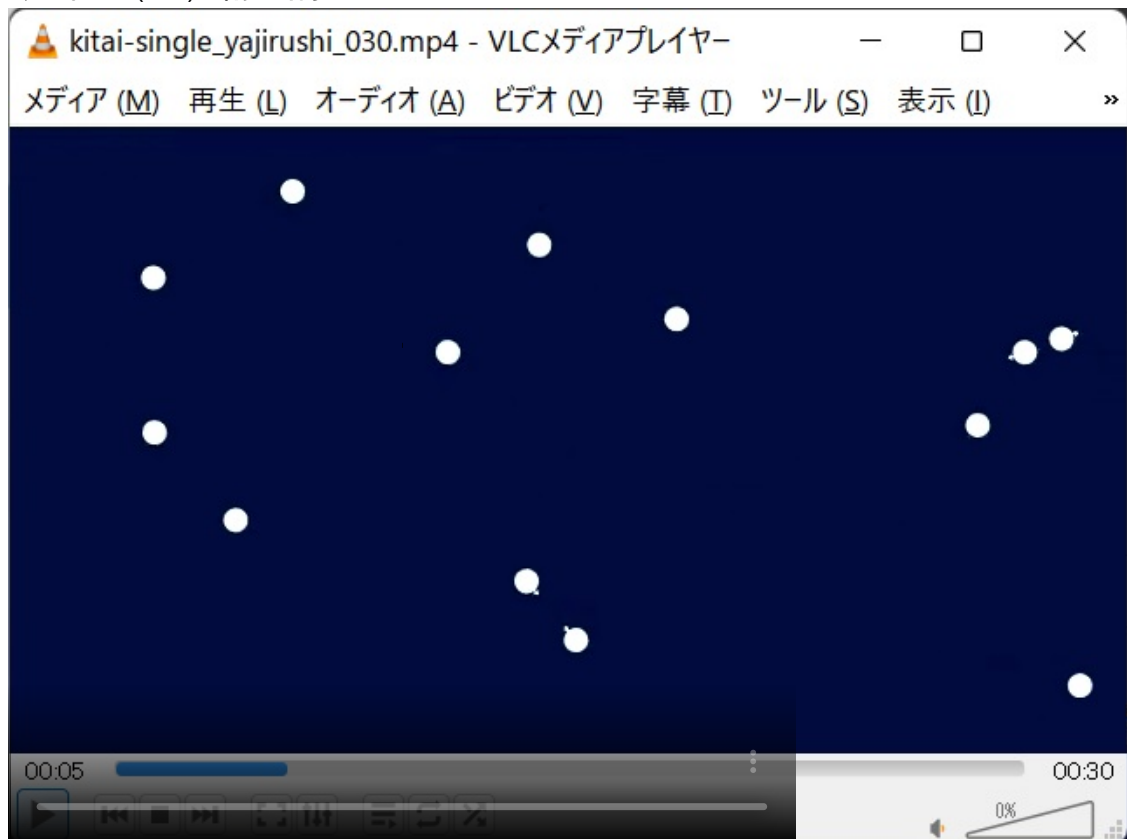
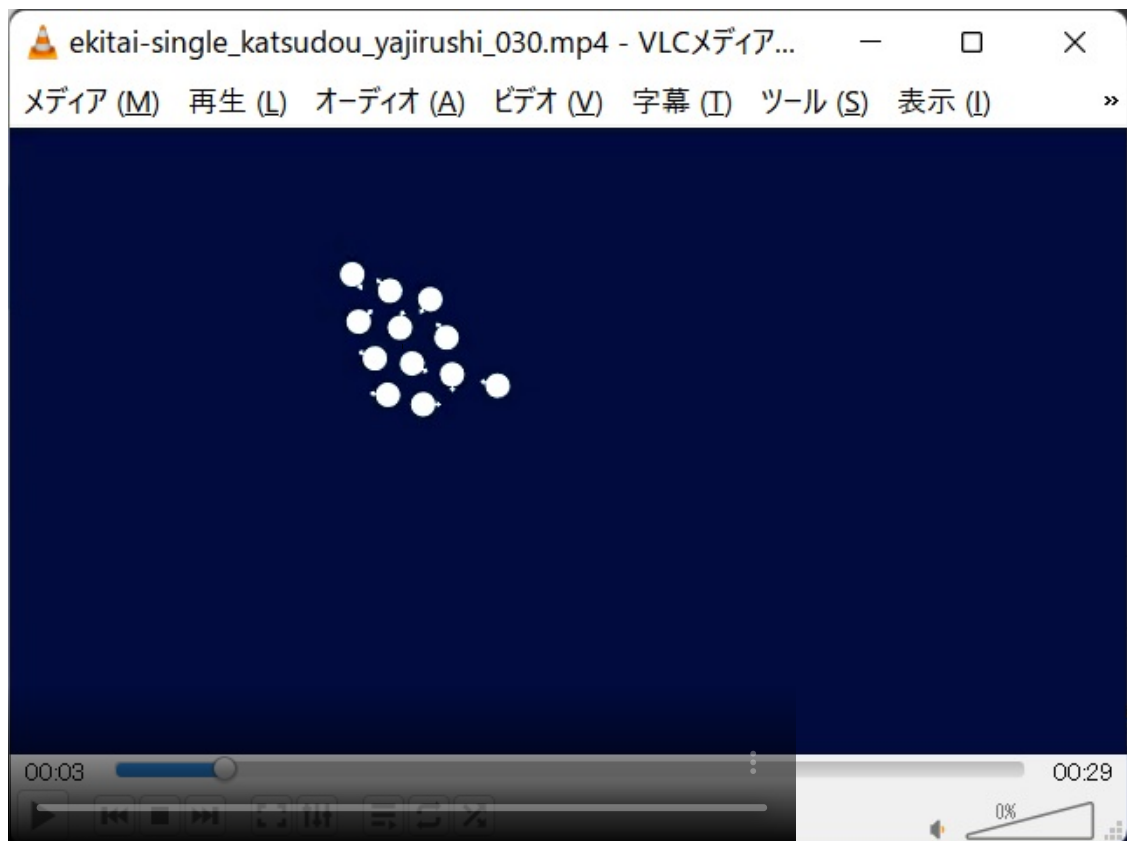
動画　相互作用（水色の個体が、乾いたドライな個体です。ピンク色の個体が、湿ったウェットな個体です。矢印は、力のかかる方向を表しています。）

液体的行動の湿った（ウェットな）個体が、気体的行動の乾いた（ドライな）個体に接触されると、内向きの閉鎖的な指向を示します。力の指向する向きを示す矢印が内向きに振れるためです。

このパターンは、生物や人間のドライ、ウェットな性格の違いにそのまま反映されます。
（１）気体的行動＝ドライな、乾いた性格の人の行動様式
（２）液体的行動＝ウェットな、湿った性格の人の行動様式

生物や人間の性格の湿度差。それをコンピュータ・シミュレー

ションで表すこと。それは、気体的行動、液体的行動で表せば良い。

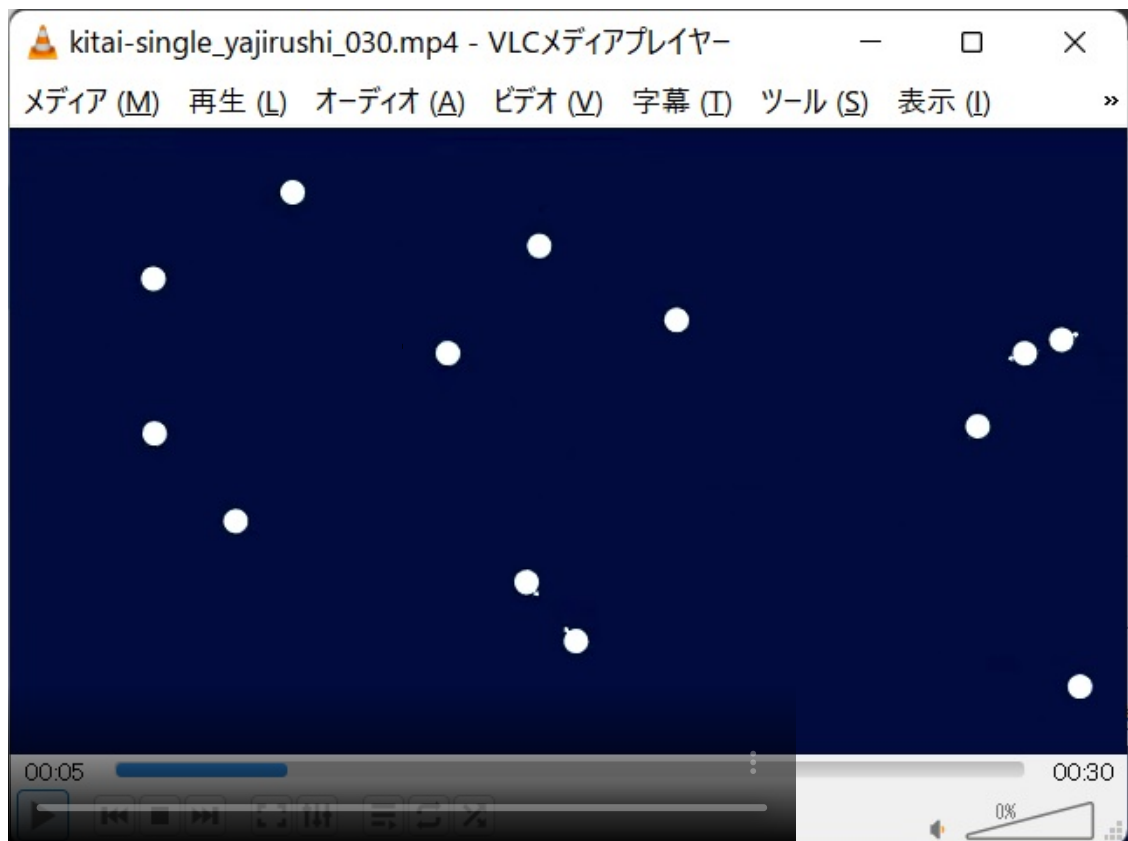
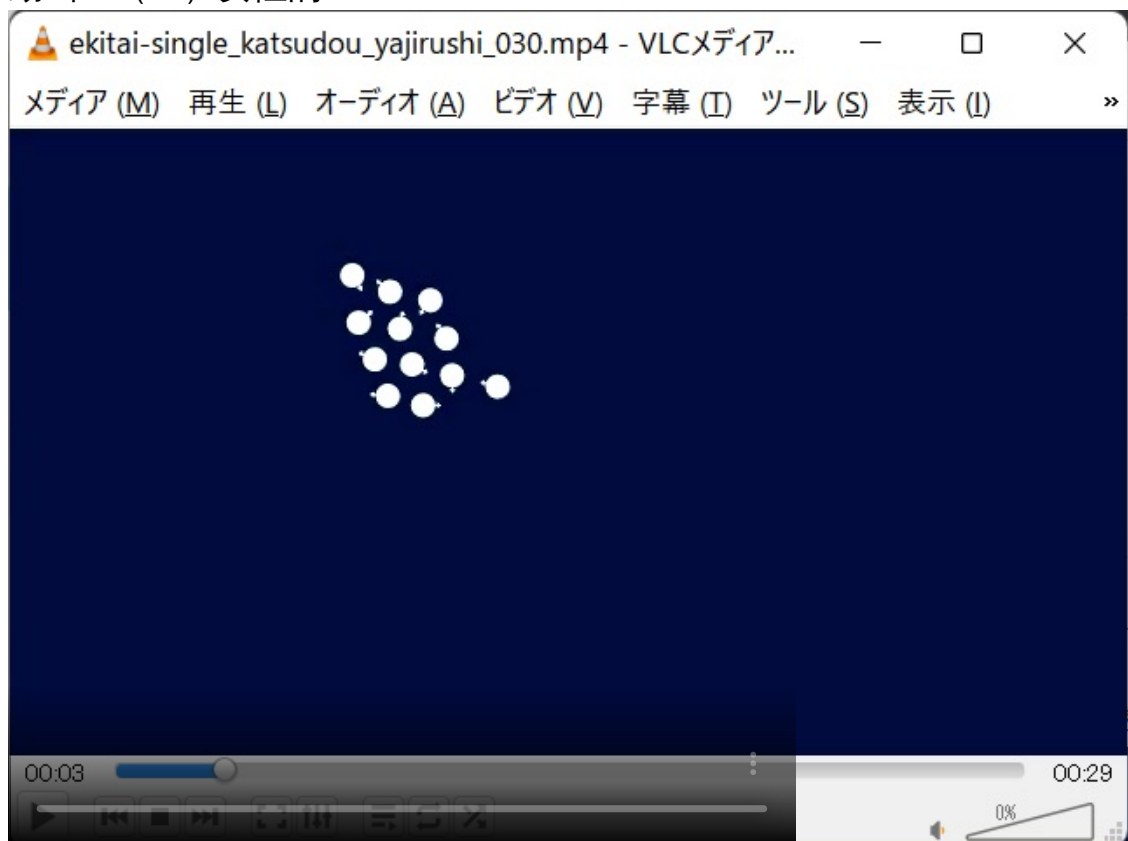
（生物学）精子的／卵子的行動様式

動画　（１）精子的

動画　（２）卵子的

上記の動画では、 表示は、以下の通りです。
（１）気体的行動。精子的性格。精子的行動様式。男性性の起源。
（２）液体的行動。卵子的性格。卵子的行動様式。女性性の起源。

これらの相違は、生物の有性生殖の根本に関連します。

ここから、以下の内容を導き出すことが可能です。

（性差心理学。性差社会学。）男性的性格／女性的性格。男性的行動様式／女性的行動様式。（男らしさ／女らしさ。父性的性格／母性的性格。）

動画　（１）男性的

動画　（２）女性的

上記の動画では、 表示は、以下の通りです。

（１）気体的行動。男性的性格。男性的行動様式。男性優位社

会。その価値観や社会規範。
（２）液体的行動。女性的性格。女性的行動様式。女性優位社会。その価値観や社会規範。

このように表せる理由は、リスク、危険を回避する度合いの相違が男女の行動様式の根本的な相違だからです。
（１）捨て身でリスクを取る個体＝男性
（２）自己保身でリスクを回避する個体＝女性

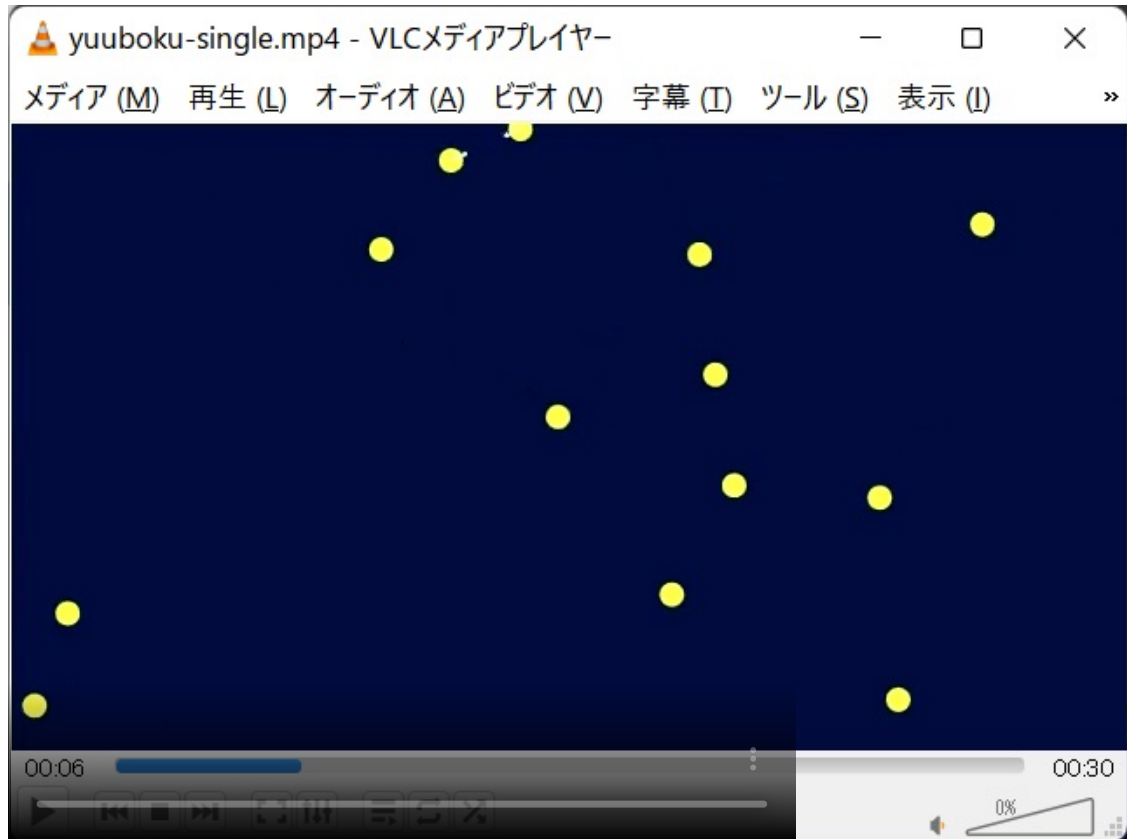
それについてのは、以下のようになります。
（１）気体的行動。リスクを取ること。どんどん未知の闇の領域に拡散して進むこと。男性的。
（２）液体的行動。リスクを回避すること。すでに光の当たっている、同じ狭い限られた既知の安全領域。その内部に、皆で集中して集まって、そのまま動かずにとどまること。女性的。

ここで、動画中の各個体の矢印に注目しましょう。これらの矢印は、その個体にかかる力の働きを示しています。
（１）気体的行動＝男性的行動様式
各個体は、独立して自由に行動するため、各個体の間には、常時力が働き続けることは無く、各個体は普段はリラックスしています。
（２）液体的行動＝女性的行動様式
各個体は、互いに他者に気配りをして、安全領域から追い出されないように、必死に気を遣います。そのため、各個体は、互いの間に、力が絶えず働いており、緊張状態にあり、決してリラックス出来ません。

男女の行動様式の性差をコンピュータ・シミュレーションで表すには、気体的行動、液体的行動で表せば良いです。

（１）父性は、男性の親としての側面であり、気体的な行動様式を生み出し、子供の行動様式を気体的に決定します。
（２）母性は、女性の親としての側面であり、液体的な行動様式を生み出し、子供の行動様式を液体的に決定します。

（地理学、歴史学）　移動生活様式／定住生活様式。遊牧民／農耕民。彼らの行動様式

動画　（１）移動生活様式者。遊牧民。

動画　（２）定住生活様式者。農耕民。

上記の動画では、表示は、以下の通りです。

（１）気体的行動＝移動生活様式者。遊牧民。彼らの行動様式
（２）液体的行動＝定住生活様式者。農耕民。彼らの行動様式

このように表せる理由は、両者の生活様式の違いに基づきます。

・居住場所の気候の乾燥／湿潤の違い。
（１）乾燥気候。移動生活様式者。遊牧民。
（２）湿潤気候。定住生活様式者。農耕民。
乾燥した気候は、以下の実現に適しています。移動生活様式、遊牧生活に必要な家畜が食べる牧草の生育。
湿潤で高温な気候は、以下の実現に適しています。定住生活様式、農耕生活に必要な栽培植物の生育。

この湿度面での環境の違い。それが気体的行動（移動や遊牧）と、液体的行動（定住や農耕）の違いを生み出しています。

（１）移動する動物に頼る生産様式が遊牧です。
（２）移動しない植物に頼る生産様式が農耕です。

（１）遊牧は移動です。（動物は、牧草を求めて移動する。）
（２）農耕は定住です。（植物は、一箇所に根を張って動かない。）

（１）気体的行動では個体は高速で移動します。
（２）液体的行動では個体はほとんど移動せず、定住しています。

この違いが、以下の行動に当てはまります。
（１）気体的行動（遊牧）
（２）液体的行動（農耕）

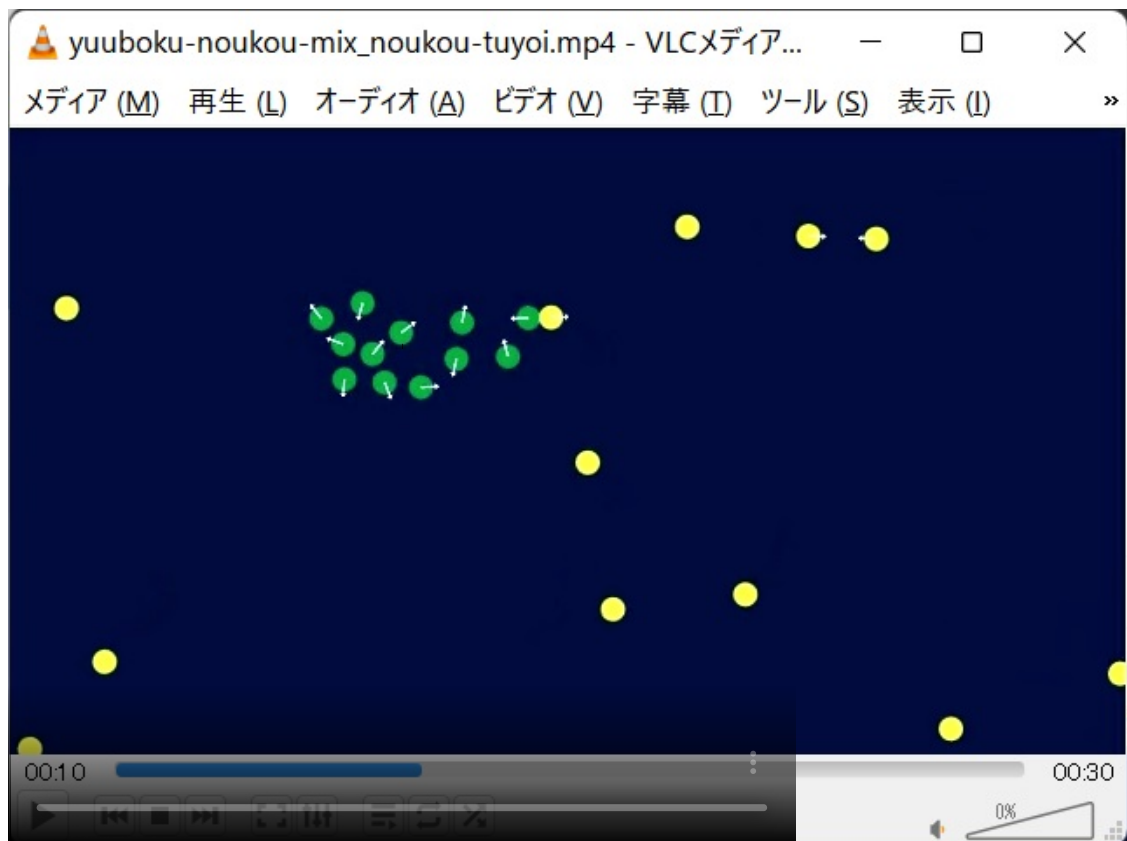
（１）遊牧は、広い面積に低密度で粗放的に行われます。
（２）農耕は、狭い面積に高密度で密集して集約的に行われます。

（１）気体的行動では、各個体が広い面積に低密度で分布しています。
（２）液体的行動では、各個体は狭い面積に高密度で分布しています。

この違いが、以下の行動に当てはまります。
（１）気体的行動（遊牧）、
（２）液体的行動（農耕）

遊牧民と農耕民の行動様式の違い。移動生活様式者と定住生活様式者の行動様式の違い。それらを、をコンピュータ・シミュレーションで表すには、気体的行動、液体的行動で表せば良いです。

遊牧民と農耕民を相互作用させてみた例を以下にあげます。これは、例えば中国の漢民族と北方遊牧民族との歴史的なせめぎ合いのシミュレーションとして捉えることができます。これは、例えばロシア農耕民族とモンゴル遊牧民族との歴史的なせめぎ合いのシミュレーションとして捉えることができます。

動画　（農耕民が重く強い場合、遊牧民が攻めてきても、動じません）

動画　（農耕民が軽く弱い場合、遊牧民が攻めてくると、簡単に散らされてしまいます）

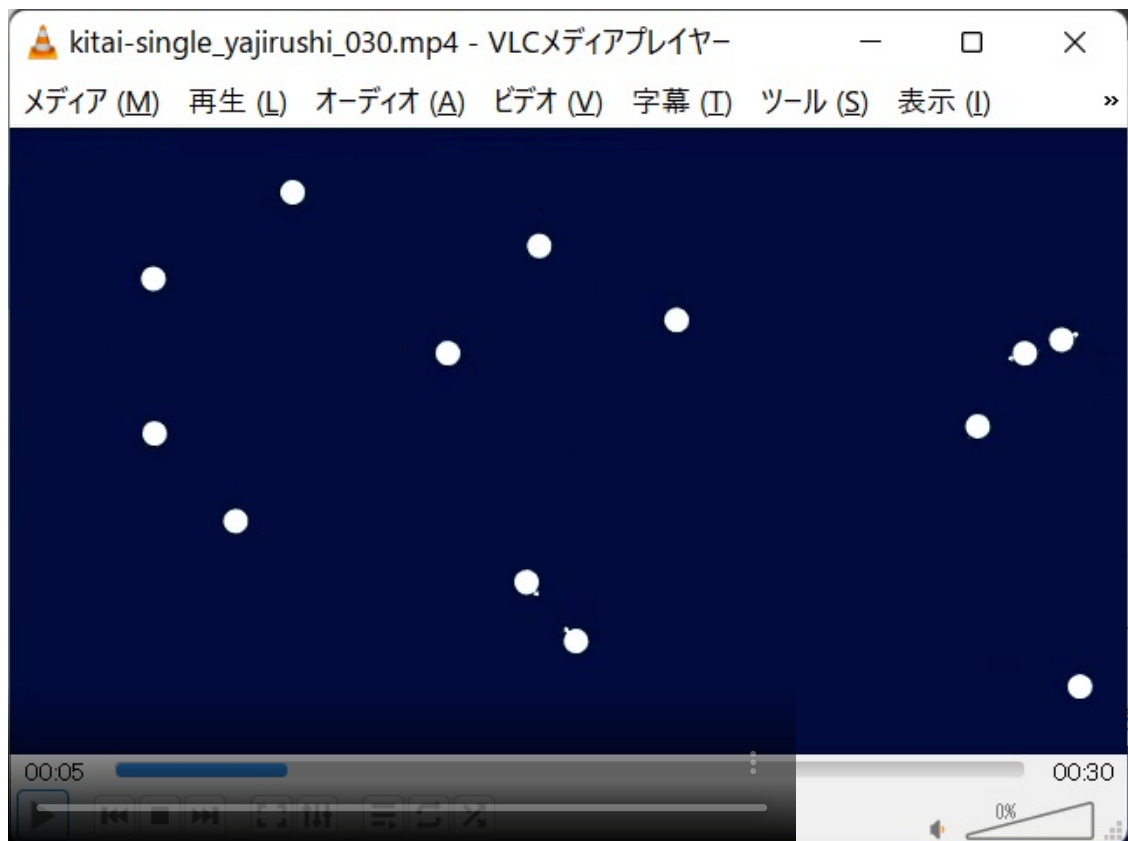
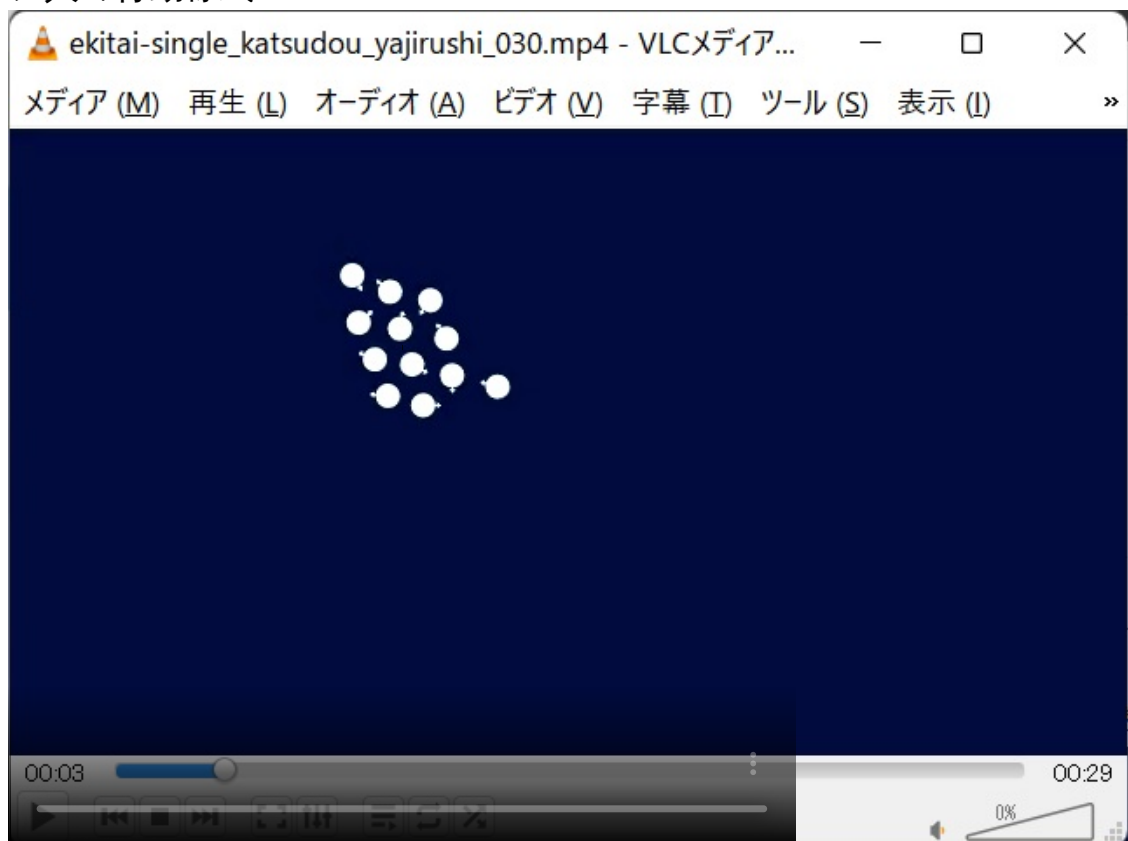
この応用で、以下の違いを表すことができます。

西洋人と、東洋人やロシア人の行動様式の違い

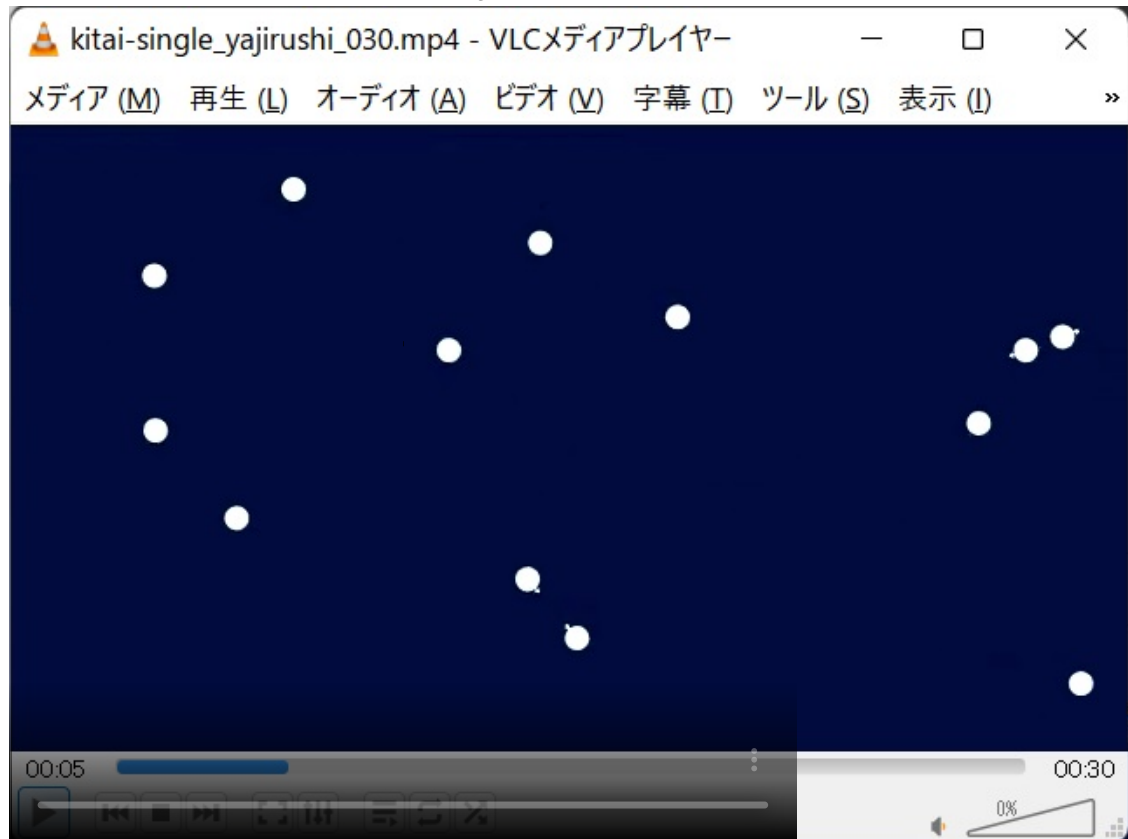
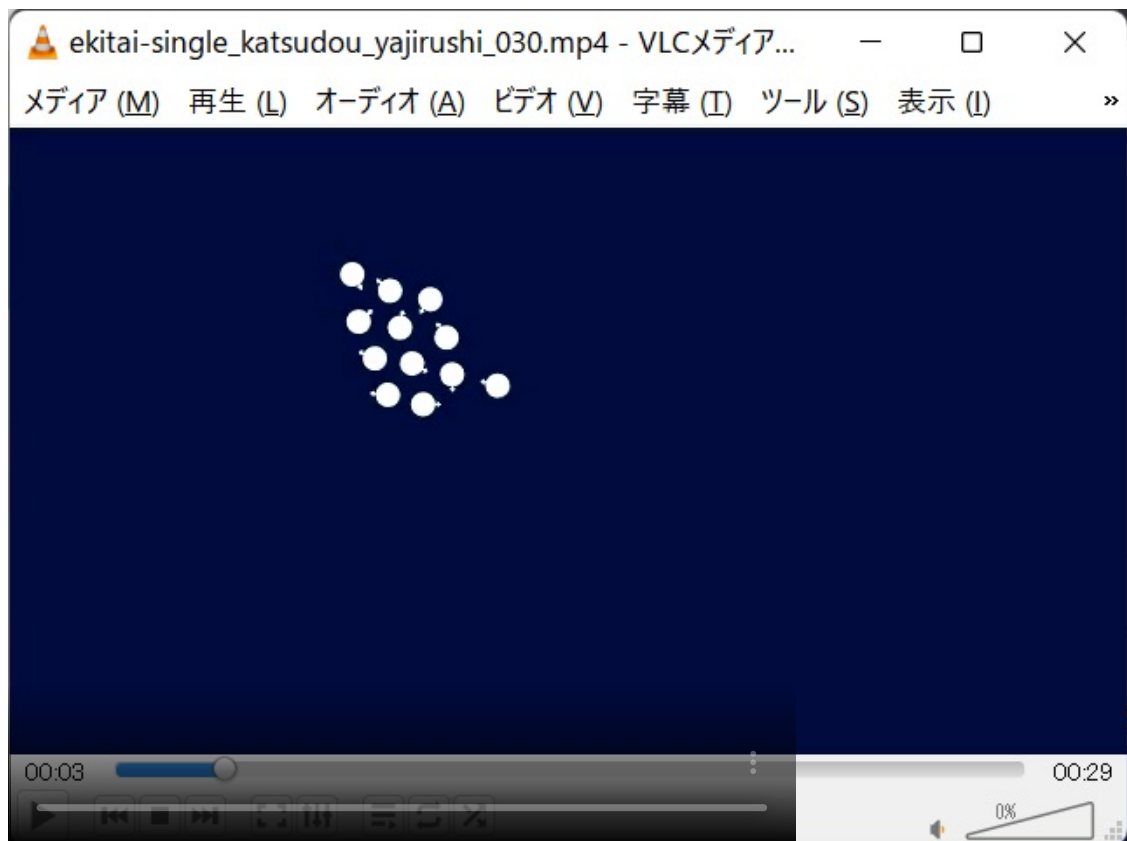
西欧は、牧畜民であり、遊牧と麦作農耕の両方に依存する生活をします。気候は乾燥しているが、砂漠ほどではありません。
西欧は、東アジアのモンスーンほど湿潤ではありません。
西欧は、適度に乾燥し、湿潤しています。
西欧は、和辻哲郎「風土」の分類では、牧場型に当たります。
西欧は、アラブ、ユダヤ、トルコ、モンゴルほど遊牧的、移動的ではありません。
西欧は、東アジア（東洋）やロシアほど農耕的、定住的ではありません。
西欧は、遊牧と農耕の中間型です。それは、西欧（西洋人）の特徴です。
西欧（西洋人）は、以下の中間に位置します。
（１）気体的行動（純粋遊牧民。純粋な移動生活様式者。）
（２）液体的行動（純粋農耕民。純粋な定住生活様式者。）

西洋と、東洋やロシアとを比較する場合。それは、以下の内容になります。
（１）西洋が相対的に気体的行動に近い。
（２）東洋やロシアが相対的に液体的行動に近い。

西洋人と、東洋人やロシア人の行動様式の差。それをコンピュータ・シミュレーションで表す場合。
それは、気体的行動と液体的行動の違いで表せば良い。

動画　（１）相対的に気体的な行動＝西洋人（西欧）の行動様式

動画　（２）相対的に液体的な行動＝東洋人（東アジア）やロシア人の行動様式

このサブセットは、以下の内容を表すことが可能です。

アメリカ人と日本人の国民性の違い

動画　（１）相対的に気体的な行動＝アメリカ人の行動様式

動画　（２）相対的に液体的行動＝日本人の行動様式

アメリカ人は、西欧由来の牧畜民がメインの国です。
日本人は、稲作農耕民です。

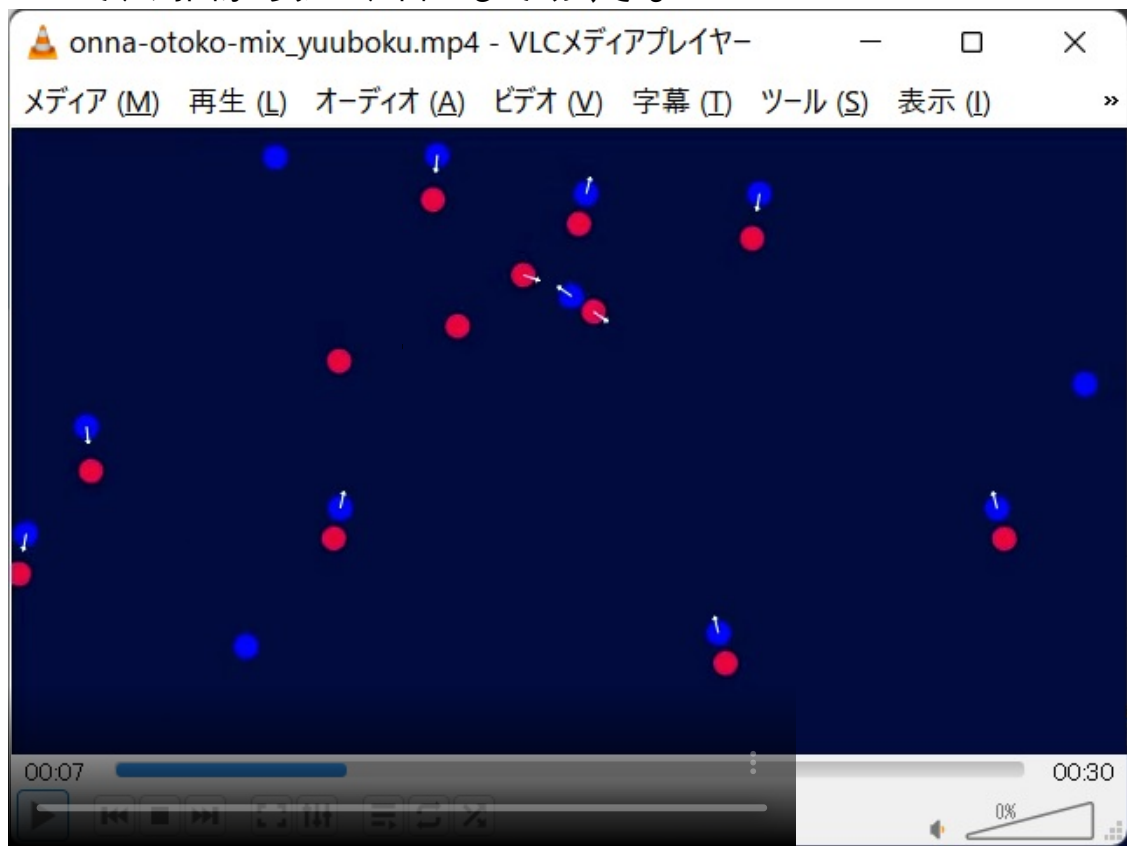
牧畜民の行動様式は、相対的に気体的行動に近い。
稲作農耕民の行動様式が液体的行動に近い。

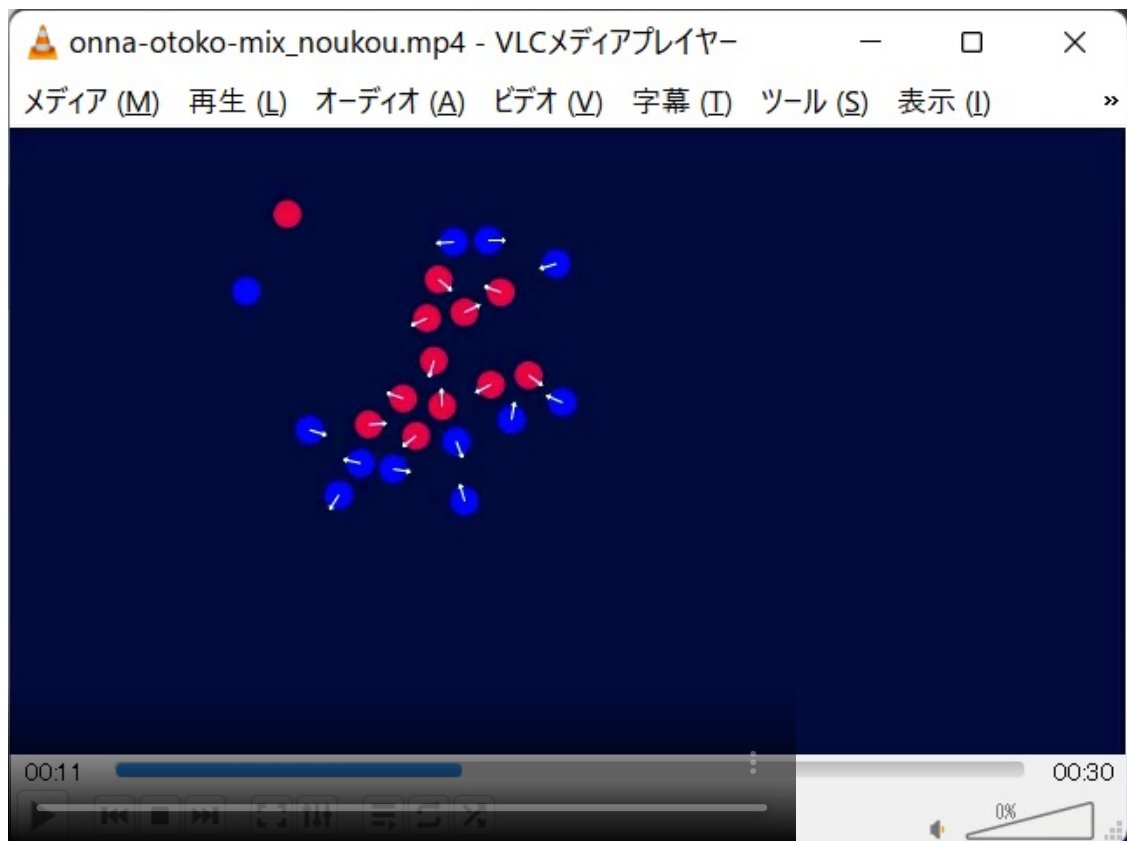
そのことから、以下の表現が可能です。
（１）アメリカ人は気体的行動で表せます。
（２）日本人は液体的行動で表せます。

アメリカ人と日本人の行動様式の差。それをコンピュータ・シミュレーションで表す場合。それは、気体的行動と、液体的行動の違いで表せば良い。

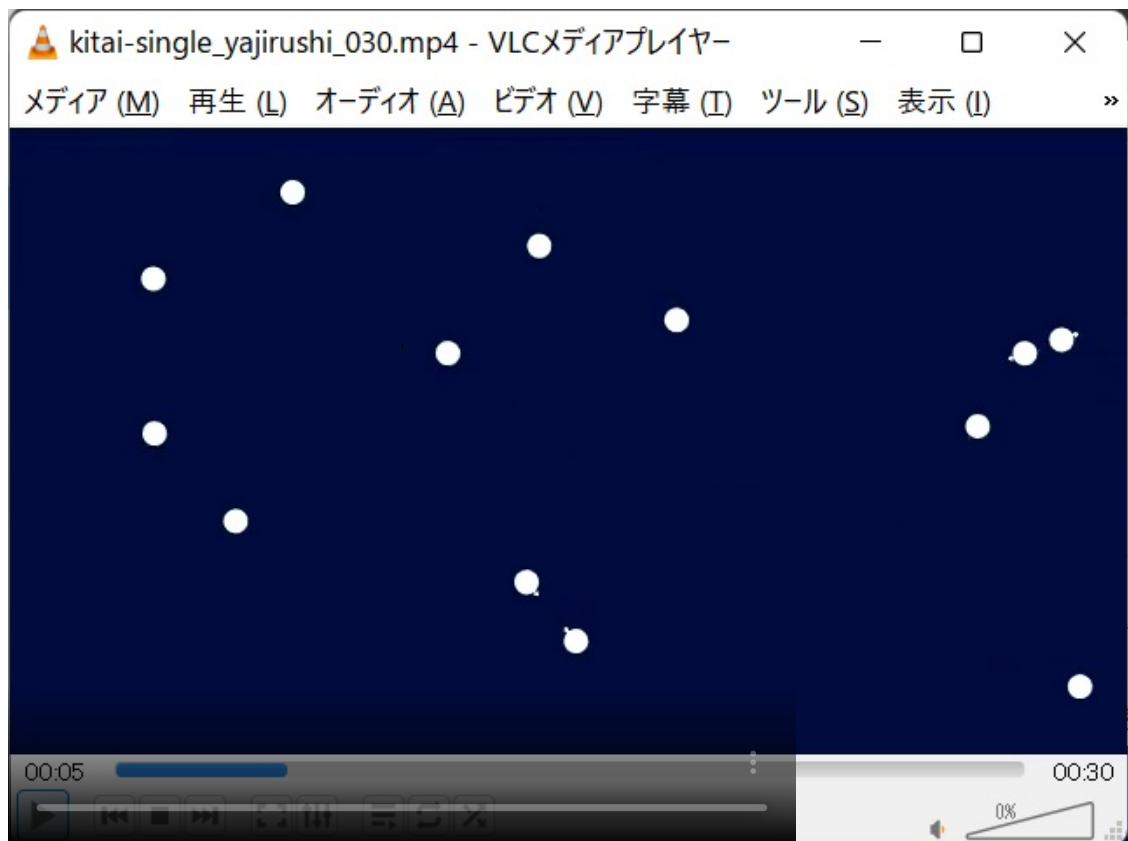
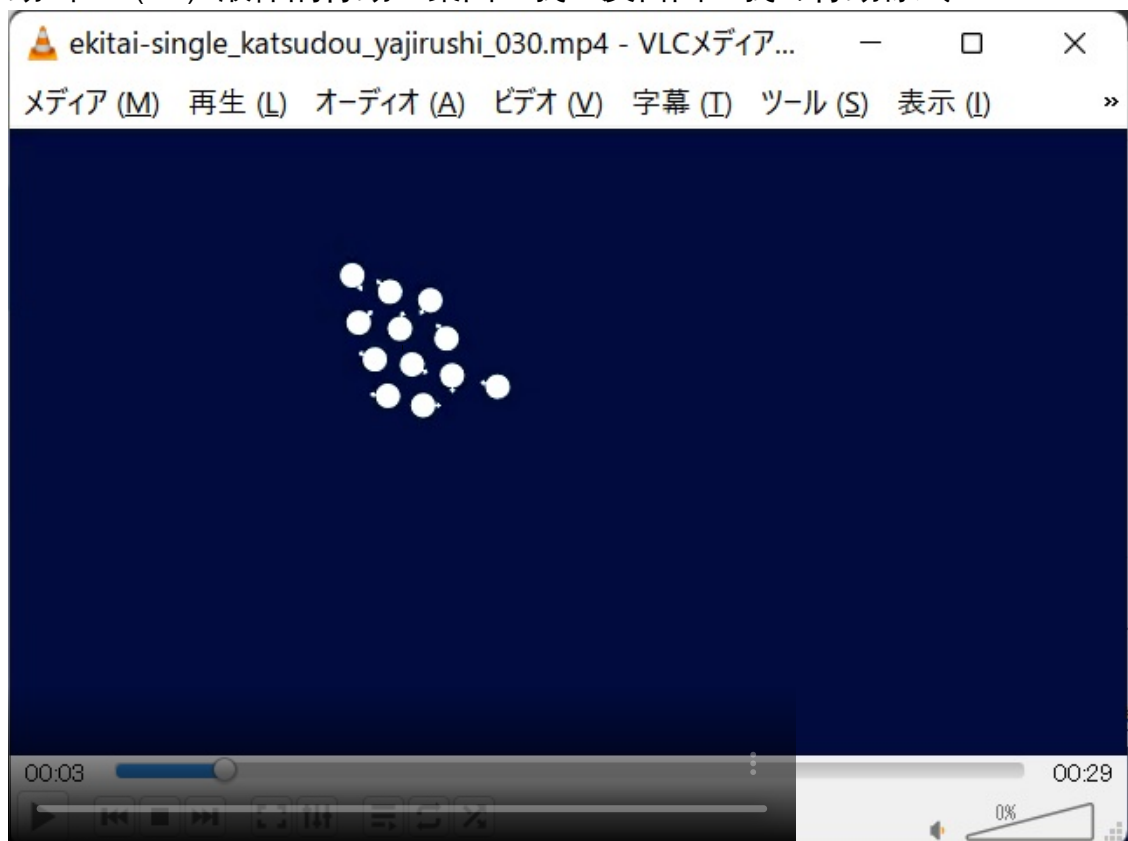
中国や韓国、日本、あるいはロシアは、いずれも稲作か畑作の農耕民です。これを行動パターンで表せば、共通に液体的行動となります。

気体的行動で動く、より遊牧的な西洋（西欧、アメリカ）の人々の男女関係（一夫一婦制を想定）。それは、例えば以下のように表せます。

動画　移動生活様式者の夫婦。遊牧民の夫婦。彼らが二人でくっついて、周囲から独立、自立して動くさま

液体的行動で動く、より農耕的な東洋（中国、日本）やロシアの人々の男女関係（一夫一婦制を想定）。それは、例えば以下のように表せます。

動画　定住生活様式者の夫婦。農耕民の夫婦。夫が、妻のグループを中心に、吸い寄せられくっつくさま

以上、国民性には、その共通の親となる運動パターン（気体的行動、液体的行動）が存在します。国民性の違いは、その具体例として捉えることが出来ます。

（社会科学の主要なイデオロギー）個人主義・自由主義と、集団主義・反自由主義の違い

動画　（１）気体的行動＝個人主義・自由主義の行動様式

動画　（２）液体的行動＝集団主義・反自由主義の行動様式

（１）個人の自由と独立がある行動様式。それが、気体的行動です。

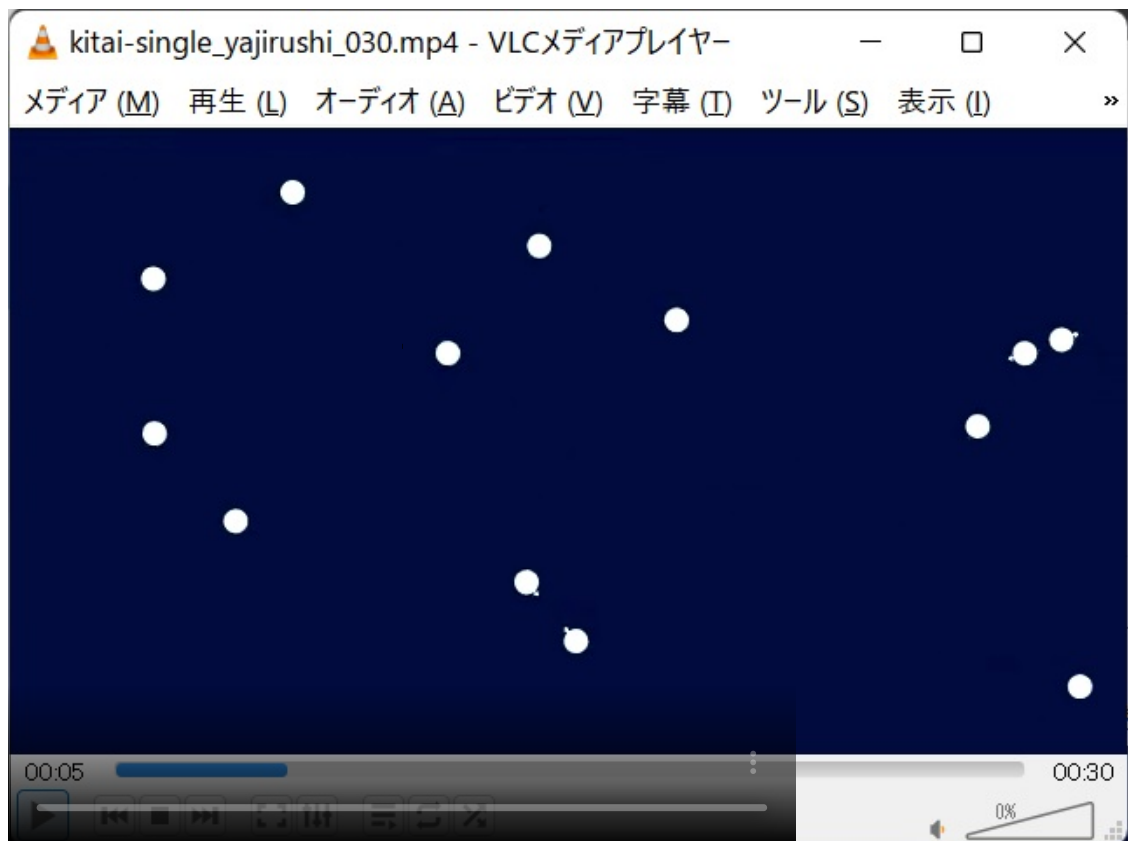
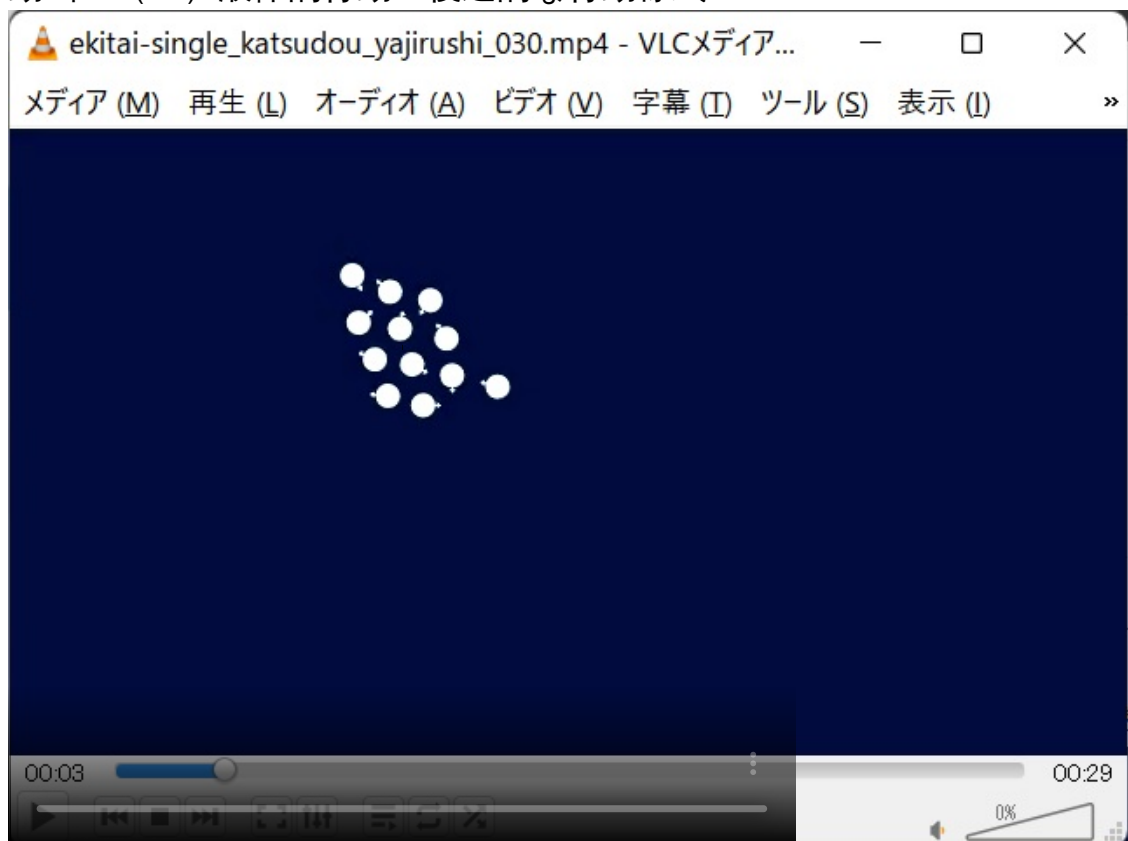
（２）個人の自由と独立が無い行動様式。それが、液体的行動です。

（１）個人の意見が尊重される行動様式。それが気体的行動です。
（２）個人よりも集団が優先され、個人が集団に従属する行動様式。それが液体的行動です。

（１）個人のプライベートな領域が確保される行動様式。それが気体的行動です。
（２）個人のプライベートな領域が確保不可な行動様式。それが液体的行動です。

個人主義・自由主義と集団主義・反自由主義の行動様式の差。それらをコンピュータ・シミュレーションで表す場合。それは、気体的行動と、液体的行動の違いで表せば良いです。

(社会科学の主要なイデオロギー) 先進的と後進的の違い

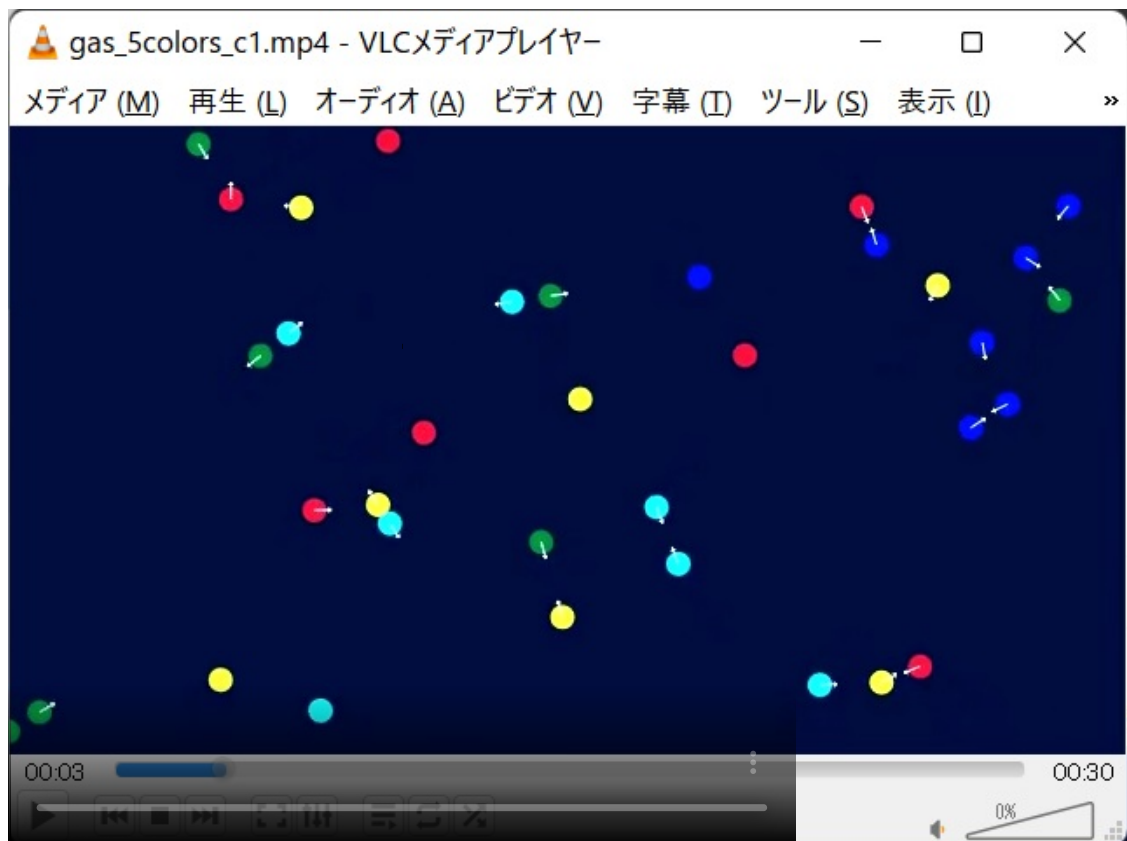
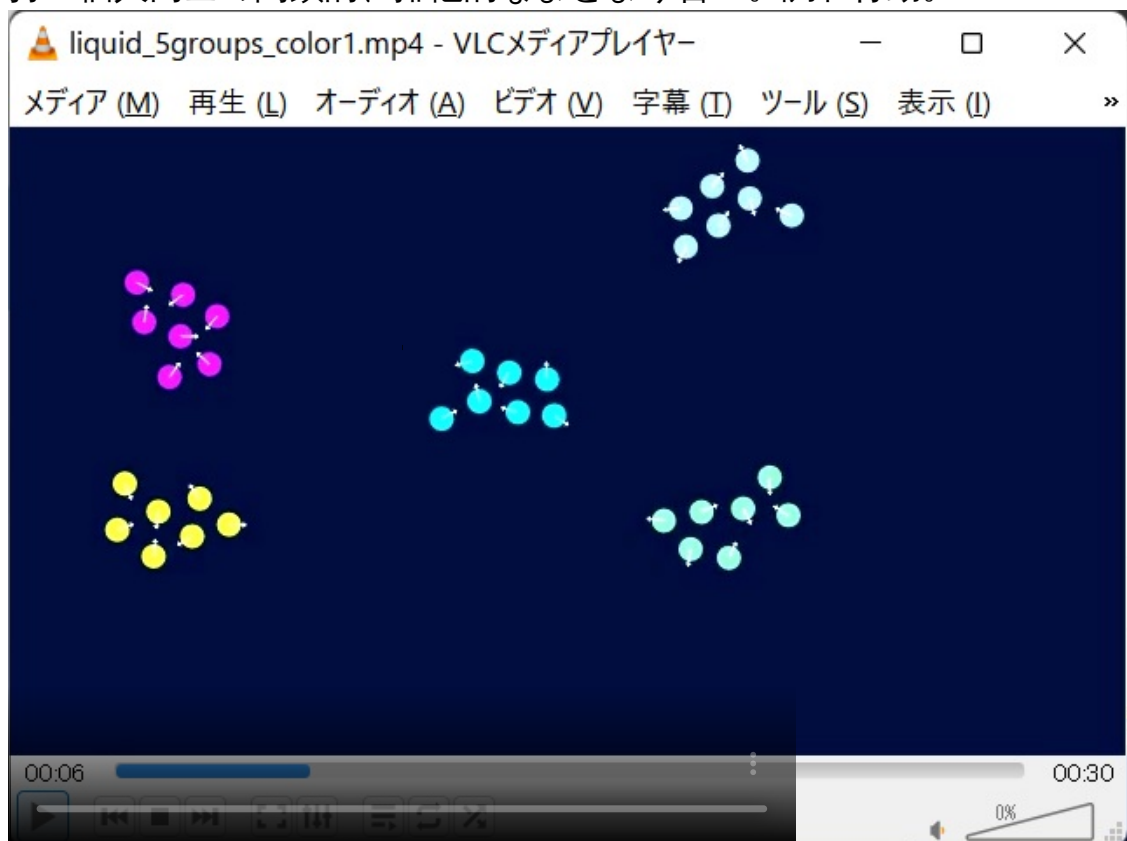
動画　（１）気体的行動＝先進的な行動様式

動画　（２）液体的行動＝後進的な行動様式

（１）未知の新しいリスクのある領域に積極的に移動して飛び込むこと。そのため、先んじて新しい知見を得られること。その実

現が可能な個体。それが、気体的行動の個体です。
（２）リスクを取らず、いつまでも今までいた（安全とされる前例、しきたりを示す）既知の光の領域にとどまり、居続けること。そのため、知見面で後追いとなること。それが、液体的行動の個体です。

（１）リスクを取る行動。＝先進的（気体的行動）
（２）リスクを取らない行動。安全を取る行動。＝後進的（液体的行動）

個人同士のイデオロギー、価値観の違い

互いにイデオロギー、価値観が異なる個人同士。彼らがどのような行動をするかについて。それは、気体的行動と液体的行動とで、大きな違いが見られます。同じイデオロギー、価値観を持つ個人に同じ色を付けて表した場合。それは、以下のような表示になります。

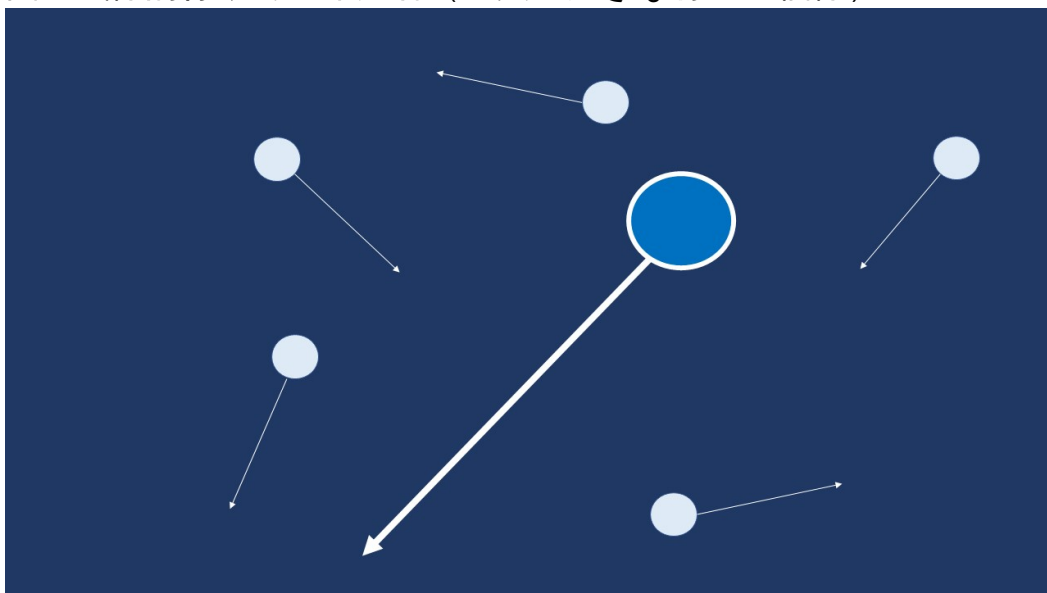
動画　（１）気体的行動。異なるイデオロギー、価値観。それらを持つ個人同士の個人単位でのぶつかり合い。非調和行動。

動画　（２）液体的行動。同じイデオロギー、価値観。それらを持つ個人同士の閉鎖的、排他的なまとまり合い。調和行動。

（１）気体的行動。そこでは、以下の内容が見られます。

異なるイデオロギー、価値観の個人同士。彼らが、高速で動き回りながら互いに混ざり合うこと。個人単位での衝突、ぶつかり合い。そこでは、以下の内容が確保されています。イデオロギー、価値観の多様性。非調和性。

（２）液体的行動。そこでは、以下の内容が見られます。
同じイデオロギー、価値観の個人同士。彼らの閉鎖的、排他的な所属、まとまり合い、集団化。彼らの低速であまり動かない定住化。異なる価値観の集団同士は互いに混ざることなく没交渉です。そこでは、以下の内容が確保されています。集団内での同質性、同調性、一体性。集団の調和性。

権力者の位置と振る舞いの違い

気体的行動下での強者、権力者。
彼らは、パワーのある個体として動きます。
彼らは、質量が重い。
彼らは、動く速度、加速度が大きい。
彼らは、高速で動く。
彼らは、その圧倒的パワーで、周囲の粒子を猛スピード、猛パワーで一方的に蹴散らす。
彼らは、自分の道を推進していく。

図　気体的行動での権力者（中央の大きな青色の個体）

液体的行動下での強者、権力者。
彼らは、集団内の中枢、中心に定住、位置する。
彼らは、質量が重い。
彼らは、大地と癒着して、土着化して動かない。
液体分子的な集団。
そこでは、以下の（１）が、以下の（２）の内容を、以下の（３）の内容とみなす。
（１）各々の粒子
（２）中枢、都心にある権力者の在所に近くなること。
（３）自らの集団内での出世、昇進とみなすこと。

上記の（１）は、以下の（４）の行動を取ります。
（４－１）中枢権力者への忖度を盛んに行うこと。
（４－２）中枢に近づこうとする他粒子との間で、激しい嫉妬深い足の引っ張り合いをすること。それを繰り返し実行すること。

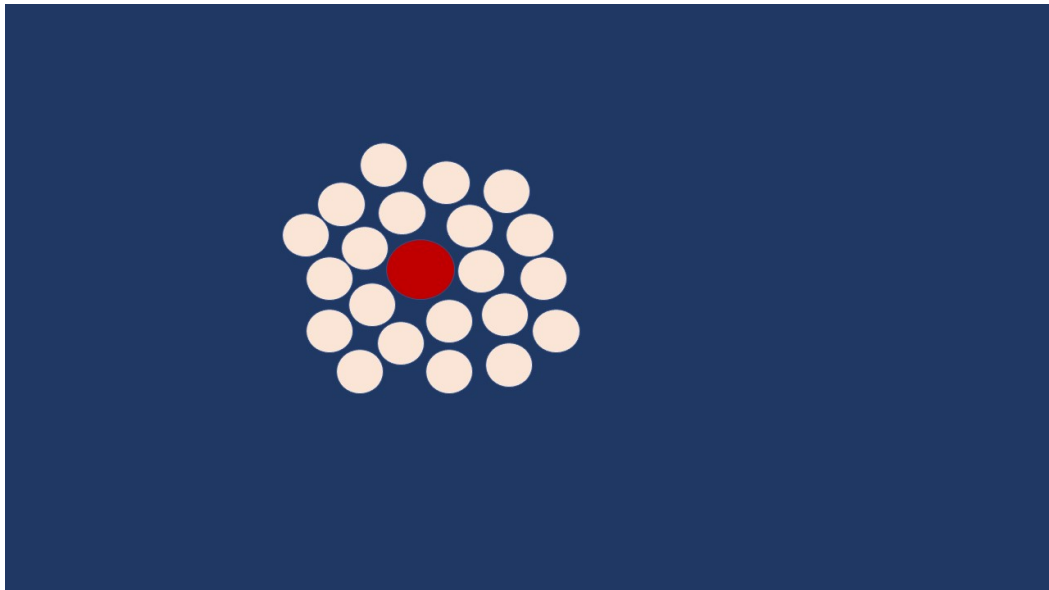
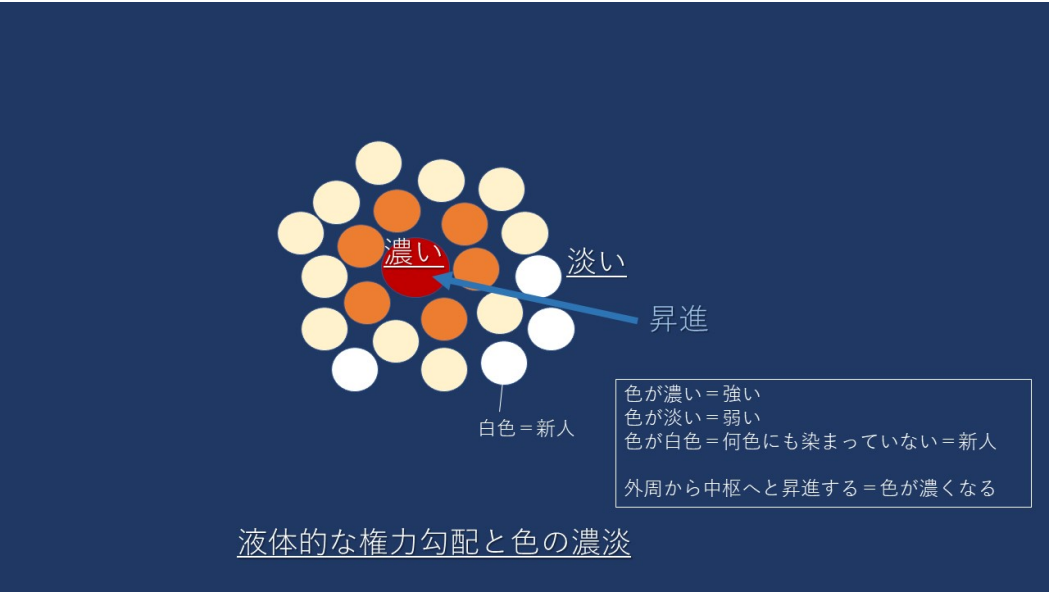
図　液体的行動における権力者（中央の大きな赤い個体）

液体的社会。そこでは、個体、粒子が、外周から中枢部に向かって、分布しています。それは、権力的な強弱関係を伴っています。
個体、粒子は、中枢部に向かうほど、色が濃くなります。そうした個体、粒子は、権力的に強くなります。
個体、粒子は、最初は、白色の特定の色の付いていない新人の状態から始まります。個体、粒子は、徐々に内周に向かって昇進して行きます。個体、粒子は、昇進すればするほど、より濃い色に染まって行きます。

図　液体的な権力勾配と色の濃淡

異なる領域間の相関

また、上記について、異なる領域間で、以下の表のように同じパターン同士の相関を取ることができます。

表_1

それは、例えば、以下の結びつき、対応関係を説明します。

気体的行動－液体的行動：農耕－遊牧：定住生活様式－移動生活様式：女性－男性：母性－父性

上記から、以下の対応関係を導き出すことが可能です。

西洋－東洋、ロシア：（西欧－東アジア、ロシア）：（アメリカ－日本）：男性的（男性優位）－女性的（女性優位）：気体的行動－液体的行動

西欧－日本：父性的－母性的：気体的行動－液体的行動

上記の対応、相関から得られる応用の答えとしては、一例として、以下のようなものがあげられます。

遊牧民の人々の性格はドライである。
農耕民の人々の性格はウェットである。

女性は、西洋では弱い。
女性は、東洋やロシアでは強い。

男性は、東洋やロシアでは弱い。
男性は、西洋では強い。

女性は、根本的に集団主義者、反自由主義者である。
男性は、根本的に個人主義者、自由主義者である。

日本社会は、根本的に集団主義者、反自由主義の社会である。それは、同じ農耕民の社会である中国、韓国、ロシアと同じである。
稲作農耕民の社会は集団主義的、反自由主義的である。

日本社会、中国社会、韓国社会、ロシア社会は女性的である。そこでは、女性が社会を支配している。それは女性優位社会である。

移動生活様式者。遊牧民。彼らは先進的である。
定住生活様式者。農耕民。彼らは後進的である。

男性は先進的である。
女性は後進的である。

アメリカ、西欧は先進的である。
中国、韓国、日本、ロシアは後進的である。

国際情勢との関連

液体的社会、気体的社会は、共に、世界の人間社会の中でひたすら盛衰を繰り返してきました。その繰り返しが、今後も続きます。
少し以前には、以下のような時期がありました。

以下の（１）が、以下の（２）によって、以下の（３）の行為を受けること。
（１）中国や日本のような液体的社会。
（２）欧米諸国のような気体的社会。
（３）大きく圧迫され、攻撃、浸食され、一方的に支配されること。

最近では、中国やロシアのような液体的社会は、とても勢力が大きくなりました。彼らは、欧米諸国のような気体的社会を、その周囲を次々と取り囲んで、密閉状態にします。液体的社会は、そうすることで、気体的社会の動きを封じます。液体的社会は、そうして、気体的社会を、自分たちの社会の下請け状態のようにして支配します。
そうした方向へと、国際情勢が新たに変化してきています。

気体的思想と、液体的思想。

私は、上記における、気体的行動様式と、液体的行動様式との、比較に基づいて、以下の内容を、整理しました。

生物や人間における、気体的思想と、液体的思想。それらの内容の、整理。
それらは、以下の内容である。

精子的行動様式や、男性的行動様式は、気体的思想をもたらす。
卵子的行動様式や、女性的行動様式は、液体的思想をもたらす。
移動生活様式は、気体的思想をもたらす。
定住生活様式は、液体的思想をもたらす。
男性優位社会の思想は、気体的思想である。
女性優位社会の思想は、液体的思想である。
例。ギリシャや西欧や中東やモンゴルの思想は、気体的思想である。
例。中国やロシアの思想は、液体的思想である。

気体的思想。例。
01　乾燥性。冷涼性。
02　簡潔性。貧相性。
03　個別主義。個人主義。自由主義。独立性。単独性。自律性。

無機性。非接着性と非癒着性。
04　運動性。流動性。能動性。
05　内外の非区別。表面の欠如。外部性。通気性。内部空気の、外気との入れ替えにおける、容易性。
06　代表性。露出性。率直性。
07　自己捨て身性。非温室性。解放性。短期契約性。
08　個人プライバシーの尊重。
09　離散性や切断性。冷徹で客観的な、対象俯瞰性。分析性。低密度性。粗雑性。
10　多様性や離散性。公開性や開放性。
11　周辺性や普遍性。自己拡大性。マクロ性や大局性やグローバル性。
12　軽量性。天空指向。
13　未知領域への、飛び出しや挑戦。新規性や独創性。
14　理性。直線性。鋭角性。剛性。論理性。科学性。
15　攻撃性。批判性。暴力支配性。

液体的思想。例。
01　湿潤性。温暖性。
02　豊潤性。富裕性。
03　全体主義。集団主義。統制主義。相互依存性。協調性。他律性。有機性。接着性と癒着性。
04　不動性。定着性。受動性。
05　内外の区別。表面張力の所持。内部性。密閉性。内部空気の、外気との入れ替えにおける、困難性。
06　内奥性。隠ぺい性や内部保護性。クッション性。
07　自己保身性。温室性。包含性。閉じ込め性。長期縁故性。
08　集団プライバシーの尊重。
09　集中性や近接性や親密性や一体融合性。盲目的で丸呑み的な、対象受容性。分析拒絶性と、チェックの詳細性。高密度性。綿密性。
10　調和性や同調性。機密性や閉鎖性や排他性。
11　自己中心性。凝縮性。ミクロ性や局所性。
12　重量性。大地指向。
13　既知領域への滞留。前例踏襲性や前例改良性。
14　情緒性。曲線性。円滑性。柔軟性。非論理性や直観性。非科学性。
15　防御性。無批判性。専制支配性。

気体的思想と液体的思想とは、互いに、矛盾し、対立し、相容れない。
気体的思想の所有者は、液体的思想に対して、専ら、気体的思想に基づいて、アプローチしようとする。例。西欧と北米の人々による、日本文化の、分析と受容。
液体的思想の所有者は、気体的思想に対して、専ら、液体的思想に基づいて、アプローチしようとする。例。日本の学者たちによる、西欧思想の、無批判な丸呑みによる、受容。日本の人々が、西欧と北米の諸国が形成する集団を、伝統的な定住集団と見なして、その定住民になることを、熱望し、実現したこと。日本の人々が、西欧と北米の諸国が形成する集団を、伝統的な定住集団と見なして、その社会的価値観に対して、同調と調和と隷従を、盲目的に行うこと。そうした定住集団のルールがもたらす、日本国内における、液体的思想の主張の、社会的な禁止。
その結果。
気体的思想の所有者は、液体的思想を、理解できない。例。西欧や北米の社会学者たちが、中国やロシアや日本を、家父長制社会と捉えることしか、出来ないこと。西欧や北米の社会学者たちが、中国やロシアの国家代表者を、家父長的な最高権力者の独裁者と捉えることしか、出来ないこと。
液体的思想の所有者は、気体的思想を、理解できない。例。日本の社会学者たち。彼らは、日本国内の大学での講義において、西欧の社会思想の素晴らしさを、真顔で主張すること。彼ら自身は、伝統的な定住生活様式のルールに基づいて、大学での日常生活を、送ることしか、出来ないこと。
気体的思想の所有者は、液体的思想を、受容できない。例。西欧や北米の社会学者たちが、女性優位社会の実在を、決して容認することが出来ないこと。
液体的思想の所有者は、気体的思想を、受容できない。例。中国やロシアの人々における、西欧的な個人主義や自由主義に対する、強烈な拒否反応。
気体的思想の所有者は、液体的思想と、その所有者を、恐れる。例。西欧と北米の諸国における、女性への恐怖症。西欧と北米の諸国における、ロシアや中国への、恐怖症。
液体的思想の所有者は、気体的思想と、その所有者を、恐れる。例。中国やロシアや日本における、男性的価値観に対する、強い社会的軽蔑。中国やロシアにおける、西欧と北米の諸国の社会的価値観に対する、強い恐怖感。日本社会内部に潜在する、アメリカ的価値観に対する、強い恐怖感。

気体的思想の所有者は、液体的思想と、その所有者を、排斥し、抹消しようとする。例。西欧と北米の諸国が主導する、ロシアを、世界社会から、抹殺しようとする、試み。
液体的思想の所有者は、気体的思想と、その所有者を、排斥し、抹消しようとする。例。中国やロシアにおける、西欧と北米の諸国の社会的価値観を、国内から抹消しようとする、試み。

男性は、気体的思想を、遺伝的に所有する。
女性は、液体的思想を、遺伝的に所有する。
気体的思想の社会において。
男性は、遺伝的に、社会適合者である。女性は、遺伝的に、社会不適合者である。
父親は、気体的思想の主導者である。
父親は、娘が遺伝的に所有する液体的思想を、彼自身の娘の生育の過程において、強制的に抹消する。
その結果。
娘は、後天的に、気体的思想の、劣化した所有者となる。

液体的思想の社会において。
女性は、遺伝的に、社会適合者である。男性は、遺伝的に、社会不適合者である。
母親は、液体的思想の主導者である。
母親は、息子が遺伝的に所有する気体的思想を、彼女自身の息子の生育の過程において、強制的に抹消する。
その結果。
息子は、後天的に、液体的思想の、劣化した所有者となる。

気体的思想と液体的思想の両方を、同時に理解する者。
彼は、生物や人間の社会における、根本的な、社会不適合者である。

生物や人間における、気体的思想と、液体的思想。それらの両者に共通する思想。
気体的思想の社会にも、液体的思想の社会にも、同時に存在する思想。
それらは、以下の内容である。
例。
01　生きやすさの最大化。生きやすさの奪い合い。上位者による、下位者の生きやすさの、収奪。例。利益至上主義。領土拡大

主義。植民地主義。
02　自己複製。自己増殖。同質性や共通性への指向。合意形成への指向。異質性の排除。純血性の維持への指向。雑種性の排除。非同化者の排除。例。人種差別。民族差別。性差別。
03　有能性の獲得への指向。既得権益の獲得への指向。社会的上位性の獲得への指向。
04　危険や脅威やライバルの、排除や抹消。そのための、戦争や闘争の、頻発。
05　社会的上位性の誇示。社会的下位性への侮蔑。
06　下位者の意思の社会的反映。上位者による、下位者の生きやすさの実現に対する、配慮。社会的地位の、上下方向における流動性の、確保。社会における、それらの実現を、理想化すること。例。民主主義。
07　隆盛指向。繁栄指向。それらの実現のための、平和の、尊重。
08　部外者の内部進入に対する、許可制の施行。内部秩序を乱す者の、内部における抹消や、外部への追放。

（2022年5月初出。）

気体優位の世界。液体優位の世界。

01 気体優位の世界。
02 液体優位の世界。

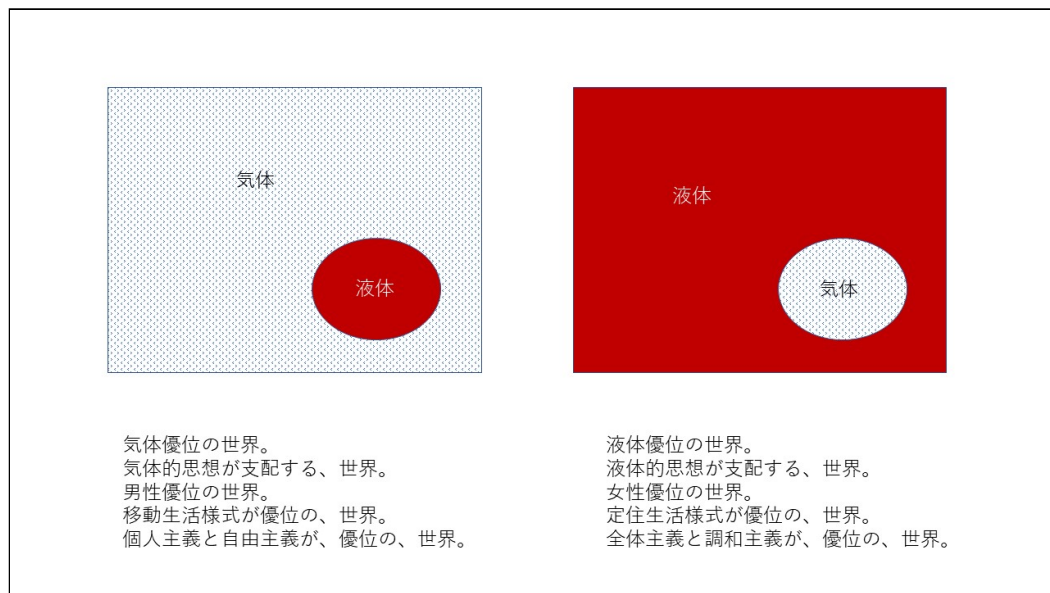
01 気体が、液体全体の外部に、無限に拡大する形で、広大に分布する、物理的な世界。
02 液体が、気体全体を、その内部へと、完全に閉じ込める形で分布する、物理的な世界。

01 気体的思想の社会が、液体的思想の社会の外部に、無限に拡大する形で、広大に分布する、精神的な世界。
02 液体的思想の社会が、気体的思想の社会を、その内部へと、完全に閉じ込める形で分布する、精神的な世界。

01 男性優位社会が、女性優位社会の外部に、無限に拡大する形で、広大に分布する、生物的な世界。

02 女性優位社会が、男性優位社会を、その内部へと、完全に閉じ込める形で分布する、生物的な世界。

01 父権社会が、母権社会の外部に、無限に拡大する形で、広大に分布する、生物的な世界。
02 母権社会が、父権社会を、その内部へと、完全に閉じ込める形で分布する、生物的な世界。

01 移動生活様式の社会が、定住生活様式の社会の外部に、無限に拡大する形で、広大に分布する、生物的な世界。
02 定住生活様式の社会が、移動生活様式の社会を、その内部へと、完全に閉じ込める形で分布する、生物的な世界。

（2022年7月初出。）

気体性社会。液体性社会。気体性や液体性の研究と、社会的禁忌との関連。

気体性社会。気体的思想の所有者たちによって形成される社会。
それは、以下の内容である。
-
生物の社会の場合。移動生活様式中心社会。男性優位社会。精子群や精細胞群の社会。

無生物の物質の社会の場合。気体分子群が形成する社会。
-

液体性社会。液体的思想の所有者たちによって形成される社会。
それは、以下の内容である。
-
生物の社会の場合。定住生活様式中心社会。女性優位社会。卵子群や卵細胞群の社会。
無生物の物質の社会の場合。液体分子群が形成する社会。
-

それらの社会における、社会的禁忌。
それは、以下の内容である。
-
気体性社会において、液体的思想への共鳴は、社会的禁忌であること。
液体性社会において、気体的思想への共鳴は、社会的禁忌であること。

例。
気体性社会において、定住生活様式への共鳴は、社会的禁忌であること。
液体性社会において、移動生活様式への共鳴は、社会的禁忌であること。

例。
-
気体性社会において、女性性そのものへの共鳴は、社会的禁忌であること。
液体性社会において、男性性そのものへの共鳴は、社会的禁忌であること。
-
気体性社会において、女性の優位性への共鳴は、社会的禁忌であること。
液体性社会において、男性の優位性への共鳴は、あくまで表向きの態度であり、実際には社会的禁忌であること。
-

例。
-
気体性社会において、液体分子運動パターンへの共鳴は、社会的

禁忌であること。
その結果。気体性社会において、液体分子運動パターンの解明は、何時まで経っても、決して進まないこと。
-
液体性社会において、気体分子運動パターンへの共鳴は、社会的禁忌であること。
液体性社会において、液体分子運動パターンの解明は、社会的禁忌であること。その行為は、彼らの社会の内部における機密の暴露に、該当すること。その行為は、社会的に決して許されないこと。
-
_

それらの結果。
世界中の、あらゆる社会において、液体分子運動パターンの解明は、社会的禁忌であり、容認されないこと。
世界中の、あらゆる社会において、液体性の研究が、何時まで経っても進まないこと。

（2022年12月初出。）

表による説明。

動作の4パターンの抽出

上記の説明では、２つのパターンに絞って説明してきました。

粒子の動作パターンから速度と相互間引力の2次元を取り出すこと。それによって、以下の四つのタイプを抽出すること。それが可能です。

表_2

それらは、以下の通りです。

（１）“気体分子の運動パターン。気体的行動。”
速度が速いこと。
相互間の引力が働かず、個人で自由に動くこと。

（２）“集団移動のパターン。”
速度が速いこと。
相互間の引力が働き、団体でまとまって動くこと。

（２－１）
無機的物質の社会の場合。
雨雲。台風や、サイクロンや、ハリケーン。彗星や、火の玉。
それらの動きのパターン。

（２－２）
生物の社会の場合。
（２－２－１）
空中移動。気体中における、移動。
飛んで集団移動する、渡り鳥の群れ。
飛んで集団移動する、バッタの群れ。
（２－２－２）
水中移動。液体中における、移動。
泳いで集団移動する、魚の群れ。
それらの動きのパターン。

（３）“散村パターン。”
速度が遅いこと。
相互間の引力が働かず、散在すること。

人間社会の場合。
散村。陸上生活。
個々の住居が、散在して形成された、集落。
それらが存在する地域の例。アメリカ。ドイツ。日本。

（４）“液体分子の運動パターン。液体的行動。”
速度が遅いこと。
相互間の引力が働き、団体でまとまって動くこと。

筆者は、本書では、上記のうち、対比する上で、よりベーシックな、（１）気体分子と、（４）液体分子とを、まず取り出して、比較しています。

動作2パターン。アンケート調査結果との対応

気体的行動、液体的行動の二つのパターン。それらは、以下のような広範な行動、動作の指向、主義を同時に説明します。
筆者は、2006年2月頃、インターネットでのアンケート調査を行いました。筆者は、その結果、それらを明らかにしました。
筆者は、読者の皆さんに、以下のことを要望します。
以下の表の内容を、大まかにざっと見て、その全容を掴むこと。

表_3

アンケート結果分析データ等詳細。それを知ること。読者の皆さんは、そのために、資料編を参照して下さい。

それにより、以下の内容の実現が可能です。
以下の傾向を、これらの動作パターンから、目視によって、導き出すこと。

（気体的行動／液体的行動）
相互分離指向／相互一体指向
独立、自立指向／相互依存指向
個人主義／集団主義
離散指向／集中指向
自由主義／相互規制指向

読者の皆さんは、それらの詳細については、以下の表を参照して下さい。
気体的行動／液体的行動。それらの性質のまとめの表。

それは、次の項目です。

気体的行動／液体的行動。それらの性質のまとめの表。

表_4

表_1

比較内容	気体的行動（ガス主義）	液体的行動（リキッド主義）
気質	ドライ	ウェット
生活様式	移動、遊牧、牧畜	定住、農耕（稲作、・・・）
性差	男性優位	女性優位
親の差	父性的	母性的
地域差（大局的）	西洋	東洋
地域差（詳細）	西欧、北米、中東	東アジア （日本、中国、韓国）
社会体制	自由主義	反自由主義
	個人主義	集団主義
先進性	先進的	後進的

トップページに戻ること。

表_2

比較内容	速度が速い	速度が遅い
相互間引力が働くこと。団体でまとまって動くこと。	雨雲。台風やサイクロンやハリケーン。彗星や火の玉。 渡り鳥の群れ。飛来バッタの群れ。魚群。	液体分子運動のパターン ＝液体的行動
相互間引力が働かないこと。散在すること。	気体分子運動のパターン	散村パターン

	＝気体的行動	

トップページに戻ること。

表_3

比較内容	気体的行動（ガス主義）	液体的行動（リキッド主義）
分子運動	気体分子運動パターン	液体分子運動パターン
湿度	ドライ	ウェット
明るさvs暗さ		
冷たさvs温かさ		
国際比較	アメリカ的	日本的
性差	男性的	女性的
父性vs母性	父性的	母性的
遊牧vs農耕	遊牧的	農耕的
都市vs農村	都市的	農村的
媚びること。	媚びないこと。	媚びること。
	かわいくないこと。	
リスクvs自己保身	危険に立ち向かうこと。	自己保身、安全、守られることを指向すること。
探検	探検を好むこと。	探検を好まないこと。

比較内容	気体的行動（ガス主義）	液体的行動（リキッド主義）
独創vs模倣	独創的	模倣的
争いvs和合	争いを好むこと。	和合を好むこと。
自由vs規制	自由を好むこと。	規制を好むこと。
決まりを破るvs守ること。	決まりを破ること。	決まりを守ること。
プライバシー	プライバシーがある。	プライバシーがない。
自立vs依存	自立していること。	依存的であること。
責任	責任を取ること。	責任を回避すること。
開放vs閉鎖、排他	開放的	閉鎖的、排他的
能動vs受動	能動的	受動的
機動性	機動性がある。	機動性がない。
自主性	自主性がある。	自主性がない。
能力主義（個人の能力を重視すること。）	能力主義的であること。	能力主義的でないこと。

比較内容	気体的行動（ガス主義）	液体的行動（リキッド主義）
格差容認vs横並び	格差を容認すること。	横並びを好むこと。
個性的	個性的	個性的でないこと。

[トップページに戻ること。]

表_4

[液体的行動。]	[気体的行動。]
液体。	気体。
[分子運動のタイプ。]	
液体分子運動。	気体分子運動。
[粒子や個体の、一般的な動き。]	
== 運動エネルギー。活動性。速度。	
運動エネルギーが小さいこと。運動しないこと。 不活発で、非活動的であること。	運動エネルギーが大きいこと。運動的であること。 活発で、活動的であること。
低速であること。 ゆっくりであること。	高速であること。 速いこと。
停止し、休止し、停滞すること。 定住し、定着すること。移動しないこと。	活動すること。 移動すること。
動くスケールが、小さいこと。 微小な振動を繰り返すこと。	動くスケールが、大きいこと。

[液体的行動。]	[気体的行動。]
動きが、微弱であること。	動きが、強力であること。
== 引力。分子間力。	
引力が、働くこと。 互いに、引き合うこと。	引力が、働かないこと。 互いに、引き合わないこと。
（分子間力が、働くこと。）	（分子間力が、働かないこと。）
体積が、一定であること。	体積が、膨張すること。体積が、拡大すること。
接着すること。 近づくこと。	接着せずに、離れること。 離反すること。
連続すること。 つながること。 癒着すること。	関係を、切断すること。
付くこと。 粘着すること。	はがれること。
纏わりつくこと。 懐くこと。 加入すること。 一緒になること。	別れること。 出て行くこと。
集まること。 密度が高いこと。	散ること。 密度が低いこと。
一体融合化すること。 一つになること。まとまること。	離散すること。 互いに独立していること。 分離すること。

[液体的行動。]	[気体的行動。]
同じであること。	違うこと。 別の途を歩むこと。
間隔や、隙間や、空きが、小さいこと。	間隔や、隙間や、空きが、大きいこと。

[生物の、性格や行動。] （個人や個体のレベルから、社会や組織や集団のレベルまで。）	
== 行動速度	
低速であること。	高速であること。
静的であること。	動的であること。
— 空間移動能力が、小さいこと。	**— 空間移動能力が、大きいこと。**
運動能力が、小さいこと。 例。筋力。機動性。敏捷性。 運転能力が、小さいこと。 例。自動車を運転すること。 空間認識能力が、小さいこと。例。地図を読解すること。 空間操作能力が、小さいこと。例。三次元の立体を、正確に回転させること。	運動能力が、大きいこと。例。筋力。機動性。敏捷性。 運転能力が、大きいこと。例。自動車を運転すること。 空間認識能力が、大きいこと。例。地図を読解すること。 空間操作能力が、大きいこと。例。三次元の立体を、正確に回転させること。
— 受動性。	**— 能動性。**
受動的であること。	能動的で、行動的であること。
エネルギーが小さいこと。	エネルギーが大きいこと。

[液体的行動。]	[気体的行動。]
品質や完成度が、高いこと。	機動性が、高いこと。
受信や受容を、指向すること。	発信を、指向すること。
導入や輸入を、指向すること。	対外的な伝導や布教や、輸出を、指向すること。
相手を、溶解し、消化し、吸収し、取り込むこと。	相手に対して、出展し、出力すること。
相手を、呑み込み、包含すること。	相手の方へと、突撃すること。
受け身で、指示待ちで、他人任せで、外圧頼りで、周囲に流される感じであること。（自分からは動かないこと。）	自主的で、自発的で、能動的であること。（自分から進んで動くこと。）
作業の、他者への丸投げをすること。	主体的であること。
先送り的であること。（決定や決断を、回避すること。）	即決的であること。（決定し、決断すること。）
待機的であること。	機動的であること。
自己主張が、調和的であること。	自己主張が、不調和的であること。
発射物を、受け止めること。クッションや緩衝となること。衝撃を、吸収し和らげること。	発射すること。突入すること。衝撃を与えること。
相手から、何かを、されること。	相手に対して、何かを、すること。

[液体的行動。]	[気体的行動。]
侵されること。犯されること。	侵すこと。犯すこと。
被害者となること。 被害者意識が強いこと。（被害妄想が強いこと。）	加害者となること。
— 停止性。定住性。	**— 移動性。**
停止的であること。停滞的であること。蓄積を重視すること。	流動的であること。変動的であること。流れを重視すること。
不動であること。定着し、定住すること。土着であること。 （根を、しっかり下ろすこと。）	移動すること。拡散すること。 （根無し草であること。）
土地への執着が、強いこと。 土地に対して、関心があること。	土地への執着が、弱いこと。 土地に対して、無関心であること。
— 重量性。	**— 軽量性。**
下降すること。沈下すること。	上昇すること。飛行すること。
大地や、下方向を、指向すること。 （地母神を、信仰すること。）	天空や、上方向を、指向すること。 （天の父なる神を、信仰すること。）
どっしり構えていること。肝が座っていること。動じないこと。	吹き飛ぶこと。動くこと。
重みをかけて、押し潰し、圧すること。	空中を、飛ばして、撃つこと。

[液体的行動。]	[気体的行動。]
― 保存性。防御性。	**― 破壊性。攻撃性。**
保存的で、保全的で、遵守的で、合社会的であること。（決まりを守ること。）	破壊的で、違反的で、反社会的であること。（決まりを破ること。）
防衛的で、防御的であること。（守りの姿勢であること。受けの姿勢であること。）	攻撃的で、挑戦的であること。（攻めの姿勢であること。）
現状維持的で、前例踏襲的であること。秩序の維持を、指向すること。	変革的で、前例破壊的であること。現状秩序の破壊と、新秩序の樹立を、指向すること。
積極的に減点すること。（物事のマイナス面を、重視すること。）	積極的に加点すること。（物事のプラス面を、重視すること。）
ネガティブであること。（否定的であること。）	ポジティブであること。（肯定的であること。）
消極的であること。	積極的であること。
失敗やエラーを、許さないこと。	失敗やエラーを、許容すること。
― ミクロ性。	**― マクロ性。**
ミクロであること。	マクロであること。
局所的で、ローカルであること。	大局的で、グローバルであること。
（狭く、小さいこと。）	（広く、大きいこと。）

[液体的行動。]	**[気体的行動。]**
繊細で、小心であること。	粗雑で、大胆であること。
小刻みで、漸進的であること。 （小改良の積み重ねを、指向すること。）	一度に、大きく動くこと。 抜本的であること。
— 身重であること。	**— 身軽であること。**
物持ちであること。	物を持たないこと。
蓄積的であること。ストックを重視すること。	蓄積しないこと。フローを重視すること。
温存すること。	切り捨てること。
博識を指向すること。知識量の多さを、重視すること。 暗記能力を重視すること。	独創能力を重視すること。
何でもできること。 ゼネラリストであること。 オールラウンドであること。 取捨選択しないこと。	得意なことへと、特化していること。スペシャリストであること。取捨選択すること。
== 行動の方向。	
近づくこと。	離れること。
距離を、縮めること。	距離を、広げること。
— 体積が、一定であること。	**— 体積が、膨張すること。**

[液体的行動。]	[気体的行動。]
拡散しないこと。拡大しないこと。 存在領域の広さを、現状維持すること。 表面積を、最小とすること。 表面張力が働くこと。	拡散すること。 拡大すること。広がること。
まとまること。結束すること。	バラバラに離散すること。
秘密性や機密性を、保持すること。	布教すること。広めること。流布させること。
ローカルであること。限定されていること。 狭いこと。	グローバルであること。（世界中へと、大きく広がること。）無限定であること。 ワイドであること。 （世界中へと、幅広く広がること。）
局所的であること。限定的であること。	普遍的であること。 （世界中へと、あまねく広がること。）
膨張を、抑止すること。	膨張すること。
内部を、彼ら自身による専制支配の、対象とすること。	周辺全部を、彼ら自身による植民地化の、対象とすること。
— 集団性。	**— 単独性。**
集団主義であること。 （集団行動や、団体行動を、好むこと。）	個人主義であること。 （個人行動や、単独行動を、好むこと。）

[液体的行動。]	[気体的行動。]
密集し、凝集すること。高密度になること。集中すること。	分散し、拡散すること。低密度になること。離散すること。
詰め込みや、緊縛を、好むこと。	余裕や、ゆとりを、好むこと。
分布が狭いこと。	分布が広いこと。
中央集権的であること。中心部を指向すること。（中央と地方とを、区別し、差別すること。）	地方分権的であること。普遍性を指向すること。（中央と地方との区別を、しないこと。）
一極性や単極性を、指向すること。	多極性を、指向すること。
主流派や、多数派を、指向すること。	少数派を、尊重すること。
権威主義であること。	反権威主義であること。
同じ分野の内部で、固まること。	異分野へと、進出し、交流すること。
— 所属性。連帯性。	**— 非所属性。独立性。**
所属や帰属を、重視すること。 （根付きを、重視すること。無所属や自由独立を、忌避すること。）	自由や独立を、重視すること。所属を、軽視すること。 （渡り鳥であること。根無し草であること。）
触れ合いを、重視すること。 私的空間の確保を、忌避すること。	触れ合いを、忌避すること。 私的空間の確保を、重視すること。

[液体的行動。]	**[気体的行動。]**
連帯すること。つながりや、リンクを、重視すること。まとめを、重視すること。	切断的であること。分析を、重視すること。
関係性やコネクションを、指向すること。縁故や派閥を、重視すること。（関係を、本質視すること。）	非関係性を、指向すること。（関係を、手段視し、道具視すること。）
団結すること。	バラバラになること。
他者や生物を、指向すること。	孤独や非生物を、指向すること。
コミュニケーションや、会話や、対話を、連続させること。	コミュニケーションや、会話や、対話を、断絶させること。
ネットワークや、網を、指向すること。	原子性を、指向すること。
他者の視線を、意識すること。見栄や恥を、重視すること。	他者の視線に対して、無関心であること。個人的な興味を、重視すること。
— 制限性。統制性。	**— 自由性。**
規制や、制限や、管理や、統制を、好むこと。（制約や束縛を、好むこと。）	自由主義であること。（自由を、好むこと。）
牽制すること。足を引っ張ること。嫉妬すること。	牽制しないこと。嫉妬しないこと。
決められた枠内へと、止まること。	決められた枠を、はみ出ることや、破ること。

[液体的行動。]	[気体的行動。]
非競争的であること。エスカレータ的であること。 （同時加入者が、同期を取って、同時に、横並びで、上昇すること。）	競争的であること。 （飛び級や、追い抜きや、脱落を、容認すること。）
既得権益主義的であること。 （既得権益を所有する個人を、重視すること。個人の既得権益を、誇示すること。）	能力主義的であること。 （有能性を所有する個人を、重視すること。個人の能力を、誇示すること。）
成果を共有すること。 （個人の成果を、皆の成果とすること。）	成果を私有すること。 （成果を出す個人を重視すること。個人の成果を誇示すること。）
同期や、横並びや、平等を、指向すること。 （均一性や均等性を、指向すること。）	格差を、容認すること。
市場原理を、否定し、敵視すること。	市場原理を、肯定し、重視すること。
— 一様性。	**— 多様性。**
共通で、同一であること。	非共通であること。 違っていること。
画一的であること。	多様性を尊重すること。
心理的位置を近接させること。同化すること。	心理的位置を隔離させること。同化しないこと。

[液体的行動。]	[気体的行動。]
同質的であること。統一的であること。	異質的であること。バラバラであること。
同質化を、強制すること。（目立ち過ぎる者や、外れた者を、潰し、追放すること。）	目立ち過ぎる者や外れた者の存在を、許容すること。
没個性的であること。目立たないこと。	個性的であること。目立つこと。
普通であること。一般的であること。標準的であること。	変わっていること。特殊であること。
周囲への融合や埋没を、好むこと。	周囲からの目立ちを、好むこと。
自己を確立しないこと。	自己を確立すること。
揃いを、好むこと。一緒を、好むこと。	別々を、好むこと。相違を、好むこと。
内部における調和の維持を、好むこと。内部の調和を乱す者を、外部へと追放すること。内部の調和を乱す者を、内部で、秘密裏に、抹消すること。内部抗争を、表に出さないこと。	内部における調和の維持に対して、無頓着であること。
制服の着用を、好むこと。	自由な服の着用を、好むこと。
（相手と、同じ道を歩むこと。相手を、自分自身と同一レベルまで、落とすこと。相手の足を、引っ張ること。相手に、追いつくこと。）	（相手とは、別々の道を歩むこと。）

[液体的行動。]	[気体的行動。]
― 従属性。相互依存性。他律性。	**― 自主性。独立性。自律性。**
従属的であること。	独立的であること。
相互依存的であること。	自立的であること。
複製であること。	独自であること。
もたれ合うこと。	自立すること。
他者任せであること。他者の指示を、待つこと。責任転嫁を、行うこと。	自己判断で、動くこと。 自己責任で、動くこと。
上位者に対して、素直で従順なこと。上位者の言うことを、聞くこと。挑戦しないこと。	上位者に対して、反抗的なこと。上位者の言うことを、聞かないこと。挑戦的であること。
相手から、侵略されること。 相手から、脅迫されること。 相手に対して、防御すること。	相手を、侵略すること。 相手を、脅迫すること。 相手を、攻撃すること。
自己主張しないこと。	自己主張すること。
所有していること。 持ち物が、豊潤であること。 持ち物を、奪われること。	所有していないこと。 持ち物が、貧相であること。 持ち物を、奪うこと。
攻められること。責められること。受けること。 （マゾヒズムを、指向すること。）	攻めること。責めること。攻めること。 （サディズムを、指向すること。）

[液体的行動。]	[気体的行動。]
侵されること。 犯されること。	侵すこと。 犯すこと。
— 貴重性。	**— 非貴重性。**
自分自身を、貴重視すること。自己保身や、安全を、指向すること。	自分自身を、貴重視しないこと。他者を護衛すること。
自己保身的であること。退嬰的であること。 （自分自身の生存維持を、他者の生存維持よりも、最優先すること。）	捨て身的であること。 （誰かの外側で、その盾や防護壁になること。他者の生存維持を、自分自身の生存維持よりも、優先すること。）
誰かによって、守られ、助けられること。護衛されること。護送船団方式を好むこと。温室の内部に居ること。互いに守られること。	自衛すること。自助すること。他者の助けを、借りないこと。温室から出て行くこと。
安全を指向すること。 （安全、安心を第一に優先すること。危険を回避すること。）	危険を指向すること。 （危険を容認すること。危険に対して、積極的に立ち向かうこと。）
失敗を回避すること。	失敗を容認すること。
無難であること。大過無いこと。それらを、指向すること。	リスクを取ること。チャレンジすること。それらを、指向すること。
護送船団的であること。	単独航行的であること。

[液体的行動。]	**[気体的行動。]**
（安全であること。外敵から、直接、襲われないこと。それらを、指向すること。）	（外敵と、直接、対峙すること。外敵を、直接、撃退すること。それらを、指向すること。）
— プライバシーを尊重しないこと。	**— プライバシーを尊重すること。**
他者と、近接すること。	他者から、離れること。
プライバシーを、確保しないこと。 （個人空間が、欠如していること。）	プライバシーを、確保すること。 （個人空間が、確保可能であること。）
大部屋を、好むこと。 （各々が、皆と一緒の部屋にいること。そうした状態を、好むこと。）	個室を好むこと。 （各々が、一人で、別々の部屋にいること。そうした状態を、好むこと。）
相互監視を、好むこと。	相互監視を、忌避すること。
他者の視線が、気になること。（見られている感じがすること。）恥ずかしいと、感じること。 他者の視線に対して、敏感であること。	他者の視線を、気にしないこと。

[液体的行動。]	[気体的行動。]
他者からの評判や評価に対して、敏感であること。 他者から、良く見られようとすること。ルックスや化粧や服装に対して、気を遣うこと。見栄を張ること。 他者から、気に入られようとすること。他者に対して、媚びること。 他者から、誉められようとすること。他者によって誉められる方向へと、進むこと。	他者を気にしないこと。我が道を行くこと。（自分自身が進むべきと考える、独自の進路。そうした道を、進むこと。）
— 一体融合性。	**— 分離性。**
相互の一体融合化を、指向すること。 相互の包括性を、指向すること。	相互の分離を、指向すること。 相互の個別性を、指向すること。
包含や、内包や、抱擁を、好むこと。 袋の内部に、居ること。そうした状態を、好むこと。	外部への飛び出し。外部への放出。突き放し。それらを、好むこと。
受け入れること。受容すること。	切り捨てること。
賛成すること。同意すること。	反対すること。反論すること。異論を唱えること。
共感すること。	共感しないこと。
慕うこと。付いて行くこと。	別れること。
気に入られようとすること。媚びること。忖度すること。	気に入られようとしないこと。媚びないこと。忖度しないこと。

[液体的行動。]	[気体的行動。]
懐くこと。懐に入ること。懐かしさがあること。	懐かないこと。懐に入らないこと。懐かしさが無いこと。
甘えること。	甘えないこと。
拗ねること。 （相手から、受け入れられないこと。それを根に持って、相手に対して、表面的に反抗すること。）	拗ねないこと。 （相手から、受け入れられないこと。それを根に持たないこと。）
容赦すること。許すこと。	容赦しないこと。許さないこと。
主観的であること。	客観的であること。
協調的で、同調的であること。 （一人での抜け駆けを、許さないこと。）	単独であること。同調しないこと。 （一人で、我が道を行くこと。）
合わせること。	合わせないこと。
馴れ合うこと。	馴れ合わないこと。
癒着すること。	癒着しないこと。
流行や、トレンドを、追うこと。 （周囲の流行に対して、敏感であること。周囲の流行に、追従すること。）	流行や、トレンドを、追わないこと。 （周囲の流行に対して、敏感で無いこと。周囲の流行に、追従しないこと。）

[液体的行動。]	[気体的行動。]
責任が、分散し、拡散すること。 責任回避が、可能であること。 責任転嫁が、可能であること。 （個人の行為が、皆の行為であること。ある個人の失敗は、誰の責任か？その特定が、困難であること。）	責任を、個人で、取らされること。 責任回避が、不可能であること。 責任転嫁が、不可能であること。 （個人の行為が、単独行為であること。ある個人の失敗は、誰の責任か？その内容が、ピンポイントで、判明可能で、特定可能であること。）
個人の行為が、連帯責任であること。	個人の行為が、個人の責任であること。
目的や、目標や、進行方向が、不明確であること。	目的や、目標や、進行方向が、明確であること。
— **他律性。**	— **自律性。**
他律的であること。	自律的であること。
感染しやすいこと。伝染しやすいこと。	感染しにくいこと。伝染しにくいこと。
腐敗しやすいこと。	腐敗しにくいこと。
— **調和性。一致性。**	— **紛争性。相違性。**
調和を、指向すること。	紛争を、指向すること。
和解を、指向すること。	訴訟を、指向すること。
平和を、指向すること。	戦争を、指向すること。

[液体的行動。]	[気体的行動。]
調和や協和や和音を、指向すること。	不調和や不協和や騒音を、指向すること。
一致を、指向すること。	相違を、指向すること。
満場一致を、好むこと。仲間割れを、容認しないこと。	多数決を、好むこと。仲間割れを、容認すること。
一斉行動を、指向すること。抜け駆けを、禁止すること。	分散行動を、指向すること。抜け駆けを、容認すること。
調整的であること。間接的であること。配慮的であること。 （気配りが、行き届いていること。）	独断的であること。直接的で、直截的であること。配慮しないこと。 （気配りを、しないこと。）
事前協議や、事前決定や、事前了解を、指向すること。 （談合や根回しを、好むこと。）	その場での、リアルタイムでの、決定を、指向すること。
慣性に従って、行動すること。 事前に用意された台本に従って、行動すること。	慣性に逆らって、行動すること。 臨機応変に、行動すること。
— 曖昧性。	**— 明快性。**
曖昧さを、指向すること。	明快さを、指向すること。
間接的な表現を、好むこと。	直接的な表現を、好むこと。

[液体的行動。]	[気体的行動。]
— 感動性。	**— 冷徹性。**
情緒的で、感情的であること。感動すること。	感情の表出を、抑制すること。無感情であること。無感動であること。
非合理的で、非論理的であること。割り切れないこと。	合理的で、論理的であること。割り切ること。
愛憎に従って、残忍に行動すること。他者に対して、感情移入を、し過ぎること。	冷徹さに従って、残忍に行動すること。他者に対して、感情移入を、し無さ過ぎること。
— 狭小性。	**— 広大性。**
各個体のテリトリーが、狭いこと。	各個体のテリトリーが、広いこと。
視界や、視野が、狭いこと。	視界や、視野が、広いこと。
癒着的で、密着的であること。高密度を、指向すること。密集や詰め込みを、指向すること。隙間や空きや余裕を、嫌うこと。	癒着や密着を、忌避すること。低密度を、指向すること。密集や詰め込みを、忌避すること。隙間や空きや余裕を、好むこと。
— 閉鎖性。	**— 開放性。**
閉鎖的であること。	開放的であること。

[液体的行動。]	[気体的行動。]
隙間が無いこと。光が入らないこと。暗いこと。 隙間風が吹かないこと。寒気や暑気や熱気が入りにくいこと。他者の体温を、感じやすいこと。適度に温かいこと。温室であること。	光が差し込むこと。光が入る隙間があること。明るいこと。 隙間風が吹くこと。寒気や暑気や熱気が入りやすいこと。他者の体温を、感じにくいこと。冷たいこと。暑いこと。熱いこと。非温室であること。
内外を、区別すること。 （表面張力が、存在すること。）	内外を、区別しないこと。 （表面張力が、存在しないこと。）
排他的であること。部外者に対して、門戸を閉じていること。 部外者による、内部への参入を、拒否すること。 （初見者や、部外者に対して、不寛容であること。）	排他的で無いこと。部外者に対して、門戸を開いていること。 内部という概念が、もともと、無いこと。 （初見者や、部外者に対して、寛容であること。）
隠蔽すること。秘匿すること。表明を忌避すること。名前を伏せること。表に出ないこと。奥に居ること。部外者に対して、秘密性や機密性が、高いこと。歴史に名前を残さないこと。 （内向きであること。）	露出すること。暴露すること。表明すること。代表すること。表に出ること。部外者に対して、秘密性や機密性が、低いこと。歴史に名前を残すこと。 （外向きであること。）

[液体的行動。]	[気体的行動。]
内部限定であること。ローカルであること。局地的であること。	グローバルであること。普遍的であること。
脱出が、困難であること。 内部に、一度でも、加入したり、所属した場合。抜けられないこと。出られないこと。 脱出した場合。脱出を試みた場合。裏切り者扱いされること。	脱出が、容易であること。 内部に、加入したり、所属した場合。抜けられること。出られること。 脱出した場合。脱出を試みた場合。裏切り者扱いされないこと。
— 複製性。模倣性。	**— 独創性。独自性。**
模倣すること。真似すること。コピーすること。それらを、好むこと。	独創性や独自性の実現に対して、こだわること。
既知領域を、指向すること。 二番手を指向すること。 （一番手の経験を、そのまま利用すれば良いこと。楽であること。）	未知領域を、指向すること。 最初を指向すること。一番手や先頭を、指向すること。 （経験が、初めてであること。そのため、苦労すること。）
モルモットや、実験台に、なろうとしないこと。	モルモットや、実験台に、なろうとすること。
既に出来ている先例を、利用すること。先例に沿って、進むこと。	先例を、自力で作ること。後進が進む途を、自力で切り開くこと。

[液体的行動。]	**[気体的行動。]**
定説を守ること。 ブレークスルーを回避すること。	定説を破ること。定説に違反すること。定説を覆すこと。 ブレークスルーを実現すること。
== 行動速度。x 行動方向。	
低速性。 x 近づくこと。	高速性。 x 離れること。
— 既存性。	**— 未知性。**
既存領域や既知領域へと、滞留すること。 （探検しないこと。冒険しないこと。）	未開領域や、未知領域や、未踏領域へと、進出すること。 （探検すること。冒険すること。）
光の領域を、指向すること。 （既に光が当たっている、領域。何があるか、予め、見ることが出来る、領域。既に、誰かが居る、領域。そうした領域を指向すること。）	闇の領域を、指向すること。 （何があるか、暗くて見ることが出来ない領域。何が待っているか、誰にも分からない領域。未だ、誰も居ない、領域。そうした領域を指向すること。）
前例や、しきたりを、重視すること。	前例や、しきたりに、囚われないこと。

[液体的行動。]	[気体的行動。]
前例の蓄積の度合いを、重視すること。 先輩後輩関係を、重視すること。 （既存の経験を、より豊富に持つ者。そうした者が、より上位であること。）	画期的な成功の度合いを、重視すること。 先輩後輩関係を、重視しないこと。 （未知の領域へのチャレンジに、成功した者。そうした者が、より上位であること。）
既存の、正解とされる知見に、通じていること。博識であること。その度合いを、重視すること。	新天地を開拓すること。新たな発見や発明を、実現すること。その度合いを、重視すること。
事前に判明していること。その度合いを、重視すること。 （予め分かっていることしか、しないこと。そうした行為を、指向すること。）	事前に判明していないこと。その場で、リアルタイムで、初めて、判明させること。それらの度合いを、重視すること。 （予め分かっていないことを、その都度、新たに判明させること。そうした行為を、指向すること。）
— 後進性。	**— 先進性。**
後進的であること。	先進的であること。
前近代的であること。近代性の超克を、指向すること。	近代的であること。

== その他。

[液体的行動。]	[気体的行動。]
卵子的であること。女性的であること。	精子的であること。男性的であること。
母性的であること。母権的であること。	父性的であること。父権的であること。
血縁関係が濃いこと。共通の血縁を、持つこと。	血縁関係が薄いこと。共通の血縁を、持たないこと。
恋愛を、好むこと。性的結合を、好むこと。	恋愛を、好まないこと。性的結合を、好まないこと。
定住生活様式に従って、生きること。 農耕民的であること。（植物の栽培によって、生きること。） 女性優位社会であること。	移動生活様式に従って、生きること。 遊牧民的であること。 牧畜民的であること。 （動物の飼育によって、生きること。） 男性優位社会であること。
（例。日本。中国。韓国。東南アジア。ロシア。）	（例。西欧。北米。中東。モンゴル。）
植物的であること。 （動かないこと。）	動物的であること。 （動くこと。）
農村的であること。	都市的であること。
湿潤的であること。 （割り切れないこと。涙もろいこと。人情味があること。）	乾燥的であること。 （割り切ること。味気ないこと。面白みに欠けていること。）
[物質の性質。（例。色。音程。）]	

[液体的行動。]	[気体的行動。]
湿潤性。（湿っていること。濡れていること。）	乾燥性。（乾いていること。）
近づいていること。くっついていること。	離れていること。
重いこと。低いこと。下降すること。下方へと沈殿すること。大地を指向すること。	軽いこと。高いこと。上昇すること。上方へと、浮遊し飛行すること。天空を指向すること。
濃いこと。高密度であること。 暗いこと。 温かいこと。温室であること。	薄いこと。淡いこと。 低密度であること。 あっさりしていること。 明るいこと。 冷たいこと。暑いこと。熱いこと。非温室であること。
連続すること。	分離すること。切断すること。断絶すること、断続すること。
アナログ的であること。	デジタル的であること。
遅いこと。低速であること。加速度が低いこと。	速いこと。高速であること。加速度が高いこと。
（冬場において、空気の加湿を、行うこと。）	（夏場において、空気の除湿を、行うこと。）

[液体的行動。]	[気体的行動。]
柔らかいこと。変形すること。受け止めること。	硬いこと。変形しないこと。跳ね返すこと。剛性を持つこと。
曲線的であること。曲がっていること。	直線的であること。まっすぐであること。
非論理的であること。	論理的であること。
有機的であること。生物的であること。（例。衣類。蛋白質。木材。）	無機的であること。物理的であること。（例。機械。装置。歯車。コンクリート。）

（2022年6月改訂。）

トップページに戻ること。

資料編

液体的行動、気体的行動 検証データ数値一覧

2006.12〜 初出

回答結果 その1

回答期間 2006年12月4日〜2006年12月9日

回答数 206
男 49.515％ 女 50.485％
10代 26.214％
20代 43.689％
30代 15.534％
40代 8.738％
50代 4.854％
60代 0.485％
70代 0.485％

回答比率

No.	文章	ドライ	感じない(0)	少し感じる(1)	やや感じる(2)	かなり感じる(3)	とても感じる(4)	合計値
		ウェット	感じない(0)	少し感じる(1)	やや感じる(2)	かなり感じる(3)	とても感じる(4)	合計値
1			56.311	17.476	15.534	5.825	4.854	0.854

	液体	ドライ						
		ウェット	23.301	13.592	17.961	21.359	23.786	2.087
2	気体	ドライ	36.408	11.650	21.845	16.019	14.078	1.597
		ウェット	41.748	24.272	16.990	11.165	5.825	1.150

回答結果 その2

回答期間 2007年6月16日〜2007年6月20日

回答数 207
男 49.275％ 女 50.725％
10代 31.401％
20代 33.816％
30代 19.807％
40代 9.662％
50代 4.831％
60代 0.000％
70代 0.483％

回答比率

No.	文章	ドライ	感じない(0)	少し感じる(1)	やや感じる(2)	かなり感じる(3)	とても感じる(4)	合計値
		ウェット	感じない(0)	少し感じる(1)	やや感じる(2)	かなり感じる(3)	とても感じる(4)	合計値
1	近づく、	ドライ	68.116	14.493	8.696	3.865	4.831	0.628
			20.773	17.391	22.222	22.222	17.391	1.981

	低速	ウェット						
2	近づく、高速	ドライ	54.106	15.459	16.425	5.797	8.213	0.986
		ウェット	28.019	23.188	15.459	18.841	14.493	1.686
3	離れる、低速	ドライ	41.063	21.739	16.425	13.527	7.246	1.242
		ウェット	40.580	17.874	14.010	13.527	14.010	1.425
4	離れる、高速	ドライ	30.918	8.213	18.357	21.739	20.773	1.932
		ウェット	62.802	18.357	8.696	5.314	4.831	0.710

回答結果 その3

回答期間 2007年8月21日〜2007年8月31日

回答数 201
男 52.239％ 女 47.761％
10代 30.348％
20代 33.333％
30代 20.896％
40代 13.433％
50代 1.990％
60代 0.000％
70代 0.000％

回答比率

No.	文章	液体	感じない(0)	少し感じ	やや感じ	かなり感じる(3)	とても感じる(4)	合計値

				る (1)	る (2)			
		気体	感じない (0)	少し感じる (1)	やや感じる (2)	かなり感じる (3)	とても感じる (4)	合計値
1	女性的に	液体	38.806	19.900	19.403	11.443	10.448	1.348
		気体	68.657	11.443	10.448	4.975	4.478	0.652
6	男性的に	液体	66.169	13.433	10.448	6.965	2.985	0.672
		気体	36.816	15.920	19.403	16.915	10.945	1.493
9	母性的に	液体	54.229	18.905	14.925	6.468	5.473	0.900
		気体	80.597	11.443	5.473	1.493	0.995	0.308
4	父性的に	液体	79.104	8.955	9.453	0.995	1.493	0.368
		気体	63.184	14.428	10.945	6.468	4.975	0.756
3	農耕民的に	液体	41.791	16.418	20.398	14.428	6.965	1.284
		気体	63.682	15.920	12.935	3.483	3.980	0.682
8	遊牧民的に	液体	53.234	15.423	12.935	10.448	7.960	1.045
		気体	48.259	15.920	15.423	6.965	13.433	1.214

5	日本的に	液体	29.851	17.413	20.398	16.418	15.920	1.711
		気体	58.209	14.428	12.935	8.458	5.970	0.896
2	アメリカ的に	液体	75.124	10.448	7.463	5.970	0.995	0.473
		気体	43.781	12.438	19.403	13.433	10.945	1.353
7	模倣的に	液体	40.299	17.910	18.905	11.940	10.945	1.353
		気体	54.726	15.920	15.423	6.965	6.965	0.955
10	独創的に	液体	66.667	14.428	7.960	5.970	4.975	0.682
		気体	35.821	18.408	19.900	11.940	13.930	1.498

回答結果 その4

回答期間 2007年9月15日〜2007年10月19日

回答数 200
男 52.500％ 女 47.500％
10代 27.500％
20代 36.000％
30代 23.000％
40代 10.000％
50代 3.500％
60代 0.000％
70代 0.000％

回答比率

No.	文章	液体	感じない(0)	少し感じる(1)	やや感じる(2)	かなり感じる(3)	とても感じる(4)	合計値
		気体	感じない(0)	少し感じる(1)	やや感じる(2)	かなり感じる(3)	とても感じる(4)	合計値
10	自身の保身を重視するように	液体	14.500	9.500	15.000	25.000	36.000	2.585
		気体	39.500	17.500	21.500	12.500	9.000	1.340
1	自身の安全を重視するように	液体	12.000	9.500	23.500	24.500	30.500	2.520
		気体	58.000	16.500	16.000	3.500	6.000	0.830
32	守られるのを好むように	液体	7.500	8.000	13.000	22.500	49.000	2.975
		気体	62.000	15.500	8.500	7.500	6.500	0.810
13	危険に立ち向かうように	液体	61.500	17.500	14.500	4.500	2.000	0.680
		気体	37.000	17.000	23.000	13.000	10.000	1.420
26	探検を好むように	液体	70.500	16.000	6.500	4.500	2.500	0.525
		気体	21.500	11.000	23.000	19.500	25.000	2.155

2	依存的に	液体	9.000	8.500	18.000	27.500	37.000	2.750
		気体	70.500	8.000	12.000	7.500	2.000	0.625
16	自立しているように	液体	83.000	9.000	4.000	1.500	2.500	0.315
		気体	27.500	19.000	16.000	19.000	18.500	1.820
17	規制を好むように	液体	25.000	9.500	20.500	19.500	25.500	2.110
		気体	72.000	14.500	8.500	3.500	1.500	0.480
3	自由を好むように	液体	77.000	9.500	6.000	4.000	3.500	0.475
		気体	12.000	8.000	13.500	22.000	44.500	2.790
7	個性的に	液体	77.500	10.000	5.500	3.000	4.000	0.460
		気体	24.000	11.500	19.000	18.500	27.000	2.130
4	プライバシーがあるように	液体	68.500	18.000	6.500	5.000	2.000	0.540
		気体	43.500	18.000	19.000	11.500	8.000	1.225
27	決まりを守るように	液体	16.000	10.000	17.500	23.500	33.000	2.475
		気体	61.500	21.500	9.500	2.500	5.000	0.680
21	決まり	液	79.000	11.000	4.500	3.000	2.500	0.390

	を破るように	体						
		気体	23.500	18.000	21.500	17.000	20.000	1.920
18	責任を回避するように	液体	17.000	14.500	20.000	19.500	29.000	2.290
		気体	30.000	21.500	19.000	14.000	15.500	1.635
5	責任を取るように	液体	65.500	19.000	9.000	4.000	2.500	0.590
		気体	66.500	14.000	12.000	4.000	3.500	0.640
8	閉鎖的に	液体	12.000	13.500	14.000	22.500	38.000	2.610
		気体	53.500	18.000	7.000	11.000	10.500	1.070
24	排他的に	液体	30.000	18.500	15.000	13.500	23.000	1.810
		気体	35.000	22.500	21.500	10.000	11.000	1.395
36	開放的に	液体	81.500	9.000	3.500	2.500	3.500	0.375
		気体	19.500	13.500	13.500	23.000	30.500	2.315
23	和合を好むように	液体	18.000	14.000	16.000	23.500	28.500	2.305
		気体	55.500	23.000	15.000	4.500	2.000	0.745
30	調和を好むように	液体	15.500	10.500	23.000	21.000	30.000	2.395

		気体	63.000	17.500	10.000	6.500	3.000	0.690
11	争いを好むように	液体	72.500	13.500	10.000	1.500	2.500	0.480
		気体	28.000	15.500	22.000	16.500	18.000	1.810
29	受動的に	液体	15.000	21.500	16.000	23.000	24.500	2.205
		気体	53.000	18.000	12.500	10.500	6.000	0.985
12	能動的に	液体	52.500	24.000	11.500	7.000	5.000	0.880
		気体	16.500	16.500	18.500	24.500	24.000	2.230
25	機動性があるように	液体	59.000	24.000	11.500	3.000	2.500	0.660
		気体	15.500	12.500	21.500	24.000	26.500	2.335
9	自主性があるように	液体	73.000	13.500	7.500	3.500	2.500	0.490
		気体	22.500	17.000	18.500	21.500	20.500	2.005
20	横並びを好むように	液体	26.500	12.500	16.500	18.000	26.500	2.055
		気体	69.500	14.500	9.000	4.500	2.500	0.560
31	個人の能力を重視す	液体	71.000	18.500	4.500	4.000	2.000	0.475
		気体	27.000	15.500	21.000	18.000	18.500	1.855

	るように							
33	格差を容認するように	液体	58.000	19.000	15.500	5.000	2.500	0.750
		気体	32.500	18.000	23.000	13.000	13.500	1.570
35	同調を好むように	液体	10.500	10.500	16.000	24.500	38.500	2.700
		気体	59.000	15.500	8.000	11.500	6.000	0.900
34	媚びるように	液体	27.500	21.500	16.000	18.000	17.000	1.755
		気体	65.000	15.000	10.000	7.500	2.500	0.675
15	かわいく	液体	59.000	15.500	13.500	5.500	6.500	0.850
		気体	66.500	14.500	9.500	6.500	3.000	0.650
37	農村的に	液体	27.000	23.000	20.500	9.000	20.500	1.730
		気体	71.000	16.000	6.500	5.000	1.500	0.500
19	都市的に	液体	39.500	18.000	20.000	7.500	15.000	1.405
		気体	19.000	14.500	20.500	17.500	28.500	2.220
6	暗く	液体	22.000	14.500	25.000	15.000	23.500	2.035
		気体	60.000	16.500	7.500	8.000	8.000	0.875

22	明るく	液体	70.500	15.500	7.000	6.000	1.000	0.515
		気体	31.000	17.500	18.000	19.000	14.500	1.685
28	温かく	液体	44.500	25.000	15.000	9.500	6.000	1.075
		気体	59.000	21.500	12.000	5.000	2.500	0.705
14	冷たく	液体	48.500	19.500	17.000	5.500	9.500	1.080
		気体	40.000	19.500	17.000	11.500	12.000	1.360

気体液体分子運動との関連についての研究調査結果

調査結果一覧表（要約）

比較内容	気体分子運動パターン	液体分子運動パターン
湿度	ドライ	ウェット
明るさvs暗さ	明るい	暗い
冷たさvs温かさ	冷たい	温かい
国際比較	アメリカ的	日本的
性差	男性的	女性的
父性vs母性	父性的	母性的
遊牧vs農耕	遊牧的	農耕的

都市vs農村	都市的	農村的
媚び	媚びない	媚びる
かわいい	かわいくない	かわいい

比較内容	**気体分子運動パターン**	**液体分子運動パターン**
リスクvs自己保身	危険に立ち向かう	自己保身、安全、守られることを指向する
探検	探検を好む	探検を好まない
独創vs模倣	独創的	模倣的
争いvs和合	争いを好む	和合を好む
自由vs規制	自由を好む	規制を好む
決まりを破るvs守る	決まりを破る	決まりを守る
プライバシー	プライバシーがある	プライバシーがない
自立vs依存	自立している	依存的である
責任	責任を取る	責任を回避する
開放vs閉鎖、排他	開放的	閉鎖的、排他的
能動vs受動	能動的	受動的
機動性	機動性がある	機動性がない
自主性	自主性がある	自主性がない
能力主義（個人の能力を重視する）	能力主義的である	能力主義的でない
格差容認vs横並び	格差を容認する	横並びを好む
個性的	個性的	個性的でない

ドライ・ウェットなパーソナリティの認知

2008年1月初出

ドライ、ウェットなパーソナリティと、気体液体分子運動パターンとの関係について、詳しく説明しています。ドライなパーソナリティと気体分子運動、ウェットなパーソナリティと液体分子運動が、相関します。

要約
人間のパーソナリティ認知の、ドライ、ウェットと、物質の気体と液体の人間に与える感覚との間の関連を明らかにするため、webでの調査を行った。気体液体分子群の運動をコンピュータシミュレートした2つのムービーを研究参加者201名に対して見せて、各ムービーで、粒子の動きが個人の対人行動として、どの程度、ドライ、ウェット、に感じられるかを、評価してもらった。その結果、気体分子運動パターンは人々の動きとしてドライ、液体分子運動パターンはウェット、と感じられることが、分かった。

方法

[データ収集方法] インターネットのwebサイトで回答を収集した。回答のカウントに当たっては、同じ研究参加者が複数回回答する可能性に対応するため、回答時に同一のIPアドレスの持ち主は同一の回答者であると見なし、同一のIPアドレスの複数回答は最新の1個の回答のみを有効と見なすとともに、cookieを利用して、複数回の回答を受付けないように設定した。

[研究参加者] 回答を得た研究参加者の総数は206名（男性102名、女性104名）であった。性別情報は、回答時に性別選択欄をwebページにラジオボタンで設け、選択入力してもらうことで得た。

[調査時期] 調査時期は、2006年12月4日から9日の6日間であった。

[刺激映像] 刺激は、Ar(アルゴン)の分子運動パターンをシミュレートするJavaプログラムを、池内(2002)のwebサイトより入手し、液体と気体それぞれの分子運動を最も明確に示すように、絶対温度20度(液体)と300度(気体)のそれぞれの分子運動を表すように調整した。プログラムが表示した気体液体各分子運動のムービーを、パソコン上でキャプチャし、各々30秒間のwindows media video形式のムービーに加工して、webサイト上で研究参加者のパソコンから再生可能とした。

[質問項目] 上記各ムービーについて”これは、人々の動きを早送りで再生したものです。一つ一つの粒々が一人一人の人間を表しています。このムービーに おける人々の性格が、どの程度、ドライ、ウェットに感じられるか5段階評価して下さい。‟として、ドライ、ウェット、それぞれ別々に回答させた。段階は、”感じない(0) －少し感じる(1) －やや感じる(2) －かなり感じる(3) －とても感じる(4)‟とした。

[手続き] 各ムービーは、一度に1個ずつ、順番をランダムにして呈示し、ムービー毎に回答させるようにした。また、研究参加者のコンピュータ環境に対応 しつつ、刺激提示の条件を揃えるために、”再生回数は可能な限り2回まででお願いします‟の旨、断り書きを付けて、読んでもらった。なお、実験操作のデブ リーフィングとして、回答が完了した時点で、”実はこれは、気体液体分子運動のシミュレーションムービーでした。‟という断り書きを画面上に呈示した。

結果
気体液体分子運動パターンが、人の性格としてそれぞ

れドライおよびウェットと感じられた度合いの評定値の平均値と標準偏差はTable1に示した通りである。
見せたムービーの種類別に、ドライ、ウェットに感じた度合いの違いを見るため、対応のあるt検定を行った。結果はTable2の通りである。
液体の分子運動を見たとき、ドライ、ウェットと感じる度合いについては、ウェットと感じる度合いの数値が、ドライと感じる度合いよりも、有意に高かった。($t(205)=8.74,p<.01$)
気体の分子運動を見たとき、ドライ、ウェットと感じる度合いについては、ドライと感じる度合いの数値が、ウェットと感じる度合いよりも、有意に高かった。($t(205)=3.21,p<.01$)
液体と気体とではどちらを、よりドライと感じるかについては、気体分子運動パターンをドライに感じる度合いが、液体分子運動パターンをドライに感じる度合いよりも、有意に高かった。($t(205)=6.32,p<.01$)
液体と気体とではどちらを、よりウェットと感じるかについては、液体分子運動パターンをウェットに感じる度合いが、気体分子運動パターンをウェットに感じる度合いよりも、有意に高かった。($t(205)=8.25,p<.01$)

考察

以上の結果により、気体分子運動のシミュレーションを人に見立てて観察させると、ドライな性格と認知され、一方、液体分子運動は、ウェットな性格と認知されることが、分かった。気体分子運動パターンと同様に振る舞う人のパーソナリティは、ドライに、液体分子運動パターンと同様に振る舞う人では、ウェットに感じられる、と考えられる。

図表

Figure.1 気体液体分子運動パターン分子運動シミュレーションムービー（研究参加者に見せたもの）

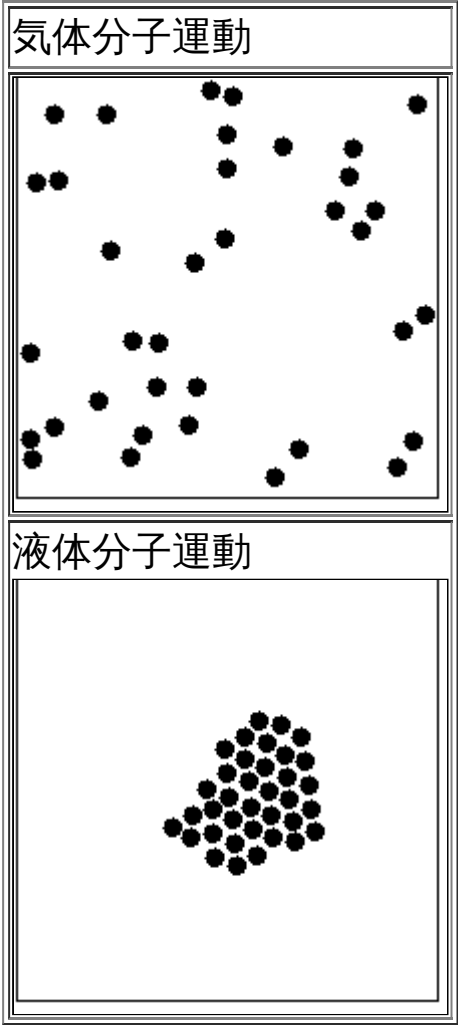



Table.1

刺激種類	ドライ	ウェット
液体分子運動	0.85 (1.17)	2.09 (1.50)
気体分子運動	1.60 (1.46)	1.15 (1.24)

(かっこ内は標準偏差)

Table.2

比較対象	t検定結果	有意水準
液体 ウェット液体 ドライ	t(205)=8.74	p <.01
気体 ドライ－気体 ウェット	t(205)=3.21	p <.01
気体 ドライ－液体 ドライ	t(205)=6.32	p <.01
液体 ウェット気体 ウェット	t(205)=8.25	p <.01

以上の結果により、気体分子運動のシミュレーションを人に見立てて観察させると、ドライな性格と認知され、一方、液体分子運動は、ウェットな性格と認知される ことが分かった。気体分子運動パターンと同様に振る舞う人のパーソナリティは、ドライに、液体分子運動パターンと同様に振る舞う人では、ウェットに感じられる 、と考えられる。

アメリカ的、日本的なパーソナリティの認知

2008.04 初出

アメリカ的、日本的パーソナリティと、気体液体分子運動パターンとの関係について、詳しく説明しています。アメリカ的パーソナリティと気体分子運動、日本的パーソナリティと液体分子運動が、相関します。

要約
人間のパーソナリティ認知の、アメリカ的、日本的と、物質の気体と液体の人間に与える感覚との間の関連を明らかにするため、webでの調査を行った。気体 ・液体分子群の運動をコンピュータシミュレートした2つのムービーを研究参加者201名に対して見せて、各ムービーで、粒子の動きが個人の対人行動として、どの程度、アメリカ的、日本的、に感じられるかを、評価し

てもらった。その結果、気体分子運動パターンは人々の動きとしてアメリカ的、液体分子運動パターンは日本的、と感じられることが、分かった。

目的
実際に日本人の研究参加者に気体と液体の分子運動シミュレーションムービーを見せて、各分子の動きを人の動きと見立てた場合、それぞれどの程度、欧米的、日本的、と感じるか、調べることにした。
その際、”欧米的‟という言葉は、”欧米‟がカバーする地球上の地域が広範囲、多種多様にわたるため、人々が捉えるパーソナリティ上のイメージが分散し、統合して捉えにくい可能性がある。そこで、今回研究参加者を日本人としたこともあり、日本人にとって、欧米地域の中で、太平洋戦争後の日本占領以来、最も身近で親しみのある、パーソナリティの具体的イメージが沸きやすい、と考えられる北米のアメリカ合衆国を代表例として採用し、”アメリカ的‟”日本的‟のそれぞれを調べることにした。

方法

[データ収集方法] インターネットのwebサイトで回答を収集した。回答のカウントに当たっては、同じ研究参加者が複数回回答する可能性に対応するため、回答時に同一のIPアドレスの持ち主は同一の回答者であると見なし、同一のIPアドレスの複数回答は最新の1個の回答のみを有効と見なすとともに、cookieを利用して、複数回の回答を受付けないように設定した。

[研究対象者] 回答を得た研究参加者の総数は201名（男性105名、女性96名）であった。性別情報は、回答時に性別選択欄をwebページにラジオボタンで設け、選択入力してもらうことで得た。

[調査時期] 調査時期は、2007年8月21日から8月31日の11日間であった。

[刺激映像] 刺激は、Ar(アルゴン)の分子運動パターンをシミュレートするJavaプログラムを、池内満(2002)のwebサイトより入手し、液体と気体それぞれの分子運動を最も明確に示すように、絶対温度20度(液体)と300度(気体)のそれぞれの分子運動を表すように調整した。プログラムが表示した気体液体各分子運動のムービーを、パソコン上でキャプチャし、各々30秒間のWindowsMediaVideo形式のムービーに加工して、webサイト上で研究参加者のパソコンから再生可能とした。各ムービーの静止画は、Figure1の通りである。

[質問項目] 上記各ムービーについて”これは、人々の動きを早送りで再生したものです。一つ一つの粒々が一人一人の人間を表しています。このムービーにおける人々の性格が、どの程度、アメリカ的、日本的に感じられるか5段階評価して下さい。‟として、アメリカ的、日本的、それぞれ別々に回答させた。段階は、”感じない(0)‟から”とても感じる(4)‟の5段階とした。

[手続き] 各ムービーは、一度に1個ずつ、順番をランダムにして呈示し、ムービー毎に回答させるようにした。回答はムービーが実際に動いているのを見ながらでないと行いにくいため、各ムービーは回答中エンドレスで流れるようにした。なお、実験操作のデブリーフィングとして、回答が完了した時点で、”実はこれは、気体液体分子運動のシミュレーションムービーでした。‟という断り書きを画面上に呈示した。

結果
気体液体分子運動パターンが、人の性格としてそれぞれアメリカ的および日本的と感じられた度合いの評定

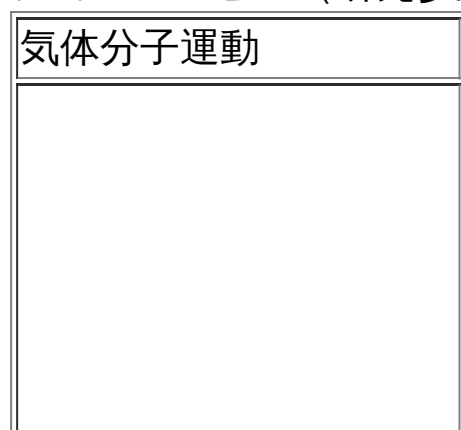
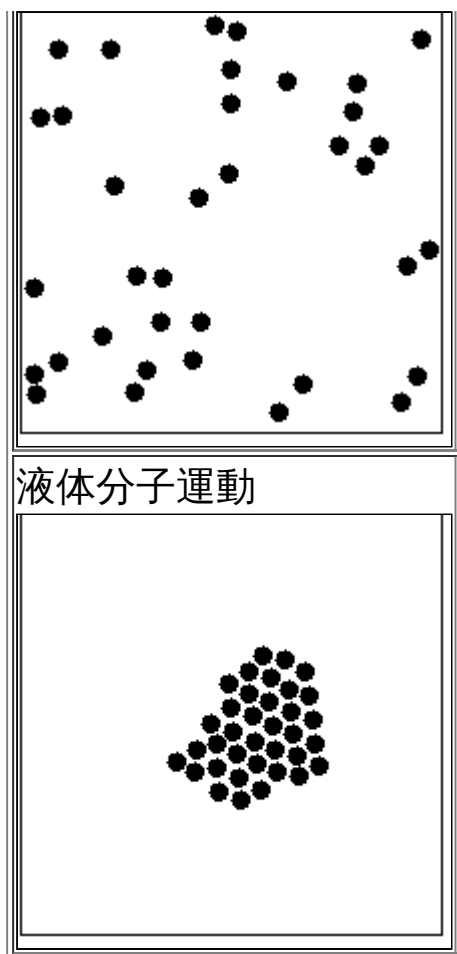
値の平均値と標準偏差はTable1に示した通りである。
見せたムービーの種類別に、アメリカ的、日本的、に感じた度合いの違いを見るため、対応のあるt検定を行った。結果はTable2の通りである。
液体の分子運動を見たとき、アメリカ的、日本的、と感じる度合いについては、日本的、と感じる度合いの数値が、アメリカ的、と感じる度合いよりも、有意に高かった。(t(200)=10.20,p<.01)
気体の分子運動を見たとき、アメリカ的、日本的、と感じる度合いについては、アメリカ的、と感じる度合いの数値が、日本的、と感じる度合いよりも、有意に高かった。(t(200)=3.54,p<.01)
液体と気体とではどちらを、よりアメリカ的と感じるかについては、気体分子運動パターンをアメリカ的に感じる度合いが、液体分子運動パターンをアメリカ的に感じる度合いよりも、有意に高かった。
(t(200)=7.81,p<.01)
液体と気体とではどちらを、より日本的と感じるかについては、液体分子運動パターンを日本的に感じる度合いが、気体分子運動パターンを日本的に感じる度合いよりも、有意に高かった。(t(200)=7.15,p<.01)

考察

以上の結果により、気体分子運動のシミュレーションを人に見立てて観察させると、アメリカ的な性格と認知され、一方、液体分子運動は、日本的な性格と認知されることが、分かった。気体分子運動パターンと同様に振る舞う人のパーソナリティは、アメリカ的に、液体分子運動パターンと同様に振る舞う人では、日本的に感じられる、と考えられる。
このことから、気体 と液体 それぞれの分子運動のパターンと、パーソナリティの認知におけるアメリカ的、日本的という印象との間に、なんらかのつながりが存在することが推測される。しかし、なぜこうした

つながりが生じるかの理由は、現状ではよく分からず、さらなる研究が必要である。
また、今回の研究結果では、アメリカ的、日本的なパーソナリティについて日本人の研究参加者が持つ印象を単に尋ねたに過ぎず、その印象が、アメリカ人、日本人のパーソナリティの実際のあり方にそのまま即していると考えるのは早計、と考えられる。実際の対人関係においてアメリカ人のパーソナリティが気体的で日本人のそれが液体的であることを示す研究が別途必要である。
また、今回の結果は、あくまで日本人サイドの見方であり、視点に偏りが見られる。より偏りのない客観的な視点を得るには、日本人の研究参加者だけでなく、アメリカ人の研究参加者を別途募って、アメリカ人から見た印象がどうなっているかを別途確認する必要がある。
また、欧米的、日本的パーソナリティの比較という当初の研究目的からは、今後は、今回の研究では対象から除外された、アメリカ以外の西欧、北欧等のヨーロッパ各地域と日本との比較等も必要となってくる、と考えられる。

図表

Figure.1 気体液体分子運動パターン分子運動シミュレーションムービー（研究参加者に見せたもの）

気体分子運動

液体分子運動

Table.1 気体液体分子運動ムービーへのアメリカ的・日本的評価値の平均値と標準偏差（かっこ内）

刺激種類	アメリカ的	日本的
液体分子運動	0.47 (0.94)	1.71 (1.45)
気体分子運動	1.35 (1.43)	0.90 (1.26)

n=201

Table.2 条件間の平均値の差の比較結果（対応あり）

比較対象	t検定
液体 日本的－液体 アメリカ的	t(200)=10.20**
気体 アメリカ的－気体 日本的	t(200)=3.54**

気体 アメリカ的－液体 アメリカ的	t(200)=7.81**
液体 日本的－気体 日本的	t(200)=7.15**

**p<.01

男性的、女性的なパーソナリティの認知

2008.04 初出

男性的、女性的パーソナリティと、気体液体分子運動パターンとの関係について、詳しく説明しています。男性的パーソナリティと気体分子運動、女性的パーソナリティと液体分子運動が、相関します。

要約
人間のパーソナリティ認知の、男性的、女性的と、物質の気体と液体の人間に与える感覚との間の関連を明らかにするため、webでの調査を行った。気体液体分子運動パターンをコンピュータシミュレートした2つのムービーを研究参加者201名に対して見せて、各ムービーで、粒子の動きが個人の対人行動として、どの程度、男性的、女性的、に感じられるかを、評価してもらった。その結果、気体分子運動パターンは人々の動きとして男性的、液体分子運動パターンは女性的、と感じられることが、分かった。

課題
実際に研究参加者に気体と液体の分子運動シミュレーションムービーを見せて、各分子の動きを人の動きと見立てた場合、それぞれどの程度、男性的、女性的、と感じるか、調べることにした。

方法

[データ収集方法] インターネットのwebサイトで回答を収集した。回答のカウントに当たっては、同じ研究参加者が複数回回答する可能性に対応するため、回答時に同一のIPアドレスの持ち主は同一の回答者であると見なし、同一のIPアドレスの複数回答は最新の1個の回答のみを有効と見なすとともに、cookieを利用して、複数回の回答を受付けないように設定した。

[研究対象者] 回答を得た研究参加者の総数は201名（男性105名、女性96名）であった。性別情報は、回答時に性別選択欄をwebページにラジオボタンで設け、選択入力してもらうことで得た。
[調査時期] 調査時期は、2007年8月21日から8月31日の11日間であった。

[刺激映像] 刺激は、Ar(アルゴン)の分子運動パターンをシミュレートするJavaプログラムを、池内満(2002)のwebサイトより入手し、液体と気体それぞれの分子運動を最も明確に示すように、絶対温度20度(液体)と300度(気体)のそれぞれの分子運動を表すように調整した。プログラムが表示した気体液体各分子運動のムービーを、パソコン上でキャプチャし、各々30秒間のWindowsMediaVideo形式のムービーに加工して、webサイト上で研究参加者のパソコンから再生可能とした。各ムービーの静止画は、Figure1の通りである。

[質問項目] 上記各ムービーについて”これは、人々の動きを早送りで再生したものです。一つ一つの粒々が一人一人の人間を表しています。このムービーにおける人々の性格が、どの程度、男性的、女性的に感じられるか5段階評価して下さい。[illegible]として、男性的、女性的、それぞれ別々に回答させた。段階は、”感じない(0)“から”とても感じる(4)“の5段階とした。

[手続き] 各ムービーは、一度に1個ずつ、順番をランダムにして呈示し、ムービー毎に回答させるようにした。回答はムービーが実際に動いているのを見ながらでないと、しにくいため、各ムービーは回答中エンドレスで流れるようにした。なお、実験操作のデブリーフィングとして、回答が完了した時点で、”実はこれは、気体液体分子運動のシミュレーションムービーでした。‟という断り書きを画面上に呈示した。

結果

気体液体分子運動パターンが、人の性格としてそれぞれ男性的および女性的と感じられた度合いの評定値の平均値と標準偏差はTable1に示した通りである。

見せたムービーの種類別に、男性的、女性的、に感じた度合いの違いを見るため、対応ありの平均値の差のt検定（両側）を行った。(n=201)結果はTable2の通りである。

液体の分子運動を見たとき、男性的、女性的、と感じる度合いについては、女性的、と感じる度合いの数値が、男性的、と感じる度合いよりも、有意に高かった。(t(200)=5.42,p<.01)

気体の分子運動を見たとき、男性的、女性的、と感じる度合いについては、男性的、と感じる度合いの数値が、女性的、と感じる度合いよりも、有意に高かった。(t(200)=6.84,p<.01)

液体と気体とではどちらを、より男性的と感じるかについては、気体分子運動パターンを男性的に感じる度合いが、液体分子運動パターンを男性的に感じる度合いよりも、有意に高かった。(t(200)=7.47,p<.01)

液体と気体とではどちらを、より女性的と感じるかについては、液体分子運動パターンを女性的に感じる度合いが、気体分子運動パターンを女性的に感じる度合いよりも、有意に高かった。(t(200)=6.29,p<.01)

考察

以上の結果により、気体分子運動のシミュレーションを人に見立てて観察させると、男性的な性格と認知され、一方、液体分子運動は、女性的な性格と認知されることが、分かった。気体分子運動パターンと同様に振る舞う人のパーソナリティは、男性的に、液体分子運動パターンと同様に振る舞う人では、女性的に感じられる、と考えられる。

図表

Figure.1 気体液体分子運動パターン分子運動シミュレーションムービー（研究参加者に見せたもの）

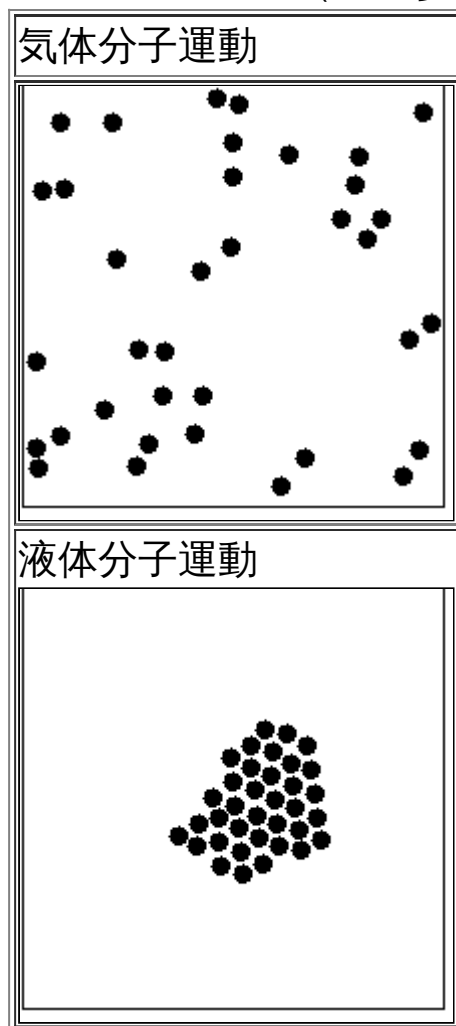



Table.1 気体液体分子運動ムービーへの男性的・女性的評価値の平均値と標準偏差（かっこ内）

刺激種類	男性的	女性的
液体分子運動	0.67 (1.10)	1.35 (1.37)
気体分子運動	1.49 (1.41)	0.65 (1.13)

n=201

Table.2 条件間の平均値の差の比較結果（対応あり）

比較対象	t検定
液体 女性的－液体 男性的	$t(200)=5.42^{**}$
気体 男性的－気体 女性的	$t(200)=6.84^{**}$
気体 男性的－液体 男性的	$t(200)=7.47^{**}$
液体 女性的－気体 女性的	$t(200)=6.29^{**}$

$^{**}p<.01$

父性的、母性的なパーソナリティの認知

2012.07初出

父性的、母性的パーソナリティと、気体液体分子運動パターンとの関係について、詳しく説明しています。父性的パーソナリティと気体分子運動、母性的パーソナ

リティと液体分子運動が、相関します。

要約

人間のパーソナリティ認知の、父性的、母性的と、物質の気体と液体の人間に与える感覚との間の関連を明らかにするため、webでの調査を行った。気体液体分子運動パターンをコンピュータシミュレートした2つのムービーを研究参加者201名に対して見せて、各ムービーで、粒子の動きが個人の対人行動として、どの程度、父性的、母性的、に感じられるかを、評価してもらった。その結果、気体分子運動パターンは人々の動きとして父性的、液体分子運動パターンは母性的、と感じられることが、分かった。

課題

実際に研究参加者に気体と液体の分子運動シミュレーションムービーを見せて、各分子の動きを人の動きと見立てた場合、それぞれどの程度、父性的、母性的、と感じるか、調べることにした。

方法

[データ収集方法] インターネットのwebサイトで回答を収集した。回答のカウントに当たっては、同じ研究参加者が複数回回答する可能性に対応するため、回答時に同一のIPアドレスの持ち主は同一の回答者であると見なし、同一のIPアドレスの複数回答は最新の1個の回答のみを有効と見なすとともに、cookieを利用して、複数回の回答を受付けないように設定した。

[研究対象者] 回答を得た研究参加者の総数は201名（男性105名、女性96名）であった。性別情報は、回答時に性別選択欄をwebページにラジオボタンで設け、選択入力してもらうことで得た。

[調査時期] 調査時期は、2007年8月21日から8月31日の11

日間であった。

[刺激映像] 刺激は、Ar(アルゴン)の分子運動パターンをシミュレートするJavaプログラムを、池内満(2002)のwebサイトより入手し、液体と気体それぞれの分子運動を最も明確に示すように、絶対温度20度(液体)と300度(気体)のそれぞれの分子運動を表すように調整した。プログラムが表示した気体液体各分子運動のムービーを、パソコン上でキャプチャし、各々30秒間のWindowsMediaVideo形式のムービーに加工して、webサイト上で研究参加者のパソコンから再生可能とした。各ムービーの静止画は、Figure1の通りである。

[質問項目] 上記各ムービーについて”これは、人々の動きを早送りで再生したものです。一つ一つの粒々が一人一人の人間を表しています。このムービーにおける人々の性格が、どの程度、父性的、母性的に感じられるか5段階評価して下さい。‟として、父性的、母性的、それぞれ別々に回答させた。段階は、”感じない(0)‟から”とても感じる(4)‟の5段階とした。

[手続き] 各ムービーは、一度に1個ずつ、順番をランダムにして呈示し、ムービー毎に回答させるようにした。回答はムービーが実際に動いているのを見ながらでないと、しにくいため、各ムービーは回答中エンドレスで流れるようにした。なお、実験操作のデブリーフィングとして、回答が完了した時点で、”実はこれは、気体液体分子運動のシミュレーションムービーでした。‟という断り書きを画面上に呈示した。

結果
気体液体分子運動パターンが、人の性格としてそれぞれ父性的および母性的と感じられた度合いの評定値の平均値と標準偏差はTable1に示した通りである。
見せたムービーの種類別に、父性的、母性的、に感じた

度合いの違いを見るため、対応ありの平均値の差のt検定（両側）を行った。(n=201)結果はTable2の通りである。

液体の分子運動を見たとき、父性的、母性的、と感じる度合いについては、母性的、と感じる度合いの数値が、父性的、と感じる度合いよりも、有意に高かった。(t(200)=5.67,p<.01)

気体の分子運動を見たとき、父性的、母性的、と感じる度合いについては、父性的、と感じる度合いの数値が、母性的、と感じる度合いよりも、有意に高かった。(t(200)=4.96,p<.01)

液体と気体とではどちらを、より父性的と感じるかについては、気体分子運動パターンを父性的に感じる度合いが、液体分子運動パターンを父性的に感じる度合いよりも、有意に高かった。(t(200)=4.28,p<.01)

液体と気体とではどちらを、より母性的と感じるかについては、液体分子運動パターンを母性的に感じる度合いが、気体分子運動パターンを母性的に感じる度合いよりも、有意に高かった。(t(200)=6.82,p<.01)

考察

以上の結果により、気体分子運動のシミュレーションを人に見立てて観察させると、父性的な性格と認知され、一方、液体分子運動は、母性的な性格と認知されることが、分かった。気体分子運動パターンと同様に振る舞う人のパーソナリティは、父性的に、液体分子運動パターンと同様に振る舞う人では、母性的に感じられる、と考えられる。

図表

Figure.1 気体液体分子運動パターン分子運動シミュレーションムービー（研究参加者に見せたもの）

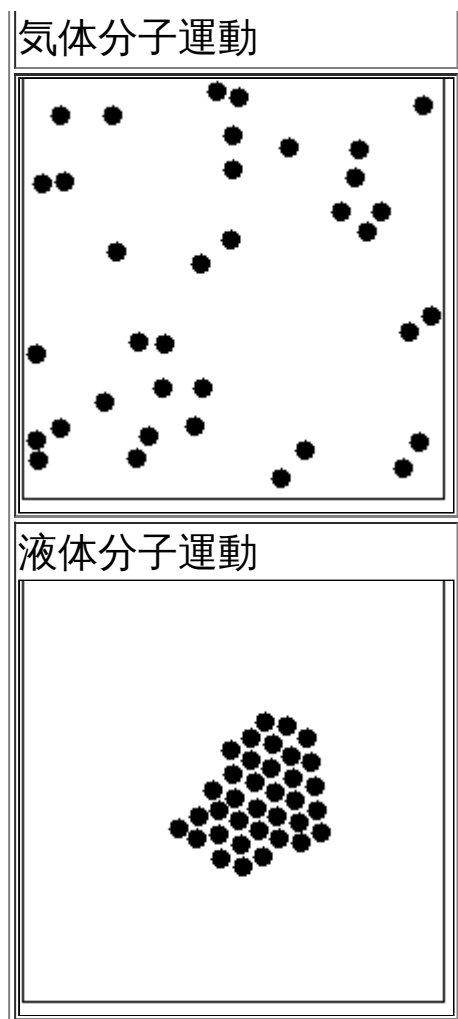



Table.1 気体液体分子運動ムービーへの父性的・母性的評価値の平均値と標準偏差（かっこ内）

刺激種類	父性的	母性的
液体分子運動	0.37 (0.81)	0.90 (1.20)
気体分子運動	0.76 (1.18)	0.31 (0.73)

n=201

Table.2 条件間の平均値の差の比較結果（対応あり）

比較対象	t検定
液体 母性的－液体 父性的	t(200)=5.67**
気体 父性的－気体 母性的	t(200)=4.96**
気体 父性的－液体 父性的	t(200)=4.28**
液体 母性的－気体 母性的	t(200)=6.82**

**p<.01

遊牧的、農耕的なパーソナリティの認知

2012.07初出

遊牧的、農耕的パーソナリティと、気体液体分子運動パターンとの関係について、詳しく説明しています。遊牧的パーソナリティと気体分子運動、農耕的パーソナリティと液体分子運動が、相関します。

要約
人間のパーソナリティ認知の、遊牧的、農耕的と、物質の気体と液体の人間に与える感覚との間の関連を明らかにするため、webでの調査を行った。気体液体分子運動パターンをコンピュータシミュレートした2つのムービーを研究参加者201名に対して見せて、各ムービーで、粒子の動きが個人の対人行動として、どの程度、遊牧的、農耕的、に感じられるかを、評価してもらった。その結果、気体分子運動パターンは人々の動きとして遊牧的、液体分子運動パターンは農耕的、と感じられることが、分かった。

課題
実際に研究参加者に気体と液体の分子運動シミュレー

ションムービーを見せて、各分子の動きを人の動きと見立てた場合、それぞれどの程度、遊牧的、農耕的、と感じるか、調べることにした。

方法

[データ収集方法] インターネットのwebサイトで回答を収集した。回答のカウントに当たっては、同じ研究参加者が複数回回答する可能性に対応するため、回答時に同一のIPアドレスの持ち主は同一の回答者であると見なし、同一のIPアドレスの複数回答は最新の1個の回答のみを有効と見なすとともに、cookieを利用して、複数回の回答を受付けないように設定した。

[研究対象者] 回答を得た研究参加者の総数は201名（男性105名、女性96名）であった。性別情報は、回答時に性別選択欄をwebページにラジオボタンで設け、選択入力してもらうことで得た。
[調査時期] 調査時期は、2007年8月21日から8月31日の11日間であった。

[刺激映像] 刺激は、Ar(アルゴン)の分子運動パターンをシミュレートするJavaプログラムを、池内満(2002)のwebサイトより入手し、液体と気体それぞれの分子運動を最も明確に示すように、絶対温度20度(液体)と300度(気体)のそれぞれの分子運動を表すように調整した。プログラムが表示した気体液体各分子運動のムービーを、パソコン上でキャプチャし、各々30秒間のWindowsMediaVideo形式のムービーに加工して、webサイト上で研究参加者のパソコンから再生可能とした。各ムービーの静止画は、Figure1の通りである。

[質問項目] 上記各ムービーについて”これは、人々の動きを早送りで再生したものです。一つ一つの粒々が一人一人の人間を表しています。このムービーにおける

人々の性格が、どの程度、遊牧的、農耕的に感じられるか5段階評価して下さい。‟として、遊牧的、農耕的、それぞれ別々に回答させた。段階は、”感じない(0)‟から”とても感じる(4)‟の5段階とした。

[手続き] 各ムービーは、一度に1個ずつ、順番をランダムにして呈示し、ムービー毎に回答させるようにした。回答はムービーが実際に動いているのを見ながらでないと、しにくいため、各ムービーは回答中エンドレスで流れるようにした。なお、実験操作のデブリーフィングとして、回答が完了した時点で、”実はこれは、気体液体分子運動のシミュレーションムービーでした。‟という断り書きを画面上に呈示した。

結果
気体液体分子運動パターンが、人の性格としてそれぞれ遊牧的および農耕的と感じられた度合いの評定値の平均値と標準偏差はTable1に示した通りである。
見せたムービーの種類別に、遊牧的、農耕的、に感じた度合いの違いを見るため、対応ありの平均値の差のt検定（両側）を行った。(n=201)結果はTable2の通りである。
液体の分子運動を見たとき、遊牧的、農耕的、と感じる度合いについては、農耕的、と感じる度合いの数値が、遊牧的、と感じる度合いよりも、有意に高かった。$(t(200)=2.18, p<.05)$
気体の分子運動を見たとき、遊牧的、農耕的、と感じる度合いについては、遊牧的、と感じる度合いの数値が、農耕的、と感じる度合いよりも、有意に高かった。$(t(200)=4.72, p<.01)$
液体と気体とではどちらを、より遊牧的と感じるかについては、気体分子運動パターンを遊牧的に感じる度合いと、液体分子運動パターンを遊牧的に感じる度合いとの間で、有意差は見られなかった。$(t(200)=1.32)$これ

は、液体 の動きが、低速で家畜を連れて移動する遊牧民の動きと似ているため、両方共遊牧民的と感じられ、差が出なかったのではないか、と考えられる。液体 の動きをより低速にして、ほとんど動かない状態にすれば、農耕民的となって、差が出ると予想される。液体と気体とではどちらを、より農耕的と感じるかについては、液体分子運動パターンを農耕的に感じる度合いが、気体分子運動パターンを農耕的に感じる度合いよりも、有意に高かった。($t(200)=5.41, p<.01$)

考察

以上の結果により、気体分子運動のシミュレーションを人に見立てて観察させると、遊牧的な性格と認知され、一方、液体分子運動は、農耕的な性格と認知されることが、分かった。気体分子運動パターンと同様に振る舞う人のパーソナリティは、遊牧的に、液体分子運動パターンと同様に振る舞う人では、農耕的に感じられる、と考えられる。

図表

Figure.1 気体液体分子運動パターン分子運動シミュレーションムービー（研究参加者に見せたもの）

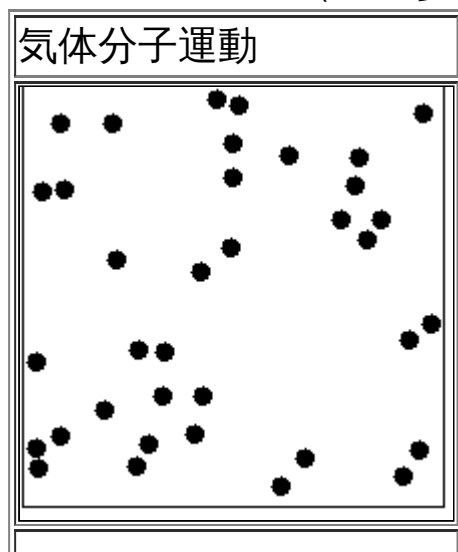
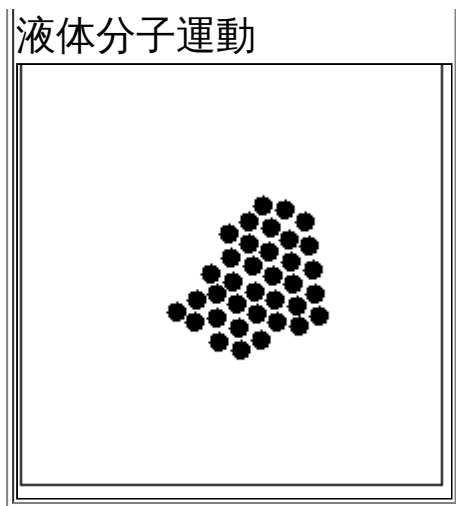



Table.1 気体液体分子運動ムービーへの遊牧的・農耕的評価値の平均値と標準偏差（かっこ内）

刺激種類	遊牧的	農耕的
液体分子運動	1.04 (1.34)	1.28 (1.32)
気体分子運動	1.21 (1.44)	0.68 (1.81)

n=201

Table.2 条件間の平均値の差の比較結果（対応あり）

比較対象	t検定
液体 農耕的－液体 遊牧的	t(200)=2.18*
気体 遊牧的－気体 農耕的	t(200)=4.72**
気体 遊牧的－液体 遊牧的	t(200)=1.32
液体 農耕的－気体 農耕的	t(200)=5.41**

**p<.01, *p<.05

独創的、模倣的なパーソナリティの認知

2012.07初出

独創的、模倣的パーソナリティと、気体液体分子運動パターンとの関係について、詳しく説明しています。独創的パーソナリティと気体分子運動、模倣的パーソナリティと液体分子運動が、相関します。

要約
人間のパーソナリティ認知の、独創的、模倣的と、物質の気体と液体の人間に与える感覚との間の関連を明らかにするため、webでの調査を行った。気体液体分子運動パターンをコンピュータシミュレートした2つのムービーを研究参加者201名に対して見せて、各ムービーで、粒子の動きが個人の対人行動として、どの程度、独創的、模倣的、に感じられるかを、評価してもらった。その結果、気体分子運動パターンは人々の動きとして独創的、液体分子運動パターンは模倣的、と感じられることが、分かった。

課題
実際に研究参加者に気体と液体の分子運動シミュレーションムービーを見せて、各分子の動きを人の動きと見立てた場合、それぞれどの程度、独創的、模倣的、と感じるか、調べることにした。

方法

[データ収集方法] インターネットのwebサイトで回答を収集した。回答のカウントに当たっては、同じ研究参

加者が複数回回答する可能性に対応するため、回答時に同一のIPアドレスの持ち主は同一の回答者であると見なし、同一のIPアドレスの複数回答は最新の1個の回答のみを有効と見なすとともに、cookieを利用して、複数回の回答を受付けないように設定した。

[研究対象者] 回答を得た研究参加者の総数は201名（男性105名、女性96名）であった。性別情報は、回答時に性別選択欄をwebページにラジオボタンで設け、選択入力してもらうことで得た。
[調査時期] 調査時期は、2007年8月21日から8月31日の11日間であった。

[刺激映像] 刺激は、Ar(アルゴン)の分子運動パターンをシミュレートするJavaプログラムを、池内満(2002)のwebサイトより入手し、液体と気体それぞれの分子運動を最も明確に示すように、絶対温度20度(液体)と300度(気体)のそれぞれの分子運動を表すように調整した。プログラムが表示した気体液体各分子運動のムービーを、パソコン上でキャプチャし、各々30秒間のWindowsMediaVideo形式のムービーに加工して、webサイト上で研究参加者のパソコンから再生可能とした。各ムービーの静止画は、Figure1の通りである。

[質問項目] 上記各ムービーについて”これは、人々の動きを早送りで再生したものです。一つ一つの粒々が一人一人の人間を表しています。このムービーにおける人々の性格が、どの程度、独創的、模倣的に感じられるか5段階評価して下さい。‟として、独創的、模倣的、それぞれ別々に回答させた。段階は、”感じない(0)‟から”とても感じる(4)‟の5段階とした。

[手続き] 各ムービーは、一度に1個ずつ、順番をランダムにして呈示し、ムービー毎に回答させるようにした。回答はムービーが実際に動いているのを見ながら

でないと、しにくいため、各ムービーは回答中エンドレスで流れるようにした。なお、実験操作のデブリーフィングとして、回答が完了した時点で、”実はこれは、気体液体分子運動のシミュレーションムービーでした。‟という断り書きを画面上に呈示した。

結果
気体液体分子運動パターンが、人の性格としてそれぞれ独創的および模倣的と感じられた度合いの評定値の平均値と標準偏差はTable1に示した通りである。
見せたムービーの種類別に、独創的、模倣的、に感じた度合いの違いを見るため、対応ありの平均値の差のt検定（両側）を行った。(n=201)結果はTable2の通りである。
液体の分子運動を見たとき、独創的、模倣的、と感じる度合いについては、模倣的、と感じる度合いの数値が、独創的、と感じる度合いよりも、有意に高かった。(t(200)=5.59,p<.01)
気体の分子運動を見たとき、独創的、模倣的、と感じる度合いについては、独創的、と感じる度合いの数値が、模倣的、と感じる度合いよりも、有意に高かった。(t(200)=4.37,p<.01)
液体と気体とではどちらを、より独創的と感じるかについては、気体分子運動パターンを独創的に感じる度合いが、液体分子運動パターンを独創的に感じる度合いよりも、有意に高かった。(t(200)=7.33,p<.01)
液体と気体とではどちらを、より模倣的と感じるかについては、液体分子運動パターンを模倣的に感じる度合いが、気体分子運動パターンを模倣的に感じる度合いよりも、有意に高かった。(t(200)=3.11,p<.01)

考察
以上の結果により、気体分子運動のシミュレーションを人に見立てて観察させると、独創的な性格と認知さ

れ、一方、液体分子運動は、模倣的な性格と認知される
ことが、分かった。気体分子運動パターンと同様に振
る舞う人のパーソナリティは、独創的に、液体分子運
動パターンと同様に振る舞う人では、模倣的に感じら
れる、と考えられる。

図表

Figure.1 気体液体分子運動パターン分子運動シミュレー
ションムービー（研究参加者に見せたもの）

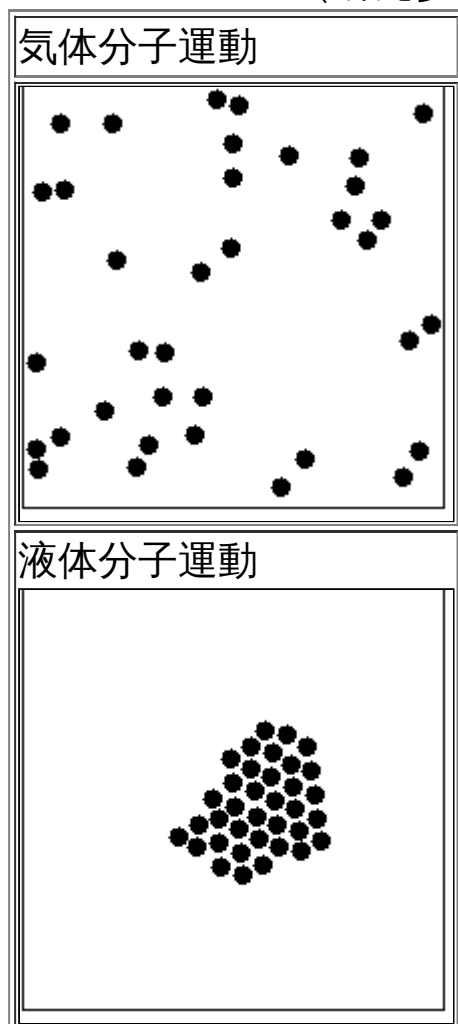



Table.1 気体液体分子運動ムービーへの独創的・模倣的評価値の平均値と標準偏差（かっこ内）

刺激種類	独創的	模倣的
液体分子運動	0.68 (1.16)	1.35 (1.39)
気体分子運動	1.50 (1.43)	0.96 (1.27)

n=201

Table.2 条件間の平均値の差の比較結果（対応あり）

比較対象	t検定
液体 模倣的－液体 独創的	t(200)=5.59**
気体 独創的－気体 模倣的	t(200)=4.37**
気体 独創的－液体 独創的	t(200)=7.33**
液体 模倣的－気体 模倣的	t(200)=3.11**

**p<.01

自己保身、安全、守られることvs危険に立ち向かうことへの指向

2012.07初出

要約
人間の自己保身、安全、守られることvs危険への指向と、物質の気体と液体の人間に与える感覚との間の関連を明らかにするため、webでの調査を行った。気体液体分子運動パターンをコンピュータシミュレートした2つ

のムービーを研究参加者200名に対して見せて、各ムービーで、粒子の動きが個人の対人行動として、どの程度、自身の保身、安全を重視し、守られることを好む、ないし危険に立ち向かうよう、に感じられるかを、評価してもらった。その結果、気体分子運動パターンは人々の動きとして、危険に立ち向かうように、液体分子運動パターンは人々の動きとして、自身の保身、安全を重視し、守られることを好むように感じられることが分かった。

課題
実際に研究参加者に気体と液体の分子運動シミュレーションムービーを見せて、各分子の動きを人の動きと見立てた場合、それぞれどの程度、保身、安全、守られやすさvs危険を指向している、と感じるか、調べることにした。

方法

[データ収集方法] インターネットのwebサイトで回答を収集した。回答のカウントに当たっては、同じ研究参加者が複数回回答する可能性に対応するため、回答時に同一のIPアドレスの持ち主は同一の回答者であると見なし、同一のIPアドレスの複数回答は最新の1個の回答のみを有効と見なすとともに、cookieを利用して、複数回の回答を受付けないように設定した。

[研究対象者] 回答を得た研究参加者の総数は200名（男性105名、女性95名）であった。性別情報は、回答時に性別選択欄をwebページにラジオボタンで設け、選択入力してもらうことで得た。
[調査時期] 調査時期は、2007年9月15日から10月9日の24

日間であった。

[刺激映像] 刺激は、Ar(アルゴン)の分子運動パターンをシミュレートするJavaプログラムを、池内満(2002)のwebサイトより入手し、液体と気体それぞれの分子運動を最も明確に示すように、絶対温度20度(液体)と300度(気体)のそれぞれの分子運動を表すように調整した。プログラムが表示した気体液体各分子運動のムービーを、パソコン上でキャプチャし、各々30秒間のWindowsMediaVideo形式のムービーに加工して、webサイト上で研究参加者のパソコンから再生可能とした。各ムービーの静止画は、Figure1の通りである。

[質問項目] 上記各ムービーについて”これは、人々の動きを早送りで再生したものです。一つ一つの粒々が一人一人の人間を表しています。このムービーにおける人々の性格が、どの程度、自己の保身、安全を重視し、守られることを好む、ないし危険に立ち向かうように感じられるか5段階評価して下さい。‶として、それぞれ別々に回答させた。段階は、”感じない(0)‶から”とても感じる(4)‶の5段階とした。

[手続き] 各ムービーは、一度に1個ずつ、順番をランダムにして呈示し、ムービー毎に回答させるようにした。回答はムービーが実際に動いているのを見ながらでないと、しにくいため、各ムービーは回答中エンドレスで流れるようにした。なお、実験操作のデブリーフィングとして、回答が完了した時点で、”実はこれは、気体液体分子運動のシミュレーションムービーでした。‶という断り書きを画面上に呈示した。

結果

気体液体分子運動パターンが、人の性格としてそれぞれ、保身、安全、守られやすさ、ないし危険を指向し

ているように感じられた度合いの評定値の平均値と標準偏差はTable1に示した通りである。

見せたムービーの種類別に、感じた度合いの違いを見るため、対応ありの平均値の差のt検定（両側）を行った。(n=200)結果はTable2の通りである。
自己の保身を重視するように感じられる度合い、自己の安全を重視するように感じられる度合い、守られることを好むように感じられる度合いは、いずれも、液体分子運動パターンの方が、気体分子運動パターンよりも、有意に大きかった。
一方、危険に立ち向かうように感じられる度合いは、気体分子運動パターンの方が、液体分子運動パターンよりも、有意に大きかった。
液体分子運動パターンでは、守られることを好むように感じられる度合いが、一番高かった。次に、自身の保身を重視するように感じられる度合い、自身の安全を重視するように感じられる度合い、の両者が高かった。この両者の間には、有意差は無かった。一番低かったのが、危険に立ち向かうように感じられる度合いであった。
気体分子運動パターンでは、危険に立ち向かうように感じられる度合い、自身の保身を重視するように感じられる度合い、の両者が一番高かった。この両者の間には、有意差は無かった。低かったのは、自身の安全を重視するように感じられる度合い、守られることを好むように感じられる度合いの両者であった。この両者の間には、有意差は無かった。

考察

以上の結果により、気体分子運動のシミュレーションを人に見立てて観察させると、危険に立ち向かうように感じられ、一方、液体分子運動は、自身の保身、安全

を重視し、守られることを好むように感じられることが分かった。気体分子運動パターンと同様に振る舞う人のパーソナリティは、危険やリスクに立ち向かうように、液体分子運動パターンと同様に振る舞う人では、自身の保身、安全を重視し、守られることを好むように感じられる、と考えられる。

なお、
・液体分子運動パターンにおいて、守られることを好むように感じられる度合いが、一番高かったのは、液体分子運動パターンが、周囲の皆と一緒にいれば大丈夫という、いわゆる護送船団方式を連想させるものであったため、と考えられる。
・気体分子運動パターンにおいて、自身の保身を重視するように感じられる度合いが、危険に立ち向かうと感じられる度合い同様、高かったのは、個体の周囲に十分な空間が空いており、保身もある程度できるようになっていると捉えられたため、と考えられる。また、気体分子運動パターンにおいて、自身の保身を重視するように感じられる度合いの方が、自身の安全を重視するように感じられる度合いよりも、有意に高かったのは、気体分子運動パターンにおいては、危険な流れ弾が飛んでくるため個体の安全は確保出来ないが、保身のための個体身辺の空間的余裕はあると捉えられたため、と考えられる。

図表

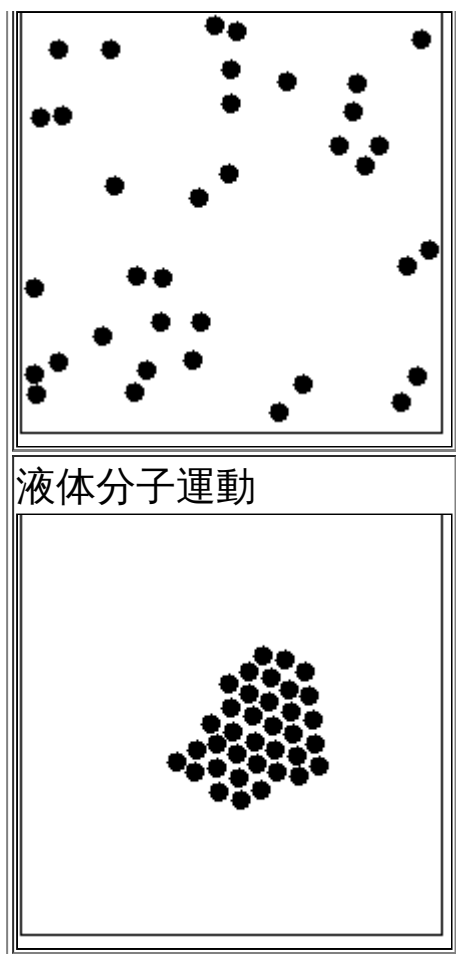
Figure.1 気体液体分子運動パターン分子運動シミュレーションムービー（研究参加者に見せたもの）

気体分子運動

Table.1 気体液体分子運動ムービーへのアメリカ的・日本的評価値の平均値と標準偏差（かっこ内）

刺激種類	自身の保身を重視するように	自身の安全を重視するように	守られるのを好むように	危険に立ち向かうように
液体分子運動	2.59 (1.43)	2.52 (1.33)	2.98 (1.27)	0.68 (1.01)
気体分子運動	1.36 (1.36)	0.85 (1.20)	0.83 (1.26)	1.4 (1.35)

n=200

Table.2 条件間の平均値の差の比較結果（対応あり）

比較対象	t検定
液体 保身重視－気体 保身重視	t(199)=8.75**
液体 安全重視－気体 安全重視	t(199)=13.49**
液体 守られるのを好む－気体 守られるのを好む	t(199)=18.04**
気体 危険に立ち向かう －液体 危険に立ち向かう	t(199)=6.24**
液体 守られるのを好む－液体 危険に立ち向かう	t(199)=19.32**
液体 守られるのを好む－液体 保身重視	t(199)=4.47**
液体 守られるのを好む－液体 安全重視	t(199)=4.50**
液体 保身重視－液体 危険に立ち向かう	t(199)=15.40**
液体 保身重視－液体 安全重視	t(199)=0.69
液体 安全重視－液体 危険に立ち向かう	t(199)=15.73**
気体 危険に立ち向かう －気体 保身重視	t(199)=0.30
気体 危険に立ち向かう －気体 安全重視	t(199)=4.22**
気体 危険に立ち向かう －気体 守られるのを好む	t(199)=4.20**
気体 保身重視－気体 安全重視	t(199)=5.29**
気体 保身重視－気体 守られるのを好む	t(199)=4.90**
気体 安全重視－気体 守られるのを好む	t(199)=0.23

**p<.01

液	<－感じられ	危険に	保	守られ	ー>感じられ

体	る度合いが、より小さい	立ち向かう	身重視安全重視	るのを好む	る度合いが、より大きい
			＾差がない		

気体	＜－感じられる度合いが、より小さい	安全重視 守られるのを好む	危険に立ち向かう保身重視	ー＞感じられる度合いが、より大きい
		＾差がない	＾差がない	

争いを好む、和合を好むパーソナリティの認知

2012.07初出

争いを好む、和合を好むパーソナリティと、気体液体分子運動パターンとの関係について、詳しく説明しています。争いを好むパーソナリティと気体分子運動、和合を好むパーソナリティと液体分子運動が、相関します。

要約
人間のパーソナリティ認知の、争いを好む、和合を好むと、物質の気体と液体の人間に与える感覚との間の関連を明らかにするため、webでの調査を行った。気体液体分子運動パターンをコンピュータシミュレートした2つのムービーを研究参加者200名に対して見せて、各ムービーで、粒子の動きが個人の対人行動として、どの程度、争いを好む、和合を好む、に感じられるかを、評価してもらった。その結果、気体分子運動パターンは人々の動きとして争いを好む、液体分子運動パターンは和合を好む、と感じられることが、分かった。

課題
実際に研究参加者に気体と液体の分子運動シミュレーションムービーを見せて、各分子の動きを人の動きと見立てた場合、それぞれどの程度、争いを好む、和合を好む、と感じるか、調べることにした。

方法

[データ収集方法] インターネットのwebサイトで回答を収集した。回答のカウントに当たっては、同じ研究参加者が複数回回答する可能性に対応するため、回答時に同一のIPアドレスの持ち主は同一の回答者であると見なし、同一のIPアドレスの複数回答は最新の1個の回答のみを有効と見なすとともに、cookieを利用して、複数回の回答を受付けないように設定した。

[研究対象者] 回答を得た研究参加者の総数は200名（男性105名、女性95名）であった。性別情報は、回答時に性別選択欄をwebページにラジオボタンで設け、選択入力してもらうことで得た。
[調査時期] 調査時期は、2007年9月15日から10月09日の24日間であった。

[刺激映像] 刺激は、Ar(アルゴン)の分子運動パターンをシミュレートするJavaプログラムを、池内満(2002)のwebサイトより入手し、液体と気体それぞれの分子運動を最も明確に示すように、絶対温度20度(液体)と300度(気体)のそれぞれの分子運動を表すように調整した。プログラムが表示した気体液体各分子運動のムービーを、パソコン上でキャプチャし、各々30秒間のWindowsMediaVideo形式のムービーに加工して、webサイト上で研究参加者のパソコンから再生可能とした。各ムービーの静止画は、Figure1の通りである。

[質問項目] 上記各ムービーについて”これは、人々の動きを早送りで再生したものです。一つ一つの粒々が一人一人の人間を表しています。このムービーにおける人々の性格が、どの程度、争いを好む、和合を好むに感じられるか5段階評価して下さい。‟として、争いを好む、和合を好む、それぞれ別々に回答させた。段階は、”感じない(0)‟から”とても感じる(4)‟の5段階とした。

[手続き] 各ムービーは、一度に1個ずつ、順番をランダムにして呈示し、ムービー毎に回答させるようにした。回答はムービーが実際に動いているのを見ながらでないと、しにくいため、各ムービーは回答中エンドレスで流れるようにした。なお、実験操作のデブリーフィングとして、回答が完了した時点で、”実はこれは、気体液体分子運動のシミュレーションムービーでした。‟という断り書きを画面上に呈示した。

結果

気体液体分子運動パターンが、人の性格としてそれぞれ争いを好むおよび和合を好むと感じられた度合いの評定値の平均値と標準偏差はTable1に示した通りである。

見せたムービーの種類別に、争いを好む、和合を好む、に感じた度合いの違いを見るため、対応ありの平均値の差のt検定（両側）を行った。(n=200)結果はTable2の通りである。
液体の分子運動を見たとき、争いを好む、和合を好む、と感じる度合いについては、和合を好む、と感じる度合いの数値が、争いを好む、と感じる度合いよりも、有意に高かった。($t(199)=13.71, p<.01$)
気体の分子運動を見たとき、争いを好む、和合を好む、と感じる度合いについては、争いを好む、と感じる度合いの数値が、和合を好む、と感じる度合いよりも、有意に高かった。($t(199)=8.01, p<.01$)
液体と気体とではどちらを、より争いを好むと感じるかについては、気体分子運動パターンを争いを好むに感じる度合いが、液体分子運動パターンを争いを好むに感じる度合いよりも、有意に高かった。
($t(199)=11.59, p<.01$)
液体と気体とではどちらを、より和合を好むと感じるかについては、液体分子運動パターンを和合を好むに感じる度合いが、気体分子運動パターンを和合を好むに感じる度合いよりも、有意に高かった。
($t(199)=13.85, p<.01$)

考察

以上の結果により、気体分子運動のシミュレーションを人に見立てて観察させると、争いを好む性格と認知され、一方、液体分子運動は、和合を好む性格と認知されることが、分かった。気体分子運動パターンと同様に振る舞う人のパーソナリティは、争いを好むに、液体分子運動パターンと同様に振る舞う人では、和合を好むに感じられる、と考えられる。

図表

Figure.1 気体液体分子運動パターン分子運動シミュレーションムービー（研究参加者に見せたもの）

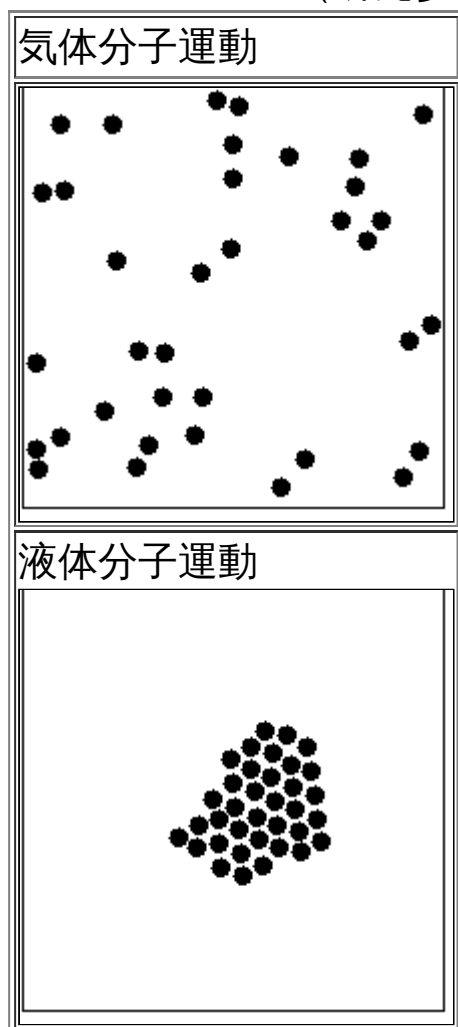



Table.1 気体液体分子運動ムービーへの争いを好む・和合を好む評価値の平均値と標準偏差（かっこ内）

刺激種類	争いを好む	和合を好む
液体分子運動	0.48 (0.92)	2.31 (1.47)
気体分子運動	1.81 (1.46)	0.75 (1.00)

n=200

Table.2 条件間の平均値の差の比較結果（対応あり）

比較対象	t検定
液体 和合を好む－液体 争いを好む	t(199)=13.71**
気体 争いを好む－気体 和合を好む	t(199)=8.01**
気体 争いを好む－液体 争いを好む	t(199)=11.59**
液体 和合を好む－気体 和合を好む	t(199)=13.85**

**p<.01,*p<.05

自由を好む、規制を好むパーソナリティの認知

2012.07初出

自由を好む、規制を好むパーソナリティと、気体液体分子運動パターンとの関係について、詳しく説明しています。自由を好むパーソナリティと気体分子運動、規制を好むパーソナリティと液体分子運動が、相関します。

要約
人間のパーソナリティ認知の、自由を好む、規制を好

むと、物質の気体と液体の人間に与える感覚との間の関連を明らかにするため、webでの調査を行った。気体液体分子運動パターンをコンピュータシミュレートした2つのムービーを研究参加者200名に対して見せて、各ムービーで、粒子の動きが個人の対人行動として、どの程度、自由を好む、規制を好む、に感じられるかを、評価してもらった。その結果、気体分子運動パターンは人々の動きとして自由を好む、液体分子運動パターンは規制を好む、と感じられることが、分かった。

課題
実際に研究参加者に気体と液体の分子運動シミュレーションムービーを見せて、各分子の動きを人の動きと見立てた場合、それぞれどの程度、自由を好む、規制を好む、と感じるか、調べることにした。

方法

[データ収集方法] インターネットのwebサイトで回答を収集した。回答のカウントに当たっては、同じ研究参加者が複数回回答する可能性に対応するため、回答時に同一のIPアドレスの持ち主は同一の回答者であると見なし、同一のIPアドレスの複数回答は最新の1個の回答のみを有効と見なすとともに、cookieを利用して、複数回の回答を受付けないように設定した。

[研究対象者] 回答を得た研究参加者の総数は200名（男性105名、女性95名）であった。性別情報は、回答時に性別選択欄をwebページにラジオボタンで設け、選択入力してもらうことで得た。
[調査時期] 調査時期は、2007年9月15日から10月09日の24日間であった。

[刺激映像] 刺激は、Ar(アルゴン)の分子運動パターンを

シミュレートするJavaプログラムを、池内満(2002)のwebサイトより入手し、液体と気体それぞれの分子運動を最も明確に示すように、絶対温度20度(液体)と300度(気体)のそれぞれの分子運動を表すように調整した。プログラムが表示した気体液体各分子運動のムービーを、パソコン上でキャプチャし、各々30秒間のWindowsMediaVideo形式のムービーに加工して、webサイト上で研究参加者のパソコンから再生可能とした。各ムービーの静止画は、Figure1の通りである。

[質問項目] 上記各ムービーについて”これは、人々の動きを早送りで再生したものです。一つ一つの粒々が一人一人の人間を表しています。このムービーにおける人々の性格が、どの程度、自由を好む、規制を好むに感じられるか5段階評価して下さい。‟として、自由を好む、規制を好む、それぞれ別々に回答させた。段階は、”感じない(0)‟から”とても感じる(4)‟の5段階とした。

[手続き] 各ムービーは、一度に1個ずつ、順番をランダムにして呈示し、ムービー毎に回答させるようにした。回答はムービーが実際に動いているのを見ながらでないと、しにくいため、各ムービーは回答中エンドレスで流れるようにした。なお、実験操作のデブリーフィングとして、回答が完了した時点で、”実はこれは、気体液体分子運動のシミュレーションムービーでした。‟という断り書きを画面上に呈示した。

結果
気体液体分子運動パターンが、人の性格としてそれぞれ自由を好むおよび規制を好むと感じられた度合いの評定値の平均値と標準偏差はTable1に示した通りである。
見せたムービーの種類別に、自由を好む、規制を好む、

に感じた度合いの違いを見るため、対応ありの平均値の差のt検定（両側）を行った。($n=200$)結果はTable2の通りである。
液体の分子運動を見たとき、自由を好む、規制を好む、と感じる度合いについては、規制を好む、と感じる度合いの数値が、自由を好む、と感じる度合いよりも、有意に高かった。($t(199)=11.15,p<.01$)
気体の分子運動を見たとき、自由を好む、規制を好む、と感じる度合いについては、自由を好む、と感じる度合いの数値が、規制を好む、と感じる度合いよりも、有意に高かった。($t(199)=18.55,p<.01$)
液体と気体とではどちらを、より自由を好むと感じるかについては、気体分子運動パターンを自由を好むに感じる度合いが、液体分子運動パターンを自由を好むに感じる度合いよりも、有意に高かった。
($t(199)=19.36,p<.01$)
液体と気体とではどちらを、より規制を好むと感じるかについては、液体分子運動パターンを規制を好むに感じる度合いが、気体分子運動パターンを規制を好むに感じる度合いよりも、有意に高かった。
($t(199)=14.64,p<.01$)

考察

以上の結果により、気体分子運動のシミュレーションを人に見立てて観察させると、自由を好む性格と認知され、一方、液体分子運動は、規制を好む性格と認知されることが、分かった。気体分子運動パターンと同様に振る舞う人のパーソナリティは、自由を好むに、液体分子運動パターンと同様に振る舞う人では、規制を好むに感じられる、と考えられる。

図表

Figure.1 気体液体分子運動パターン分子運動シミュレーションムービー（研究参加者に見せたもの）

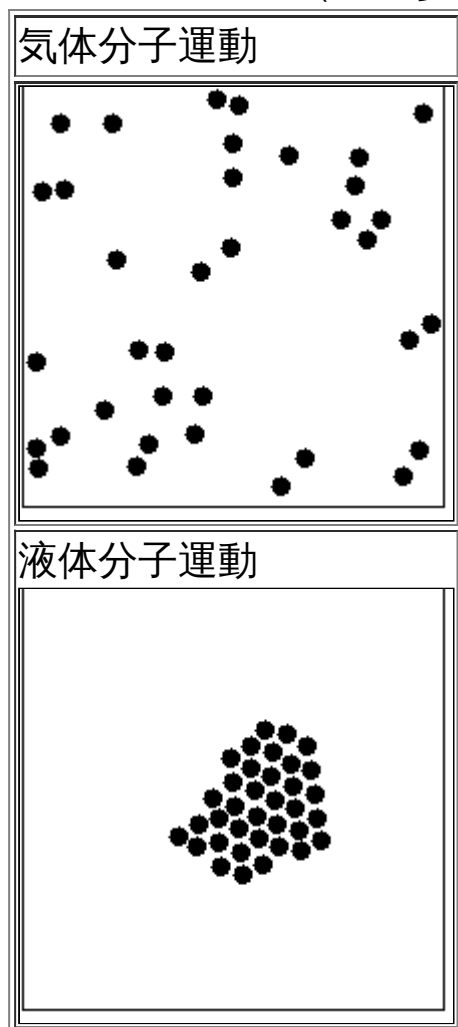



Table.1 気体液体分子運動ムービーへの自由を好む・規制を好む評価値の平均値と標準偏差（かっこ内）

刺激種類	自由を好む	規制を好む
液体分子運動	0.48 (1.02)	2.10 (1.51)
気体分子運動	2.79 (1.39)	0.48 (0.90)

n=200

Table.2 条件間の平均値の差の比較結果（対応あり）

比較対象	t検定
液体 規制を好む－液体 自由を好む	t(199)=11.15**
気体 自由を好む－気体 規制を好む	t(199)=18.55**
気体 自由を好む－液体 自由を好む	t(199)=19.36**
液体 規制を好む－気体 規制を好む	t(199)=14.64**

**p<.01,*p<.05

決まりを破る、決まりを守るパーソナリティの認知

2012.07初出

自由を好む、決まりを守るパーソナリティと、気体液体分子運動パターンとの関係について、詳しく説明しています。決まりを破るパーソナリティと気体分子運動、決まりを守るパーソナリティと液体分子運動が、相関します。

要約
人間のパーソナリティ認知の、決まりを破る、決まりを守ると、物質の気体と液体の人間に与える感覚との

間の関連を明らかにするため、webでの調査を行った。気体液体分子運動パターンをコンピュータシミュレートした2つのムービーを研究参加者200名に対して見せて、各ムービーで、粒子の動きが個人の対人行動として、どの程度、決まりを破る、決まりを守る、に感じられるかを、評価してもらった。その結果、気体分子運動パターンは人々の動きとして決まりを破る、液体分子運動パターンは決まりを守る、と感じられることが、分かった。

課題
実際に研究参加者に気体と液体の分子運動シミュレーションムービーを見せて、各分子の動きを人の動きと見立てた場合、それぞれどの程度、決まりを破る、決まりを守る、と感じるか、調べることにした。

方法

[データ収集方法] インターネットのwebサイトで回答を収集した。回答のカウントに当たっては、同じ研究参加者が複数回回答する可能性に対応するため、回答時に同一のIPアドレスの持ち主は同一の回答者であると見なし、同一のIPアドレスの複数回答は最新の1個の回答のみを有効と見なすとともに、cookieを利用して、複数回の回答を受付けないように設定した。

[研究対象者] 回答を得た研究参加者の総数は200名（男性105名、女性95名）であった。性別情報は、回答時に性別選択欄をwebページにラジオボタンで設け、選択入力してもらうことで得た。
[調査時期] 調査時期は、2007年9月15日から10月09日の24日間であった。

[刺激映像] 刺激は、Ar(アルゴン)の分子運動パターンをシミュレートするJavaプログラムを、池内満(2002)の

webサイトより入手し、液体と気体それぞれの分子運動を最も明確に示すように、絶対温度20度(液体)と300度(気体)のそれぞれの分子運動を表すように調整した。プログラムが表示した気体液体各分子運動のムービーを、パソコン上でキャプチャし、各々30秒間のWindowsMediaVideo形式のムービーに加工して、webサイト上で研究参加者のパソコンから再生可能とした。各ムービーの静止画は、Figure1の通りである。

[質問項目] 上記各ムービーについて”これは、人々の動きを早送りで再生したものです。一つ一つの粒々が一人一人の人間を表しています。このムービーにおける人々の性格が、どの程度、決まりを破る、決まりを守るに感じられるか5段階評価して下さい。“として、決まりを破る、決まりを守る、それぞれ別々に回答させた。段階は、”感じない(0)“から”とても感じる(4)“の5段階とした。

[手続き] 各ムービーは、一度に1個ずつ、順番をランダムにして呈示し、ムービー毎に回答させるようにした。回答はムービーが実際に動いているのを見ながらでないと、しにくいため、各ムービーは回答中エンドレスで流れるようにした。なお、実験操作のデブリーフィングとして、回答が完了した時点で、”実はこれは、気体液体分子運動のシミュレーションムービーでした。“という断り書きを画面上に呈示した。

結果
気体液体分子運動パターンが、人の性格としてそれぞれ決まりを破るおよび決まりを守ると感じられた度合いの評定値の平均値と標準偏差はTable1に示した通りである。
見せたムービーの種類別に、決まりを破る、決まりを守る、に感じた度合いの違いを見るため、対応ありの

平均値の差のt検定（両側）を行った。(n=200)結果はTable2の通りである。
液体の分子運動を見たとき、決まりを破る、決まりを守る、と感じる度合いについては、決まりを守る、と感じる度合いの数値が、決まりを破る、と感じる度合いよりも、有意に高かった。(t(199)=15.46,p<.01)
気体の分子運動を見たとき、決まりを破る、決まりを守る、と感じる度合いについては、決まりを破る、と感じる度合いの数値が、決まりを守る、と感じる度合いよりも、有意に高かった。(t(199)=8.72,p<.01)
液体と気体とではどちらを、より決まりを破ると感じるかについては、気体分子運動パターンを決まりを破るに感じる度合いが、液体分子運動パターンを決まりを破るに感じる度合いよりも、有意に高かった。(t(199)=13.29,p<.01)
液体と気体とではどちらを、より決まりを守ると感じるかについては、液体分子運動パターンを決まりを守るに感じる度合いが、気体分子運動パターンを決まりを守るに感じる度合いよりも、有意に高かった。(t(199)=15.63,p<.01)

考察

以上の結果により、気体分子運動のシミュレーションを人に見立てて観察させると、決まりを破る性格と認知され、一方、液体分子運動は、決まりを守る性格と認知されることが、分かった。気体分子運動パターンと同様に振る舞う人のパーソナリティは、決まりを破るように、液体分子運動パターンと同様に振る舞う人では、決まりを守るように感じられる、と考えられる。

図表

Figure.1 気体液体分子運動パターン分子運動シミュレーションムービー（研究参加者に見せたもの）

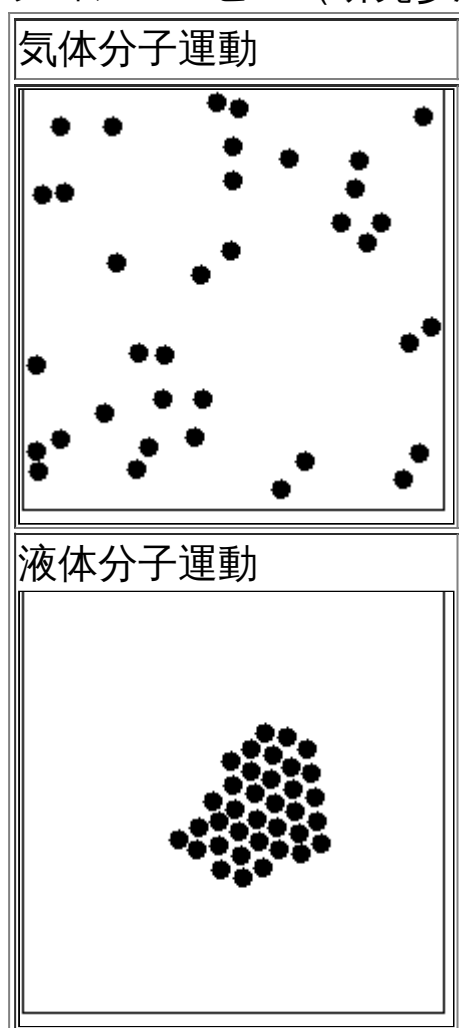



Table.1 気体液体分子運動ムービーへの決まりを破る・決まりを守る評価値の平均値と標準偏差（かっこ内）

刺激種類	決まりを破る	決まりを守る
液体分子運動	0.39 (0.90)	2.48 (1.44)
気体分子運動	1.92 (1.45)	0.68 (1.08)

n=200

Table.2 条件間の平均値の差の比較結果（対応あり）

比較対象	t検定
液体 決まりを守る－液体 決まりを破る	t(199)=15.46**
気体 決まりを破る－気体 決まりを守る	t(199)=8.72**
気体 決まりを破る－液体 決まりを破る	t(199)=13.29**
液体 決まりを守る－気体 決まりを守る	t(199)=15.63**

**p<.01,*p<.05

格差を容認する、横並びを好むパーソナリティの認知

2012.07初出

自由を好む、横並びを好むパーソナリティと、気体液体分子運動パターンとの関係について、詳しく説明しています。格差を容認するパーソナリティと気体分子運動、横並びを好むパーソナリティと液体分子運動が、相関します。

要約
人間のパーソナリティ認知の、格差を容認する、横並びを好むと、物質の気体と液体の人間に与える感覚と

の間の関連を明らかにするため、webでの調査を行った。気体液体分子運動パターンをコンピュータシミュレートした2つのムービーを研究参加者200名に対して見せて、各ムービーで、粒子の動きが個人の対人行動として、どの程度、格差を容認する、横並びを好む、に感じられるかを、評価してもらった。その結果、気体分子運動パターンは人々の動きとして格差を容認する、液体分子運動パターンは横並びを好む、と感じられることが、分かった。

課題
実際に研究参加者に気体と液体の分子運動シミュレーションムービーを見せて、各分子の動きを人の動きと見立てた場合、それぞれどの程度、格差を容認する、横並びを好む、と感じるか、調べることにした。

方法

[データ収集方法] インターネットのwebサイトで回答を収集した。回答のカウントに当たっては、同じ研究参加者が複数回回答する可能性に対応するため、回答時に同一のIPアドレスの持ち主は同一の回答者であると見なし、同一のIPアドレスの複数回答は最新の1個の回答のみを有効と見なすとともに、cookieを利用して、複数回の回答を受付けないように設定した。

[研究対象者] 回答を得た研究参加者の総数は200名（男性105名、女性95名）であった。性別情報は、回答時に性別選択欄をwebページにラジオボタンで設け、選択入力してもらうことで得た。
[調査時期] 調査時期は、2007年9月15日から10月09日の24日間であった。

[刺激映像] 刺激は、Ar(アルゴン)の分子運動パターンをシミュレートするJavaプログラムを、池内満(2002)の

webサイトより入手し、液体と気体それぞれの分子運動を最も明確に示すように、絶対温度20度(液体)と300度(気体)のそれぞれの分子運動を表すように調整した。プログラムが表示した気体液体各分子運動のムービーを、パソコン上でキャプチャし、各々30秒間のWindowsMediaVideo形式のムービーに加工して、webサイト上で研究参加者のパソコンから再生可能とした。各ムービーの静止画は、Figure1の通りである。

[質問項目] 上記各ムービーについて”これは、人々の動きを早送りで再生したものです。一つ一つの粒々が一人一人の人間を表しています。このムービーにおける人々の性格が、どの程度、格差を容認する、横並びを好むに感じられるか5段階評価して下さい。‟として、格差を容認する、横並びを好む、それぞれ別々に回答させた。段階は、”感じない(0)‟から”とても感じる(4)‟の5段階とした。

[手続き] 各ムービーは、一度に1個ずつ、順番をランダムにして呈示し、ムービー毎に回答させるようにした。回答はムービーが実際に動いているのを見ながらでないと、しにくいため、各ムービーは回答中エンドレスで流れるようにした。なお、実験操作のデブリーフィングとして、回答が完了した時点で、”実はこれは、気体液体分子運動のシミュレーションムービーでした。‟という断り書きを画面上に呈示した。

結果
気体液体分子運動パターンが、人の性格としてそれぞれ格差を容認するおよび横並びを好むと感じられた度合いの評定値の平均値と標準偏差はTable1に示した通りである。
見せたムービーの種類別に、格差を容認する、横並びを好む、に感じた度合いの違いを見るため、対応あり

の平均値の差のt検定（両側）を行った。(n=200)結果はTable2の通りである。
液体の分子運動を見たとき、格差を容認する、横並びを好む、と感じる度合いについては、横並びを好む、と感じる度合いの数値が、格差を容認する、と感じる度合いよりも、有意に高かった。(t(199)=10.25,p<.01)
気体の分子運動を見たとき、格差を容認する、横並びを好む、と感じる度合いについては、格差を容認する、と感じる度合いの数値が、横並びを好む、と感じる度合いよりも、有意に高かった。(t(199)=8.62,p<.01)
液体と気体とではどちらを、より格差を容認すると感じるかについては、気体分子運動パターンを格差を容認するに感じる度合いが、液体分子運動パターンを格差を容認するに感じる度合いよりも、有意に高かった。(t(199)=6.99,p<.01)
液体と気体とではどちらを、より横並びを好むと感じるかについては、液体分子運動パターンを横並びを好むに感じる度合いが、気体分子運動パターンを横並びを好むに感じる度合いよりも、有意に高かった。(t(199)=12.26,p<.01)

考察
以上の結果により、気体分子運動のシミュレーションを人に見立てて観察させると、格差を容認する性格と認知され、一方、液体分子運動は、横並びを好む性格と認知されることが、分かった。気体分子運動パターンと同様に振る舞う人のパーソナリティは、格差を容認するように、液体分子運動パターンと同様に振る舞う人では、横並びを好むように感じられる、と考えられる。

図表

Figure.1 気体液体分子運動パターン分子運動シミュレーションムービー（研究参加者に見せたもの）

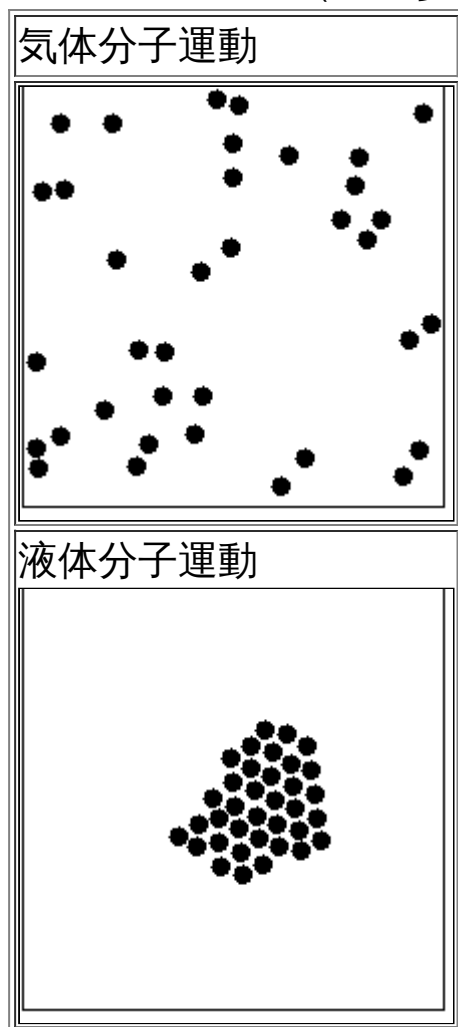



Table.1 気体液体分子運動ムービーへの格差を容認する・横並びを好む評価値の平均値と標準偏差（かっこ内）

刺激種類	格差を容認する	横並びを好む
液体分子運動	0.76 (1.05)	2.06 (1.56)
気体分子運動	1.56 (1.40)	0.56 (1.00)

n=200

Table.2 条件間の平均値の差の比較結果（対応あり）

比較対象	t検定
液体 横並びを好む－液体 格差を容認する	t(199)=10.25**
気体 格差を容認する－気体 横並びを好む	t(199)=8.62**
気体 格差を容認する－液体 格差を容認する	t(199)=6.99**
液体 横並びを好む－気体 横並びを好む	t(199)=12.26**

**p<.01,*p<.05

自立している、依存的パーソナリティの認知

2012.07初出

自立している、依存的パーソナリティと、気体液体分子運動パターンとの関係について、詳しく説明しています。自立しているパーソナリティと気体分子運動、依存的パーソナリティと液体分子運動が、相関します。

要約
人間のパーソナリティ認知の、自立している、依存的と、物質の気体と液体の人間に与える感覚との間の関連を明らかにするため、webでの調査を行った。気体液体分子運動パターンをコンピュータシミュレートした2つのムービーを研究参加者200名に対して見せて、各ムービーで、粒子の動きが個人の対人行動として、どの程度、自立している、依存的、に感じられるかを、評価してもらった。その結果、気体分子運動パターンは人々の動きとして自立している、液体分子運動パターンは依存的、と感じられることが、分かった。

課題
実際に研究参加者に気体と液体の分子運動シミュレーションムービーを見せて、各分子の動きを人の動きと見立てた場合、それぞれどの程度、自立している、依存的、と感じるか、調べることにした。

方法

[データ収集方法] インターネットのwebサイトで回答を収集した。回答のカウントに当たっては、同じ研究参加者が複数回回答する可能性に対応するため、回答時に同一のIPアドレスの持ち主は同一の回答者であると見なし、同一のIPアドレスの複数回答は最新の1個の回答のみを有効と見なすとともに、cookieを利用して、複数回の回答を受付けないように設定した。

[研究対象者] 回答を得た研究参加者の総数は200名（男性105名、女性95名）であった。性別情報は、回答時に性別選択欄をwebページにラジオボタンで設け、選択入力してもらうことで得た。
[調査時期] 調査時期は、2007年9月15日から10月09日の24日間であった。

[刺激映像] 刺激は、Ar(アルゴン)の分子運動パターンをシミュレートするJavaプログラムを、池内満(2002)のwebサイトより入手し、液体と気体それぞれの分子運動を最も明確に示すように、絶対温度20度(液体)と300度(気体)のそれぞれの分子運動を表すように調整した。プログラムが表示した気体液体各分子運動のムービーを、パソコン上でキャプチャし、各々30秒間のWindowsMediaVideo形式のムービーに加工して、webサイト上で研究参加者のパソコンから再生可能とした。各ムービーの静止画は、Figure1の通りである。

[質問項目] 上記各ムービーについて”これは、人々の動きを早送りで再生したものです。一つ一つの粒々が一人一人の人間を表しています。このムービーにおける人々の性格が、どの程度、自立している、依存的に感じられるか5段階評価して下さい。“として、自立している、依存的、それぞれ別々に回答させた。段階は、”感じない(0)“から”とても感じる(4)“の5段階とした。

[手続き] 各ムービーは、一度に1個ずつ、順番をランダムにして呈示し、ムービー毎に回答させるようにした。回答はムービーが実際に動いているのを見ながらでないと、しにくいため、各ムービーは回答中エンドレスで流れるようにした。なお、実験操作のデブリーフィングとして、回答が完了した時点で、”実はこれは、気体液体分子運動のシミュレーションムービーでした。“という断り書きを画面上に呈示した。

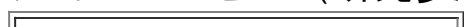
結果

気体液体分子運動パターンが、人の性格としてそれぞれ自立しているおよび依存的と感じられた度合いの評定値の平均値と標準偏差はTable1に示した通りである。見せたムービーの種類別に、自立している、依存的、に感じた度合いの違いを見るため、対応ありの平均値

の差のt検定（両側）を行った。(n=200)結果はTable2の通りである。

液体の分子運動を見たとき、自立している、依存的、と感じる度合いについては、依存的、と感じる度合いの数値が、格差を容認する、と感じる度合いよりも、有意に高かった。($t(199)=20.01, p<.01$)

気体の分子運動を見たとき、自立している、依存的、と感じる度合いについては、自立している、と感じる度合いの数値が、依存的、と感じる度合いよりも、有意に高かった。($t(199)=8.34, p<.01$)

液体と気体とではどちらを、より自立していると感じるかについては、気体分子運動パターンを自立している、と感じる度合いが、液体分子運動パターンを自立している、と感じる度合いよりも、有意に高かった。($t(199)=13.21, p<.01$)

液体と気体とではどちらを、より依存的と感じるかについては、液体分子運動パターンを依存的に感じる度合いが、気体分子運動パターンを依存的に感じる度合いよりも、有意に高かった。($t(199)=19.47, p<.01$)

考察

以上の結果により、気体分子運動のシミュレーションを人に見立てて観察させると、自立している性格と認知され、一方、液体分子運動は、依存的性格と認知されることが、分かった。気体分子運動パターンと同様に振る舞う人のパーソナリティは、自立しているように、液体分子運動パターンと同様に振る舞う人では、依存的なように感じられる、と考えられる。

図表

Figure.1 気体液体分子運動パターン分子運動シミュレーションムービー（研究参加者に見せたもの）

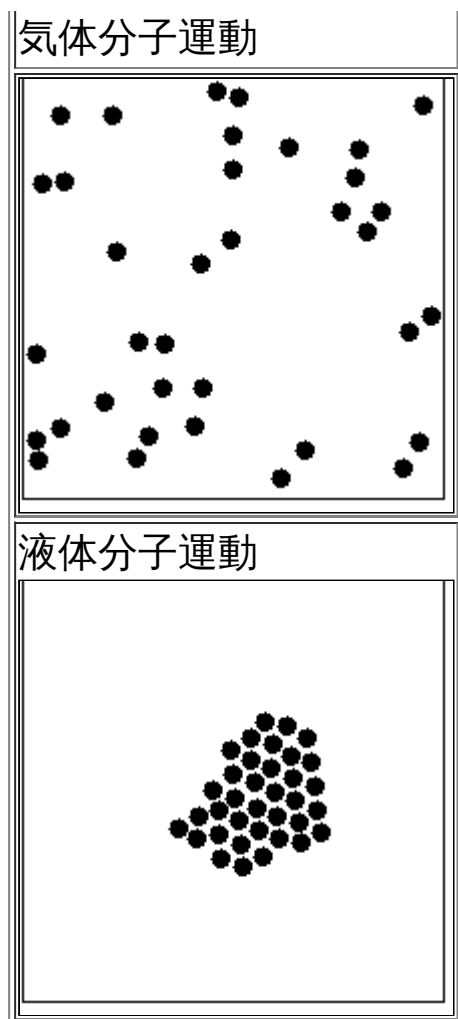



Table.1 気体液体分子運動ムービーへの自立している・依存的評価値の平均値と標準偏差（かっこ内）

刺激種類	自立している	依存的
液体分子運動	0.32 (0.83)	2.75 (1.28)
気体分子運動	1.81 (1.47)	0.64 (1.09)

n=200

Table.2 条件間の平均値の差の比較結果（対応あり）

比較対象	t検定
液体 依存的－液体 自立している	t(199)=20.01**
気体 自立している－気体 依存的	t(199)=8.34**
気体 自立している－液体 自立している	t(199)=13.21**
液体 依存的－気体 依存的	t(199)=19.47**

**p<.01,*p<.05

明るい、暗いパーソナリティの認知

2012.07初出

明るい、暗いパーソナリティと、気体液体分子運動パターンとの関係について、詳しく説明しています。明るいパーソナリティと気体分子運動、暗いパーソナリティと液体分子運動が、相関します。

要約
人間のパーソナリティ認知の、明るい、暗いと、物質の気体と液体の人間に与える感覚との間の関連を明らかにするため、webでの調査を行った。気体液体分子運動パターンをコンピュータシミュレートした2つのムービーを研究参加者200名に対して見せて、各ムービー

で、粒子の動きが個人の対人行動として、どの程度、明るい、暗い、に感じられるかを、評価してもらった。
その結果、気体分子運動パターンは人々の動きとして明るい、液体分子運動パターンは暗い、と感じられることが、分かった。

課題
実際に研究参加者に気体と液体の分子運動シミュレーションムービーを見せて、各分子の動きを人の動きと見立てた場合、それぞれどの程度、能動的、暗い、と感じるか、調べることにした。

方法

[データ収集方法] インターネットのwebサイトで回答を収集した。回答のカウントに当たっては、同じ研究参加者が複数回回答する可能性に対応するため、回答時に同一のIPアドレスの持ち主は同一の回答者であると見なし、同一のIPアドレスの複数回答は最新の1個の回答のみを有効と見なすとともに、cookieを利用して、複数回の回答を受付けないように設定した。

[研究対象者] 回答を得た研究参加者の総数は200名（男性105名、女性95名）であった。性別情報は、回答時に性別選択欄をwebページにラジオボタンで設け、選択入力してもらうことで得た。
[調査時期] 調査時期は、2007年9月15日から10月09日の24日間であった。

[刺激映像] 刺激は、Ar(アルゴン)の分子運動パターンをシミュレートするJavaプログラムを、池内満(2002)のwebサイトより入手し、液体と気体それぞれの分子運動を最も明確に示すように、絶対温度20度(液体)と300度(気体)のそれぞれの分子運動を表すように調整した。プログラムが表示した気体液体各分子運動のムービー

を、パソコン上でキャプチャし、各々30秒間のWindowsMediaVideo形式のムービーに加工して、webサイト上で研究参加者のパソコンから再生可能とした。各ムービーの静止画は、Figure1の通りである。

[質問項目] 上記各ムービーについて”これは、人々の動きを早送りで再生したものです。一つ一つの粒々が一人一人の人間を表しています。このムービーにおける人々の性格が、どの程度、明るく、暗く感じられるか5段階評価して下さい。“として、明るい、暗い、それぞれ別々に回答させた。段階は、”感じない(0)“から”とても感じる(4)“の5段階とした。

[手続き] 各ムービーは、一度に1個ずつ、順番をランダムにして呈示し、ムービー毎に回答させるようにした。回答はムービーが実際に動いているのを見ながらでないと、しにくいため、各ムービーは回答中エンドレスで流れるようにした。なお、実験操作のデブリーフィングとして、回答が完了した時点で、”実はこれは、気体液体分子運動のシミュレーションムービーでした。“という断り書きを画面上に呈示した。

結果
気体液体分子運動パターンが、人の性格としてそれぞれ明るくおよび暗く感じられた度合いの評定値の平均値と標準偏差はTable1に示した通りである。
見せたムービーの種類別に、明るく、暗く感じた度合いの違いを見るため、対応ありの平均値の差のt検定（両側）を行った。(n=200)結果はTable2の通りである。
液体の分子運動を見たとき、明るく、暗く感じる度合いについては、暗く感じる度合いの数値が、明るく感じる度合いよりも、有意に高かった。
(t(199)=10.60,p<.01)
気体の分子運動を見たとき、明るく、暗く感じる度合いについては、明るく感じる度合いの数値が、暗く感

じる度合いよりも、有意に高かった。($t(199)=4.92,p<.01$)
液体と気体とではどちらを、より明るく感じるかについては、気体分子運動パターンを明るく感じる度合いが、液体分子運動パターンを明るく感じる度合いよりも、有意に高かった。($t(199)=10.17,p<.01$)
液体と気体とではどちらを、より暗く感じるかについては、液体分子運動パターンを暗く感じる度合いが、気体分子運動パターンを暗く感じる度合いよりも、有意に高かった。($t(199)=9.34,p<.01$)

考察

以上の結果により、気体分子運動のシミュレーションを人に見立てて観察させると、明るい性格と認知され、一方、液体分子運動は、暗い性格と認知されることが、分かった。気体分子運動パターンと同様に振る舞う人のパーソナリティは、明るく、液体分子運動パターンと同様に振る舞う人では、暗く感じられる、と考えられる。

図表

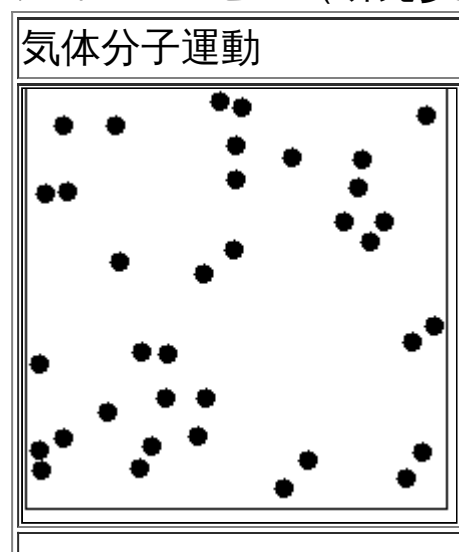
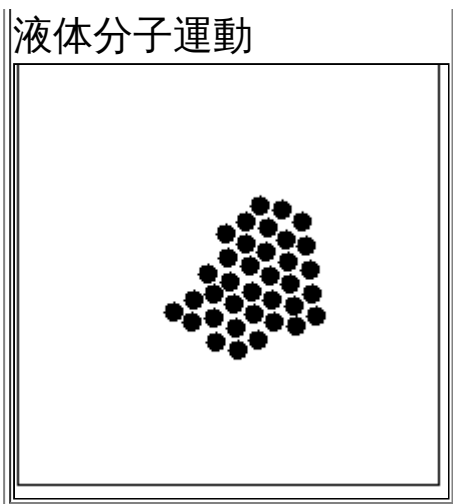
Figure.1 気体液体分子運動パターン分子運動シミュレーションムービー（研究参加者に見せたもの）

液体分子運動

Table.1 気体液体分子運動ムービーへの明るい・暗い評価値の平均値と標準偏差（かっこ内）

刺激種類	明るく	暗く
液体分子運動	0.53 (0.94)	2.02 (1.46)
気体分子運動	1.67 (1.44)	0.89 (1.31)

n=200

Table.2 条件間の平均値の差の比較結果（対応あり）

比較対象	t検定
液体 暗く－液体 明るく	t(199)=10.60**
気体 明るく－気体 暗く	t(199)=4.92**
気体 明るく－液体 明るく	t(199)=10.17**

液体 暗く－気体 暗く	t(199)=9.34**

**p<.01,*p<.05

冷たい、温かいパーソナリティの認知

2012.07初出

冷たい、温かいパーソナリティと、気体液体分子運動パターンとの関係について、詳しく説明しています。冷たいパーソナリティと気体分子運動、温かいパーソナリティと液体分子運動が、相関します。

要約
人間のパーソナリティ認知の、冷たい、温かいと、物質の気体と液体の人間に与える感覚との間の関連を明らかにするため、webでの調査を行った。気体液体分子運動パターンをコンピュータシミュレートした2つのムービーを研究参加者200名に対して見せて、各ムービーで、粒子の動きが個人の対人行動として、どの程度、冷たい、温かい、に感じられるかを、評価してもらった。その結果、気体分子運動パターンは人々の動きとして冷たい、液体分子運動パターンは温かい、と感じられることが、分かった。

課題
実際に研究参加者に気体と液体の分子運動シミュレーションムービーを見せて、各分子の動きを人の動きと見立てた場合、それぞれどの程度、冷たい、温かい、

と感じるか、調べることにした。

方法

[データ収集方法] インターネットのwebサイトで回答を収集した。回答のカウントに当たっては、同じ研究参加者が複数回回答する可能性に対応するため、回答時に同一のIPアドレスの持ち主は同一の回答者であると見なし、同一のIPアドレスの複数回答は最新の1個の回答のみを有効と見なすとともに、cookieを利用して、複数回の回答を受付けないように設定した。

[研究対象者] 回答を得た研究参加者の総数は200名（男性105名、女性95名）であった。性別情報は、回答時に性別選択欄をwebページにラジオボタンで設け、選択入力してもらうことで得た。
[調査時期] 調査時期は、2007年9月15日から10月09日の24日間であった。

[刺激易PI] 刺激は、Ar(アルゴン)の分子運動パターンをシミュレートするJavaプログラムを、池内満(2002)のwebサイトより入手し、液体と気体それぞれの分子運動を最も明確に示すように、絶対温度20度(液体)と300度(気体)のそれぞれの分子運動を表すように調整した。プログラムが表示した気体液体各分子運動のムービーを、パソコン上でキャプチャし、各々30秒間のWindowsMediaVideo形式のムービーに加工して、webサイト上で研究参加者のパソコンから再生可能とした。各ムービーの静止画は、Figure1の通りである。

[質問項目] 上記各ムービーについて”これは、人々の動きを早送りで再生したものです。一つ一つの粒々が一人一人の人間を表しています。このムービーにおける人々の性格が、どの程度、冷たく、温かく感じられるか5段階評価して下さい。“として、冷たい、温かい、

それぞれ別々に回答させた。段階は、”感じない(0)‟から”とても感じる(4)‟の5段階とした。

[手続き] 各ムービーは、一度に1個ずつ、順番をランダムにして呈示し、ムービー毎に回答させるようにした。回答はムービーが実際に動いているのを見ながらでないと、しにくいため、各ムービーは回答中エンドレスで流れるようにした。なお、実験操作のデブリーフィングとして、回答が完了した時点で、”実はこれは、気体液体分子運動のシミュレーションムービーでした。‟という断り書きを画面上に呈示した。

結果
気体液体分子運動パターンが、人の性格としてそれぞれ冷たくおよび温かく感じられた度合いの評定値の平均値と標準偏差はTable1に示した通りである。
見せたムービーの種類別に、冷たく、温かく感じた度合いの違いを見るため、対応ありの平均値の差のt検定（両側）を行った。(n=200)結果はTable2の通りである。
液体の分子運動を見たとき、冷たく、温かく感じる度合いについては、温かく感じる度合いの数値と、冷たく感じる度合いの数値に有意差は見られなかった。
(t(199)=0.04)
気体の分子運動を見たとき、冷たく、温かく感じる度合いについては、冷たく感じる度合いの数値が、温かく感じる度合いよりも、有意に高かった。
(t(199)=4.75,p<.01)
液体と気体とではどちらを、より冷たく感じるかについては、気体分子運動パターンを冷たく感じる度合いが、液体分子運動パターンを冷たく感じる度合いよりも、有意に高かった。(t(199)=2.36,p<.05)
液体と気体とではどちらを、より温かく感じるかについては、液体分子運動パターンを温かく感じる度合いが、気体分子運動パターンを温かく感じる度合いよりも、有意に高かった。(t(199)=3.82,p<.01)

考察

以上の結果により、気体分子運動のシミュレーション
を人に見立てて観察させると、冷たい性格と認知さ
れ、一方、液体分子運動は、温かい性格と認知されるこ
とが、分かった。気体分子運動パターンと同様に振る
舞う人のパーソナリティは、冷たく、液体分子運動パ
ターンと同様に振る舞う人では、温かく感じられる、
と考えられる。

図表

Figure.1 気体液体分子運動パターン分子運動シミュレー
ションムービー（研究参加者に見せたもの）

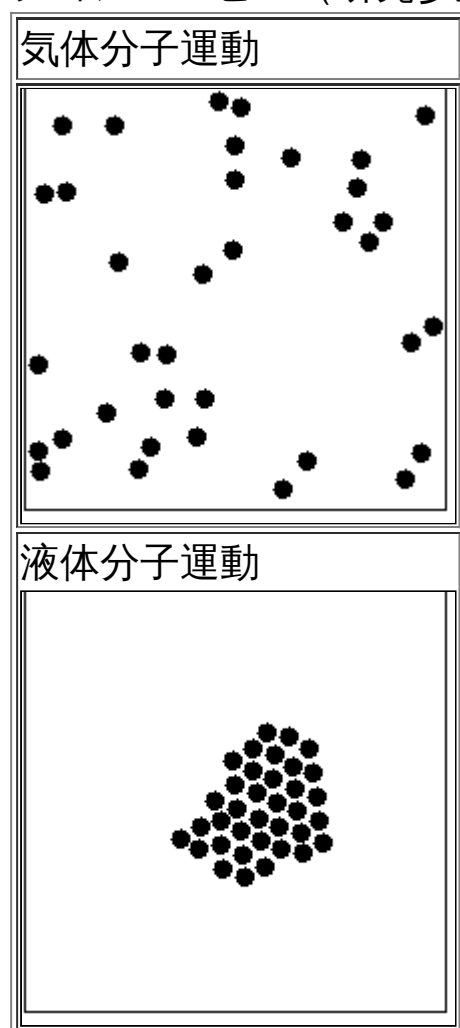



Table.1 気体液体分子運動ムービーへの冷たい・温かい評価値の平均値と標準偏差（かっこ内）

刺激種類	冷たく	温かく
液体分子運動	1.08 (1.32)	1.08 (1.23)
気体分子運動	1.36 (1.40)	0.71 (1.03)

n=200

Table.2 条件間の平均値の差の比較結果（対応あり）

比較対象	t検定
液体 温かく －液体 冷たく	t(199)=0.04
気体 冷たく －気体 温かく	t(199)=4.75**
気体 冷たく －液体 冷たく	t(199)=2.36*
液体 温かく －気体 温かく	t(199)=3.82**

**p<.01,*p<.05

責任を取る、責任を回避するパーソナリティの認知

2012.07初出

責任を取る、責任を回避するパーソナリティと、気体液体分子運動パターンとの関係について、詳しく説明しています。責任を取るパーソナリティと気体分子運動、責任を回避するパーソナリティと液体分子運動が、相関します。

要約
人間のパーソナリティ認知の、責任を取る、責任を回避すると、物質の気体と液体の人間に与える感覚との間の関連を明らかにするため、webでの調査を行った。気体液体分子運動パターンをコンピュータシミュレートした2つのムービーを研究参加者200名に対して見せて、各ムービーで、粒子の動きが個人の対人行動として、どの程度、責任を取る、責任を回避する、に感じられるかを、評価してもらった。その結果、気体分子運動も液体分子運動も同様に責任を回避する性格と認知されることが分かった。ただし、責任を回避すると認知される度合いを、気体分子運動と液体分子運動とで比べてみると、液体分子運動の方がより高く、相対的に見ると、液体分子運動相当の行動をするパーソナリティの方が、より責任回避的であると言えることが分かった。

課題
実際に研究参加者に気体と液体の分子運動シミュレーションムービーを見せて、各分子の動きを人の動きと見立てた場合、それぞれどの程度、能動的、責任を回避する、と感じるか、調べることにした。

方法

[データ収集方法] インターネットのwebサイトで回答を収集した。回答のカウントに当たっては、同じ研究参

加者が複数回回答する可能性に対応するため、回答時に同一のIPアドレスの持ち主は同一の回答者であると見なし、同一のIPアドレスの複数回答は最新の1個の回答のみを有効と見なすとともに、cookieを利用して、複数回の回答を受付けないように設定した。

[研究対象者] 回答を得た研究参加者の総数は200名（男性105名、女性95名）であった。性別情報は、回答時に性別選択欄をwebページにラジオボタンで設け、選択入力してもらうことで得た。
[調査時期] 調査時期は、2007年9月15日から10月09日の24日間であった。

[刺激映像] 刺激は、Ar(アルゴン)の分子運動パターンをシミュレートするJavaプログラムを、池内満(2002)のwebサイトより入手し、液体と気体それぞれの分子運動を最も明確に示すように、絶対温度20度(液体)と300度(気体)のそれぞれの分子運動を表すように調整した。プログラムが表示した気体液体各分子運動のムービーを、パソコン上でキャプチャし、各々30秒間のWindowsMediaVideo形式のムービーに加工して、webサイト上で研究参加者のパソコンから再生可能とした。各ムービーの静止画は、Figure1の通りである。

[質問項目] 上記各ムービーについて”これは、人々の動きを早送りで再生したものです。一つ一つの粒々が一人一人の人間を表しています。このムービーにおける人々の性格が、どの程度、責任を取るように、責任を回避するように感じられるか5段階評価して下さい。‟として、責任を取る、責任を回避する、それぞれ別々に回答させた。段階は、”感じない(0)‟から”とても感じる(4)‟の5段階とした。

[手続き] 各ムービーは、一度に1個ずつ、順番をランダムにして呈示し、ムービー毎に回答させるようにし

た。回答はムービーが実際に動いているのを見ながらでないと、しにくいため、各ムービーは回答中エンドレスで流れるようにした。なお、実験操作のデブリーフィングとして、回答が完了した時点で、”実はこれは、気体液体分子運動のシミュレーションムービーでした。‟という断り書きを画面上に呈示した。

結果
気体液体分子運動パターンが、人の性格としてそれぞれ責任を取るようにおよび責任を回避するように感じられた度合いの評定値の平均値と標準偏差はTable1に示した通りである。
見せたムービーの種類別に、責任を取るように、責任を回避するよう、に感じた度合いの違いを見るため、対応ありの平均値の差のt検定（両側）を行った。
$(n=200)$結果はTable2の通りである。
液体の分子運動を見たとき、責任を取るように、責任を回避するように感じる度合いについては、責任を回避するように感じる度合いの数値が、責任を取るように感じる度合いよりも、有意に高かった。
$(t(199)=13.20,p<.01)$
気体の分子運動を見たとき、責任を取るように、責任を回避するように感じる度合いについては、責任を回避するように感じる度合いの数値が、責任を取るように感じる度合いよりも、有意に高かった。
$(t(199)=8.33,p<.01)$
液体と気体とではどちらを、より責任を取るように感じるかについては、両者に有意差は見られなかった。
$(t(199)=0.36)$
液体と気体とではどちらを、より責任を回避するように感じるかについては、液体分子運動パターンで責任を回避するように感じる度合いが、気体分子運動パターンで責任を回避するように感じる度合いよりも、有意に高かった。$(t(199)=4.76,p<.01)$

考察

以上の結果により、気体分子運動のシミュレーションを人に見立てて観察させると、責任を回避する性格と認知され、一方、液体分子運動も同様に責任を回避する性格と認知されることが分かった。ただし、責任を回避すると認知される度合いを、気体分子運動と液体分子運動とで比べてみると、液体分子運動の方がより高く、相対的に見ると、液体分子運動相当の行動をするパーソナリティの方が、より責任回避的であると言えることが分かった。

図表

Figure.1 気体液体分子運動パターン分子運動シミュレーションムービー（研究参加者に見せたもの）

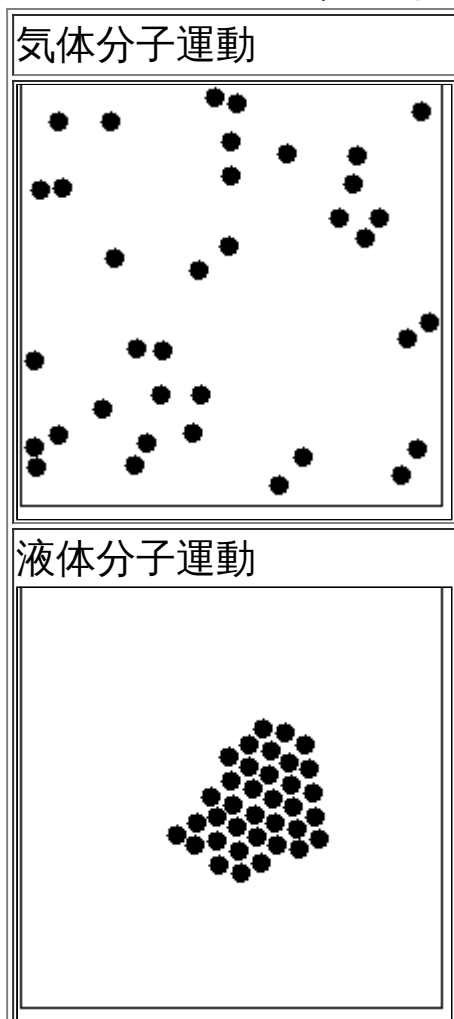



Table.1 気体液体分子運動ムービーへの責任を取る・責任を回避する評価値の平均値と標準偏差（かっこ内）

刺激種類	責任を取るように	責任を回避するように
液体分子運動	0.59 (0.98)	2.29 (1.45)
気体分子運動	0.62 (1.04)	1.65 (1.43)

n=200

Table.2 条件間の平均値の差の比較結果（対応あり）

比較対象	t検定
液体 責任を回避するように－液体 責任を取るように	t(199)=13.20**
気体 責任を回避するように－気体 責任を取るように	t(199)=8.33**
気体 責任を取るように－液体 責任を取	t(199)=0.36

るように	
液体 責任を回避するように－気体 責任を回避するように	t(199)=4.76**

**p<.01,*p<.05

開放的、閉鎖的、排他的パーソナリティの認知

2012.07初出

開放的、閉鎖的、排他的パーソナリティと、気体液体分子運動パターンとの関係について、詳しく説明しています。開放的パーソナリティと気体分子運動、閉鎖的、排他的パーソナリティと液体分子運動が、相関します。

要約
人間のパーソナリティ認知の、開放的、閉鎖的、排他的と、物質の気体と液体の人間に与える感覚との間の関連を明らかにするため、webでの調査を行った。気体液体分子運動パターンをコンピュータシミュレートした2つのムービーを研究参加者200名に対して見せて、各ムービーで、粒子の動きが個人の対人行動として、どの程度、開放的、閉鎖的、排他的、に感じられるかを、評価してもらった。その結果、気体分子運動パターンは人々の動きとして開放的、液体分子運動パターンは閉鎖的、排他的、と感じられることが、分かった。

課題
実際に研究参加者に気体と液体の分子運動シミュレーションムービーを見せて、各分子の動きを人の動きと

見立てた場合、それぞれどの程度、開放的、閉鎖的・排他的、と感じるか、調べることにした。

方法

[データ収集方法] インターネットのwebサイトで回答を収集した。回答のカウントに当たっては、同じ研究参加者が複数回回答する可能性に対応するため、回答時に同一のIPアドレスの持ち主は同一の回答者であると見なし、同一のIPアドレスの複数回答は最新の1個の回答のみを有効と見なすとともに、cookieを利用して、複数回の回答を受付けないように設定した。

[研究対象者] 回答を得た研究参加者の総数は200名（男性105名、女性95名）であった。性別情報は、回答時に性別選択欄をwebページにラジオボタンで設け、選択入力してもらうことで得た。
[調査時期] 調査時期は、2007年9月15日から10月09日の24日間であった。

[刺激映像] 刺激は、Ar(アルゴン)の分子運動パターンをシミュレートするJavaプログラムを、池内満(2002)のwebサイトより入手し、液体と気体それぞれの分子運動を最も明確に示すように、絶対温度20度(液体)と300度(気体)のそれぞれの分子運動を表すように調整した。プログラムが表示した気体液体各分子運動のムービーを、パソコン上でキャプチャし、各々30秒間のWindowsMediaVideo形式のムービーに加工して、webサイト上で研究参加者のパソコンから再生可能とした。各ムービーの静止画は、Figure1の通りである。

[質問項目] 上記各ムービーについて”これは、人々の動きを早送りで再生したものです。一つ一つの粒々が一人一人の人間を表しています。このムービーにおける人々の性格が、どの程度、開放的、閉鎖的、排他的に感

じられるか5段階評価して下さい。"として、開放的、閉鎖的、排他的、それぞれ別々に回答させた。段階は、"感じない(0)"から"とても感じる(4)"の5段階とした。

[手続き] 各ムービーは、一度に1個ずつ、順番をランダムにして呈示し、ムービー毎に回答させるようにした。回答はムービーが実際に動いているのを見ながらでないと、しにくいため、各ムービーは回答中エンドレスで流れるようにした。なお、実験操作のデブリーフィングとして、回答が完了した時点で、"実はこれは、気体液体分子運動のシミュレーションムービーでした。"という断り書きを画面上に呈示した。

結果
気体液体分子運動パターンが、人の性格としてそれぞれ開放的および閉鎖的、排他的と感じられた度合いの評定値の平均値と標準偏差はTable1に示した通りである。
見せたムービーの種類別に、開放的、閉鎖的、排他的、に感じた度合いの違いを見るため、対応ありの平均値の差のt検定（両側）を行った。(n=200)結果はTable2の通りである。
液体の分子運動を見たとき、開放的、閉鎖的・排他的、と感じる度合いについては、閉鎖的、排他的、と感じる度合いの数値が、開放的、と感じる度合いよりも、それぞれ有意に高かった。閉鎖的と排他的との比較では、液体分子運動では、閉鎖的、と感じる度合いの数値が、排他的、と感じる度合いよりも、有意に高かった。
気体の分子運動を見たとき、開放的、閉鎖的・排他的、と感じる度合いについては、開放的、と感じる度合いの数値が、閉鎖的、排他的とそれぞれ感じる度合いよりも、有意に高かった。閉鎖的と排他的との比較で

は、気体分子運動では、排他的、と感じる度合いの数値が、閉鎖的、と感じる度合いよりも、有意に高かった。
液体と気体とではどちらを、より開放的と感じるかについては、気体分子運動パターンを開放的、と感じる度合いが、液体分子運動パターンを開放的、と感じる度合いよりも、有意に高かった。
液体と気体とではどちらを、より閉鎖的と感じるかについては、液体分子運動パターンを閉鎖的に感じる度合いが、気体分子運動パターンを閉鎖的に感じる度合いよりも、有意に高かった。液体と気体とではどちらを、より排他的と感じるかについては、液体分子運動パターンを排他的に感じる度合いが、気体分子運動パターンを排他的に感じる度合いよりも、有意に高かった。

考察
以上の結果により、気体分子運動のシミュレーションを人に見立てて観察させると、開放的性格と認知され、一方、液体分子運動は、閉鎖的、排他的性格と認知されることが、分かった。気体分子運動パターンと同様に振る舞う人のパーソナリティは、開放的なように、液体分子運動パターンと同様に振る舞う人では、閉鎖的、排他的なように感じられる、と考えられる。閉鎖的と排他的との比較では、排他的の方が、開放的に対して、より近い概念である、と考えられる。

図表

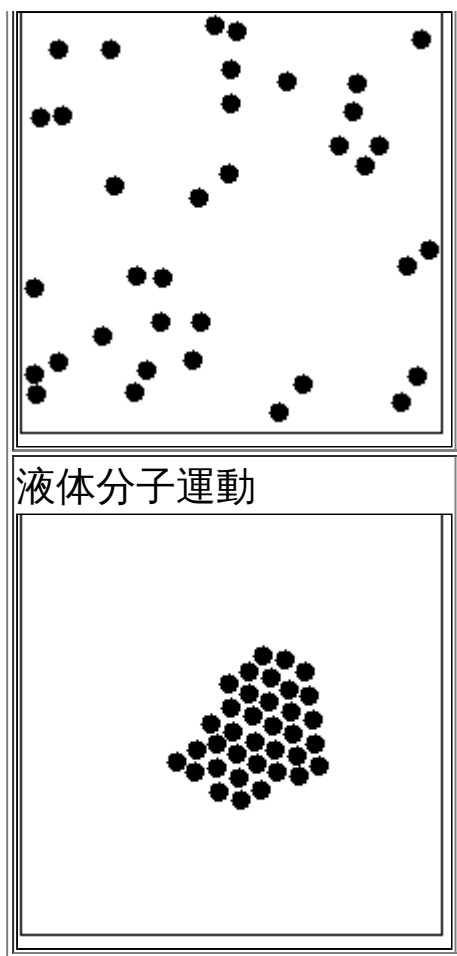
Figure.1 気体液体分子運動パターン分子運動シミュレーションムービー（研究参加者に見せたもの）

気体分子運動

Table.1 気体液体分子運動ムービーへの開放的・閉鎖的評価値の平均値と標準偏差（かっこ内）

刺激種類	開放的	閉鎖的	排他的
液体分子運動	0.38 (0.94)	2.60 (1.41)	1.81 (1.55)
気体分子運動	2.30 (1.51)	1.08 (1.41)	1.40 (1.34)

n=200

Table.2 条件間の平均値の差の比較結果（対応あり）

比較対象	t検定
液体 閉鎖的－液体 開放的	t(199)=17.13**
液体 排他的－液体 開放的	t(199)=10.71**
液体 閉鎖的－液体 排他的	t(199)=6.00**
気体 開放的－気体 閉鎖的	t(199)=7.36**
気体 開放的－気体 排他的	t(199)=6.17**
気体 排他的－気体 閉鎖的	t(199)=2.75**
気体 開放的－液体 開放的	t(199)=15.95**
液体 閉鎖的－気体 閉鎖的	t(199)=11.95**
液体 排他的－気体 排他的	t(199)=2.85**

**p<.01,*p<.05

能動的、受動的パーソナリティの認知

2012.07初出

能動的、受動的パーソナリティと、気体液体分子運動パターンとの関係について、詳しく説明しています。能

動的パーソナリティと気体分子運動、受動的パーソナリティと液体分子運動が、相関します。

要約

人間のパーソナリティ認知の、能動的、受動的と、物質の気体と液体の人間に与える感覚との間の関連を明らかにするため、webでの調査を行った。気体液体分子運動パターンをコンピュータシミュレートした2つのムービーを研究参加者200名に対して見せて、各ムービーで、粒子の動きが個人の対人行動として、どの程度、能動的、受動的、に感じられるかを、評価してもらった。その結果、気体分子運動パターンは人々の動きとして能動的、液体分子運動パターンは受動的、と感じられることが、分かった。

課題

実際に研究参加者に気体と液体の分子運動シミュレーションムービーを見せて、各分子の動きを人の動きと見立てた場合、それぞれどの程度、能動的、受動的、と感じるか、調べることにした。

方法

[データ収集方法] インターネットのwebサイトで回答を収集した。回答のカウントに当たっては、同じ研究参加者が複数回回答する可能性に対応するため、回答時に同一のIPアドレスの持ち主は同一の回答者であると見なし、同一のIPアドレスの複数回答は最新の1個の回答のみを有効と見なすとともに、cookieを利用して、複数回の回答を受付けないように設定した。

[研究対象者] 回答を得た研究参加者の総数は200名（男性105名、女性95名）であった。性別情報は、回答時に性別選択欄をwebページにラジオボタンで設け、選択入力してもらうことで得た。

[調査時期] 調査時期は、2007年9月15日から10月09日の24日間であった。

[刺激映像] 刺激は、Ar(アルゴン)の分子運動パターンをシミュレートするJavaプログラムを、池内満(2002)のwebサイトより入手し、液体と気体それぞれの分子運動を最も明確に示すように、絶対温度20度(液体)と300度(気体)のそれぞれの分子運動を表すように調整した。プログラムが表示した気体液体各分子運動のムービーを、パソコン上でキャプチャし、各々30秒間のWindowsMediaVideo形式のムービーに加工して、webサイト上で研究参加者のパソコンから再生可能とした。各ムービーの静止画は、Figure1の通りである。

[質問項目] 上記各ムービーについて”これは、人々の動きを早送りで再生したものです。一つ一つの粒々が一人一人の人間を表しています。このムービーにおける人々の性格が、どの程度、能動的、受動的に感じられるか5段階評価して下さい。‟として、能動的、受動的、それぞれ別々に回答させた。段階は、”感じない(0)‟から”とても感じる(4)‟の5段階とした。

[手続き] 各ムービーは、一度に1個ずつ、順番をランダムにして呈示し、ムービー毎に回答させるようにした。回答はムービーが実際に動いているのを見ながらでないと、しにくいため、各ムービーは回答中エンドレスで流れるようにした。なお、実験操作のデブリーフィングとして、回答が完了した時点で、”実はこれは、気体液体分子運動のシミュレーションムービーでした。‟という断り書きを画面上に呈示した。

結果
気体液体分子運動パターンが、人の性格としてそれぞれ能動的および受動的と感じられた度合いの評定値の平均値と標準偏差はTable1に示した通りである。

見せたムービーの種類別に、能動的、受動的、に感じた度合いの違いを見るため、対応ありの平均値の差のt検定（両側）を行った。(n=200)結果はTable2の通りである。

液体の分子運動を見たとき、能動的、受動的、と感じる度合いについては、受動的、と感じる度合いの数値が、格差を容認する、と感じる度合いよりも、有意に高かった。(t(199)=9.58,p<.01)

気体の分子運動を見たとき、能動的、受動的、と感じる度合いについては、能動的、と感じる度合いの数値が、受動的、と感じる度合いよりも、有意に高かった。(t(199)=8.44,p<.01)

液体と気体とではどちらを、より能動的と感じるかについては、気体分子運動パターンを能動的、と感じる度合いが、液体分子運動パターンを能動的、と感じる度合いよりも、有意に高かった。(t(199)=11.25,p<.01)

液体と気体とではどちらを、より受動的と感じるかについては、液体分子運動パターンを受動的に感じる度合いが、気体分子運動パターンを受動的に感じる度合いよりも、有意に高かった。(t(199)=9.72,p<.01)

考察

以上の結果により、気体分子運動のシミュレーションを人に見立てて観察させると、能動的性格と認知され、一方、液体分子運動は、受動的性格と認知されることが、分かった。気体分子運動パターンと同様に振る舞う人のパーソナリティは、能動的なように、液体分子運動パターンと同様に振る舞う人では、受動的なように感じられる、と考えられる。

図表

Figure.1 気体液体分子運動パターン分子運動シミュレーションムービー（研究参加者に見せたもの）

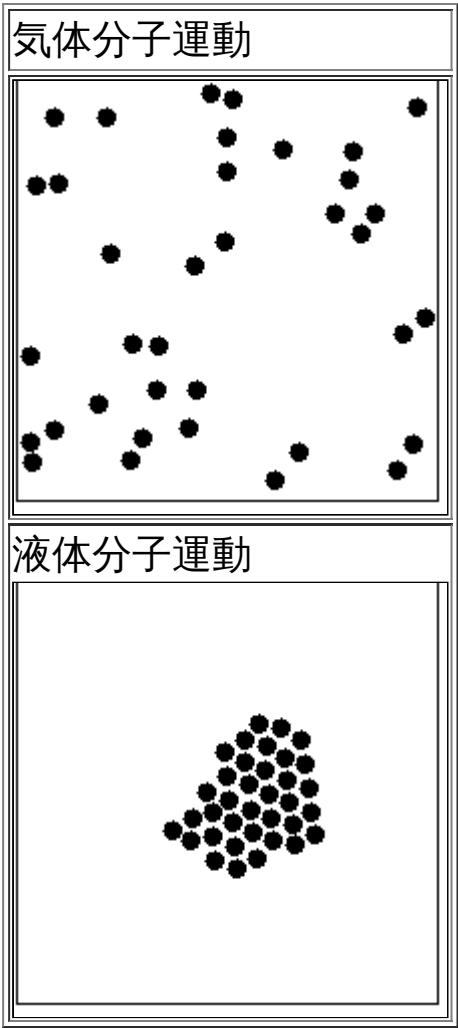



Table.1 気体液体分子運動ムービーへの能動的・受動的評価値の平均値と標準偏差（かっこ内）

刺激種類	能動的	受動的
液体分子運動	0.88 (1.17)	2.21 (1.41)

気体分子運動	2.22 (1.40)	1.00 (1.27)

n=200

Table.2 条件間の平均値の差の比較結果（対応あり）

比較対象	t検定
液体 受動的－液体 能動的	t(199)=9.58**
気体 能動的－気体 受動的	t(199)=8.44**
気体 能動的－液体 能動的	t(199)=11.25**
液体 受動的－気体 受動的	t(199)=9.72**

**p<.01,*p<.05

プライバシーがあるパーソナリティの認知

2012.07初出

プライバシーがあるパーソナリティと、気体液体分子運動パターンとの関係について、詳しく説明しています。プライバシーがあるパーソナリティと気体分子運動が、相関します。

要約
人間の、プライバシーがあるパーソナリティの認知と、物質の気体と液体の人間に与える感覚との間の関連を明らかにするため、webでの調査を行った。気体液体

分子運動パターンをコンピュータシミュレートした2つのムービーを研究参加者200名に対して見せて、各ムービーで、粒子の動きが個人の対人行動として、どの程度、プライバシーがあるよう、に感じられるかを、評価してもらった。その結果、気体分子運動パターンの方が、液体分子運動よりも、人々の動きとしてよりプライバシーがあるように感じられることが分かった。

課題
実際に研究参加者に気体と液体の分子運動シミュレーションムービーを見せて、各分子の動きを人の動きと見立てた場合、それぞれどの程度、プライバシーがあるように感じるか調べることにした。

方法

[データ収集方法] インターネットのwebサイトで回答を収集した。回答のカウントに当たっては、同じ研究参加者が複数回回答する可能性に対応するため、回答時に同一のIPアドレスの持ち主は同一の回答者であると見なし、同一のIPアドレスの複数回答は最新の1個の回答のみを有効と見なすとともに、cookieを利用して、複数回の回答を受付けないように設定した。

[研究対象者] 回答を得た研究参加者の総数は200名（男性105名、女性95名）であった。性別情報は、回答時に性別選択欄をwebページにラジオボタンで設け、選択入力してもらうことで得た。
[調査時期] 調査時期は、2007年9月15日から10月09日の24日間であった。

[刺激映像] 刺激は、Ar(アルゴン)の分子運動パターンをシミュレートするJavaプログラムを、池内満(2002)のwebサイトより入手し、液体と気体それぞれの分子運動を最も明確に示すように、絶対温度20度(液体)と300度

(気体)のそれぞれの分子運動を表すように調整した。プログラムが表示した気体液体各分子運動のムービーを、パソコン上でキャプチャし、各々30秒間のWindowsMediaVideo形式のムービーに加工して、webサイト上で研究参加者のパソコンから再生可能とした。各ムービーの静止画は、Figure1の通りである。

[質問項目] 上記各ムービーについて”これは、人々の動きを早送りで再生したものです。一つ一つの粒々が一人一人の人間を表しています。このムービーにおける人々の性格が、どの程度、プライバシーがあるようにに感じられるか5段階評価して下さい。‟として回答させた。段階は、”感じない(0)‟から”とても感じる(4)‟の5段階とした。

[手続き] 各ムービーは、一度に1個ずつ、順番をランダムにして呈示し、ムービー毎に回答させるようにした。回答はムービーが実際に動いているのを見ながらでないと、しにくいため、各ムービーは回答中エンドレスで流れるようにした。なお、実験操作のデブリーフィングとして、回答が完了した時点で、”実はこれは、気体液体分子運動のシミュレーションムービーでした。‟という断り書きを画面上に呈示した。

結果

気体液体分子運動パターンが、人の性格としてプライバシーがあるように感じられた度合いの評定値の平均値と標準偏差はTable1に示した通りである。

見せたムービーの種類別に、プライバシーがあるよう、に感じた度合いの違いを見るため、対応ありの平均値の差のt検定（両側）を行った。(n=200)結果はTable2の通りである。

液体と気体とではどちらを、よりプライバシーがあると感じるかについては、気体分子運動パターンをプラ

イバシーがある、と感じる度合いが、液体分子運動パターンをプライバシーがある、と感じる度合いよりも、有意に高かった。$(t(199)=6.63,p<.01)$

考察

以上の結果により、気体分子運動のシミュレーションを人に見立てて観察させると、液体分子運動の場合よりも、よりプライバシーがある性格と認知されることが、分かった。気体分子運動パターンと同様に振る舞う人のパーソナリティの方が、液体分子運動パターンと同様に振る舞う人の場合よりも、よりプライバシーがあるように感じられる、と考えられる。

図表

Figure.1 気体液体分子運動パターン分子運動シミュレーションムービー（研究参加者に見せたもの）

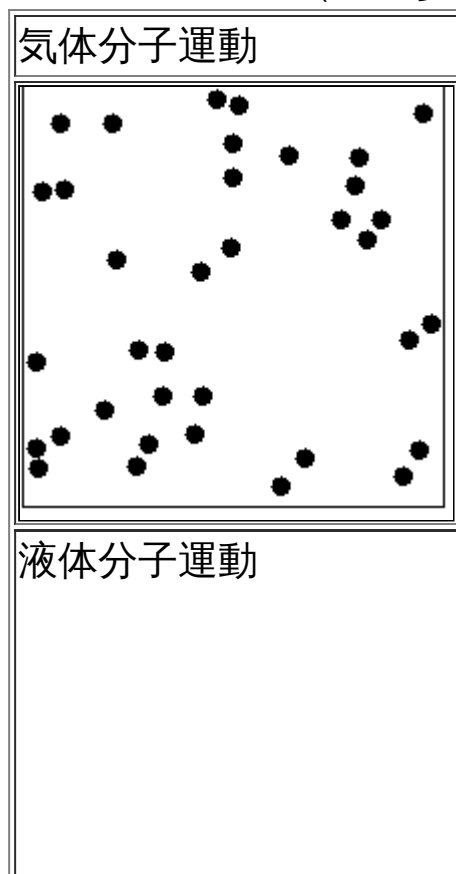
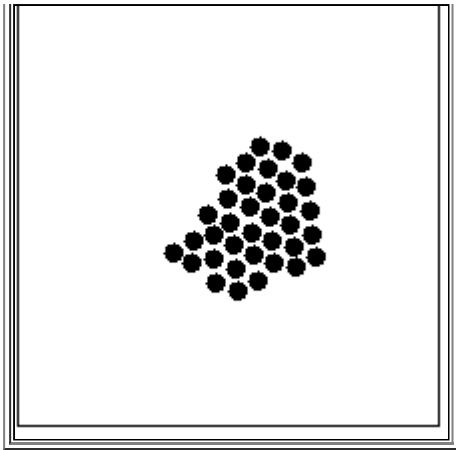



Table.1 気体液体分子運動ムービーへのプライバシーがある評価値の平均値と標準偏差（かっこ内）

刺激種類	プライバシーがある
液体分子運動	0.54 (0.96)
気体分子運動	1.24 (1.33)

n=200

Table.2 条件間の平均値の差の比較結果（対応あり）

比較対象	t検定
気体 プライバシーがある－液体 プライバシーがある	t(199)=6.63**

**p<.01,*p<.05

媚びるパーソナリティの認知

2012.07初出

媚びるパーソナリティと、気体液体分子運動パターンとの関係について、詳しく説明しています。媚びるパーソナリティと液体分子運動が、相関します。

要約
人間の、媚びるパーソナリティの認知と、物質の気体と液体の人間に与える感覚との間の関連を明らかにするため、webでの調査を行った。気体液体分子運動パターンをコンピュータシミュレートした2つのムービーを研究参加者200名に対して見せて、各ムービーで、粒子の動きが個人の対人行動として、どの程度、媚びるよう、に感じられるかを、評価してもらった。その結果、液体分子運動パターンの方が、気体分子運動よりも、人々の動きとしてより媚びるように感じられることが分かった。

課題
実際に研究参加者に気体と液体の分子運動シミュレーションムービーを見せて、各分子の動きを人の動きと見立てた場合、それぞれどの程度、媚びるように感じるか調べることにした。

方法

[データ収集方法] インターネットのwebサイトで回答を

収集した。回答のカウントに当たっては、同じ研究参加者が複数回回答する可能性に対応するため、回答時に同一のIPアドレスの持ち主は同一の回答者であると見なし、同一のIPアドレスの複数回答は最新の1個の回答のみを有効と見なすとともに、cookieを利用して、複数回の回答を受付けないように設定した。

[研究対象者] 回答を得た研究参加者の総数は200名（男性105名、女性95名）であった。性別情報は、回答時に性別選択欄をwebページにラジオボタンで設け、選択入力してもらうことで得た。
[調査時期] 調査時期は、2007年9月15日から10月09日の24日間であった。

[刺激映像] 刺激は、Ar(アルゴン)の分子運動パターンをシミュレートするJavaプログラムを、池内満(2002)のwebサイトより入手し、液体と気体それぞれの分子運動を最も明確に示すように、絶対温度20度(液体)と300度(気体)のそれぞれの分子運動を表すように調整した。プログラムが表示した気体液体各分子運動のムービーを、パソコン上でキャプチャし、各々30秒間のWindowsMediaVideo形式のムービーに加工して、webサイト上で研究参加者のパソコンから再生可能とした。各ムービーの静止画は、Figure1の通りである。

[質問項目] 上記各ムービーについて”これは、人々の動きを早送りで再生したものです。一つ一つの粒々が一人一人の人間を表しています。このムービーにおける人々の性格が、どの程度、媚びるようにに感じられるか5段階評価して下さい。‟として回答させた。段階は、”感じない(0)‟から”とても感じる(4)‟の5段階とした。

[手続き] 各ムービーは、一度に1個ずつ、順番をランダムにして呈示し、ムービー毎に回答させるようにし

た。回答はムービーが実際に動いているのを見ながらでないと、しにくいため、各ムービーは回答中エンドレスで流れるようにした。なお、実験操作のデブリーフィングとして、回答が完了した時点で、”実はこれは、気体液体分子運動のシミュレーションムービーでした。‟という断り書きを画面上に呈示した。

結果
気体液体分子運動パターンが、人の性格として媚びるように感じられた度合いの評定値の平均値と標準偏差はTable1に示した通りである。
見せたムービーの種類別に、媚びるよう、に感じた度合いの違いを見るため、対応ありの平均値の差のt検定（両側）を行った。(n=200)結果はTable2の通りである。
液体と気体とではどちらを、より媚びるように感じるかについては、液体分子運動パターンを媚びる、と感じる度合いが、気体分子運動パターンを媚びる、と感じる度合いよりも、有意に高かった。(t(199)=8.95,p<.01)

考察
以上の結果により、液体分子運動のシミュレーションを人に見立てて観察させると、気体分子運動の場合よりも、より媚びる性格と認知されることが、分かった。液体分子運動パターンと同様に振る舞う人のパーソナリティの方が、気体分子運動パターンと同様に振る舞う人の場合よりも、より媚びるように感じられる、と考えられる。

図表

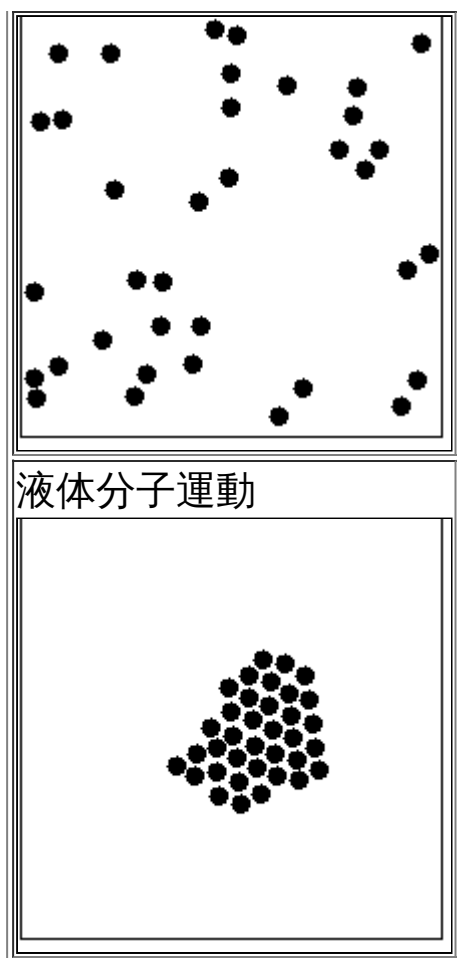
Figure.1 気体液体分子運動パターン分子運動シミュレーションムービー（研究参加者に見せたもの）

気体分子運動

Table.1 気体液体分子運動ムービーへの媚びる評価値の平均値と標準偏差（かっこ内）

刺激種類	媚びる
液体分子運動	1.76 (1.46)
気体分子運動	0.69 (1.10)

n=200

Table.2 条件間の平均値の差の比較結果（対応あり）

比較対象	t検定
気体 媚びる－液体 媚びる	t(199)=8.95**

**p<.01,*p<.05

かわいいパーソナリティの認知

2012.07初出

かわいいパーソナリティと、気体液体分子運動パターンとの関係について、詳しく説明しています。かわいいパーソナリティと液体分子運動が、相関します。

要約
人間の、かわいいパーソナリティの認知と、物質の気体と液体の人間に与える感覚との間の関連を明らかにするため、webでの調査を行った。気体液体分子運動パターンをコンピュータシミュレートした2つのムービーを研究参加者200名に対して見せて、各ムービーで、粒子の動きが個人の対人行動として、どの程度、かわいく感じられるかを評価してもらった。その結果、液体分子運動パターンの方が、気体分子運動よりも、人々の動きとしてよりかわいく感じられることが分かった。

課題
実際に研究参加者に気体と液体の分子運動シミュレー

ションムービーを見せて、各分子の動きを人の動きと見立てた場合、それぞれどの程度、かわいく感じるか調べることにした。

方法

[データ収集方法] インターネットのwebサイトで回答を収集した。回答のカウントに当たっては、同じ研究参加者が複数回回答する可能性に対応するため、回答時に同一のIPアドレスの持ち主は同一の回答者であると見なし、同一のIPアドレスの複数回答は最新の1個の回答のみを有効と見なすとともに、cookieを利用して、複数回の回答を受付けないように設定した。

[研究対象者] 回答を得た研究参加者の総数は200名（男性105名、女性95名）であった。性別情報は、回答時に性別選択欄をwebページにラジオボタンで設け、選択入力してもらうことで得た。
[調査時期] 調査時期は、2007年9月15日から10月09日の24日間であった。

[刺激映像] 刺激は、Ar(アルゴン)の分子運動パターンをシミュレートするJavaプログラムを、池内満(2002)のwebサイトより入手し、液体と気体それぞれの分子運動を最も明確に示すように、絶対温度20度(液体)と300度(気体)のそれぞれの分子運動を表すように調整した。プログラムが表示した気体液体各分子運動のムービーを、パソコン上でキャプチャし、各々30秒間のWindowsMediaVideo形式のムービーに加工して、webサイト上で研究参加者のパソコンから再生可能とした。各ムービーの静止画は、Figure1の通りである。

[質問項目] 上記各ムービーについて”これは、人々の動きを早送りで再生したものです。一つ一つの粒々が一人一人の人間を表しています。このムービーにおける

人々の性格が、どの程度、かわいく感じられるか5段階評価して下さい。‟として回答させた。段階は、”感じない(0)‟から”とても感じる(4)‟の5段階とした。

[手続き] 各ムービーは、一度に1個ずつ、順番をランダムにして呈示し、ムービー毎に回答させるようにした。回答はムービーが実際に動いているのを見ながらでないと、しにくいため、各ムービーは回答中エンドレスで流れるようにした。なお、実験操作のデブリーフィングとして、回答が完了した時点で、”実はこれは、気体液体分子運動のシミュレーションムービーでした。‟という断り書きを画面上に呈示した。

結果
気体液体分子運動パターンが、人の性格としてかわいく感じられた度合いの評定値の平均値と標準偏差はTable1に示した通りである。
見せたムービーの種類別に、かわいく感じた度合いの違いを見るため、対応ありの平均値の差のt検定（両側）を行った。(n=200)結果はTable2の通りである。
液体と気体とではどちらを、よりかわいく感じるかについては、液体分子運動パターンをかわいい、と感じる度合いが、気体分子運動パターンをかわいい、と感じる度合いよりも、有意に高かった。$(t(199)=2.14, p<.05)$

考察
以上の結果により、液体分子運動のシミュレーションを人に見立てて観察させると、気体分子運動の場合よりも、よりかわいい性格と認知されることが、分かった。液体分子運動パターンと同様に振る舞う人のパーソナリティの方が、気体分子運動パターンと同様に振る舞う人の場合よりも、よりかわいく感じられる、と考えられる。

図表

Figure.1 気体液体分子運動パターン分子運動シミュレーションムービー（研究参加者に見せたもの）

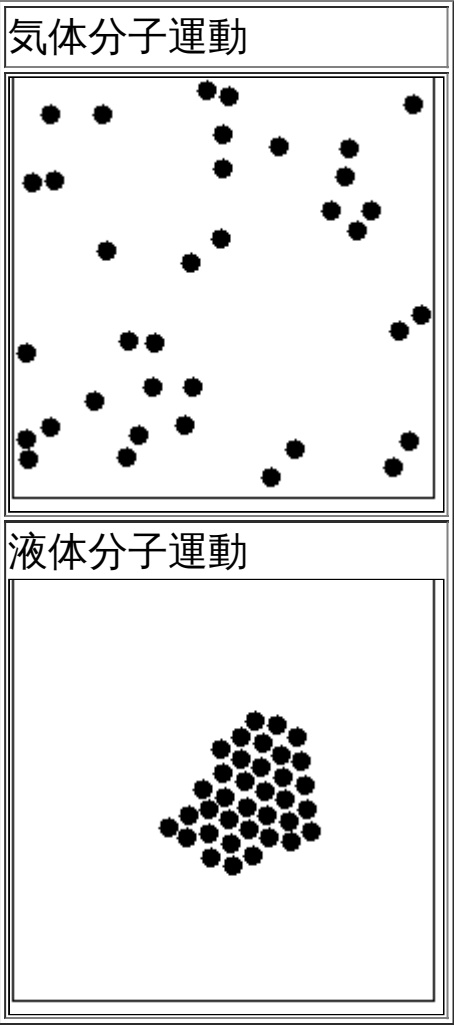



Table.1 気体液体分子運動ムービーへのかわいい評価値の平均値と標準偏差（かっこ内）

刺激種類	かわいく
液体分子運動	0.85 (1.22)

気体分子運動	0.66 (1.08)

n=200

Table.2 条件間の平均値の差の比較結果（対応あり）

比較対象	t検定
気体 かわいい－液体 かわいい	t(199)=2.14*

**p<.01,*p<.05

探検を好むパーソナリティの認知

2012.07初出

探検を好むパーソナリティと、気体液体分子運動パターンとの関係について、詳しく説明しています。探検を好むパーソナリティと気体分子運動が、相関します。

要約
人間の、探検を好むパーソナリティの認知と、物質の気体と液体の人間に与える感覚との間の関連を明らかにするため、webでの調査を行った。気体液体分子運動パターンをコンピュータシミュレートした2つのムービーを研究参加者200名に対して見せて、各ムービーで、粒子の動きが個人の対人行動として、どの程度、探

検を好むよう、に感じられるかを、評価してもらった。その結果、気体分子運動パターンの方が、液体分子運動よりも、人々の動きとしてより探検を好むように感じられることが分かった。

課題
実際に研究参加者に気体と液体の分子運動シミュレーションムービーを見せて、各分子の動きを人の動きと見立てた場合、それぞれどの程度、探検を好むように感じるか調べることにした。

方法

[データ収集方法] インターネットのwebサイトで回答を収集した。回答のカウントに当たっては、同じ研究参加者が複数回回答する可能性に対応するため、回答時に同一のIPアドレスの持ち主は同一の回答者であると見なし、同一のIPアドレスの複数回答は最新の1個の回答のみを有効と見なすとともに、cookieを利用して、複数回の回答を受付けないように設定した。

[研究対象者] 回答を得た研究参加者の総数は200名（男性105名、女性95名）であった。性別情報は、回答時に性別選択欄をwebページにラジオボタンで設け、選択入力してもらうことで得た。
[調査時期] 調査時期は、2007年9月15日から10月09日の24日間であった。

[刺激映像] 刺激は、Ar(アルゴン)の分子運動パターンをシミュレートするJavaプログラムを、池内満(2002)のwebサイトより入手し、液体と気体それぞれの分子運動を最も明確に示すように、絶対温度20度(液体)と300度(気体)のそれぞれの分子運動を表すように調整した。プログラムが表示した気体液体各分子運動のムービーを、パソコン上でキャプチャし、各々30秒間の

WindowsMediaVideo形式のムービーに加工して、webサイト上で研究参加者のパソコンから再生可能とした。
各ムービーの静止画は、Figure1の通りである。

[質問項目] 上記各ムービーについて”これは、人々の動きを早送りで再生したものです。一つ一つの粒々が一人一人の人間を表しています。このムービーにおける人々の性格が、どの程度、探検を好むようにに感じられるか5段階評価して下さい。‶として回答させた。段階は、”感じない(0)‶から”とても感じる(4)‶の5段階とした。

[手続き] 各ムービーは、一度に1個ずつ、順番をランダムにして呈示し、ムービー毎に回答させるようにした。回答はムービーが実際に動いているのを見ながらでないと、しにくいため、各ムービーは回答中エンドレスで流れるようにした。なお、実験操作のデブリーフィングとして、回答が完了した時点で、”実はこれは、気体液体分子運動のシミュレーションムービーでした。‶という断り書きを画面上に呈示した。

結果
気体液体分子運動パターンが、人の性格として探検を好むように感じられた度合いの評定値の平均値と標準偏差はTable1に示した通りである。
見せたムービーの種類別に、探検を好むよう、に感じた度合いの違いを見るため、対応ありの平均値の差のt検定（両側）を行った。(n=200)結果はTable2の通りである。
液体と気体とではどちらを、より探検を好むと感じるかについては、気体分子運動パターンを探検を好む、と感じる度合いが、液体分子運動パターンを探検を好む、と感じる度合いよりも、有意に高かった。
$(t(199)=13.58, p<.01)$

考察

以上の結果により、気体分子運動のシミュレーションを人に見立てて観察させると、液体分子運動の場合よりも、より探検を好む性格と認知されることが、分かった。気体分子運動パターンと同様に振る舞う人のパーソナリティの方が、液体分子運動パターンと同様に振る舞う人の場合よりも、より探検を好むように感じられる、と考えられる。

図表

Figure.1 気体液体分子運動パターン分子運動シミュレーションムービー（研究参加者に見せたもの）

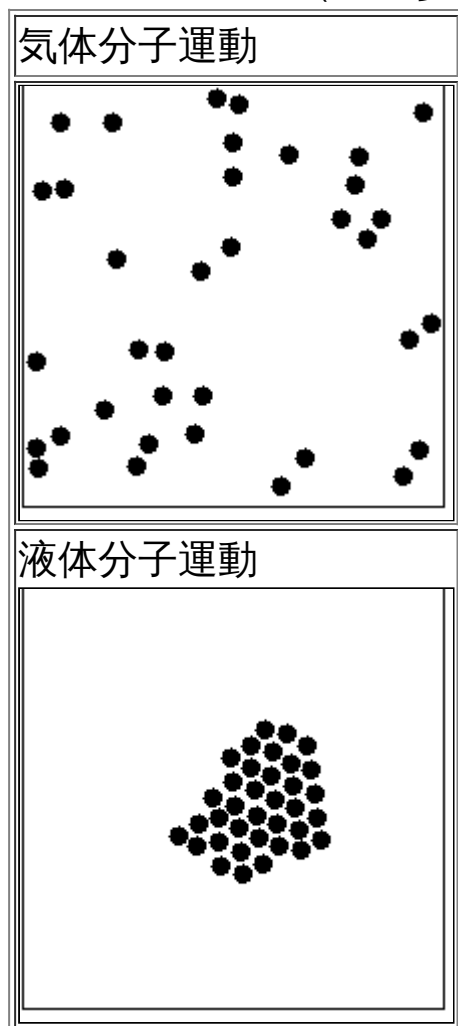



Table.1 気体液体分子運動ムービーへの探検を好む評価値の平均値と標準偏差（かっこ内）

刺激種類	探検を好む
液体分子運動	0.53 (0.98)
気体分子運動	2.14 (1.47)

n=200

Table.2 条件間の平均値の差の比較結果（対応あり）

比較対象	t検定
気体 探検を好む－液体 探検を好む	t(199)=13.58**

**p<.01,*p<.05

自主性があるパーソナリティの認知

2012.07初出

自主性があるパーソナリティと、気体液体分子運動パターンとの関係について、詳しく説明しています。自主性があるパーソナリティと気体分子運動が、相関します。

要約
人間の、自主性があるパーソナリティの認知と、物質の気体と液体の人間に与える感覚との間の関連を明らかにするため、webでの調査を行った。気体液体分子運動パターンをコンピュータシミュレートした2つのムービーを研究参加者200名に対して見せて、各ムービーで、粒子の動きが個人の対人行動として、どの程度、自主性があるよう、に感じられるかを、評価してもらった。その結果、気体分子運動パターンの方が、液体分子運動よりも、人々の動きとしてより自主性があるように感じられることが分かった。

課題
実際に研究参加者に気体と液体の分子運動シミュレーションムービーを見せて、各分子の動きを人の動きと見立てた場合、それぞれどの程度、自主性があるように感じるか調べることにした。

方法

[データ収集方法] インターネットのwebサイトで回答を収集した。回答のカウントに当たっては、同じ研究参加者が複数回回答する可能性に対応するため、回答時に同一のIPアドレスの持ち主は同一の回答者であると見なし、同一のIPアドレスの複数回答は最新の1個の回答のみを有効と見なすとともに、cookieを利用して、複数回

の回答を受付けないように設定した。

[研究対象者] 回答を得た研究参加者の総数は200名（男性105名、女性95名）であった。性別情報は、回答時に性別選択欄をwebページにラジオボタンで設け、選択入力してもらうことで得た。
[調査時期] 調査時期は、2007年9月15日から10月09日の24日間であった。

[刺激映像] 刺激は、Ar(アルゴン)の分子運動パターンをシミュレートするJavaプログラムを、池内満(2002)のwebサイトより入手し、液体と気体それぞれの分子運動を最も明確に示すように、絶対温度20度(液体)と300度(気体)のそれぞれの分子運動を表すように調整した。プログラムが表示した気体液体各分子運動のムービーを、パソコン上でキャプチャし、各々30秒間のWindowsMediaVideo形式のムービーに加工して、webサイト上で研究参加者のパソコンから再生可能とした。各ムービーの静止画は、Figure1の通りである。

[質問項目] 上記各ムービーについて”これは、人々の動きを早送りで再生したものです。一つ一つの粒々が一人一人の人間を表しています。このムービーにおける人々の性格が、どの程度、自主性があるようにに感じられるか5段階評価して下さい。‟として回答させた。段階は、”感じない(0)‟から”とても感じる(4)‟の5段階とした。

[手続き] 各ムービーは、一度に1個ずつ、順番をランダムにして呈示し、ムービー毎に回答させるようにした。回答はムービーが実際に動いているのを見ながらでないと、しにくいため、各ムービーは回答中エンドレスで流れるようにした。なお、実験操作のデブリーフィングとして、回答が完了した時点で、”実はこれは、気体液体分子運動のシミュレーションムービーで

した。"という断り書きを画面上に呈示した。

結果
気体液体分子運動パターンが、人の性格として自主性があるように感じられた度合いの評定値の平均値と標準偏差はTable1に示した通りである。
見せたムービーの種類別に、自主性があるよう、に感じた度合いの違いを見るため、対応ありの平均値の差のt検定（両側）を行った。(n=200)結果はTable2の通りである。
液体と気体とではどちらを、より自主性があると感じるかについては、気体分子運動パターンを自主性がある、と感じる度合いが、液体分子運動パターンを自主性がある、と感じる度合いよりも、有意に高かった。(t(199)=14.06,p<.01)

考察
以上の結果により、気体分子運動のシミュレーションを人に見立てて観察させると、液体分子運動の場合よりも、より自主性がある性格と認知されることが、分かった。気体分子運動パターンと同様に振る舞う人のパーソナリティの方が、液体分子運動パターンと同様に振る舞う人の場合よりも、より自主性があるように感じられる、と考えられる。

図表

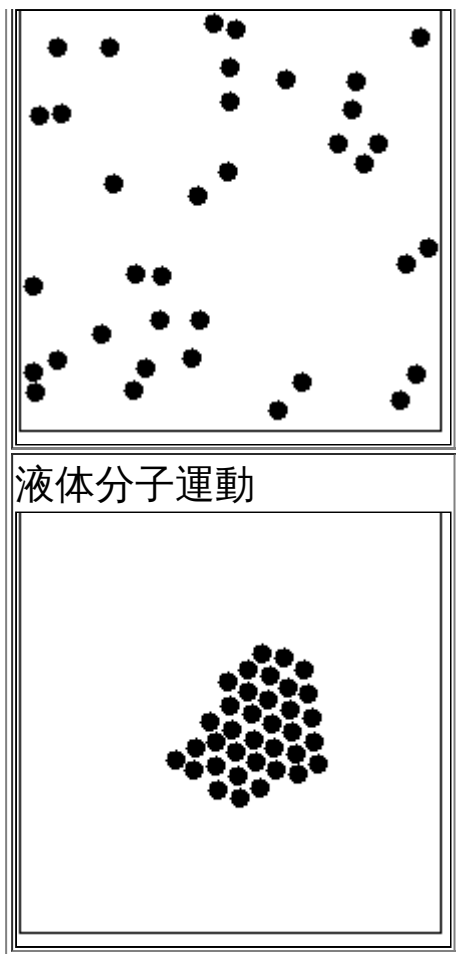
Figure.1 気体液体分子運動パターン分子運動シミュレーションムービー（研究参加者に見せたもの）

気体分子運動

Table.1 気体液体分子運動ムービーへの自主性がある評価値の平均値と標準偏差（かっこ内）

刺激種類	自主性がある
液体分子運動	0.49 (0.96)
気体分子運動	2.00 (1.45)

n=200

Table.2 条件間の平均値の差の比較結果（対応あり）

比較対象	t検定
気体 自主性がある－液体 自主性がある	t(199)=14.06**

**p<.01,*p<.05

個人の能力を重視する能力主義パーソナリティの認知

2012.07初出

個人の能力を重視する能力主義パーソナリティと、気体液体分子運動パターンとの関係について、詳しく説明しています。個人の能力を重視する能力主義パーソナリティと気体分子運動が、相関します。

要約
人間の、個人の能力を重視する能力主義パーソナリティの認知と、物質の気体と液体の人間に与える感覚との間の関連を明らかにするため、webでの調査を行った。気体液体分子運動パターンをコンピュータシミュレートした2つのムービーを研究参加者200名に対して見せて、各ムービーで、粒子の動きが個人の対人行動として、どの程度、個人の能力を重視するよう、に感じられるかを、評価してもらった。その結果、気体分子

運動パターンの方が、液体分子運動よりも、人々の動きとしてより個人の能力を重視するように感じられることが分かった。

課題
実際に研究参加者に気体と液体の分子運動シミュレーションムービーを見せて、各分子の動きを人の動きと見立てた場合、それぞれどの程度、個人の能力を重視するように感じるか調べることにした。

方法

[データ収集方法] インターネットのwebサイトで回答を収集した。回答のカウントに当たっては、同じ研究参加者が複数回回答する可能性に対応するため、回答時に同一のIPアドレスの持ち主は同一の回答者であると見なし、同一のIPアドレスの複数回答は最新の1個の回答のみを有効と見なすとともに、cookieを利用して、複数回の回答を受付けないように設定した。

[研究対象者] 回答を得た研究参加者の総数は200名（男性105名、女性95名）であった。性別情報は、回答時に性別選択欄をwebページにラジオボタンで設け、選択入力してもらうことで得た。
[調査時期] 調査時期は、2007年9月15日から10月09日の24日間であった。

[刺激映像] 刺激は、Ar(アルゴン)の分子運動パターンをシミュレートするJavaプログラムを、池内満(2002)のwebサイトより入手し、液体と気体それぞれの分子運動を最も明確に示すように、絶対温度20度(液体)と300度(気体)のそれぞれの分子運動を表すように調整した。プログラムが表示した気体液体各分子運動のムービーを、パソコン上でキャプチャし、各々30秒間のWindowsMediaVideo形式のムービーに加工して、webサ

イト上で研究参加者のパソコンから再生可能とした。
各ムービーの静止画は、Figure1の通りである。

[質問項目] 上記各ムービーについて”これは、人々の動きを早送りで再生したものです。一つ一つの粒々が一人一人の人間を表しています。このムービーにおける人々の性格が、どの程度、個人の能力を重視するようにに感じられるか5段階評価して下さい。‟として回答させた。段階は、”感じない(0)‟から”とても感じる(4)‟の5段階とした。

[手続き] 各ムービーは、一度に1個ずつ、順番をランダムにして呈示し、ムービー毎に回答させるようにした。回答はムービーが実際に動いているのを見ながらでないと、しにくいため、各ムービーは回答中エンドレスで流れるようにした。なお、実験操作のデブリーフィングとして、回答が完了した時点で、”実はこれは、気体液体分子運動のシミュレーションムービーでした。‟という断り書きを画面上に呈示した。

結果
気体液体分子運動パターンが、人の性格として個人の能力を重視するように感じられた度合いの評定値の平均値と標準偏差はTable1に示した通りである。
見せたムービーの種類別に、個人の能力を重視するよう、に感じた度合いの違いを見るため、対応ありの平均値の差のt検定（両側）を行った。(n=200)結果はTable2の通りである。
液体と気体とではどちらを、より個人の能力を重視すると感じるかについては、気体分子運動パターンを個人の能力を重視する、と感じる度合いが、液体分子運動パターンを個人の能力を重視する、と感じる度合いよりも、有意に高かった。(t(199)=12.31,p<.01)

考察

以上の結果により、気体分子運動のシミュレーション を人に見立てて観察させると、液体分子運動の場合よりも、より個人の能力を重視する能力主義の性格と認知されることが、分かった。気体分子運動パターンと同様に振る舞う人のパーソナリティの方が、液体分子運動パターンと同様に振る舞う人の場合よりも、より個人の能力を重視するように感じられる、と考えられる。

図表

Figure.1 気体液体分子運動パターン分子運動シミュレーションムービー（研究参加者に見せたもの）

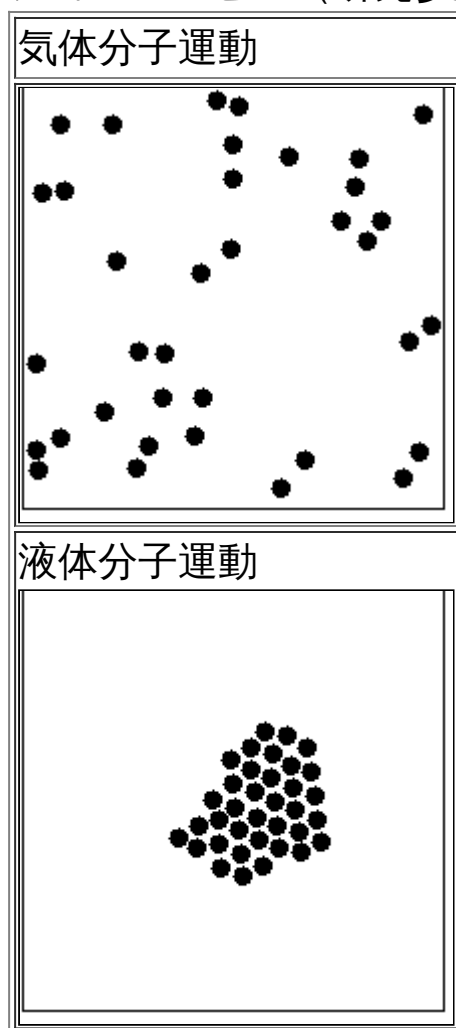



Table.1 気体液体分子運動ムービーへの個人の能力を重視する評価値の平均値と標準偏差（かっこ内）

刺激種類	個人の能力を重視する
液体分子運動	0.48 (0.91)
気体分子運動	1.84 (1.46)

n=200

Table.2 条件間の平均値の差の比較結果（対応あり）

比較対象	t検定
気体 個人の能力を重視する－液体 個人の能力を重視する	t(199)=12.31**

**p<.01,*p<.05

個性的パーソナリティの認知

2012.07初出

個性的 パーソナリティと、気体液体分子運動パターンとの関係について、詳しく説明しています。個性的パーソナリティと気体分子運動が、相関します。

要約
人間の、個性的パーソナリティの認知と、物質の気体と液体の人間に与える感覚との間の関連を明らかにするため、webでの調査を行った。気体液体分子運動パターンをコンピュータシミュレートした2つのムービーを研究参加者200名に対して見せて、各ムービーで、粒子の動きが個人の対人行動として、どの程度、個性的、に感じられるかを、評価してもらった。その結果、気体分子運動パターンの方が、液体分子運動よりも、人々の動きとしてより個性的に感じられることが分かった。

課題
実際に研究参加者に気体と液体の分子運動シミュレーションムービーを見せて、各分子の動きを人の動きと見立てた場合、それぞれどの程度、個性的に感じるか調べることにした。

方法

[データ収集方法] インターネットのwebサイトで回答を収集した。回答のカウントに当たっては、同じ研究参加者が複数回回答する可能性に対応するため、回答時に

同一のIPアドレスの持ち主は同一の回答者であると見なし、同一のIPアドレスの複数回答は最新の1個の回答のみを有効と見なすとともに、cookieを利用して、複数回の回答を受付けないように設定した。

[研究対象者] 回答を得た研究参加者の総数は200名（男性105名、女性95名）であった。性別情報は、回答時に性別選択欄をwebページにラジオボタンで設け、選択入力してもらうことで得た。
[調査時期] 調査時期は、2007年9月15日から10月09日の24日間であった。

[刺激映像] 刺激は、Ar(アルゴン)の分子運動パターンをシミュレートするJavaプログラムを、池内満(2002)のwebサイトより入手し、液体と気体それぞれの分子運動を最も明確に示すように、絶対温度20度(液体)と300度(気体)のそれぞれの分子運動を表すように調整した。プログラムが表示した気体液体各分子運動のムービーを、パソコン上でキャプチャし、各々30秒間のWindowsMediaVideo形式のムービーに加工して、webサイト上で研究参加者のパソコンから再生可能とした。各ムービーの静止画は、Figure1の通りである。

[質問項目] 上記各ムービーについて”これは、人々の動きを早送りで再生したものです。一つ一つの粒々が一人一人の人間を表しています。このムービーにおける人々の性格が、どの程度、個性的に感じられるか5段階評価して下さい。‟として回答させた。段階は、”感じない(0)‟から”とても感じる(4)‟の5段階とした。

[手続き] 各ムービーは、一度に1個ずつ、順番をランダムにして呈示し、ムービー毎に回答させるようにした。回答はムービーが実際に動いているのを見ながらでないと、しにくいため、各ムービーは回答中エンドレスで流れるようにした。なお、実験操作のデブリー

フィングとして、回答が完了した時点で、”実はこれは、気体液体分子運動のシミュレーションムービーでした。‟という断り書きを画面上に呈示した。

結果

気体液体分子運動パターンが、人の性格として個性的に感じられた度合いの評定値の平均値と標準偏差はTable1に示した通りである。
見せたムービーの種類別に、個性的、に感じた度合いの違いを見るため、対応ありの平均値の差のt検定（両側）を行った。($n=200$)結果はTable2の通りである。
液体と気体とではどちらを、より個性的と感じるかについては、気体分子運動パターンを個性的、と感じる度合いが、液体分子運動パターンを個性的、と感じる度合いよりも、有意に高かった。($t(199)=13.23,p<.01$)

考察

以上の結果により、気体分子運動のシミュレーションを人に見立てて観察させると、液体分子運動の場合よりも、より個性的性格と認知されることが、分かった。気体分子運動パターンと同様に振る舞う人のパーソナリティの方が、液体分子運動パターンと同様に振る舞う人の場合よりも、より個性的に感じられる、と考えられる。

図表

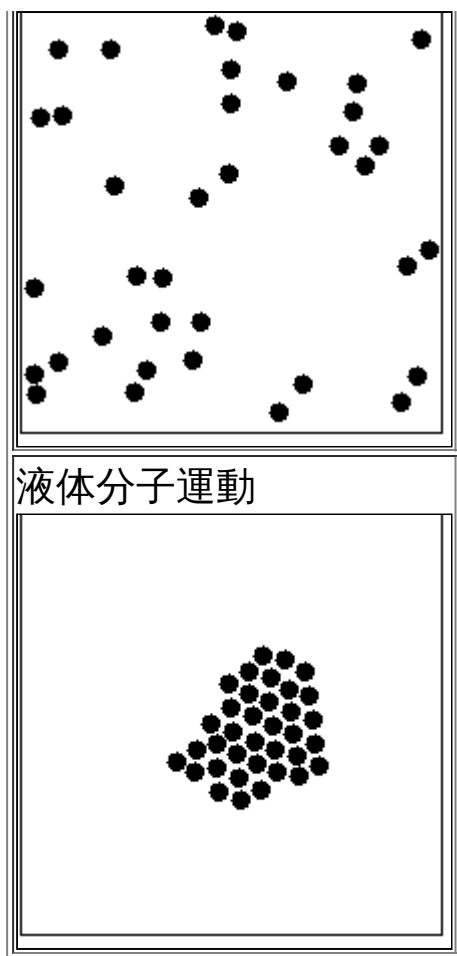
Figure.1 気体液体分子運動パターン分子運動シミュレーションムービー（研究参加者に見せたもの）

気体分子運動

Table.1 気体液体分子運動ムービーへの個性的評価値の平均値と標準偏差（かっこ内）

刺激種類	個性的
液体分子運動	0.46 (1.01)
気体分子運動	2.12 (1.52)

n=200

Table.2 条件間の平均値の差の比較結果（対応あり）

比較対象	t検定
気体 個性的－液体 個性的	t(199)=13.23**

**p<.01,*p<.05

機動性があるパーソナリティの認知

2012.07初出

機動性があるパーソナリティと、気体液体分子運動パターンとの関係について、詳しく説明しています。機動性があるパーソナリティと気体分子運動が、相関します。

要約
人間の、機動性があるパーソナリティの認知と、物質の気体と液体の人間に与える感覚との間の関連を明らかにするため、webでの調査を行った。気体液体分子運動パターンをコンピュータシミュレートした2つのムービーを研究参加者200名に対して見せて、各ムービーで、粒子の動きが個人の対人行動として、どの程度、機

動性があるよう、に感じられるかを、評価してもらった。その結果、気体分子運動パターンの方が、液体分子運動よりも、人々の動きとしてより機動性があるように感じられることが分かった。

課題
実際に研究参加者に気体と液体の分子運動シミュレーションムービーを見せて、各分子の動きを人の動きと見立てた場合、それぞれどの程度、機動性があるように感じるか調べることにした。

方法

[データ収集方法] インターネットのwebサイトで回答を収集した。回答のカウントに当たっては、同じ研究参加者が複数回回答する可能性に対応するため、回答時に同一のIPアドレスの持ち主は同一の回答者であると見なし、同一のIPアドレスの複数回答は最新の1個の回答のみを有効と見なすとともに、cookieを利用して、複数回の回答を受付けないように設定した。

[研究対象者] 回答を得た研究参加者の総数は200名（男性105名、女性95名）であった。性別情報は、回答時に性別選択欄をwebページにラジオボタンで設け、選択入力してもらうことで得た。
[調査時期] 調査時期は、2007年9月15日から10月09日の24日間であった。

[刺激映像] 刺激は、Ar(アルゴン)の分子運動パターンをシミュレートするJavaプログラムを、池内満(2002)のwebサイトより入手し、液体と気体それぞれの分子運動を最も明確に示すように、絶対温度20度(液体)と300度(気体)のそれぞれの分子運動を表すように調整した。プログラムが表示した気体液体各分子運動のムービーを、パソコン上でキャプチャし、各々30秒間の

WindowsMediaVideo形式のムービーに加工して、webサイト上で研究参加者のパソコンから再生可能とした。各ムービーの静止画は、Figure1の通りである。

[質問項目] 上記各ムービーについて”これは、人々の動きを早送りで再生したものです。一つ一つの粒々が一人一人の人間を表しています。このムービーにおける人々の性格が、どの程度、機動性があるようにに感じられるか5段階評価して下さい。‟として回答させた。段階は、”感じない(0)‟から”とても感じる(4)‟の5段階とした。

[手続き] 各ムービーは、一度に1個ずつ、順番をランダムにして呈示し、ムービー毎に回答させるようにした。回答はムービーが実際に動いているのを見ながらでないと、しにくいため、各ムービーは回答中エンドレスで流れるようにした。なお、実験操作のデブリーフィングとして、回答が完了した時点で、”実はこれは、気体液体分子運動のシミュレーションムービーでした。‟という断り書きを画面上に呈示した。

結果
気体液体分子運動パターンが、人の性格として機動性があるように感じられた度合いの評定値の平均値と標準偏差はTable1に示した通りである。
見せたムービーの種類別に、機動性があるよう、に感じた度合いの違いを見るため、対応ありの平均値の差のt検定（両側）を行った。(n=200)結果はTable2の通りである。
液体と気体とではどちらを、より機動性があると感じるかについては、気体分子運動パターンを機動性がある、と感じる度合いが、液体分子運動パターンを機動性がある、と感じる度合いよりも、有意に高かった。
($t(199)=14.77, p<.01$)

考察

以上の結果により、気体分子運動のシミュレーションを人に見立てて観察させると、液体分子運動の場合よりも、より機動性がある性格と認知されることが、分かった。気体分子運動パターンと同様に振る舞う人のパーソナリティの方が、液体分子運動パターンと同様に振る舞う人の場合よりも、より機動性があるように感じられる、と考えられる。

図表

Figure.1 気体液体分子運動パターン分子運動シミュレーションムービー（研究参加者に見せたもの）

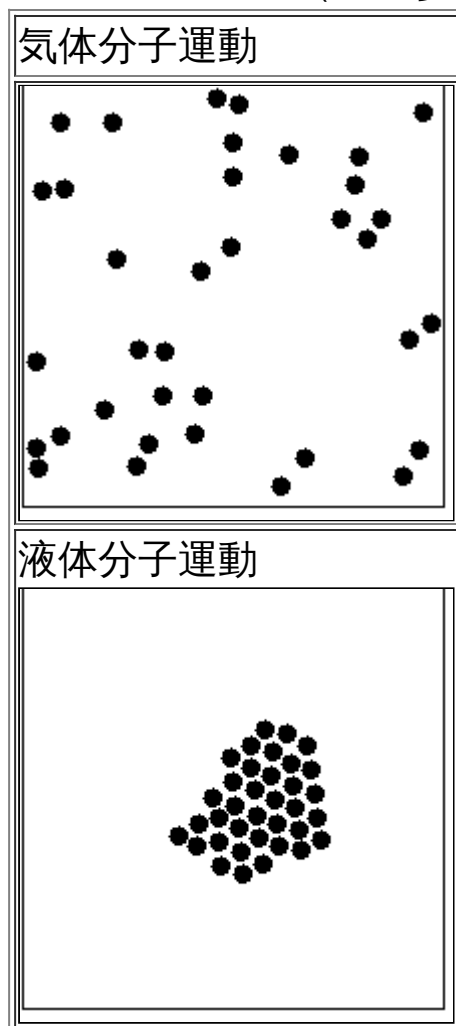



Table.1 気体液体分子運動ムービーへの機動性がある評価値の平均値と標準偏差（かっこ内）

刺激種類	機動性がある
液体分子運動	0.66 (0.97)
気体分子運動	2.32 (1.39)

n=200

Table.2 条件間の平均値の差の比較結果（対応あり）

比較対象	t検定
気体 機動性がある－液体 機動性がある	$t(199)=14.77^{**}$

$^{**}p<.01, ^{*}p<.05$

都市的、農村的パーソナリティの認知

2012.07初出

都市的、農村的パーソナリティと、気体液体分子運動パターンとの関係について、詳しく説明しています。都市的パーソナリティと気体分子運動、農村的パーソナリティと液体分子運動が、相関します。

要約
人間のパーソナリティ認知の、都市的、農村的と、物質の気体と液体の人間に与える感覚との間の関連を明らかにするため、webでの調査を行った。気体液体分子運動パターンをコンピュータシミュレートした2つのムービーを研究参加者200名に対して見せて、各ムービーで、粒子の動きが個人の対人行動として、どの程度、都市的、農村的、に感じられるかを、評価してもらった。その結果、気体分子運動パターンは人々の動きとして都市的、液体分子運動パターンは農村的、と感じられることが、分かった。

課題
実際に研究参加者に気体と液体の分子運動シミュレーションムービーを見せて、各分子の動きを人の動きと見立てた場合、それぞれどの程度、都市的、農村的、と感じるか、調べることにした。

方法

[データ収集方法] インターネットのwebサイトで回答を収集した。回答のカウントに当たっては、同じ研究参加者が複数回回答する可能性に対応するため、回答時に

同一のIPアドレスの持ち主は同一の回答者であると見なし、同一のIPアドレスの複数回答は最新の1個の回答のみを有効と見なすとともに、cookieを利用して、複数回の回答を受付けないように設定した。

[研究対象者] 回答を得た研究参加者の総数は200名（男性105名、女性95名）であった。性別情報は、回答時に性別選択欄をwebページにラジオボタンで設け、選択入力してもらうことで得た。
[調査時期] 調査時期は、2007年9月15日から10月09日の24日間であった。

[刺激映像] 刺激は、Ar(アルゴン)の分子運動パターンをシミュレートするJavaプログラムを、池内満(2002)のwebサイトより入手し、液体と気体それぞれの分子運動を最も明確に示すように、絶対温度20度(液体)と300度(気体)のそれぞれの分子運動を表すように調整した。プログラムが表示した気体液体各分子運動のムービーを、パソコン上でキャプチャし、各々30秒間のWindowsMediaVideo形式のムービーに加工して、webサイト上で研究参加者のパソコンから再生可能とした。各ムービーの静止画は、Figure1の通りである。

[質問項目] 上記各ムービーについて”これは、人々の動きを早送りで再生したものです。一つ一つの粒々が一人一人の人間を表しています。このムービーにおける人々の性格が、どの程度、都市的、農村的に感じられるか5段階評価して下さい。‟として、都市的、農村的、それぞれ別々に回答させた。段階は、”感じない(0)‟から”とても感じる(4)‟の5段階とした。

[手続き] 各ムービーは、一度に1個ずつ、順番をランダムにして呈示し、ムービー毎に回答させるようにした。回答はムービーが実際に動いているのを見ながらでないと、しにくいため、各ムービーは回答中エンド

レスで流れるようにした。なお、実験操作のデブリーフィングとして、回答が完了した時点で、”実はこれは、気体液体分子運動のシミュレーションムービーでした。‟という断り書きを画面上に呈示した。

結果

気体液体分子運動パターンが、人の性格としてそれぞれ都市的および農村的と感じられた度合いの評定値の平均値と標準偏差はTable1に示した通りである。

見せたムービーの種類別に、都市的、農村的、に感じた度合いの違いを見るため、対応ありの平均値の差のt検定（両側）を行った。(n=200)結果はTable2の通りである。

液体の分子運動を見たとき、都市的、農村的、と感じる度合いについては、農村的、と感じる度合いの数値が、格差を容認する、と感じる度合いよりも、有意に高かった。(t(199)=2.40,p<.05)

気体の分子運動を見たとき、都市的、農村的、と感じる度合いについては、都市的、と感じる度合いの数値が、農村的、と感じる度合いよりも、有意に高かった。(t(199)=13.64,p<.01)

液体と気体とではどちらを、より都市的と感じるかについては、気体分子運動パターンを都市的、と感じる度合いが、液体分子運動パターンを都市的、と感じる度合いよりも、有意に高かった。(t(199)=5.87,p<.01)

液体と気体とではどちらを、より農村的と感じるかについては、液体分子運動パターンを農村的に感じる度合いが、気体分子運動パターンを農村的に感じる度合いよりも、有意に高かった。(t(199)=10.14,p<.01)

考察

以上の結果により、気体分子運動のシミュレーションを人に見立てて観察させると、都市的性格と認知され、一方、液体分子運動は、農村的性格と認知されるこ

とが、分かった。気体分子運動パターンと同様に振る舞う人のパーソナリティは、都市的なように、液体分子運動パターンと同様に振る舞う人では、農村的なように感じられる、と考えられる。

図表

Figure.1 気体液体分子運動パターン分子運動シミュレーションムービー（研究参加者に見せたもの）

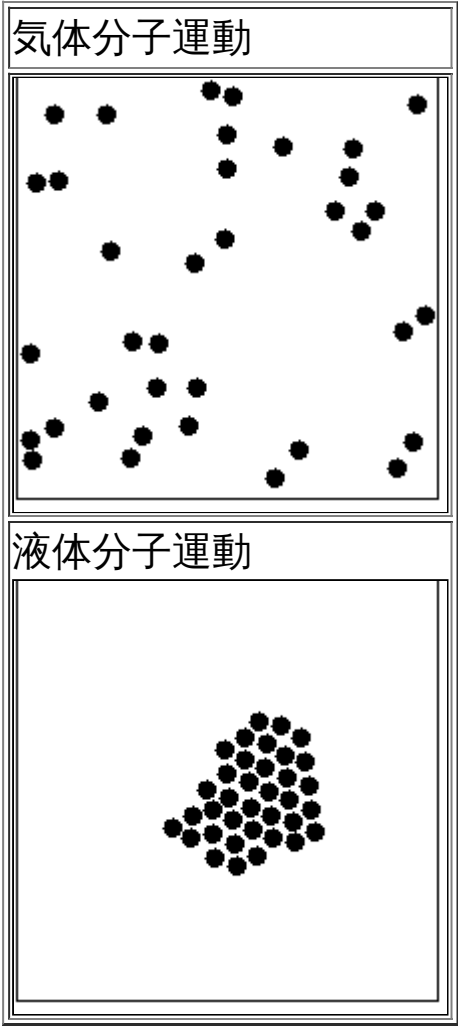



Table.1 気体液体分子運動ムービーへの都市的・農村的

評価値の平均値と標準偏差（かっこ内）

刺激種類	都市的	農村的
液体分子運動	1.42 (1.45)	1.73 (1.47)
気体分子運動	2.21 (1.47)	0.5 (0.93)

n=200

Table.2 条件間の平均値の差の比較結果（対応あり）

比較対象	t検定
液体 農村的－液体 都市的	t(199)=2.40*
気体 都市的－気体 農村的	t(199)=13.64**
気体 都市的－液体 都市的	t(199)=5.87**
液体 農村的－気体 農村的	t(199)=10.14**

**p<.01,*p<.05

引用サイト

池内満, 分子のおもちゃ箱 ,http://mike1336.web.fc2.com/, 2002

最初期の研究内容

”気体液体型行動様式”についての検討。人間行動の分子運動論的把握。

1992年05月24日。初出。
気体と液体の統合版。

（2022年04月。私は、文章の表現を、自動翻訳サービスに、より適合した表現となるように、より分かりやすく改めました。文章の内容それ自体は、オリジナルのままとなっています。）

１．
人間行動を説明するレベル。それは、基礎的なものから順に、下記のような内容が、考えられる。
１ 物理化学レベル（物体の運動）
２ 生理学ないし生物学のレベル（神経細胞から動物まで。遺伝。）
３ 人間固有レベル（大脳の前頭葉。それが生み出す、文化や文明。）

今までの、人間行動を扱う”行動科学”において。それは、下記のような現状である。
１ 社会学や社会心理では、人間固有レベルしか、扱わないこと。（そこでは、動物実験すら、殆どなされないこと。）

２ 心理学でも、せいぜい生物学レベルまでであること。（動物行動学の応用。生理心理学にみられる神経細胞研究。）

物理化学的考え方を、比喩として、行動科学へと、応用すること。そうした例は、かなり存在する。
例。
//
心理学 精神物理学（ウェーバー。フェヒナー。）
社会心理学 集団力学。（レヴィンなど。）ソシオメトリー。（モレノ。）
社会学 社会システム論や自己組織理論（パーソンズなど。）
//
しかし。
人間を、単なる比喩ではなく、物理的存在や物体として、扱うこと。その行動を、物体の運動として捉えること。そうした、最も基礎的な物理化学レベルへのアプローチ。それは、未だ、あまり検討されていない。
こういった状況は、言わば、基礎工事をしないまま、高層ビルを建てているようなものである。それは、研究を進める手順として、適当かどうか疑わしい。
そこで。
従来、より高次の人間固有レベルのものとして研究されてきた事項。（例えば、対人関係や民族性など。）それらが、より基礎的な物理化学レベルで説明できないかどうか、検討し直す必要がある。

２．
個々の人間。彼らを、宇宙・地球レベルの極めてマクロ的な視点から眺めた時。彼らを、物理化学的な分子程度の大きさとして、極小化して捉えることができること。
しかし。
分子レベルにまで極小化された、物理化学的存在とし

ての人間。ないし、そうした人間集団の行動様式。それらを、どのような形で捉えることができるかについて。それについては、目立った研究は、現状では、行われていない。
（人間を分子レベルまで極小化して捉える、物理化学的アプローチ。それ自体が、そもそも、社会科学の興味の対象になっていない。）
分子化された物理化学的存在としての、人間ないし人間集団。それらの、遺伝的あるいは文化的行動様式。（民族性や社会的性格。）それらが、物理化学における現実の分子運動法則と、直接の関連を持つかどうか？そのことについても、既存の研究では、不明のままである。（物理学を、社会心理分野に応用した研究。その例としては、K.Levinらの集団力学理論などがある。しかし、それらの内容は、いずれも比喩的レベルに、止まっている。）
もしも、人間の遺伝的・文化的行動様式が、分子運動法則と直接の関連を持つことを、立証できた場合。
現在、物理化学で使われている、コンピュータを用いた分子運動シミュレーション技術。そうした技術を、人間（集団）の研究に、そのまま応用できる。それは、以下の内容の実現に、繋がる。社会科学分野でのコンピュータ活用のレベル。それを、飛躍的に向上させること。
この文章の目的。
１ 従来の、民族性や社会的性格といった、社会学や心理学や文化人類学固有の研究テーマとして扱われてきた対象。そうした対象を、物理化学の分子運動論そのものとして扱えること。それが可能であることを示すこと。
２ 分子化された物理化学的存在としての人間ないし人間集団の遺伝的ないし文化的行動様式。それらが、流動性を持つ液体気体分子の運動法則に、大局的には従っていること。それを示すこと。

上記の内容により、下記の内容が、（単なる比喩としてではなく、）直接可能であることを示すこと。社会科学への、物理化学的アプローチ。社会科学に対する、コンピュータを用いた分子シミュレーション技術の応用。

３．
（１） 人間行動を、マクロ的な視点から眺めた場合。それらは、社会・文化的行動を含めて、（本人が自覚するしないに関わらず、）物理化学的な液体気体の分子運動法則に従っていること。
人間は、厳密には、物理化学的分子とは、知覚や連合や運動の機能を内蔵する点で、異なる動きを示す。しかし、彼らは、大局的には、物理化学的な存在として振る舞う。
（２） 遺伝的な側面。女性ないし男性の行動様式。それらが、以下の（１）の内容に従って、以下の（２）の内容に相当する。（１）それぞれの持つ生物学的貴重性。その度合い。その大小。（２）液体ないし気体の分子運動法則。
（３） 文化的な側面。適応先の自然環境における、液体優位ないし気体優位の、度合い。（湿潤ないし乾燥の度合い。）そうした度合いに従って、以下の内容が、液体ないし気体の分子運動に相当する。農耕社会。（定住的で集約的。）ないし、遊牧社会。（移動的で粗放的。）それらの社会の行動様式。（民族性。）
（文化的な人間行動様式の、乾湿の度合い。それは、自然環境の乾湿の度合いに、正相関している。）
（４） 遺伝的な、女性ないし男性の行動様式。文化的な、自然環境の乾湿に由来する、農耕社会ないし遊牧社会の行動様式。上記の両者のペアは、相互に対応関係にある。自然環境への適応度から見た場合。女性は、液体優位環境（湿潤環境）の下の農耕社会において、優位となる。男性は、気体優位環境（乾燥環境）の下の遊牧社

会において、優位となる。

４．
人間行動には、相互作用面での流動性が絶えず存在する。従って。人間行動を、物理化学的に捉える場合。その比較の対象となるもの。それは、流動性のある、気体液体の分子運動である。（流動性のない固体。それは、比較の対象から外される。）
この節では、以下の内容について、まとめる。液体ないし気体の分子運動。それらの基礎的な性質。
まず、分子間力について説明すること。次に、分子運動の原理を、分子間力中心に、動作次元（M）と、分布次元（D）とに分けて、整理すること。
次に、基本原理の各項目について、液体気体分子運動の比較を、分子間力中心に行い、表に整理すること。
この説明文の中には、以下の内容が、含まれる。分子を擬人化した表現。社会科学で用いられてきた概念を、積極的に流用したもの。
その内容は、以下の内容の実現を、目的としている。
従来の物理化学と、社会科学との、用語面での橋渡し。

Ｉ 分子間力
各分子は、”分子間力”（相互に引き合う力）を持つこと。
”分子間力”の作用する度合い。（複数分子相互の引力の働きやすさ。）それは、下記の内容に負相関すること。
（１） 各分子間の”距離”。
（２） 各分子個体の、相互の引力を振り切る”運動エネルギー”。

Ｍ 動作次元
各分子の動作と、”分子間力”との関係について、まとめ

ること。

Ｍ１ 各分子の動作エネルギーについて。それは、下記の各項目の積として、表される。
流動性のある分子は、各自、中庸レベルから高位レベルの、運動エネルギーを持っている。
各分子の動作時のエネルギー。それは。
０１ ”質量”
０２ ”速度”

各分子の動作エネルギー。それは、以下の各項目の内容に、正相関する。
１１ 動作の”スケール”の大きさ
２１ 動作の”能動性”（自発的に動き回る度合い）
３１ 相互接触時の”当たり”のハードさ・破壊的である度合い
３２ 相互接触時の傷つきやすさ
３３ 現状打破や変革へのエネルギー

”分子間力”が作用する度合い。それは、各分子の運動エネルギーに負相関する。
したがって、以上の０１～３１の指標の値は、”分子間力”に負相関する。

Ｍ２ 各分子の動作決定のあり方。それは、下記の内容によって、表される。

Ｍ２１１ 各分子の各々について。
０１ ”自由度”（周囲分子の物理的束縛を受けずに決定できる、度合い。）
０２ ”自律度”（周囲とは独立して決定できる、度合い。）
０３ ”独創度”（周囲分子と異なる、自分だけの決定ができる、度合い。）

これらの値は、下記の度合いを表す。各分子が、その引力を振り切って、自由に動き回れる度合い。ないし。各分子が、動作決定時に、周囲個体の引力の影響を結果的に配慮しなくて済む、度合い。それらの度合い。それらの値は、”分子間力”（分子間相互の引力）に負相関する。
分子間力が大きいほど、下記の度合いが、強まる。各分子における、”自由からの逃走”。〔E.Fromm。〕

Ｍ２１２ 分子間について。それは、下記の内容によって、表される。
０１ ”相互依存度”（相互に、他分子の動作決定の影響を被ること。その度合い。）
０２ ”相互牽制度”（相互に、他分子の動作を規制し束縛し合うこと。その度合い。相互に、”足を引っ張り合う”こと。その度合い。）
０３ ”画一度”（個別にバラバラに動くことができなくなること。その度合い。）
０４ ”集団主義度”（相互の引力で、ひとかたまりになって一斉に動くこと。その傾向。その強さ。）
０５ ”（同類）他者指向度”（動作ターゲットを、同類の他分子とすること。その傾向。相互の”温もり”を求めること。その傾向。）
０５B ”擬人化度”（非同類の無機物などを、同類の他者に準えること。その度合い。）
０６ ”相互和合度”（相互が、”仲良く””親しみ合う”こと。度合い。）
この値については、以下の内容の実現が、可能である。以下の０６１から、以下の０６３へと、細分化して表すこと。この値は、また、分子の相互融合や相互一体化の度合いに正相関する。（Ｄ２２－１１。）
０６１ ”引力追認度”（相互の間で引力が作用すること。そのことを、（積極的に）追認する度合い。）
０６２ ”斥力抑止度”（相互の間で、斥力（反発力）の作

用を抑止すること。周囲と反対方向への動作の存在を許さないこと。”満場一致”を指向すること。それらの度合い。）
０６３ ”引力無効化抑止度”（相互の間で、（周囲の）引力を、振り切ること。（そうした引力を、無効化すること。）そのことで、自由に動き回ること。それらの実現を抑止すること。その度合い。）

これらの値は、各分子動作の”自由度”に負相関する。
従って。これらの値は、”分子間力”と正相関している。

Ｍ２１３ 対周囲について。それは、下記の内容によって、表される。
０１ ”同調度”（周囲との、動作面での調和。その実現を求める度合い。）
０２ ”恥の感じやすさ”〔R.Benedict〕（相互に、周囲の他分子に注目され、監視されていること。そのことを、感じる度合い。）
０３ ”周囲の目の気にしやすさ”（相互に、以下の内容を、考慮すること。周囲の他分子が、彼自身について、どう感じているか？そうした考慮の、度合い。）
０４ ”根回しの必要性”（彼自身の動作に対する事前の承諾。相互に、その実現を、周囲に対して、求めること。その度合い。）

これらの値は、以下の内容を示す。各分子の動作が、周囲他分子の動作に規定される度合い。従って。これらの値は、分子間力に正相関する。
これらの値は、各分子動作の”自由度”に、負相関する。

Ｍ２２ 各分子の動作方向（進路）。それらのあり方。それは、下記の内容によって表される。
０１ ”一定度””直進度”
０２ ”明確度”（物事の白黒がはっきりすること。その度合い。）

これらの値は、分子間力に負相関する。
そうした動作方向。それは、分子が相互に引き合うことで、ジグザクで場当たり的でファジーとなる。そのことで、その明確度が、減少する。
その結果。動作の”目的指向”性。（目的対象に向かって一直線に進む度合い。）その度合いが、減少する。

Ｍ２３ 各分子自身の動作に対する責任の取り方。それは、下記の内容によって、表される。
０１ ”分散”（他の分子との間へと、拡散すること。その度合い。）
０２ ”連帯化度”（他の分子と共同で、取ったり、持ち合ったりすること。それらの度合い。）

これらの値は、分子間力に正相関する。
相互に引き合う度合いが、増大すること。そのことで、下記の度合いが、増大する。各自の動作を、彼自身という１分子のみで、決定できなくなる度合い。そのことで、下記の度合いが、減少する。彼自身の動作に対する責任を、個別に負う度合い。
その結果。動作に対する”集団的無責任”の度合い。そうした度合いが、そのことで、増大する。

Ｄ 分布次元
各分子（集団）の分布について、分子間力との関係を中心に、説明すること。

Ｄ１１ 相互距離
流動性のある分子は、相互に、中庸な距離、ないし、大きな距離を、保っている。
分子相互の引力が有効なこと。その度合い。”分子間力”が作用すること。その度合い。それらの度合いは、各分子間の距離に、負相関する。

Ｄ２１ 分子各々の分布について。それは、下記の内容によって、表される。
０１ ”individuality”（各分子が、相互に分離独立すること。その度合い。”個人主義的”であること。その度合い。）
１１ ”視点の客観度”（相互に相手を突き放して見ること。その度合い。相手を見る眼における、非近眼性。）
２１ ”テリトリーの広さ”（各分子が確保する、彼自身専用の、空間。それらの広さ。）
２２ ”視界の広さ”（各分子が確保する視界。それらにおける、広さや遠さや見通しの良さ。）
２３ ”プライバシー”（各分子が、相互に、相手によって、彼自身の動きを監視されないこと。その度合い。）
２４ ”個室指向度”（各分子が相互の間に衝立を設けること。彼が、そのことで、彼自身の空間を、周囲から独立させること。その度合い。）
３１ ”（対環境）露出度”（各分子が、外部環境に対して、他分子の介在なく、直接露出すること。その度合い。）

これらの値は、分子間の相互距離に正相関する。従って、これらの値は、分子間力の大きさに負相関する。

Ｄ２２ 分子間の分布について。それは、下記の内容によって、表される。
０１ ”相互接近度”（各分子が、相互に、距離的に近づこうとすること。その度合い。）
１１ ”融合や一体化の指向度”（各分子が、相互に、融合し一体化しようとすること。その度合い。）
１２ ”もたれあい度”（各分子が、相互に、相手にもたれたり、相手からもたれられたりすること。それらの度合い。”甘え”指向度。｛土居健郎。〕）

１３ ”触れ合い度”（他分子との接触。それらにおける、期間や頻度や面数の、多さ。他分子と、べたべたくっ付き合うこと。その度合い。）
これらの値。それらは、以下の値に、正相関する。分子が相互に引力を働かせ合うこと。その度合い。それらは、従って、分子間力の大きさに、正相関する。
これらの値は、下記の度合いに、正相関する。各分子間の相互作用が、より”全人格的””家族的”になること。その度合い。
２１ ”テリトリー不明瞭化度”（相互のテリトリーの境界。それらが、ぼやけて不明確になること。それらの度合い。）
この値は、各分子の相互一体化の度合いに、正相関する。（Ｄ２２－１１項。）この値は、分子間力の大きさに、正相関する。
”間人性”〔浜口恵俊。）その度合いは、この値に正相関する。

Ｄ２３ 分子集合レベルでの分布について。それは、下記の内容によって、表される。
０１ ”分散”（分布領域の、空間的な散らばり。）
０２ ”スケール”（分布領域の、空間的広がりや、空間的なスケールの、大きさ。）
これらの値は、下記の値に、正相関する。分子間における、相互距離の大きさ。分子間における、引力の働きにくさ。
これらの値は、したがって、分子間力の大きさに、負相関する。
１１ ”集中度。凝集度。”（分布が、一箇所に固まること。その度合い。）
１２ ”連続度”（分布が、アナログ的に繋がること。その度合い。）
１３ ”（相互）保護度”（外部環境に対して、相互に、相手の衝立となること。そのことで、露出を防止するこ

と。その度合い。）
これらの値は、以下の値に、正相関する。分子間の相互距離の小ささ。分子間における引力の働きやすさ。
これらの値は、したがって、分子間力の大きさに、正相関する。

２１ ”外れ値許容度”（分布面において、周囲への同調度の低い分子が存在し得ること。その度合い。）
２２ ”地方分権度”（分布における、各部分の、他部分に対する、分離独立。その度合い。）
これらの値は、分布の分散の大きさに、正相関する。（->Ｄ２３－０１項。）
これらの値は、したがって、分子間力の大きさに、負相関する。
３１ ”密度”（相互に密着する度合い。相互に、過密状態を指向する度合い。）
３２ ”地上指向度”（重力の影響が強まって、空間的に下方を指向する度合い。大地への指向。その度合い。）
これらの値は、分布の集中・凝集度に正相関する。（->Ｄ２３－１１項。）
これらの値は、したがって、分子間力の大きさに、正相関する。

ＭＤ 動作×分布次元
Ｍ．動作。Ｄ．分布。それらの両者が関連する項目について、分子間力との関係を中心に、まとめること。

ＭＤ１ 拡散性
１１ ”拡散度”（各分子の分布領域が、次第に拡散すること。その度合い。）
１２ ”分布枠非限定度”（分布空間を限定しないこと。その度合い。”枠や型に囚われない”こと。その度合い。体積一定で無いこと。その度合い。）
１３ ”未知領域指向度”（各分子が、他の分子が未だ分布

しない領域へと、積極的に挑戦し飛び出していくこと。その度合い。）
１４ ”オリジナリティ度”（目的とする領域に、”最初に”入ること。その領域において、何か、新たに、発見や発明を行うこと。その度合い。）
１５ ”異分野交流指向度”（異なる領域へと出て行き、他分子（集団）と相互交流すること。その度合い。）
これらの値は、下記の値に、正相関する。動作エネルギーの大きさ。相互距離の大きさ。
これらの値は、したがって、分子間力の大きさに、負相関する。
これらの値は、分布における、下記の値に、正相関する。非”セクショナリズム”度。非”蛸壺”度。〔丸山真男。〕

２１ ”表面存在度”（分布領域の表面や界面。それらが存在すること。その度合い。）
２２ ”内外区別度”（分布領域における、内部と外部との区別。そうした領域における、境界。その内容を、はっきりさせること。その度合い。）
２３ ”縁故・閥指向度”（相互作用の相手を、領域内の同類分子へと、（仲間の内部に）限定すること。その度合い。）
これらの値は、下記の度合いを、示す。各分子が、相互に分子間力が働き合う同士だけで、かたまり引き止め合うこと。その度合い。
これらの値は、すなわち、以下の内容を示す。分布領域における”拡散度”。（ＭＤ１－１１～１４。）それらの低さ。それらの値は、分子間力の大きさに正相関する。

３１ ”表面張力”（分布領域の表面面積を、最小化すること。その実現に掛けるエネルギーの大きさ。その度合い。）

３２ ”表面回避度”（各分子が、以下の状況を、避けること。その傾向。領域の表面に出て、領域の外部に対して、直接露出すること。）
３３ ”対内指向度”（各分子が、領域内部に入りたがること。その傾向。）
３４ ”排他度”（外部に対する窓口（領域表面）を、最小化すること。その度合い。）
３５ ”（対内）閉塞度”（領域内から外部へのスピンアウト。その実現が、困難になること。その度合い。”集団凝集性。”)
３６ ”（対外）閉鎖度”（領域外から内部への参入。その実現が、困難になること。その度合い。）
これらの値は、下記の度合いを、示す。相互に分子間力が働き合う分子同士。彼らが、そうでない分子を、部外者扱いすること。その度合い。
これらの値は、分子間力の大きさに正相関する。

ＭＤ２ 流動性
１１ ”移動・流動度”（分布空間を自主的に変えること。その度合い。）
１２ ”視野のスケール”（視野が、行動範囲の広がりにより、拡大すること。その度合い。）
１３ ”視野の多角性”（複数の視点から、対象を捉えること。その実現が、可能なこと。その度合い。）
これらの値は、下記の各項目に、正相関する。動作エネルギーの大きさ。分子相互の引力という、動作面におけるブレーキ。その掛かりにくさ。
これらの値は、従って、分子間力の大きさに負相関する。

２１ ”定住度”（相互に引力というブレーキを掛け合って、ほぼ同一位置に静止すること。そうした傾向。”植物化”の傾向。）
２２ ”現状維持度”（”外圧”が加わらない限り、現在位置

に停滞し続けること。そうした傾向。）
２３ ”ストック指向度”（各分子の軌跡が、蓄積されること。そうした傾向。）
２４ ”前例有効度”（各分子の軌跡が、以前に他分子が通った地点を繰り返しなぞること。そうした傾向。）
これらの値は、”流動性”の項の逆を行く。これらの値は、分子間力の大きさに正相関する。

C 液体気体分子運動の比較
以上の原理や法則の面での説明をもとに、液体気体の分子運動を相互に比較すること。
液体気体分子は、各々、流動性を持ち、運動エネルギーを持っている。
”運動エネルギー”の度合い。
１分子当たりの質量を両者等しいと仮定した場合。
動作速度は、気体分子が、液体分子に比べて、格段に大きい。
”分子間力”の作用する度合い。（分子相互の引力の働きやすさ。）
１ 各分子間の距離が、気体の方が、液体に比べて、格段に遠い。
２ 各分子の運動エネルギーが、気体の方が、液体に比べて、格段に大きい。
そうした度合いは、上記の理由より、液体分子の方が、気体分子に比べて格段に大きい。
その結果。上記の原理や法則。その説明文。それらの内容。それは、下記の内容によって、表される。
１ 液体分子（集団）の運動は、分子間力の大きさに正相関する項目に、適合する。
２ 気体分子（集団）の運動は、分子間力の大きさに負相関する項目に、適合する。

表１は、以下の（１）と、以下の（２）との関係を、ま

とめたものであること。
（１）
上記で述べた原理や法則。それらの説明文の、各項目。
（２）
下記の、各項目。
//
１ 分子間力との、正相関ないし負相関。その度合い。
２ 液体分子運動との、適合ないし不適合。その度合い。
３ 気体分子運動との、適合ないし不適合。その度合い。
//

上記で述べた原理や法則。それらの内容が、現実の液体気体分子運動と対応が取れていること。そのことを示す例を、以下に挙げる。
Ｉ 分子間力
　液体内の分子間力を無効にすること。すなわち、液体を気体に変えること。その実現のためには、膨大な量のエネルギーを、外部から供給する必要がある。
Ｍ 動作次元
　動作方向の一定度や直進度。それらの度合いは、気体分子の方が、液体分子に比べ格段に大きい。->Ｍ２１１－０１。
Ｄ 分布次元
　分布の密度は、液体は、気体に比べて格段に大きい。（１０００倍。）->Ｄ２２－３１。
　同じ数の分子集団が必要とする領域の大きさ。（体積。）それは、液体において、より小さい。
例。
空気を抜いた風船の中に、液体の水を入れて、沸騰した湯に入れた場合。それは、水が気化した分、急激に膨張する。->Ｄ２３－０１。
　分布の空間的な上下について。気体は天上方向に浮上

する。液体は地上方向に降下する。->Ｄ２３－３２。
ＭＤ 動作次元と分布次元との掛け合わせ。
　液体は、”体積一定”である。液体においては、”拡散”は、ほとんど見られない。
例。
仮に、液体の水を封入した容器の蓋を開けた場合。それは、気化した水蒸気のようには、出ていかない。->ＭＤ１－１１。
　分布領域の”表面や界面”。それらは、液体にのみ存在する。（例。透明なコップに水を注ぐと、境界線が見えること。）->ＭＤ１－２１。
　”表面張力”は、液体にのみ存在する。（例。水面に浮かぶ１円玉。）->ＭＤ１－３１。
　液体は、分布領域の移動や流動の傾向に、欠ける。
例。
水滴を、いったん水平面上に垂らした場合。それは、外から、息（外圧）を吹き掛け無い限り、いつまでもその場にとどまる。->ＭＤ２－１１。

デモプログラム編

気体分子運動シミュレーション。液体分子運動シミュレーション。

2006.12〜 初出
気体分子運動シミュレーション。
気体分子運動シミュレーション。５色版。
液体分子運動シミュレーション。低速版。
液体分子運動シミュレーション。高速版。
液体分子運動シミュレーション。高速版。５色版。

私の書籍についての関連情報。

私の主要な書籍。それらの内容の、総合的な要約。

////
私は、以下の内容を、発見した。
男女の社会行動上の性差。
そのことについての、新たな、基本的で、斬新な、説明。

男女の性差。
それは、以下の内容である。
精子と卵子との、性質の差。
それらの、直接的な、延長であり、反映。

男女の社会行動上の性差。
それらは、以下の内容に、忠実に、基づいている。
精子と卵子との、社会行動上の差。

それは、全ての生物において、共通している。
それは、生物の一種としての人間にも、当てはまる。

男性の心身は、精子の乗り物に過ぎない。
女性の心身は、卵子の乗り物に過ぎない。

子孫の生育に必要な、栄養分と水分。
卵子は、それらの、所有者であり、占有者である。

生殖設備。
女性は、それらの所有者であり、占有者である。

卵子が占有する、栄養分や水分。
精子は、それらの、借用者である。

女性が占有する生殖設備。
男性は、それらの、借用者である。

所有者が上位者であり、借用者が下位者である。

その結果。
栄養分や水分の所有。
それらにおいては、卵子が上位者であり、精子が下位者である。
生殖設備の所有。
それらにおいては、女性が上位者であり、男性が下位者である。

卵子は、以下の内容の権限を、一方的に占有する。
そうした上下関係を利用すること。
そのことで、精子を、一方的に選別すること。
そのことで、精子に対して、受精を、一方的に許可すること。
そうした権限。

女性は、以下の内容の権限を、一方的に占有する。
そうした上下関係を利用すること。
そのことで、男性を、一方的に選別すること。
そのことで、男性に対して、婚姻を、一方的に許可すること。
そうした権限。

女性は、以下の行為を、行う。
そうした上下関係を利用すること。
そのことで、男性を、様々な側面から、総合的に搾取すること。

卵子は、精子を、性的に誘引する。
女性は、男性を、性的に誘引する。

卵子は、以下の内容の権限を、一方的に占有する。
それ自身の内部への、精子の進入。
そのことについての、許認可。
その権限。

女性は、以下の内容の権限を、一方的に占有する。
男性に対する、セックスの許認可。
その権限。

彼女自身が所有する生殖設備。
男性による、それらの、借用。
その許認可。
その権限。

男性からの求婚。
それに対する許諾。
その権限。

生物が、有性生殖を行う限り、以下の内容は、確実に存在する。
男女の社会行動上の性差。

男女の社会行動上の性差。
それらは、無くすことは、決して出来ない。

私は、以下の内容を、新たに説明する。

世界には、男性優位の社会だけでなく、女性優位の社会も、同様に、普通に、多数存在すること。

それは、以下の内容である。
女性優位社会の存在の明瞭性。
その、世界社会における、新たな再確認。

男性優位社会は、移動生活様式の社会である。
女性優位社会は、定住生活様式の社会である。

精子。
その乗り物としての、男性の心身。
彼らは、移動生活様式者である。

卵子。
その乗り物としての、女性の心身。
彼らは、定住生活様式者である。

男性優位社会は、例えば、以下のような社会である。
欧米諸国。中東諸国。モンゴル。
女性優位社会は、例えば、以下のような社会である。
中国。ロシア。日本。韓国や北朝鮮。東南アジア。

男性は、行動の自由の確保を最優先する。
男性は、上位者に反抗する。
男性は、下位者を、暴力で強引にねじ伏せて、服従させる。
男性は、以下の内容についての余地は、少しだけ残す。
下位者による反抗。
その可能性。
下位者による自由行動。
その可能性。
それらの余地。

男性優位社会は、暴力による支配を行う。

女性は、自己保身を最優先する。
女性は、上位者に対して、隷従する。

女性は、下位者を、隷従させる。

それは、以下の内容である。
//
最大限の高慢さと尊大さを、用いること。

下位者による反抗や自由行動。
それらの行動の余地を、完全に封殺して、一切不可能にすること。

それは、以下の内容である。
周囲の同調者と、予め、示し合わせて、行われること。
下位者による反抗を、一切、許さないこと。
下位者を、逃げ場の一切無い、密閉空間に監禁すること。
上位者の気が済むまで、粘着的に、行われれること。
下位者を、サンドバッグ代わりにして、一方的に、虐待し続けること。
//

女性優位社会は、専制による支配を行う。

欧米諸国と、ロシアや中国との、対立。
それらは、以下の内容として、十分に説明可能である。
男性優位社会と、女性優位社会との、対立。

移動生活様式は、男性優位社会を、生み出す。
そこでは、女性差別が起きる。
定住生活様式は、女性優位社会を、生み出す。
そこでは、男性差別が起きる。

女性優位社会では、以下の内容が、恒常的に発生する。
上位者としての女性による、以下のような行動。
自己弱者性についての、恣意的な連呼。
男性の強者性についての、恣意的な連呼。
それらは、以下の内容を、故意に隠蔽する。
女性の社会的優位性。
男性差別。
それらは、女性優位社会の存在そのものを、対外的
に、隠蔽する。

女性優位社会における、その内部の機密性や閉鎖性や排
他性。
その内部情報の非公開性。
それらは、女性優位社会の存在そのものを、対外的
に、隠蔽する。

生物や人間の社会において、性差別を無くすこと。
その実現は、不可能である。
そうした試みは、しょせんは、綺麗事の理想の主張に
過ぎない。
それらの行為は、全て無駄である。

男女の性差の存在を強引に否定すること。
性差別に反対すること。
欧米主導の、そうした社会運動。
それらは、基本的に、全て無意味である。

男女の性差の存在を前提とする、社会政策。
その展開が、新たに必要である。

////
私は、以下の内容を、発見した。
人間の本質。
それらについての、新たな、基本的で、斬新な、説
明。

当方は、以下のような見方を、根本的に転換し、破壊す
る。

従来の、欧米やユダヤや中東による主導の、移動生活様
式の思想。
それらは、人間と、人間以外の生物とを、峻別する。
それらは、以下の内容に基づく。
家畜の恒常的な屠殺。その必要性。
そうした見方。

私の主張は、以下の内容である。

人間の存在は、生物一般の存在へと、完全に包含され
る。
人間の本質は、以下の方法によって、より効果的に説明
できる。
人間を、生物の一種として、眺めること。
人間の本質を、生物一般の本質として、捉えること。

生物の本質。
それは、以下の内容である。
自己の複製。
自己の存続。
自己の増殖。

それらの本質は、生物に対して、以下のような欲求を、生み出す。
私的な生きやすさ。
その、飽くなき追求。
それへの欲求。

その欲求は、生物に対して、以下のような欲求を、生み出す。
有能性の獲得。
既得権益の獲得。
それらへの欲求。

その欲求は、生物に対して、以下の内容を、絶えず生じさせる。
生存における、優位性。
その確認。
その必要性。

そのことは、結果的に、生物の間に、以下の内容を、生み出す。
社会的優劣関係。
社会的上下関係。

そのことは、以下の内容を、必然的に生み出す。
上位者の生物による、下位者の生物に対する、虐待や搾取。

そのことは、生物に対して、原罪を、回避不可能な形で、もたらす。
それは、生物を、生きにくくする。

そうした原罪や生きにくさから逃れること。
その実現。
どんな生物も、その内容は、生きている限り、決し

て、実現出来ない。
それは、生物の一種である人間においても、同様である。
人間の原罪は、生物であることそのものにより、生じている。

////
私は、以下の内容を、新たに発見した。
従来の生物学において主流である、進化論。
それについて、以下の内容を指摘すること。
その内容面における根本的な誤り。
そのための、新たな説明。

それは、以下のような見方を、根本的に否定する。
人間は、生物の進化の完成形であること。
生物の頂点に、人間が、君臨すること。
そうした見方。

生物は、自己複製を、ひたすら、機械的に、自動的に、繰り返すだけである。
生物は、そうした点において、純粋に物質的な存在である。
生物は、進化への意思を、全く持たない。

生物の自己複製における突然変異。
それらは、純粋に、機械的に、自動的に、起きる。
それは、生物に対して、新たな形態を、自動的にもたらす。

従来の進化論の説明。
そうした新たな形態が、従来の形態よりも、優れていること。
そうした説明は、何も根拠が無い。

現状の、生物の一環としての人間の、形態。
それが、生物による自己複製の繰り返しの過程において、そのまま保たれること。
そうした保証は、一切無い。

生物を取り巻く環境は、常に、予想外の方向へと変化する。
以前の環境において適応的だった形質。
それらは、次の変化した環境においては、往々にして、以下のような形質となる。
その新たな環境に対して、不適応であること。

その結果。
生物の形態は、自己複製と突然変異により、常に変化する。
それは、以下の内容の実現を、全く保証しない。
より望ましい状態への進化。
その持続。

////
私の、上記の主張。
それは、以下の内容である。

世界の上位を独占する、世界一の既得権益者。
そうした、男性優位社会。
欧米諸国。
ユダヤ。

国際秩序。
国際的な価値観。
それらは、彼らを中心として、生成されている。
それらの内容は、彼らが、彼ら自身が有利になるように、一方的に決定した。

それらの背景をなす、彼らの、伝統的な社会思想。
キリスト教。
進化論。
リベラリズム。
民主主義。
彼らにとって、一方的に有利な内容の、様々な社会思想。
それらの内容を、根本的に破壊し、封殺し、初期化すること。

国際秩序。
国際的な価値観。
それらの決定のプロセスにおける、女性優位社会の関与の度合い。
その拡大。
その実現を、更に促進すること。

女性優位社会の内部における、根本的に生きづらい、社会的内実。
それは、上位者への隷従と、下位者への専制支配によって、完全に満たされている。
例。
日本社会の内実。

そうした不都合な社会的内実。
その発生メカニズムを徹底的に解明すること。
その結果の内容を、暴露し、内部告発すること。
そうした内容であること。

////
私の書籍。
それらの内容における、隠れた、重要な目的。
それは、以下の内容である。

女性優位社会の人々。
彼らは、今まで、以下の内容に頼るしか無かった。
男性優位社会の人々が、彼ら自身のために生成した、社会理論。

女性優位社会の人々。
彼らが、彼ら自身の社会を説明する、自前の社会理論。
彼らが、それを、自前で持つことが出来るようにすること。
その実現。

そのことによる、以下の内容の実現。
世界秩序の形成において、現在、優位に立っている、男性優位社会。
それらの弱体化。
女性優位社会の力の、新たな強化。
私が、それを、手伝うこと。

女性優位社会の人々。
彼らが、自前の社会理論を、いつまで経っても、なかなか持つことが出来ないこと。
その理由。
それらは、以下の内容である。

分析行動そのものを、心の底で、嫌っていること。
対象との一体化や、対象との共感を、対象の分析よりも、優先すること。

彼ら自身の社会が持つ、強い排他性や閉鎖性。
彼ら自身の社会の内実を解明されることに対して、強い抵抗感を持っていること。

彼ら自身の女性的な自己保身性に基づく、強い退嬰性。
未知の危険な領域を探査することを嫌うこと。
安全性が既に確立された、前例踏襲ばかりを優先する

こと。

前例の無い、女性優位社会の内実の探査。
そうした行動そのものを、嫌うこと。

前例としての、男性優位社会の社会理論。
その内容を、ひたすら暗記学習すること。
それしか、能力的に、出来ないこと。

（2022年3月初出。）

筆者の執筆の目的と、その実現に当たっての方法論。

私の執筆の目的。
生物にとっての生きやすさ。生物にとっての生存可能性。生物にとっての増殖可能性。それを増大させること。
それは、生物にとって、一番、価値があることである。それは、生物にとって、本質的に、善である。それは、生物にとって、本質的に、光明性をもたらす。
社会的上位者にとっての善。それは、以下の内容である。最上位の社会的地位の獲得。覇権の獲得。獲得した既得権益の維持。
社会的下位者にとっての善。それは、以下の内容である。有能性の獲得による、社会的上昇。社会的革命の生成による、社会的上位者の既得権益の、破壊と初期化。
その実現に役立つ思想。真実。生物が、自分自身の真実を知ること。それは、生物にとって、冷酷で厳しく辛辣な内容である。その受容。その助けになる思想。それらを、効率良く生み出す方法。その確立。

私の方法論。
上記の目的。その実現に当たっての手順。その実現に当たっての勘所。その実現に当たっての注意点。それらは、以下の内容である。
ネット検索やネット閲覧によって、環境や生物社会の動向を常に俯瞰し観察し把握すること。それらの行為は、以下の内容の源泉になる。
環境や生物社会の真実や法則の解明において、説明力や説得力のあるアイデア。
あるアイデアによって、真実を８０％説明できそうな見通しが立った場合。そのアイデアの内容を、どんどん書き出して、体系化すること。真実に近そうな、説明力の高そうな思想を、独力で、どんどん生み出すこと。その行為を、最優先すること。
詳細な説明を後回しにすること。難解な説明を避けること。
過去の前例との照合は、後回しにすること。正しさの完全な検証は、後回しにすること。
簡潔で分かりやすく使いやすい法則の確立。その行為を、最優先すること。それは、例えば、以下の行為と同様である。簡潔で分かりやすく使いやすいコンピュータのソフトウェアの開発。

私の執筆における、理想とスタンス。

私の執筆における、理想。
それは、以下の内容である。
//
私が生成する内容の説明力の最大化。
そのためにかける手間や時間の最小化。
//

それらの実現のための方針やスタンス。それらは、下記の内容である。

私の執筆における、スタンス。

私が、文章の作成において、考慮する、根本的な方針。
それらの対比。
それらの主要な項目一覧。
それは、以下の内容である。

上位概念性。 / 下位概念性。
要約性。 / 詳細性。
根幹性。 / 枝葉性。
一般性。 / 個別性。
基本性。 / 応用性。
抽象性。 / 具体性。
純粋性。 / 混合性。
集約性。 / 粗放性。
一貫性。 / 変動性。
普遍性。 / 局所性。
網羅性。 / 例外性。
定式性。 / 非定式性。
簡潔性。 / 複雑性。
論理性。 / 非論理性。
実証可能性。 / 実証不能性。
客観性。 / 非客観性。
新規性。 / 既知性。
破壊性。 / 現状維持性。
効率性。 / 非効率性。
結論性。 / 中途性。
短縮性。 / 冗長性。

全ての文章において、内容面で、以下のような性質
を、最初から、最上級の形で、実現すること。

概念上位性。
要約性。

根幹性。
一般性。
基本性。
抽象性。
純粋性。
集約性。
一貫性。
普遍性。
網羅性。
定式性。
簡潔性。
論理性。
実証可能性。
客観性。
新規性。
破壊性。
効率性。
結論性。
短縮性。

その実現を最優先して、文章の内容を、執筆すること。
その内容を、なるべく早く完成させること。
その内容を、書き上げた部分毎に、直ぐに、本文に、マージしていくこと。
それらを、最優先すること。
例。
固有名詞を、使わないこと。
ローカルな、抽象度の低い意味の語句を、使わないこと。

先進的なコンピュータプログラミング技術を、文章作成の方法へと、積極的に、応用すること。

例。
オブジェクト思考に基づく、文章作成の技術。
クラスとインスタンスの概念の、文章作成への応用。
上位クラスの内容の優先的な記述。

例。
アジャイル開発の方法の、文章作成への応用。
頻繁に、以下の行動を、繰り返すこと。
電子書籍の内容の、バージョンアップ。
その電子書籍ファイルの、公開サーバーへのアップロード。

私は、従来の学術論文の作成方法とは異なる方法を、採用している。
従来の学術論文の作成方法は、説明力のある内容の導出において、非効率である。

書籍の執筆における、私の視点。
それは、以下の内容である。

統合失調症の患者からの視点。
社会における、最下位者からの視点。
社会における扱いが、一番、劣悪な者からの視点。
社会から、拒絶され、差別され、迫害され、追放され、隔離された者からの視点。
社会不適応者からの視点。
社会で生きることを諦めた者からの視点。
一番、社会的ランクが下位の病気に罹患した患者からの視点。
社会における、一番の有害者からの視点。
社会における、一番の嫌われ者からの視点。
社会に対して、生涯、心を閉ざした者からの視点。
生物や人間に対して、根本的にがっかりした者からの

視点。
生物や人間に対して、絶望した者からの視点。
人生を諦めた者からの視点。
罹患した病気のせいで、彼自身の遺伝的子孫を残すことを、社会的に拒絶された者からの視点。
罹患した病気のせいで、極めて短命に終わること。そのことを、運命付けられた者からの視点。
罹患した病気のせいで、生きやすさや救いを、生涯、得られないこと。そのことが、予め確定している者からの視点。
罹患した病気のせいで、有能性を、生涯、得られないこと。そのことが、予め確定している者からの視点。
罹患した病気のせいで、生涯にわたって、社会から、虐待や搾取を受け続けること。そのことが、予め確定している者からの視点。
そうした者による、生物社会や人間社会に対する内部告発の視点。

私の人生目標。
それは、以下の内容である。
男女の性差。
人間社会や生物社会。
生物そのもの。
それらの本質を、自力で、分析し、解明すること。

そうした、私の人生目標は、以下のような人々によって、大きく妨害された。

男性優位社会の人々。例。欧米諸国。
そうした、男性優位社会によって支配されている、女性優位社会の人々。例。日本と韓国。
彼らは、女性優位社会の存在を、決して認めない。
彼らは、男女の本質的な性差を、決して認めない。

彼らは、男女の性差についての研究そのものを、社会的に、妨害し、禁止している。
そうした、彼らの態度は、男女の性差の本質の解明にとって、本質的に、邪魔であり、有害である。

人間と、人間以外の生物との、本質的な共通性。
彼らは、それを、決して認めない。
彼らは、人間と、人間以外の生物とを、必死で、区別し、差別しようとする。
彼らは、人間の、人間以外の生物に対する優位性を、必死で、主張しようとする。

そうした、彼らの態度は、人間社会や生物社会の本質の解明にとって、本質的に、邪魔であり、有害である。

女性優位社会の女性たち。例。日本社会の女性たち。
彼らは、女性優位社会における女性の優位性を、表向きは、決して認めない。
女性専用社会や、女性優位社会における、それらの社会の内部の真実。
彼らは、その公開を、決して認めない。
そうした、彼らの態度は、男女の性差の本質の解明にとって、本質的に、邪魔であり、有害である。
そうした、彼らの態度は、人間社会や生物社会の本質の解明にとって、本質的に、邪魔であり、有害である。

上記のような人々。
そうした、彼らの態度は、私の人生目標を、根本的に、妨害した。
そうした、彼らの態度は、私の人生を、その土台から、狂わせ、破壊し、台無しにした。
私は、それらの結果について、とても怒っている。
私は、彼らに対して、鉄槌を下したい。
私は、彼らに対して、以下の内容を、何としてでも、

理解させたい。
私は、以下の内容を、何としてでも、自力で解明したい。
//
男女の性差における、真実。
人間社会や生物社会における、真実。
//

私は、人間社会を、冷静に、客観的に、分析したかった。
そこで、私は、人間社会から、一時的に、私自身を、隔離した。
私は、人間社会の俯瞰者となった。
私は、人間社会の動向を、ネット経由で、毎日、ひたすら、観察し続けた。

その結果。
私は、以下の内容を、手に入れた。
人間社会の全体を、最下位から俯瞰する、独自の視点。

その結果。
私は、以下の内容を、自力で、何とか、掴んだ。
//
男女の性差の本質。
人間社会や生物社会の本質。
//

その結果。
私は、新たな人生目標を、手に入れた。

私の、新たな人生目標。
彼らの社会的妨害に対して、対抗し、挑戦すること。
そして、以下の内容を、人々の間に広く知らせること。
//

私が自力で掴んだ、男女の性差の真実。
私が自力で掴んだ、人間社会や生物社会の真実。
//

私は、そうした目標の実現のために、これらの書籍を作成している。
私は、そうした目標の実現のために、これらの書籍の内容を、日々、熱心に、改訂し続けている。

（2022年2月初出。）

参考文献。

== 男女の性差。
/ 総説。

Bakan, D. The duality of human existence . Chicago: Rand-McNally. 1966.
Crandall, V. J., & Robson, S. (1960). Children's repetition choices in an intellectual achievement situation following success and failure. Journal of Genetic Psychology, 1960, 97, 161-168.(間宮1979 p178参照)
Deaux,K.: The Behavior of Women and Men, Monterey, California: Brooks/Cole, 1976
Goldstein, MJ (1959). The relationship between coping and avoiding behavior and response to fear-arousing propaganda. Journal of Abnormal and Social Psychology, 1959, 58, 247-252.(対処的・回避的行動と恐怖を誘発する宣伝に対する反応との関係)
影山裕子 : 女性の能力開発, 日本経営出版会, 1968
間宮武 : 性差心理学, 金子書房, 1979
皆本二三江 : 絵が語る男女の性差, 東京書籍, 1986
村中 兼松 (著), 性度心理学―男らしさ・女らしさの心理

(1974年) , 帝国地方行政学会, 1974/1/1
Mitchell,G. : Human Sex Differences - A Primatologist's Perspective, Van Nostrand Reinhold Company, 1981 (鎮目恭夫訳 : 男と女の性差 サルと人間の比較, 紀伊国屋書店, 1983)
Newcomb,T.M.,Turner,R.H.,Converse,P.E. : Social Psycholgy:The Study of Human Interaction, New York: Holt,Rinehart and Winston, 1965 (古畑和孝訳 : 社会心理学 人間の相互作用の研究,岩波書店,1973)
Sarason, I.G., Harmatz, M.G., Sex differences and experimental conditions in serial learning. Journal of Personality and Social Psychology., 1965, 1: 521-4.
Schwarz, O, 1949 The psychology of sex / by Oswald Schwarz Penguin, Harmondsworth, Middlesex.
Trudgill,P.:Sociolinguistics: An Introduction, Penguin Books, 1974(土田滋訳 : 言語と社会, 岩波書店, 1975)
Wallach M. A., & Caron A. J. (1959). "Attribute criteriality and sex-linked conservatism as determinants of psychological similarity. Journal of Abnormal and Social Psychology, 59, 43-50(心理的類似性の決定因としての帰属的規準性と性別関連の保守性)
Wright,F.: The effects of style and sex of consultants and sex of members in self-study groups, Small Group Behavior, 1976, 7, p433-456

東清和、小倉千加子(編) , ジェンダーの心理学, 早稲田大学出版部, 2000
宗方比佐子、佐野幸子、金井篤子(編), 女性が学ぶ社会心理学, 福村出版, 1996
諸井克英、中村雅彦、和田実, 親しさが伝わるコミュニケーション, 金子書房, 1999
D.Kimura, Sex And Cognition, MIT Press,Cambridge,Massachusetts, 1999. (野島久雄、三宅真季子、鈴木眞理子訳 (2001) 女の能力、男の能力 –性差について科学者が答える– 新曜社)

E.Margolies,L.VGenevie, The Samson And Delilah

Complex,Dodd,Mead &Company, Inc.,1986(近藤裕訳 サムソン＝デリラ・コンプレックス －夫婦関係の心理学－, 社会思想社,1987)

/ 各論。

// 男性単独。
E.モンテール (著), 岳野 慶作 (翻訳), 男性の心理―若い女性のために (心理学叢書) , 中央出版社, 1961/1/1
// 女性単独。
扇田 夏実 (著), 負け犬エンジニアのつぶやき~女性SE奮戦記, 技術評論社, 2004/7/6

// 男女間比較。

/// 1.能力における性差

//// 1.1 空間能力における性差

Collins,D.W. & Kimura,D.(1997) A large sex difference on a two-dimensional mental rotation task. Behavioral Neuroscience,111,845-849
Eals,M. & Silverman,I.(1994)The hunter-gatherer theory of spatial sex differences: proximate factors mediating the female advantage in recall of object arrays. Ethology & Sociobiology,15,95-105.
Galea,L.A.M. & Kimura,D.(1993) Sex differences in route learning. Personality & Individual Differences,14,53-65
Linn,M.C.,Petersen,A.C.(1985) Emergence and Characterization of Sex Differences in Spatial Ability : A Meta-Analysis. Child Development, 56, No.4, 1479-1498.
McBurney,D.H., Gaulin, S.J.C., Devineni,T. & Adams,C.(1997) Superior spatial memory of women: stronger evidence for the gathering hypothesis. Evolution & Human Behavior,18,165-174
Vandenberg,S.G. & Kuse,A.R.(1978) Mental rotations, a group test of three-dimensional spatial visualization. Perceptual & Motor Skills, 47,599-601

Watson,N.V. & Kimura,D.(1991)Nontrivial sex differences in throwing and intercepting: relation to psychometrically-defined spatial functions. Personality & Individual Differences,12,375-385

//// 1.2 数学的能力における性差

Bembow,C.P., Stanley,J.C.(1982) Consequences in high school and college of sex differences in mathematical reasoning ability : A Longtitudinal perspective. Am. Educ. Res. J. 19,598-622.
Engelhard,G.(1990) Gender differences in performance on mathematics items: evidence from USA and Thailand. Contemporary Educational Psychology,15,13-16
Hyde,J.S.,Fennema,E. & Lamon,S.J.(1990) Gender differences in mathematics performance: a meta-analysis. Psychological Bulletin,107,139-155.
Hyde,J.S.(1996) Half the human experience : The Psychology of woman. 5th ed., Lexington, Mass.: D.C.Heath.
Jensen,A.R.(1988)Sex differences in arithmetic computation and reasoning in prepubertal boys and girls. Behavioral & Brain Sciences,11,198-199
Low,R. & Over,R.(1993)Gender differences in solution of algebraic word problems containing irrelevant information. Journal of Educational Psychology,85,331-339.
Stanley,J.C., Keating,D.P., Fox,L.H. (eds.)(1974) Mathematical talent: Discovery, description, and development. Johns Hopkins University Press, Baltimore.

//// 1.3 言語能力における性差

Bleecker,M.L.,Bolla-Wilson,K. & Meyers,D.A.,(1988)Age related sex differences in verbal memory. Journal of Clinical Psychology,44,403-411.
Bromley(1958) Some effects of age on short term learning and remembering. Journal of Gerontology,13,398-406.
Duggan,L.(1950)An experiment on immediate recall in secondary school children. British Journal of Psychology,40,149-154.
Harshman,R., Hampson,E. & Berenbaum,S.(1983) Individual

differences in cognitive abilities and brain organization,Part I:
sex and handedness differences in ability. Canadian Journal of
Psychology,37,144-192.
Hyde,J.S. & Linn,M.C.(1988) Gender differences in verbal
ablility:A Meta-analysis. Psychological Bulletin, 104,
No.1,53-69.
Kimura,D.(1994)Body asymmetry and intellectual pattern.
Personality & Individual Differences,17,53-60.
Kramer,J.H.,Delis,D.C. & Daniel,M.(1988) Sex differences in
verbal learning. Journal of Clinical Psychology,44,907-915.
McGuinness,D.,Olson,A. & Chapman,J.(1990)Sex differences
in incidental recall for words and pictures. Learning &
Individual Differences,2,263-285.

//// 1.4 運動能力における性差

Denckla,M.B.(1974)Development of motor co-ordination in
normal children. Developmental Medicine & Child
Neurology,16,729-741.
Ingram,D.(1975)Motor asymmetries in young children.
Neuropsychologia,13,95-102
Nicholson,K.G. & Kimura.D.(1996) Sex differences for
speech and manual skill.Perceptual & Motor Skills,82,3-13.
Kimura,D. & Vanderwolf,C.H. (1970) The relation between
hand preference and the performance of individual finger
movements by left and right hands. Brain,93,769-774
Lomas,J. & Kimura, D.(1976) Intrahemispheric interaction
between speaking and sequential manual activity.
Neuropsychologia,14,23-33.
Watson,N.V. & Kimura,D.(1991)Nontrivial sex differences in
throwing and intercepting: relation to psychometrically-
defined spatial functions. Personality & Individual
Differences,12,375-385

//// 1.5 知覚能力における性差

Burg,A.(1966)Visual acuity as measured by dynamic and
static tests. Journal of Applied Psychology,50,460-466.
Burg,A.(1968)Lateral visual field as related to age and sex.
Journal of Applied Psychology,52,10-15.

Denckla,M.B. & Rudel,R.(1974) Rapid “automatized”naming of pictured objects,colors,letters and numbers by normal children. Cortex,10,186-202.
Dewar,R.(1967)Sex differences in the magnitude and practice decrement of th Muller-Lyer illusion. Psychonomic Science,9,345-346.
DuBois,P.H.(1939)The sex difference on the color naming test. American Journal of Psychology,52,380-382.
Ghent-Braine,L.(1961)Developmental changes in tactual thresholds on dominant and nondominant sides. Journal of Comparative & Physiological Psychology,54,670-673.
Ginsburg,N.,Jurenovskis,M. & Jamieson,J.(1982) Sex differences in critical flicker frequency. Perceptual & Motor Skills,54,1079-1082.
Hall,J.(1984)Nonverbal sex differences. Baltimore:Johns Hopkins.
McGuinness, D.(1972)Hearing: individual differences in perceiving. Perception,1,465-473.
Ligon,E.M.(1932)A genetic study of color naming and word reading. American Journal of Psychology,44,103-122.
Velle,W.(1987)Sex differences in sensory functions. Perspectives in Biology & Medicine,30,490-522.
Weinstein,S. & Sersen, E.A.(1961)Tactual sensitivity as a function of handedness and laterality. Journal of Comparative & Physiological Psychology,54,665-669.
Witkin,H.A.(1967)A cognitive style approach to cross-cultural research. International Journal of Psychology,2,233-250.

/// 2.パーソナリティの性差

Maccoby, E.E. & Jacklin, C.N.(1974) The Psychology of sex differences. Stanford,CA:Stanford University Press.

/// 3.社会的行動の性差

Brehm,J.W.(1966)A theory of psychological reactance. Academic Press.
Cacioppo,J.T. & Petty,R.E.(1980) Sex differences in influenceability:Toward specifying the underlying processes. Personality and Social Psychology Bulletin,6,651-656

Caldwell,M.A., & Peplau,L.A.(1982) Sex Differences in same-sex friendships. Sex Roles,8,721-732.
Chesler,M.A. & Barbarin,O.A.(1985) Difficulties iof providing help in crisis: Relationships between parents of children with cancer and their friends. Journal of Social Issues,40,113-134.
大坊郁夫(1988)異性間の関係崩壊についての認知的研究,日本社会心理学会第29回発表論文集,64.
Eagly,A.H.(1978) Sex differences in influenceability.Psychological Bulletin,85,86-116.
Eagly,A.H. & Carli,L.L.(1981) Sex of researchers and sex-typed communications as determinants of sex differences in influenceability:A meta-analysis of social influence studies. Psychological Bulletin,90,1-20.
Eagly,A.H. & Johnson,B.T.(1990) Gender and leadership style: A meta-analysis. Psychological Bulletin,108,233-256.
Hall,J.A.(1984) Nonverbal sex differences:Communication accuracy and expressive style. Baltimore:John Hopkins University Press.
Hays,R.B.(1984) The development and maintenance of friendship. Journal of Personal and Social Relationships,1,75-98.
Horner,M.S.(1968)Sex differences in achievement motivation and performance in competitive and non-competitive situation. Unpublished Ph.D. thesis. University of Michigan.
Jourard,S.M.(1971) Self-disclosure:An experimental analysis of the transparent self. New York:Wiley & Sons, Inc.
Jourard,S.M & Lasakow,P.(1958) Some factors in self-disclosure. Journal of Abnormal and Social Psychology, 56, 91-98.
Latane',B. & Bidwell,L.D.(1977) Sex and affiliation in college cafeteria.Personality and Social Psychology Bulletin,3,571-574
松井豊(1990)青年の恋愛行動の構造,心理学評論,33,355-370.
Nemeth,C.J. Endicott,J. & Wachtler,J.(1976) From the '50s to the '70s:Women in jury deliberations,Sociometry,39,293-304.
Rands,M. & Levinger, G. (1979)Implicit theory of relationship: An intergenerational study. Journal of Personality

and Social Psychology,37,645-661.
坂田桐子、黒川正流(1993) 地方自治体における職場のリーダーシップ機能の性差の研究-「上司の性別と部下の性別の組合せ」からの分析,産業・組織心理学研究,7,15-23.
総務庁青少年対策本部(1991) 現代の青少年－第５回青少年の連帯感などに関する調査報告書,大蔵省印刷局.
上野徳美(1994) 説得的コミュニケーションに対する被影響性の性差に関する研究,実験社会心理学研究,34,195-201
Winstead,B.A.(1986) Sex differences in same-sex friendships. In V.J.Derlega & B.A.Winstead(Eds.) Friendship and social interaction. New York:Springer-Verlag.Pp.81-99
Winstead,B.A., Derlega,V.J., Rose,S. (1997) Gender and Close Relationships. Thousand Oaks, California:Sage Publications.
山本真理子、松井豊、山成由紀子(1982) 認知された自己の諸側面の構造,教育心理学研究,30,64-68

== 世界の社会の分類。男女間における、優位性の比較。

/ 一般。

富永 健一 (著), 社会学原理, 岩波書店, 1986/12/18
岩井 弘融 (著), 社会学原論, 弘文堂, 1988/3/1

笠信太郎, ものの見方について, 1950, 河出書房
伊東俊太郎 (著) , 比較文明 UP選書 , 東京大学出版会, 1985/9/1

/ 気候。

和辻 哲郎 (著), 風土: 人間学的考察, 岩波書店, 1935
鈴木秀夫, 森林の思考・砂漠の思考, 1978, 日本放送出版協会
石田英一郎, 桃太郎の母 比較民族学的論集 , 法政大学出版局 , 1956
石田英一郎, 東西抄－日本・西洋・人間, 1967, 筑摩書房

松本 滋 (著), 父性的宗教 母性的宗教 (UP選書) , 東京大学出版会, 1987/1/1
ハンチントン (著), 間崎 万里 (翻訳), 気候と文明 (1938年) (岩波文庫) , 岩波書店, 1938
安田 喜憲 (著), 大地母神の時代—ヨーロッパからの発想 (角川選書) , 角川書店, 1991/3/1
安田 喜憲 (著), 気候が文明を変える (岩波科学ライブラリー (7)) , 岩波書店, 1993/12/20

鈴木 秀夫 (著), 超越者と風土 , 原書房, 2004/1/1
鈴木 秀夫 (著), 森林の思考・砂漠の思考 (NHKブックス 312) , NHK出版1978/3/1
鈴木 秀夫 (著), 風土の構造, 原書房, 2004/12/1
梅棹 忠夫 (著), 文明の生態史観, 中央公論社, 1967

ラルフ・リントン (著), 清水 幾太郎 (翻訳), 犬養 康彦 (翻訳), 文化人類学入門 (現代社会科学叢書), 東京創元社, 1952/6/1
祖父江孝男『文化とパーソナリティ』弘文堂，1976
F.L.K.シュー (著), 作田 啓一 (翻訳), 浜口 恵俊 (翻訳), 比較文明社会論—クラン・カスト・クラブ・家元 (1971年), 培風館，1970．

J・J・バハオーフェン (著), 吉原 達也 (翻訳), 母権論序説 付・自叙伝, 創樹社, 1989/10/20

阿部 一, 家族システムの風土性, 東洋学園大学紀要 (19), 91-108, 2011-03

/ 移動性。

大築立志, 手の日本人、足の西欧人, 1989, 徳間書店
前村 奈央佳, 移動と定住に関する心理的特性の検討 : 異文化志向と定住志向の測定および関連性について, 関西学院大学先端社会研究所紀要, 6号 pp.109-124, 2011-10-31

浅川滋男, 東アジア漂海民と家船居住, 鳥取環境大学, 紀要, 創刊号, 2003.2 pp41-60

/ 食糧の確保の手段。
千葉徳爾, 農耕社会と牧畜社会, 山田英世 (編), 風土論序説 (比較思想・文化叢書) , 国書刊行会, 1978/3/1
大野 盛雄 (著), アフガニスタンの農村から―比較文化の視点と方法 (1971年) (岩波新書) , 岩波書店, 1971/9/20
梅棹 忠夫 (著), 狩猟と遊牧の世界―自然社会の進化, 講談社, 1976/6/1
志村博康 (著), 農業水利と国土, 東京大学出版会, 1987/11/1

/ 心理。
Triandis H.C., Individualism & Collectivism, Westview Press, 1995, (H.C. トリアンディス (著), Harry C. Triandis (原著), 神山 貴弥 (翻訳), 藤原 武弘 (翻訳), 個人主義と集団主義―2つのレンズを通して読み解く文化, 北大路書房, 2002/3/1)
Yamaguchi, S., Kuhlman, D. M., & Sugimori, S. (1995). Personality correlates of allocentric tendencies in individualist and collectivist cultures. Journal of Cross-Cultural Psychology, 26, 658-672
Markus H.R.,Kitayama,S., Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. Psychological Review, 98, pp224-253 1991

千々岩 英彰 (編集), 図解世界の色彩感情事典―世界初の色彩認知の調査と分析, 河出書房新社, 1999/1/1

== 男性優位社会。移動生活様式。遊牧と牧畜。気体。

/ 欧米諸国。全般。
星 翔一郎 (著), 国際文化教育センター (編集), 外資系企業

就職サクセスブック, ジャパンタイムズ, 1986/9/1

/ 西欧。
// 単独社会。
// 社会間比較。
西尾幹二, ヨーロッパの個人主義, 1969, 講談社
会田 雄次 (著), 『アーロン収容所：西欧ヒューマニズムの限界』中公新書, 中央公論社 1962年
池田 潔 (著), 自由と規律: イギリスの学校生活 (岩波新書), 岩波書店, 1949/11/5

鯖田 豊之 (著), 肉食の思想—ヨーロッパ精神の再発見 (中公新書 92) , 中央公論社, 1966/1/1
八幡 和郎 (著), フランス式エリート育成法—ENA留学記 (中公新書 (725)) , 中央公論社, 1984/4/1
木村 治美 (著), 新交際考—日本とイギリス, 文藝春秋, 1979/11/1
森嶋 通夫 (著), イギリスと日本—その教育と経済 (岩波新書 黄版 29) , 岩波書店, 2003/1/21
/ アメリカ。
// 単独社会。
松浦秀明, 米国さらりーまん事情, 1981, 東洋経済新報社
Stewart, E.C., American Cultural Patterns A Cross-Cultural Perspectives, 1972, Inter-cultural Press（久米昭元訳, アメリカ人の思考法, 1982, 創元社）
吉原 真里 (著), Mari Yoshihara (著), アメリカの大学院で成功する方法—留学準備から就職まで (中公新書), 中央公論新社, 2004/1/1
リチャード・H. ロービア (著), Richard H. Rovere (原著), 宮地 健次郎 (翻訳), マッカーシズム (岩波文庫) , 岩波書店, 1984/1/17
G.キングスレイ ウォード (著), 城山 三郎 (翻訳), ビジネスマンの父より息子への30通の手紙, 新潮社, 1987/1/1
長沼英世, ニューヨークの憂鬱ー豊かさと快適さの裏側, 中央公論社, 1985

八木 宏典 (著), カリフォルニアの米産業, 東京大学出版会, 1992/7/1
// 社会間比較。
/ ユダヤ。
// 単独社会。
旧約聖書。
新約聖書。
中川 洋一郎, キリスト教・三位一体論の遊牧民的起源―イヌの《仲介者》化によるセム系一神教からの決別―, 経済学論纂（中央大学）第60巻第５・６合併号（2020年３月）,pp.431-461
トマス・ア・ケンピス (著), 大沢 章 (翻訳), 呉 茂一 (翻訳), キリストにならいて (岩波文庫) , 岩波書店, 1960/5/25
// 社会間比較。
/ 中東。
// 単独社会。
クルアーン。コーラン。
鷹木 恵子 U.A.E.地元アラブ人の日常生活にみる文化変化 : ドバイでの文化人類学的調査から
http://id.nii.ac.jp/1509/00000892/ Syouwa63nenn
// 社会間比較。
後藤 明 (著), メッカ―イスラームの都市社会 (中公新書 1012) , 中央公論新社, 1991/3/1
片倉もとこ『「移動文化考」 イスラームの世界をたずねて 』日本経済新聞社、1995年
片倉もとこ『イスラームの日常世界』岩波新書 , 1991 .
牧野 信也 (著), アラブ的思考様式, 講談社, 1979/6/1
井筒 俊彦 (著), イスラーム文化−その根柢にあるもの , 岩波書店, 1981/12/1
/ モンゴル。
// 単独社会。
鯉渕 信一 (著), 騎馬民族の心―モンゴルの草原から (NHKブックス) , 日本放送出版協会, 1992/3/1

// 社会間比較。

== 女性優位社会。定住生活様式。農耕。液体。
/ 東アジア。
山口 勧 (編集), 社会心理学―アジア的視点から (放送大学教材) , 放送大学教育振興会, 1998/3/1
山口 勧 (編集), 社会心理学―アジアからのアプローチ, 東京大学出版会, 2003/5/31
石井 知章 (著), K・A・ウィットフォーゲルの東洋的社会論, 社会評論社, 2008/4/1
/ 日本。
// 単独社会。

/// 文献調査。
南博, 日本人論－明治から今日まで , 岩波書店, 1994
青木保, 「日本文化論」の変容-戦後日本の文化とアイデンティティー-, 中央公論社, 1990

/// 社会全般。
//// 著者が、日本人の場合。
浜口恵俊 「日本らしさ」の再発見 日本経済新聞社 1977
阿部 謹也 (著), 「世間」とは何か (講談社現代新書) , 講談社, 1995/7/20
川島武宣, 日本社会の家族的構成, 1948, 学生書房

中根千枝, タテ社会の人間関係, 講談社, 1967
木村敏, 人と人との間, 弘文堂, 1972
山本七平 (著), 「空気」の研究, 文藝春秋, 1981/1/1
会田 雄次 (著), 日本人の意識構造 (講談社現代新書) , 講談社, 1972/10/25
石田英一郎, 日本文化論 筑摩書房 1969
荒木博之, 日本人の行動様式 -他律と集団の論理- , 講談社, 1973

吉井博明 情報化と現代社会[改訂版] 1997 北樹出版

//// 著者が、日本人以外の場合。
///// 欧米諸国からの視点。
Benedict,R., The Chrysanthemum and the Sword : Patterns of Japanese Culture, Boston Houghton Mifflin, 1948（長谷川松治訳, 菊と刀－日本文化の型, 社会思想社, 1948）
Caudill,W., Weinstein,H., Maternal Care and Infant Behavior in Japan and America, Psychiatry,32 1969
Clark,G.The Japanese Tribe:Origins of a Nation's Uniqueness, 1977(村松増美訳 日本人－ユニークさの源泉－, サイマル出版会 1977)
Ederer,G., Das Leise Laecheln Des Siegers, 1991, ECON Verlag(増田靖訳 勝者・日本の不思議な笑い, 1992 ダイヤモンド社)
Kenrick,D.M., Where Communism Works: The Success of Competitive-Communism In Japan,1988,Charles E. Tuttle Co., Inc.,（ダグラス・M. ケンリック (著), 飯倉 健次 (翻訳), なぜ"共産主義"が日本で成功したのか, 講談社, 1991/11/1）
Reischauer,E.O., The Japanese Today: Change and Continuity,1988, Charles E. Tuttle Co. Inc.
W.A.グロータース (著), 柴田 武 (翻訳), 私は日本人になりたい―知りつくして愛した日本文化のオモテとウラ (グリーン・ブックス 56) , 大和出版, 1984/10/1

///// 東アジアからの視点。
李 御寧 (著), 「縮み」志向の日本人, 学生社, 1984/11/1

/// 心理。
安田三郎「閥について――日本社会論ノート（3）」（『現代社会学3』2巻1号所収・1975・講談社）
木村敏, 人と人との間－精神病理学的日本論, 1972, 弘文堂

丸山真男, 日本の思想, 1961, 岩波書店
統計数理研究所国民性調査委員会 (編集), 日本人の国民性〈第5〉戦後昭和期総集, 出光書店, 1992/4/1

/// コミュニケーション。
芳賀綏, 日本人の表現心理, 中央公論社, 1979

/// 歴史。
R.N.ベラー (著), 池田 昭 (翻訳), 徳川時代の宗教 (岩波文庫), 岩波書店, 1996/8/20
勝俣 鎮夫 (著), 一揆 (岩波新書) , 岩波書店, 1982/6/21
永原 慶二 (著), 日本の歴史〈10〉下克上の時代, 中央公論社, 1965年
戸部 良一 (著), 寺本 義也 (著), 鎌田 伸一 (著), 杉之尾 孝生 (著), 村井 友秀 (著), 野中 郁次郎 (著), 失敗の本質—日本軍の組織論的研究, ダイヤモンド社, 1984/5/1

/// 民俗。
宮本 常一 (著), 忘れられた日本人 (岩波文庫) , 岩波書店, 1984/5/16

/// 食糧の確保。
大内力 (著), 金沢夏樹 (著), 福武直 (著) , 日本の農業 UP選書, 東京大学出版会, 1970/3/1

/// 地域。
//// 村落。
中田 実 (編集), 坂井 達朗 (編集), 高橋 明善 (編集), 岩崎 信彦 (編集), 農村 (リーディングス日本の社会学) , 東京大学出版会, 1986/5/1
蓮見 音彦 (著), 苦悩する農村—国の政策と農村社会の変

容, 有信堂高文社, 1990/7/1
福武直 (著) , 日本農村の社会問題 UP選書, 東京大学出版会, 1969/5/1
余田 博通 (編集), 松原 治郎 (編集), 農村社会学 (1968年) (社会学選書) , 川島書店, 1968/1/1
今井幸彦 編著, 日本の過疎地帯 (1968年) (岩波新書), 岩波書店, 1968-05

きだみのる (著), 気違い部落周游紀行 (冨山房百科文庫 31), 冨山房, 1981/1/30
きだ みのる (著), にっぽん部落 (1967年) (1967年) (岩波新書)

//// 都市。
鈴木広 高橋勇悦 篠原隆弘 編, リーディングス日本の社会学 7 都市, 東京大学出版会, 1985/11/1
倉沢 進 (著), 秋元 律郎 (著), 町内会と地域集団 (都市社会学研究叢書) , ミネルヴァ書房, 1990/9/1
佐藤 文明 (著), あなたの「町内会」総点検［三訂増補版］―地域のトラブル対処法 (プロブレムQ&A), 緑風出版, 2010/12/1

//// エリア毎の特色。
京都新聞社 (編さん), 京男・京おんな, 京都新聞社, 1984/1/1
丹波 元 (著), こんなに違う京都人と大阪人と神戸人 (PHP文庫) , PHP研究所, 2003/3/1
サンライズ出版編集部 (編集), 近江商人に学ぶ, サンライズ出版, 2003/8/20

/// 血縁関係。
有賀 喜左衛門 (著), 日本の家族 (1965年) (日本歴史新書) , 至文堂, 1965/1/1
光吉 利之 (編集), 正岡 寛司 (編集), 松本 通晴 (編集), 伝統

家族 (リーディングス 日本の社会学) , 東京大学出版会, 1986/8/1

/// 政治。
石田雄, 日本の政治文化－同調と競争, 1970, 東京大学出版会
京極純一, 日本の政治, 1983, 東京大学出版会

/// ルール。法律。
青柳文雄, 日本人の罪と罰, 1980, 第一法規出版
川島武宣, 日本人の法意識 (岩波新書 青版A-43) , 岩波書店, 1967/5/20

/// 行政。
辻清明 新版 日本官僚制の研究 東京大学出版会 1969
藤原 弘達 (著), 官僚の構造 (1974年) (講談社現代新書) , 講談社, 1974/1/1
井出嘉憲 (著), 日本官僚制と行政文化—日本行政国家論序説, 東京大学出版会, 1982/4/1
竹内 直一 (著), 日本の官僚—エリート集団の生態 (現代教養文庫) , 社会思想社, 1988/12/1
教育社 (編集), 官僚—便覧 (1980年) (教育社新書—行政機構シリーズ〈122〉), 教育社, 1980/3/1
加藤栄一, 日本人の行政—ウチのルール (自治選書), 第一法規出版, 1980/11/1
新藤 宗幸 (著), 技術官僚—その権力と病理 (岩波新書), 岩波書店, 2002/3/20
新藤 宗幸 (著), 行政指導—官庁と業界のあいだ (岩波新書) , 岩波書店, 1992/3/19

武藤 博己 (著), 入札改革—談合社会を変える (岩波新書) , 岩波書店, 2003/12/19

宮本政於, お役所の掟, 1993, 講談社

/// 経営。
間宏,日本的経営－集団主義の功罪,日本経済新聞社,1973
岩田龍子, 日本の経営組織, 1985, 講談社
高城 幸司 (著), 「課長」から始める 社内政治の教科書, ダイヤモンド社, 2014/10/31

/// 教育。
大槻 義彦 (著), 大学院のすすめ—進学を希望する人のための研究生活マニュアル, 東洋経済新報社, 2004/2/13
山岡栄市 (著), 人脈社会学—戦後日本社会学史 (御茶の水選書) , 御茶の水書房, 1983/7/1

/// スポーツ。
Whiting, R., The Chrysanthemum and the Bat 1977 Harper Mass Market Paperbacks（松井みどり訳, 菊とバット 1991 文藝春秋）

/// 性差。
//// 母性。母親。
Caudill,W., Weinstein, H., Maternal Care and Infant Behavior in Japan and America Psychiatry,32 1969

河合隼雄, 母性社会日本の病理, 中央公論社 1976
佐々木 孝次 (著), 母親と日本人, 文藝春秋, 1985/1/1
小此木 啓吾 (著), 日本人の阿闍世コンプレックス, 中央公論社, 1982
斎藤学, 『「家族」という名の孤独』講談社 1995
山村賢明, 日本人と母—文化としての母の観念についての研究, 東洋館出版社, 1971/1/1
土居健郎, 「甘え」の構造, 1971, 弘文堂

山下 悦子 (著), 高群逸枝論—「母」のアルケオロジー, 河出書房新社, 1988/3/1

山下 悦子 (著), マザコン文学論―呪縛としての「母」(ノマド叢書) , 新曜社, 1991/10/1

中国新聞文化部 (編集), ダメ母に苦しめられて (女のココロとカラダシリーズ) , ネスコ, 1999/1/1

加藤秀俊, 辛口教育論 第四回 衣食住をなくした家, 食農教育 200109, 農山漁村文化協会

//// 女性。
木下 律子 (著), 妻たちの企業戦争 (現代教養文庫) , 社会思想社, 1988/12/1
木下律子 (著), 王国の妻たち―企業城下町にて, 径書房, 1983/8/1
中国新聞文化部 (編集), 妻の王国―家庭内"校則"に縛られる夫たち (女のココロとカラダシリーズ), ネスコ, 1997/11/1

//// 男性。
中国新聞文化部 (編集), 長男物語―イエ、ハハ、ヨメに縛られて (女のココロとカラダシリーズ) , ネスコ, 1998/7/1
中国新聞文化部 (編集), 男が語る離婚―破局のあとさき (女のココロとカラダシリーズ) , ネスコ, 1998/3/1

// 社会間比較。
/// 欧米諸国との比較。
山岸俊男, 信頼の構造, 1998, 東京大学出版会
松山幸雄「勉縮」のすすめ, 朝日新聞社, 1978
木村尚三郎, ヨーロッパとの対話, 1974, 日本経済新聞社
栗本 一男 (著), 国際化時代と日本人―異なるシステムへの対応 (NHKブックス 476) , 日本放送出版協会, 1985/3/1
/// 社会の特殊性。その有無についての検討。

高野陽太郎、纓坂英子, ” 日本人の集団主義” と” アメリカ人の個人主義” -通説の再検討-心理学研究vol.68 No.4,pp312-327,1997
杉本良夫、ロス・マオア, 日本人は「日本的」か－特殊論を超え多元的分析へ－, 1982, 東洋経済新報社
/// 血縁関係。
増田光吉, アメリカの家族・日本の家族, 1969, 日本放送出版協会
中根千枝『家族を中心とする人間関係』講談社，1977
/// コミュニケーション。
山久瀬 洋二 (著), ジェイク・ロナルドソン (翻訳), 日本人が誤解される100の言動 100 Cross-Cultural Misunderstandings Between Japanese People and Foreigners 【日英対訳】 (対訳ニッポン双書) , IBCパブリッシング, 2010/12/24
鈴木 孝夫 (著), ことばと文化 (岩波新書) , 岩波書店, 1973/5/21
/// 独創性。
西沢潤一, 独創は闘いにあり, 1986, プレジデント社
江崎玲於奈, アメリカと日本－ニューヨークで考える, 1980, 読売新聞社
乾侑, 日本人と創造性, －科学技術立国実現のために, 1982, 共立出版
S.K.ネトル、桜井邦朋, 独創が生まれない－日本の知的風土と科学, 1989, 地人書館

/// 経営。
Abegglen, J.C.,The Japanese Factory:Aspects of Its Social Organization,Free Press 1958 (占部都美 監訳 「日本の経営」 ダイヤモンド社 1960)
林 周二, 経営と文化, 中央公論社, 1984
太田肇 (著) , 個人尊重の組織論, 企業と人の新しい関係 (中公新書) , 中央公論新社, 1996/2/25
/// 保育。
Caudill,W., Weinstein, H., Maternal Care and Infant Behavior

in Japan and America Psychiatry,32 1969
/// 教育。
岡本 薫 (著), 新不思議の国の学校教育―日本人自身が気づいていないその特徴, 第一法規, 2004/11/1
宮智 宗七 (著), 帰国子女―逆カルチュア・ショックの波紋 (中公新書) 中央公論社, 1990/1/1
グレゴリー・クラーク (著), Gregory Clark (原著), なぜ日本の教育は変わらないのですか? , 東洋経済新報社, 2003/9/1
恒吉僚子, 人間形成の日米比較－かくれたカリキュラム, 1992, 中央公論社
/// 性差。
//// 女性。
杉本 鉞子 (著), 大岩 美代 (翻訳), 武士の娘 (筑摩叢書 97) , 筑摩書房, 1967/10/1
//// 男性。
グスタフ・フォス (著), 日本の父へ, 新潮社, 1977/3/1
/ 韓国。
// 単独社会。
朴 泰赫 , 醜い韓国人, ―われわれは「日帝支配」を叫びすぎる (カッパ・ブックス) 新書 – , 光文社, 1993/3/1
朴 承薫 (著), 韓国 スラングの世界, 東方書店, 1986/2/1
// 社会間比較。
コリアンワークス, 知れば知るほど理解が深まる「日本人と韓国人」なるほど事典―衣食住、言葉のニュアンスから人づきあいの習慣まで (PHP文庫) 文庫 – , PHP研究所, 2002/1/1
造事務所 , こんなに違うよ！ 日本人・韓国人・中国人 (PHP文庫), PHP研究所 (2010/9/30)
/ 中国。
// 単独社会。
/// 社会全般。
林 松濤 (著), 王 怡韡 (著), 舩山 明音 (著) , 日本人が知りたい中国人の当たり前, 中国語リーディング, 三修社,

2016/9/20
/// 心理。
園田茂人, 中国人の心理と行動, 2001, 日本放送出版協会
デイヴィッド・ツェ (著), 吉田 茂美 (著), 関係(グワンシ)中国人との関係のつくりかた , ディスカヴァー・トゥエンティワン, 2011/3/16
/// 歴史。
加藤 徹 (著), 西太后―大清帝国最後の光芒 (中公新書) 新書 – , 中央公論新社, 2005/9/1
宮崎 市定 (著), 科挙―中国の試験地獄 (中公新書 15) , 中央公論社, 1963/5/1
/// 血縁関係。
瀬川 昌久, 現代中国における宗族の再生と文化資源化 東北アジア研究 18 pp.81-97 2014-02-19
// 社会間比較。
邱 永漢 (著), 騙してもまだまだ騙せる日本人―君は中国人を知らなさすぎる, 実業之日本社, 1998/8/1
邱永漢 (著) , 中国人と日本人, 中央公論新社, 1993
/ ロシア。
// 単独社会。
/// 社会全般。
ヘドリック スミス (著), 飯田 健一 (翻訳), 新・ロシア人〈上〉, 日本放送出版協会, 1991/2/1
ヘドリック スミス (著), 飯田 健一 (翻訳), 新・ロシア人〈下〉, 日本放送出版協会, 1991/3/1
/// 歴史。
伊賀上 菜穂, 結婚儀礼に現れる帝政末期ロシア農民の親族関係 : 記述資料分析の試み スラヴ研究, 49, 179-212 2002
奥田 央, 1920年代ロシア農村の社会政治的構造（１）, 村ソヴェトと農民共同体, 東京大学, 経済学論集, 80 1-2, 2015-7 https://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp › econ0800102
大矢 温, スラヴ派の共同体論における「ナショナル」意識 – 民族意識から国民意識への展開 –, 札幌法学 29 巻

1・2 合併号（2018）, pp.31-53
// 社会間比較。
/// 心理。
アレックス インケルス (著), Alex Inkeles (原著), 吉野 諒三 (翻訳), 国民性論―精神社会的展望, 出光書店, 2003/9/1
服部 祥子 (著), 精神科医の見たロシア人 (朝日選書 245), 朝日新聞社出版局, 1984/1/1
/// 民俗。
アレクサンドル・プラーソル, ロシアと日本：民俗文化のアーキタイプを比較して, 新潟国際情報大学情報文化学部紀要第10号、2007.
/// 血縁関係。
高木正道, ロシアの農民と中欧の農民, ――家族形態の比較――, 法経研究, 42巻1号 pp.1-38, 1993
/// 経営。
宮坂 純一, ロシアではモチベーションがどのような内容で教えられているのか, 社会科学雑誌』第５巻（2012年11月）―― 503-539
宮坂 純一, 日ロ企業文化比較考, 『社会科学雑誌』第 18 巻（2017 年 9 月）――, pp.1-48
/// 性差。
Д.Х. Ибрагимова, Кто управляет деньгами в российских семьях?, Экономическая социология. Т. 13. № 3. Май 2012, pp22-56

/ 東南アジア。
// 単独社会。
丸杉孝之助, 東南アジアにおける農家畜産と農業経営, 熱帯農業, 19(1), 1975 pp.46-49
中川 剛 (著), 不思議のフィリピン―非近代社会の心理と行動 (NHKブックス) , 日本放送出版協会, 1986/11/1
// 社会間比較。

== 液体。

/ 液体の性質。液体の動き。
小野周 著, 温度とはなにか , 岩波書店、1971
小野 周 (著), 表面張力 (物理学one point 9), 共立出版, 1980/10/1
イーゲルスタッフ (著), 広池 和夫 (翻訳), 守田 徹 (翻訳), 液体論入門 (1971年) (物理学叢書) , 吉岡書店, 1971
上田 政文 (著), 湿度と蒸発―基礎から計測技術まで, コロナ社, 2000/1/1
稲松 照子 (著), 湿度のおはなし, 日本規格協会, 1997/8/1
伊勢村 寿三 (著), 水の話 (化学の話シリーズ (6)) , 培風館, 1984/12/1
力武常次 (著), 基礎からの物理 総合版 (チャート式シリーズ) , 数研出版, 数研出版, 1986/1/1
野村 祐次郎 (著), 小林 正光 (著), 基礎からの化学 総合版 (チャート式・シリーズ) , 数研出版, 1985/2/1
物理学辞典編集委員会 , 物理学辞典 改訂版 , 培風館, 1992
池内満, 分子のおもちゃ箱 , 2008年1 月19日
http://mike1336.web.fc2.com/ (2008年2月23日)
/ 液体の知覚。
大塚巌 (2008). ドライ、ウェットなパーソナリティの認知と気体、液体の運動パターンとの関係. パーソナリティ研究, 16, 250-252

== 生物。
/ 総論。
鈴木孝仁, 本川達雄, 鷲谷いづみ, チャート式シリーズ, 新生物 生物基礎・生物 新課程版, 数研出版, 2013/2/1
/ 遺伝子。
リチャード・ドーキンス【著】 , 日高敏隆 , 岸由二 , 羽田節子 , 垂水雄二【訳】, 利己的な遺伝子, 紀伊國屋書店, 1991/02/28
/ 精子。卵子。
緋田 研爾 (著), 精子と卵のソシオロジー―個体誕生へのドラマ (中公新書) 中央公論社, 1991/3/1

/ 神経系。
二木 宏明 (著), 脳と心理学―適応行動の生理心理学 (シリーズ脳の科学) , 朝倉書店, 1984/1/1
山鳥 重 (著), 神経心理学入門, 医学書院, 1985/1/1
伊藤 正男 (著), 脳の設計図 (自然選書) , 中央公論社, 1980/9/1
D.O.ヘッブ (著), 白井 常 (翻訳), 行動学入門―生物科学としての心理学 (1970年) , 紀伊国屋書店, 1970/1/1
// 知覚。
岩村 吉晃 (著), タッチ (神経心理学コレクション), 医学書院, 2001/4/1
松田 隆夫 (著), 知覚心理学の基礎, 培風館, 2000/7/1
// パーソナリティ。
Murray,H.A., 1938, Exploration in personality:A clinical and experimental study of fifty men of collegeage.
Schacter, S., 1959, The Psychology of affiliation.Stanford University press.
三隅三不二, 1978, リーダーシップの科学, 有斐閣
Fiedler,F.E., 1973, The trouble with leadership training is that it doesn’t train leaders-by. Psychology Today Feb(山本憲久訳 1978 リーダーシップを解明する 岡堂哲雄編 現代のエスプリ131: グループ・ダイナミクス 至文堂).
Snyder,M., 1974, The self-monitoring of expssive behavior. Journal of Personality and Social Psychology, 30, 526-537.
Fenigstein, A., Scheier,M.F., & Buss,A.H., 1975, Public and private self-consciousness: Assessment and theory. Journal of Consulting and Clinical Psychology,43,522-527.
押見輝男, 自分を見つめる自分-自己フォーカスの社会心理学, サイエンス社, 1992
Wicklund, R.A., & Duval,S. 1971 Opinion change and performance facilitation as a result of objective self-awareness. Journal of Experimental Social Psychology,7,319-342.
Jourard, S.M. 1971, The transparent self, rev.ed.Van Nostrand Reinhold(岡堂哲雄訳 1974 透明なる自己 誠信書房).
Brehm, J.W.,1966, A Theory of psychological reactance. Academicpss.

Toennies, F.,1887, Gemeinshaft und Gesellshaft, Leipzig,(杉之原寿一訳 「ゲマインシャフトとゲゼルシャフト」1957 岩波書店)
McCrae, R. R., Costa, P. T., Jr., 1987, Validation of the five-factor model of personality across instruments and observers., Journal of Personality and Social Psychology, 52, 81-90
Eysenck, H. J., 1953, The structure of human personality. New York: Wiley.
Edwards, A.L., 1953, The relationship between judged desirebility of a trait and the plobability that the trait will be endowsed. Journal of Applied Psychology, 37,90-93
// 情報。
吉田 民人 (著), 情報と自己組織性の理論, 東京大学出版会, 1990/7/1
/ 社会性。
吉田 民人 (著), 主体性と所有構造の理論, 東京大学出版会, 1991/12/1

/ 人間以外の生物。
// 行動。
デティアー(著), ステラー(著), 日高敏隆(訳),小原嘉明(訳), 動物の行動－現代生物学入門7巻, 岩波書店, 1980/1/1
// 心理。
D.R.グリフィン (著), 桑原 万寿太郎 (翻訳), 動物に心があるか―心的体験の進化的連続性 (1979年) (岩波現代選書―NS〈507〉), 岩波書店, 1979年
// 文化。
J.T.ボナー (著), 八杉 貞雄 (翻訳), 動物は文化をもつか (1982年) (岩波現代選書―NS〈532〉) , 岩波書店, 1982/9/24
// 社会。
今西 錦司 (著), 私の霊長類学 (講談社学術文庫 80) , 講談社, 1976/11/1
今西錦司『私の自然観』講談社学術文庫，1990 (1966)．
河合雅雄 (著), ニホンザルの生態, 河出書房新社, 1976/1/1

伊谷純一郎 (著) , 高崎山のサル (講談社文庫), 講談社, 1973/6/26
伊谷純一郎 (著) , 霊長類社会の進化 (平凡社 自然叢書) 単行本 –, 平凡社, 1987/6/1
/ 無神論。
リチャード・ドーキンス (著), 垂水 雄二 (翻訳), 神は妄想である―宗教との決別, 早川書房, 2007/5/25

== 辞書。
新村出（編著）,広辞苑－第5版, 岩波書店, 1998
Stein, J., & Flexner, S. B. (Eds.), The Random House Thesaurus., Ballantine Books., 1992

== データ分析の方法。
田中敏 (2006). 実践心理データ解析 改訂版 新曜社
中野博幸, JavaScript-STAR , 2007年11月9日
http://www.kisnet.or.jp/nappa/software/star/ (2008年2月25日)

私が執筆した全ての書籍。その一覧。

Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) Sex Differences And Female Dominance
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) 性别差异和女性主导地位
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) Половые различия и женское превосходство
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) 男女の性差と女性の優位性

Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) Female-Dominated Society Will Rule The World.
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) 女性主导的社会将统治世界
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) Общество, в котором доминируют женщины, будет править миром.
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) 女性優位社会が、世界を支配する。

Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) Mobile Life. Settled Life. The origins of social sex differences.
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) 移动生活。定居生活。社会性别差异的起源。
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) Мобильная жизнь. Урегулированная жизнь. Истоки социальных различий по половому признаку.
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) 移動生活様式。定住生活様式。社会的性差の起源。

Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) The essence of life. The essence of human beings. The darkness of them.
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) 生物的本质。人类的本质。他们的黑暗。
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) Сущность жизни. Сущность человеческих существ. Их тьма.
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) 生物の本質。人間の本質。それらの暗黒性。

Iwao Otsuka (Aug 21, 2020) On Atheism and the Salvation of the Soul. Live by neuroscience!
Iwao Otsuka (Aug 21, 2020) 论无神论与灵魂的救赎。靠神经科学生存！

Iwao Otsuka (Aug 21, 2020) Об атеизме и спасении души. Живи неврологией!
Iwao Otsuka (Aug 21, 2020) 無神論と魂の救済について。脳神経科学で生きよう！

Iwao Otsuka (Aug 24, 2020) Dryness. Wetness. Sensation of humidity. Perception of humidity. Personality Humidity. Social Humidity.
Iwao Otsuka (Aug 24, 2020) 干性。湿气。湿度的感觉。对湿度的感知。性格湿度。社会湿度。
Iwao Otsuka (Aug 24, 2020) Сухость. Мокрота. Сенсация влажности. Восприятие влажности. Личностная влажность. Социальная влажность.
Iwao Otsuka (Aug 24, 2020) ドライさ。ウェットさ。湿度の感覚。湿度の知覚。性格の湿度。社会の湿度。

Iwao Otsuka (Aug 26, 2020) Gases and liquids. Classification of behavior and society. Applications to life and humans.
Iwao Otsuka (Aug 26, 2020) 气体和液体。行为与社会的分类。在生活和人类中的应用。
Iwao Otsuka (Aug 26, 2020) Газы и жидкости. Классификация поведения и общества. Применение к жизни и человеку.
Iwao Otsuka (Aug 26, 2020) 気体と液体。行動や社会の分類。生物や人間への応用。

Iwao Otsuka (Sep 3, 2020) Elements of livability. Functionalism of life. Society as life.
Iwao Otsuka (Sep 3, 2020) 宜居的要素。生活的功能主义。社会即生活。
Iwao Otsuka (Sep 3, 2020) Элементы благоустроенности. Функциональность жизни. Общество как жизнь.

Iwao Otsuka (Sep 3, 2020) 生きやすさの素。生物の機能主義。生物としての社会。

Iwao Otsuka (Sep 4, 2020) The laws of history. History as a system. History for life.
Iwao Otsuka (Sep 4, 2020) 历史的规律。历史是一个系统。历史的生物。
Iwao Otsuka (Sep 4, 2020) Законы истории. История как система. История на всю жизнь.
Iwao Otsuka (Sep 4, 2020) 歴史の法則。システムとしての歴史。生物にとっての歴史。

Iwao Otsuka (Sep 21, 2020) Social Theory of Maternal Authority. A Society of Strong Mothers. Japanese Society as a Case Study.
Iwao Otsuka (Sep 20, 2020) 母亲权威的社会理论。强势母亲的社会。以日本社会为个案研究。
Iwao Otsuka (Sep 20, 2020) Социальная теория материнства: Общество сильных матерей. Японское общество как пример.
Iwao Otsuka (Sep 15, 2020) 母権社会論－強い母の社会。事例としての日本社会。－

Iwao Otsuka (Sep 21, 2020) Mechanisms of Japanese society. A society of acquired settled groups.
Iwao Otsuka (Sep 21, 2020) 日本社会的机制。后天定居群体的社会。
Iwao Otsuka (Sep 21, 2020) Механизмы японского общества. Общество приобретенных оседлых групп.
Iwao Otsuka (Aug 28, 2020) 日本社会のメカニズム。後天

的定住集団の社会。

Iwao Otsuka (Oct 25, 2020) Inertial Society
Iwao Otsuka (Oct 25, 2020) 惯性社会（中文版本）
Iwao Otsuka (Oct 25, 2020) инерционное общество
Iwao Otsuka (Oct 25, 2020) 慣性社会（日本語版）

Iwao Otsuka (Oct 27, 2020) Neurosociology
Iwao Otsuka (Oct 27, 2020) 神经社会学（中文版本）
Iwao Otsuka (Oct 27, 2020) Нейросоциология
Iwao Otsuka (Oct 27, 2020) 神経社会学（日本語版）

Iwao Otsuka (Oct 29, 2020) From transportation-centric society to communication-centric society. The Progress of Transition.
Iwao Otsuka (Oct 29, 2020) 从以交通为中心的社会向以通信为中心的社会。转型的进展。
Iwao Otsuka (Oct 29, 2020) От общества, ориентированного на транспорт, к обществу, ориентированному на коммуникации. Прогресс переходного периода.
Iwao Otsuka (Oct 29, 2020) 交通中心社会から通信中心社会へ。移行の進展。

Iwao Otsuka (Nov 9, 2020) The Sociology of the Individual - The Elemental Reduction Approach.
Iwao Otsuka (Nov 9, 2020) 个人社会学 -元素还原法。
Iwao Otsuka (Nov 9, 2020) Социология личности -Элементный подход к сокращению.
Iwao Otsuka (Nov 9, 2020) 個人の見える社会学　－要素

還元アプローチ –

Iwao Otsuka (Nov 9, 2020) Introduction Of A White Tax To Counter Discrimination Against Blacks.
Iwao Otsuka (Nov 9, 2020) 引入白人税以打击对黑人的歧视
Iwao Otsuka (Nov 9, 2020) Введение белого налога для противодействия дискриминации черных
Iwao Otsuka (Nov 9, 2020) 黒人差別対策としての白人税導入

Iwao Otsuka (Nov 20, 2020) Personality and sensation, perception. Light and dark. Warm and cold. Hard and soft. Loose and tight. Tense and relaxed.
Iwao Otsuka (Nov 20, 2020) 人格与感觉、知觉。明与暗。温暖与寒冷。硬和软。松与紧。紧张与放松。
Iwao Otsuka (Nov 20, 2020) Личность и ощущения, восприятие. Светлое и темное. Тепло и холодно. Твердый и мягкий. Свободный и тугой. Напряженный и расслабленный.
Iwao Otsuka (Nov 20, 2020) 性格と感覚、知覚。明暗。温冷。硬軟。緩さときつさ。緊張とリラックス。

Iwao Otsuka (Nov 21, 2020) Motherhood and Fatherhood. Maternal and paternal authority. Parents and Power.
Iwao Otsuka (Nov 21, 2020) 母性与父性。母权和父权。父母与权力。
Iwao Otsuka (Nov 21, 2020) Материнство и отцовство. Материнская и отцовская власть. Родители и власть.
Iwao Otsuka (Nov 22, 2020) 母性と父性。母権と父権。親と権力。

Iwao Otsuka (Dec 15, 2020) Sex differences and sex discrimination. They cannot be eliminated. Social mitigation and compensation for them.
Iwao Otsuka (Dec 15, 2020) 性别差异和性别歧视。它们无法消除。对它们进行社会缓解和补偿。
Iwao Otsuka (Dec 15, 2020) Половые различия и дискриминация по половому признаку. Они не могут быть устранены. Социальное смягчение и компенсация за них.
Iwao Otsuka (Dec 15, 2020) 男女の性差と性差別。それらは無くせない。それらへの社会的な緩和や補償。

Iwao Otsuka (Dec 18, 2020) Mechanisms of acquired settled group societies. Female dominance.
Iwao Otsuka (Dec 18, 2020) 后天定居群体社会的机制。女性主导地位。
Iwao Otsuka (Dec 18, 2020) Механизмы обществ приобретенных оседлых групп. Доминирование женщин.
Iwao Otsuka (Dec 18, 2020) 後天的定住集団社会のメカニズム。女性の優位性。

Iwao Otsuka (Dec 24, 2020) Ownership and non-ownership of resources. Their advantages and disadvantages.
Iwao Otsuka (Dec 24, 2020) 资源的所有权和非所有权。其利弊。
Iwao Otsuka (Dec 24, 2020) Владение и не владение ресурсами. Их преимущества и недостатки.
Iwao Otsuka (Dec 24, 2020) 資源の所有と非所有。その利点と欠点。

Iwao Otsuka (Jan 3, 2021) Wealth and poverty. The emergence of economic disparity. Causes and solutions.

Iwao Otsuka (Jan 3, 2021) 财富与贫穷。经济差距的出现。原因和解决办法。
Iwao Otsuka (Jan 3, 2021) Благополучие и бедность. Появление экономического неравенства. Причины и решения.
Iwao Otsuka (Jan 3, 2021) 富裕と貧困。経済的格差の発生。その原因と解消法。

Iwao Otsuka (Jan 4, 2021) Social delinquents. A true delinquent. The difference between the two.
Iwao Otsuka (Jan 4, 2021) 社会不良分子。真正的不良分子。两者之间的区别。
Iwao Otsuka (Jan 4, 2021) Социальные преступники. Настоящий преступник. Разница между ними.
Iwao Otsuka (Jan 4, 2021) 社会的な不良者。真の不良者。両者の違い。

Iwao Otsuka (Jan 8, 2021) How to enjoy game music videos.
Iwao Otsuka (Jan 8, 2021) 如何欣赏游戏音乐视频。
Iwao Otsuka (Jan 8, 2021) Как наслаждаться игровыми музыкальными клипами.
Iwao Otsuka (Jan 8, 2021) ゲーム音楽動画の楽しみ方。

Iwao Otsuka (Jan 17, 2021) Life worth living. Fulfilling life. The source of them.
Iwao Otsuka (Jan 17, 2021) 值得生活的生活。充实的生活。他们的源头。
Iwao Otsuka (Jan 17, 2021) Жизнь, достойная жизни. Полноценная жизнь. Источник их.
Iwao Otsuka (Jan 17, 2021) 生きがい。充実した人生。そ

れらの源。

私の書籍の内容。それらの自動翻訳のプロセスについて。

ご訪問ありがとうございます！

私は本の内容を頻繁に改訂しています。
そのため、読者の皆様には、随時サイトを訪れていただき、新刊や改訂版の書籍をダウンロードしていただくことをお勧めしています。

自動翻訳には以下のサービスを利用しています。

DeepL プロ
https://www.deepl.com/translator

本サービスは以下の会社が提供しています。

DeepL GmbH

私の本の原語は日本語です。
私の本の自動翻訳の順序は以下の通りです。
日本語→英語→中国語、ロシア語

どうぞお楽しみ下さい！

私の略歴。

私は、1964年に、日本の神奈川県で、生まれた。
私は、1989年に、東京大学文学部社会学科を卒業した。
私は、1989年度の日本の国家公務員採用試験のI種区分の、社会学の職種に、最終合格した。
私は、1992年度の日本の国家公務員採用試験のI種区分の、心理学の職種に、最終合格した。
私は、大学卒業後は、日系大手IT企業の研究所に勤務して、コンピュータのソフトウェアの試作業務に従事した。
私は、現在は、企業を退職して、執筆活動に専念中である。

Table of Contents